外環状道路関係文化財発掘調査報告書13

高　畑　遺　跡

―第18次調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集

２００２年

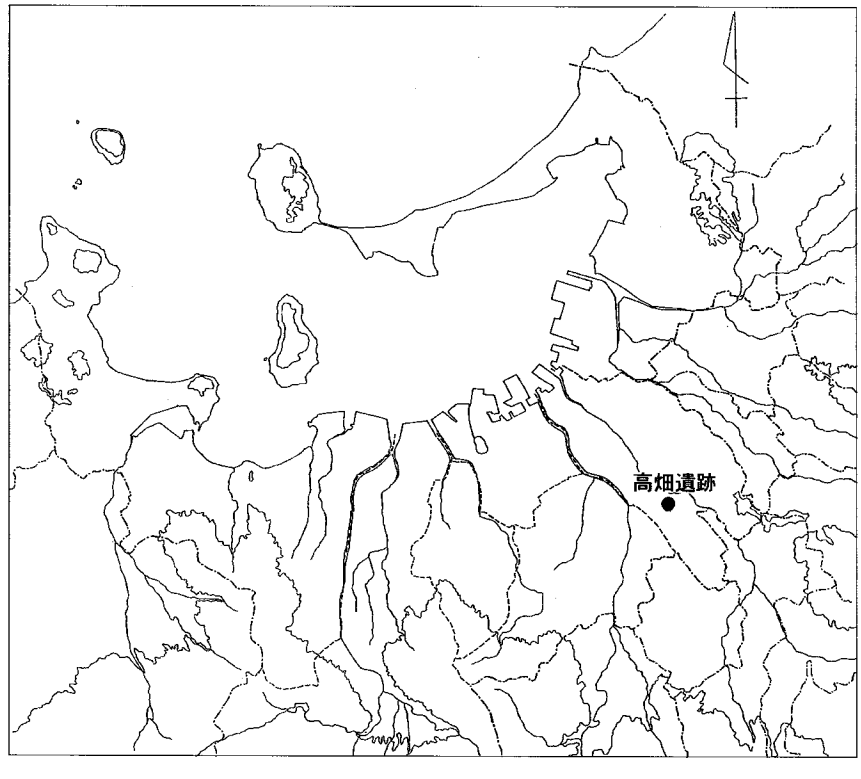
福岡市教育委員会

外環状道路関係文化財発掘調査報告書13

高　畑　遺　跡

―第18次調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集



２００２年

福岡市教育委員会

巻頭写真１　SF002（南から）

巻頭写真２　SF002内波板状遺構土層

巻頭写真３　SX015　１（西から）

巻頭写真４　SX015　２（東から）

序　文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えいくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する高畑遺跡第18次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり費用負担等のご協力を賜りました国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所と福岡北九州高速道路公社をはじめとする関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成14年３月５日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が平成11・12年度に博多区板付６丁目地内において実施した高畑遺跡第18次調査の発掘調査報告書である。
2．遺構の実測は長家伸、上角智希、坂本真一、坂元雄紀、小田裕樹、木内智康、大島隆之、瀬戸啓治、長野嘉一、中村桂子が行った。
3．遺物の実測は長家、上角、坂本、小田、米倉秀紀、井上加代子、渡辺誠、西田絵美が行った。
4．製図は長家、上角、小田、米倉、久家春美、久保恵美が行った。
5．写真は長家、上角が撮影した。
6．第二章の道路状遺構集成表は坂本真一（福岡大学大学院生）が作成した。
7．第三章の旧石器に関しては吉留秀敏氏（福岡市教育委員会）に執筆をお願いした。
8．本書で用いる方位は磁北であり、座標北から６°西偏し、真北から６°18′西偏する。
9．本書で用いる遺構番号は各調査で通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物（ＳＢ）、竪穴住居跡（ＳＣ）、土坑（ＳＫ）、溝（ＳＤ）、井戸（ＳＥ）、ピット（ＳＰ）、道路状遺構（ＳＦ）、不明遺構（ＳＸ）である。
10．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
11．本書の執筆は第二章を長家、第一・三章を上角が担当し、編集は上角が行った。

遺跡名	高畑遺跡第18次調査	遺跡略号	９９３６
所在地	博多区板付６丁目地内	遺跡略号	ＴＫＢ－１８
開発面積	11,000㎡	調査面積	4,750㎡
調査期間	平成11年９月１日～平成12年６月28日		

目　次

第一章　はじめに……1
1　調査にいたる経緯……1
2　調査組織……1
3　立地と環境……1
4　既往の調査……3
5　調査の概要……7
第二章　Ⅰ区の調査……9
1　調査概要……9
2　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物……9
竪穴住居跡（ＳＣ）……9
貯蔵穴（ＳＵ）……14
3　古代～中世の遺構と遺物……14
土坑（ＳＫ）……14
溝（ＳＤ）……15
道路（ＳＦ）……22
4　小結……43
第三章　Ⅱ・Ⅲ区の調査……61
1　調査の概要……61
2　基本層序……61
3　遺構と遺物……64
1）竪穴住居跡……64
2）掘立柱建物……82
3）井戸……85
4）土壙……107
5）溝……120
6）古墳時代から古代にかけての遺物包含層……127
7）旧石器……129
4　小結……130

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡（1/50000）……2
第２図　高畑遺跡の各調査地点の位置（1/4000）……4
第３図　大正末～昭和初期の地形図（1/4000）……5
第４図　調査区位置図（1/1500）……8
第５図　調査区土層図（1/80）……10
第６図　Ⅰ区全体図（1/200）……
第７図　SC001・016及び出土遺物実測図（1/50、1/3）……11
第８図　SU010・011・012・013実測図（1/40）……12
第９図　SU010・012・013出土遺物実測図（1/3）……13
第10図　SK014及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……15
第11図　SD005・006土層実測図（1/60）……16
第12図　SD005出土遺物実測図１（1/3）……17
第13図　SD005出土遺物実測図２（1/3）……18
第14図　SD005出土遺物実測図３（1/3）……19
第15図　SD006出土遺物実測図１（1/3）……20
第16図　SD006出土遺物実測図２（1/2、1/3）……21
第17図　SD009及び出土遺物実測図（1/60、1/3）……22

第18図　SF002実測図（1/100）……
第19図　波板状遺構Ⅰ実測図（1/50）……23
第20図　波板状遺構Ⅰ出土遺物実測図（1/3）……24
第21図　波板状遺構Ⅱ実測図（1/50）……25
第22図　波板状遺構Ⅱ出土遺物実測図（1/3）……26
第23図　波板状遺構Ⅲ～Ⅵ実測図（1/50）……
第24図　波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図1（1/3）……28
第25図　波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図2（1/3）……29
第26図　波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図3（1/3）……30
第27図　波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図4（1/3）……31
第28図　波板状遺構Ⅳ～Ⅵ出土遺物実測図（1/2、1/3）……32
第29図　波板状遺構Ⅶ及び出土遺物実測図（1/50、1/3）……33
第30図　SF002出土その他の遺物（1/3）……34
第31図　SX015実測図（1/20）……36
第32図　SX015出土遺物実測図１（1/3、1/4）……37
第33図　SX015出土遺物実測図２（1/4）……38
第34図　SX015出土遺物実測図３（1/4）……39
第35図　SX015出土遺物実測図４（1/4）……40
第36図　SX015出土遺物実測図５（1/4）……41
第37図　SX015出土遺物実測図６（1/4）……42
第38図　SF002上層水田土中及びSD004出土遺物（1/2、1/3）……43
第39図　官道復元図（1/8000）……44
第40図　板付遺跡第38次、41次全体図及び出土遺物実測図（1/250、1/400、1/4）……45
第41図　Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図（1/300）……62
第42図　北壁土層図（1/80）……63
第43図　SC052実測図（1/40）……65
第44図　SC053実測図（1/60）……66
第45図　SC052・053出土遺物実測図（1/3）……67
第46図　SC053・054出土遺物実測図（1/3、1/2）……68
第47図　SC054・056実測図（1/40）……70
第48図　SC057実測図（1/60）、同貼床除去後実測図（1/100）……71
第49図　SC057出土遺物実測図①（1/3）……72
第50図　SC057出土遺物実測図②（1/3）……73
第51図　SC058実測図、同貼床除去後実測図（1/40）……74
第52図　SC058滑石原石の出土状況（1/10）……75
第53図　SC058出土遺物実測図（1/3）……75
第54図　SC058出土滑石製品実測図（1/1）……76
第55図　SC059・063・065実測図（1/60）……78
第56図　SC059・065・066出土遺物実測図（1/3）……79
第57図　SC064・066・068・082実測図（1/40）……81
第58図　SB047・048実測図（1/60）……82
第59図　SB049・050実測図（1/60）……83
第60図　SB051・085実測図（1/60）……84
第61図　SE037・039実測図（1/40）……85
第62図　SE037出土遺物実測図①（1/4）……87
第63図　SE037出土遺物実測図②（1/3）……88
第64図　SE037出土遺物実測図③（1/3）……89
第65図　SE037出土遺物実測図④（1/3）……90
第66図　SE039出土遺物実測図（1/3）……91
第67図　SE040・041・043・046・070実測図（1/40）……92

第68図　SE040出土遺物実測図①（1/3）……94
第69図　SE040出土遺物実測図②（1/3）……95
第70図　SE041・043・060出土遺物実測図（1/3）……97
第71図　SE046出土遺物実測図（1/3、1/4）……98
第72図　SE060・073・074・076・077・081実測図（1/40）……99
第73図　SE070出土遺物実測図（1/3）……101
第74図　SE073・074・076出土遺物実測図（1/3、1/12）……102
第75図　SE077出土遺物実測図（1/4、1/3）……104
第76図　SE081出土遺物実測図①（1/3）……105
第77図　SE081出土遺物実測図②（1/3）……106
第78図　SK035・036・045・069・071・075実測図（1/40）……108
第79図　SK035・036出土遺物実測図（1/3）……109
第80図　SK038・044・061・072実測図（1/30、1/20）……110
第81図　SK038出土遺物実測図（1/3、1/1）……111
第82図　SK044出土遺物実測図①（1/3）……113
第83図　SK044・061出土遺物実測図（1/3）……114
第84図　SK072出土遺物実測図（1/3）……116
第85図　SK075・079出土遺物実測図（1/3、1/6）……117
第86図　SK078・079・080・083・084実測図（1/40）……118
第87図　SK083・084出土遺物実測図（1/3、1/2）……119
第88図　SD031土層図（1/60）……120
第89図　SD031出土遺物実測図①（1/3）……122
第90図　SD031出土遺物実測図②（1/3）……123
第91図　SD031出土遺物実測図③（1/3）……124
第92図　SD031出土遺物実測図④（1/3、1/2、1/1、1/4）……125
第93図　SD031上面包含層出土遺物実測図（1/3、1/2）……126
第94図　包含層出土遺物実測図（1/3、1/4、1/2）……128
第95図　SD031出土旧石器実測図（1/1）……129
第96図　滑石製臼玉の制作工程復元図……132
付　図　Ⅱ・Ⅲ区全体図（1/200）……付図

表　目　次

福岡県内の道路状遺構……48
第１表　高畑遺跡調査一覧表……6
第２表　SC058出土滑石原石計測表……75
第３表　Ⅱ・Ⅲ区時期別遺構分布表……131

写　真　目　次

巻頭写真１　SF002（南から）
巻頭写真２　SF002内波板状遺構土層
巻頭写真３　SX015（西から）１
巻頭写真４　SX015（東から）２
写真１　SF002作業風景（南から）……52
写真２　調査区全景（上空から）……53
写真３　調査区全景（北から　正面は大宰府方向）……53
写真４　SC001土層……54
写真５　SC001（北から）……54
写真６　SU010（西から）……54

写真７　SU011（南から）……54
写真８　SU012（東から）……54
写真９　SU013（東から）……54
写真10　SK014（東から）……55
写真11　SD005・006（南から）……55
写真12　SD005・006土層1……55
写真13　SD006土層2……55
写真14　SD006土層3……55
写真15　SD009（西から）……55
写真16　SF002南壁土層……56
写真17　SF002土層内近代轍痕跡……56
写真18　SF002北壁土層……56
写真19　SF002波板状遺構掘削前全景（上空から）……57
写真20　SF002波板状遺構掘削後全景（上空から）……57
写真21　波板状遺構Ⅰ掘削前（東から）……58
写真22　波板状遺構Ⅰ掘削後（東から）……58
写真23　波板状遺構Ⅱ～Ⅶ掘削前（南から）……58
写真24　波板状遺構Ⅱ～Ⅵ掘削後（南から）……58
写真25　波板状遺構Ⅱ・Ⅲ掘削後（北から）……58
写真26　波板状遺構Ⅲ～Ⅶ掘削後（北から）……58
写真27　波板状遺構Ⅳ掘削後（北から）……59
写真28　波板状遺構Ⅶ掘削後（南から）……59
写真29　波板状遺構Ⅲ南北土層中央部分……59
写真30　波板状遺構Ⅲ南北土層南端部分……59
写真31　SX015検出状況（東から）……60
写真32　SX015上面（東から）……60
写真33　SX015中央筒部分掘削後（北から）……60
写真34　SX015中央筒部分（北から）……60
写真35　SX015筒部分木質除去後（東から）……60
写真36　SX015瓦積み除去後（東から）……60
写真37　Ⅲ区全景（南東から）……133
写真38　Ⅱ区全景（南東から）……133
写真39　竪穴住居跡群（南西から）……134
写真40　掘立柱建物群（南西から）……134
写真41　SC052（南西から）……135
写真42　SC053（南西から）……135
写真43　SC057（西から）……135
写真44　SC058（北西から）……136
写真45　SC058滑石原石出土状況……136
写真46　SC066（東から）……136
写真47　SE040（西から）……137
写真48　SE046（北から）……137
写真49　SE060ねずみ返し状木製品出土状況……137
写真50　SK038（東から）……138
写真51　SK044（北から）……138
写真52　SK072（北から）……138
写真53　出土土器……139
写真54　SC058出土滑石製品……140

第一章　はじめに

1．調査にいたる経緯

現在、福岡市においては交通施設等の都市基盤が整備されないまま都市化が進行したため、交通量の増加に伴い慢性的な交通混雑が発生するなど多くの交通問題が生じている。そこで、このような状況に対処するため、自動車交通の効率的な分散を図り、福岡市西南部地域の交通混雑の緩和を図るとともに、福岡都市圏の外郭を形成する目的で、福岡外環状道路（一般国道202号線）の建設が進行中である。この外環状道路は、福岡市西区福重から博多区立花寺までを結ぶ延長16.2km幅員40mの道路であり、完成すれば福岡都市圏の骨格を形成する重要な幹線道路となる。

福岡市教育委員会では、外環状道路の建設に伴い、国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所より調査の委託を受け、平成３年度より継続して発掘調査を実施している。外環状道路は終点立花寺において福岡都市高速道路と結ばれるため、今回の調査にあたっては福岡北九州高速道路公社からも合わせて調査の委託を受けた。今回報告する高畑遺跡第18次発掘調査は、この外環状道路Ｉ区工事に先立って、平成11年９月９日から平成12年６月28日にかけて実施した。

2．調査組織

調査は以下の組織でおこなった。

事業主体	国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所	
	福岡北九州高速道路公社	
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課	
調査総括	文化財部長	柳田純孝
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	埋蔵文化財第２係長	力武卓治
調査庶務	文化財整備課	谷口真由美（前任）　御手洗清（現任）
調査担当	長家伸、上角智希	

今回の調査がつつがなく進行し、多くの貴重な成果を得ることができたのは、発掘調査および整理作業に参加していただいた発掘作業員、整理作業員の皆様に依るところが大きい。毎日の重労働に快く、そして忍耐強く従事してくださった皆様に、この場を借りて感謝申し上げる。

3．立地と環境

福岡平野は、北は博多湾に臨み、残りの三方は丘陵地帯によって囲まれ、その背後には標高300m～500mの立花山、三日月山、牛頸山、油山、叶岳、高祖山などを繋ぐ山地の尾根線が半円状にめぐっている。福岡平野を囲む主な丘陵を挙げると、東側に月隈丘陵、南に春日丘陵、南西に油山丘陵、西に早良平野とを画する干隈丘陵がある。平野には那珂川、御笠川、樋井川をはじめとする大小の河川が北流し、古来から肥沃な沖積地を形成していた。

高畑遺跡は、福岡平野中央部を貫流する御笠川、那珂川の中下流域に所在する。この一帯の地形は、南側の春日丘陵から続く洪積台地が、前述の両河川およびその支流によって細かく開析されてできたものである。したがって、河岸段丘が発達しており、低平な沖積地の中に、洪積台地が島状に点々と

第１図　周辺の遺跡（1/50000）

1．高畑遺跡　2．比恵遺跡群　3．那珂遺跡群　4．板付遺跡　5．諸岡Ｂ遺跡　6．井相田Ｃ遺跡
7．麦野Ａ遺跡　8．麦野Ｂ遺跡　9．麦野Ｃ遺跡　10．南八幡遺跡　11．雑飼隈遺跡　12．井尻Ｂ遺跡
13．須玖遺跡群　14．雀居遺跡　15．宝満尾遺跡　16．天神森遺跡　17．立花寺遺跡　18．金隈遺跡

分布している。これらの開析丘陵上のほとんどに集落遺跡が存在しており、高畑遺跡もそのひとつである。高畑遺跡の立地する台地は、那珂川と御笠川に挟まれた場所にあり、本遺跡の南北に鞍部を挟んで並ぶ各丘陵上には、北に板付遺跡、南に麦野Ａ遺跡が立地する。本遺跡は台地の頂部から縁辺部にかけて分布している。現在では戦後の都市化により住宅が密集し、地形の起伏は全く分からないが、昭和初期の地図（第３図）を見ると、往時の丘陵の姿がはっきりと見て取れる。当時、台地上は果樹園として、縁辺部は水田として利用されていた。

高畑遺跡の所在する那珂川・御笠川中流域には多くの遺跡が密集している。本報告書と関連する弥生時代から古代にかけての周辺の遺跡をいくつか紹介することにしたい。高畑遺跡の北500mには縄文時代晩期の水田や環濠集落で有名な国指定史跡の板付遺跡が所在する。弥生時代の集落としては、板付遺跡のさらに北西に位置する比恵・那珂遺跡群や本遺跡の北５kmの雀居遺跡、南に３kmの春日市須玖遺跡群などが有名である。また、本遺跡の南西1.5kmに位置する井尻B遺跡においても弥生時代後期から古墳時代にかけての集落が存在する。弥生時代の墓地は、御笠川を挟んで東側の月隈丘陵で多く発見されている。たとえば100基を超える甕棺墓群が発見された国指定史跡金隈遺跡や天神森遺跡、宝満尾遺跡がある。平野部においても本遺跡の西隣の丘陵に立地する諸岡B遺跡などで墓地が見つかっている。

高畑遺跡周辺では古代の大集落も多く発見されている。例えば、本遺跡の南南東2km弱に位置する麦野B、麦野C遺跡や、その南側の南八幡遺跡、南東１kmの井相田C遺跡、御笠川東岸の立花寺遺跡などが挙げられる。また、本遺跡の南２kmの雑餉隈遺跡では、７世紀末～８世紀初頭の方形の配置をもつ大型建物群が検出され、官衙的な施設と考えられている。

４．既往の調査

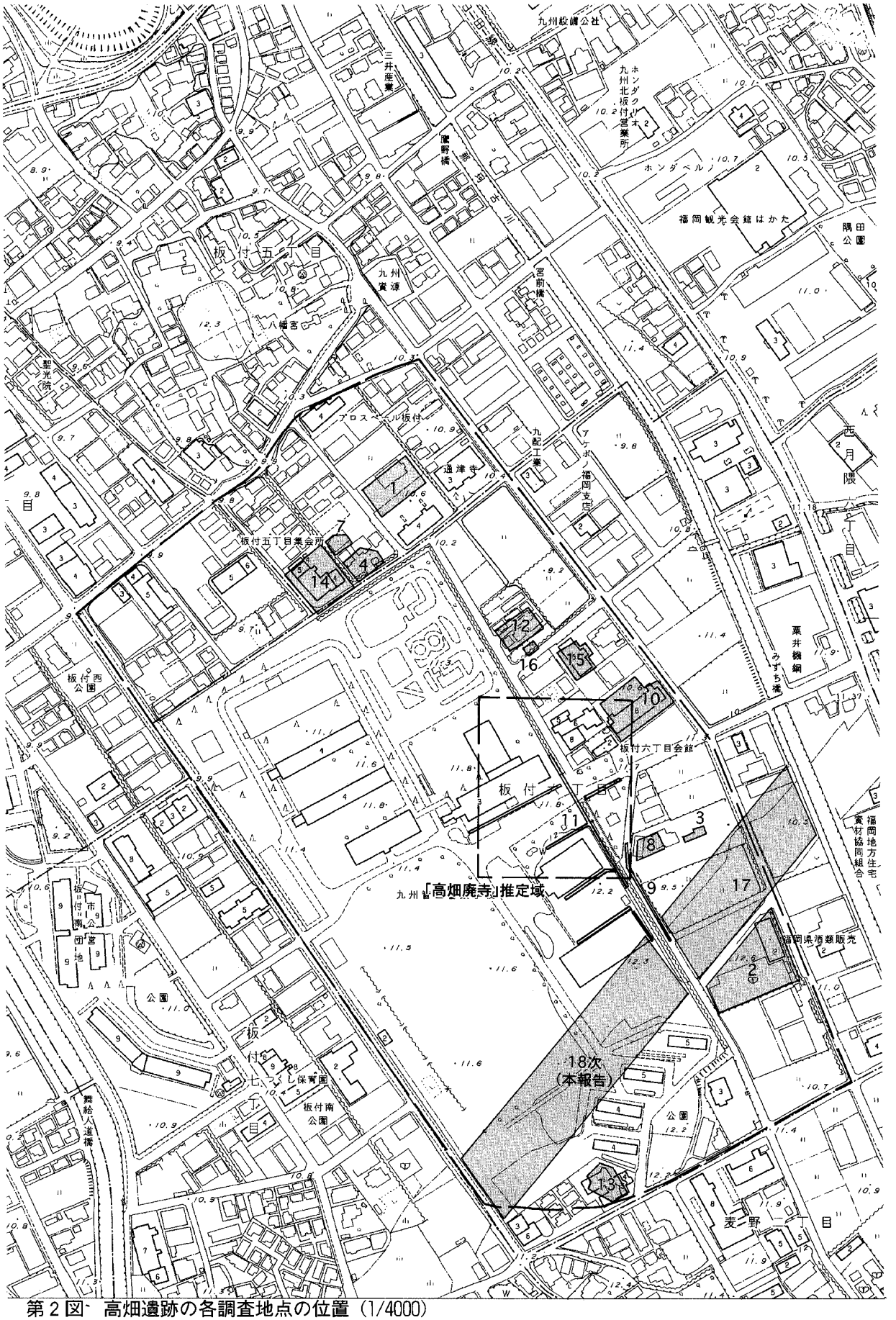
高畑遺跡の調査は今回で18次を数える。本節ではこれまでの調査の成果について簡単にまとめる。

高畑遺跡の調査は、当初、板付周辺遺跡緊急調査としておこなわれた。これは1974年の板付遺跡の一部国史跡指定に伴い、急速に宅地化がすすむ板付台地およびその周辺において板付遺跡の全容把握を目的として実施された国庫補助事業である。1973年度から継続して調査が行われている。この調査に際し、福岡市地図No24「板付」を100m方眼に区切り、東から西へＡ・Ｂ…、北から南へ１・２…とし、緊急調査地点をこの方眼の番号で呼ぶことにした。例えば高畑第１次調査地点は板付Ｄ－９・10地点と称された。以降、1984年度の第10次調査までこの呼称がとられたが、九州管区警察学校内下水道工事に伴う第11次調査において、はじめて高畑遺跡発掘調査として登録され、同時に、先立って実施されていた本遺跡内の板付周辺遺跡緊急調査に高畑遺跡第1次～第10次調査の名称が併用されることとなった。

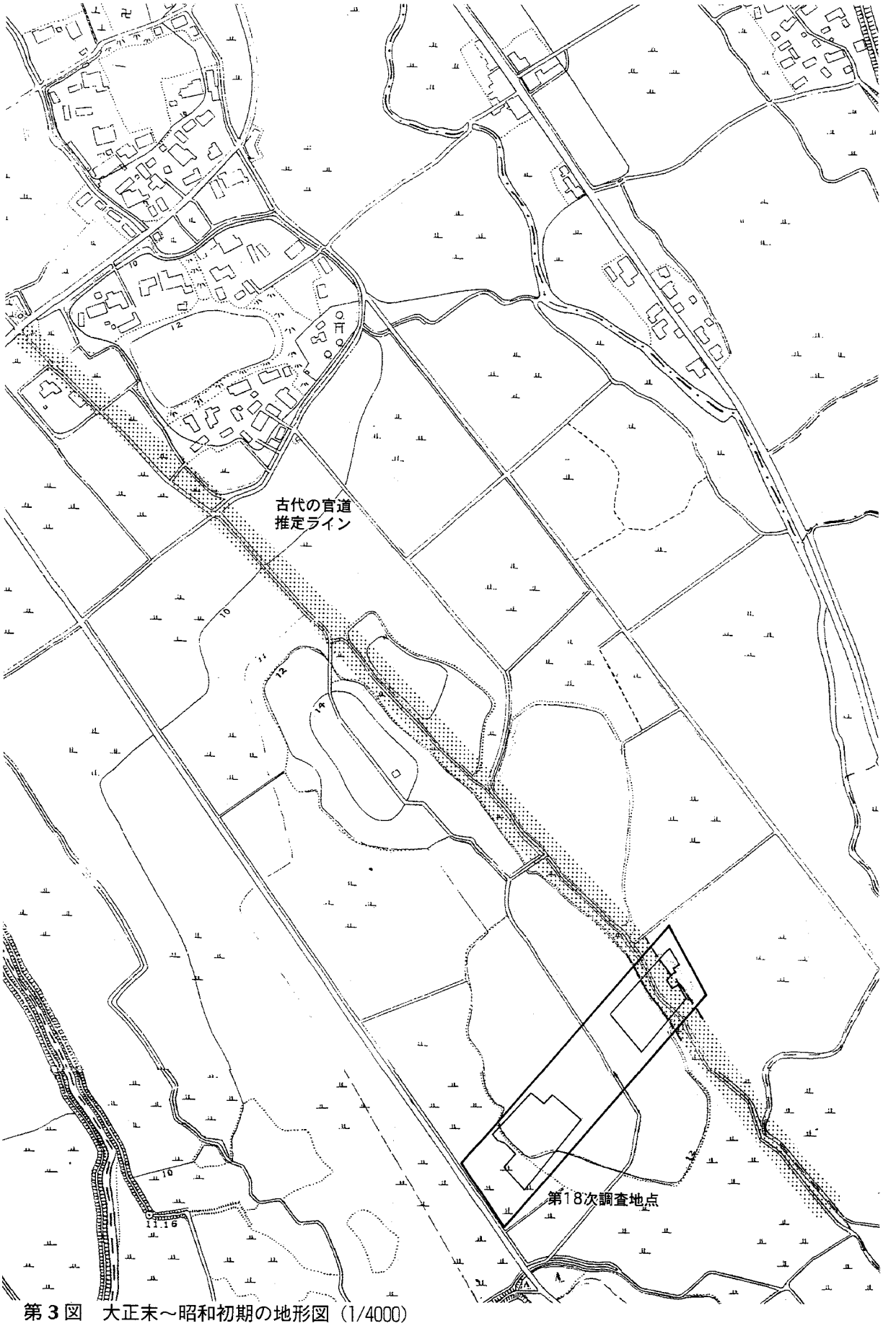
高畑遺跡は洪積台地上とその縁辺部の沖積地に分布しており、調査地点の立地によって検出される遺構の性格もおのずと異なる。調査地点の立地を台地の各方位の縁辺部、台地上に分け、それぞれについて説明していくことにする（第２図・第１表）。

まず、台地の北縁部では第１・４・７・14次調査が実施されている。第４・7次調査地点では古墳時代の溝が検出され、大量の古式土師器・木製品が出土した。また、第４・７・１4次地点で奈良時代の溝・土壙が検出されている。

台地の東側縁辺部は、最も調査例の多いところである。第２・３・８・９・10・12・15・16・17次調査が実施されている。東縁部の北半には台地の裾に沿って南東から北西方向に向かって走る古墳時代の溝が検出され、大量の木製品・古式土師器が出土している（北から第12・16・15・10次調査地点）。



第２図　高畑遺跡の各調査地点の位置（1/4000）



第3図　大正末～昭和初期の地形図（1/4000）

この溝は前述の台地北縁部の溝へ続いている。水田に関連する水路と推測され、第12次調査では漆を塗布した鍬の柄や小型模造船が出土し、農耕祭祀・水利祭祀に使用されたものと考えられている。また、東縁部南半では奈良時代の大溝が検出されている（南から第２・17・９・８・10次調査地点）。この溝は台地の裾を南北に走り、第10次地点で東へ向きを変える。

第８次調査では前述の古代の溝から大量の古代瓦・塼、墨書土器、木簡、木製品が出土した。調査を担当した柳沢一男は、瓦・塼をはじめとする諸遺物の内容と、かつて台地上に礎石らしき大石群があったという話から、台地上に「高畑廃寺」の存在を主張した。一方では、墨書土器に地名を記したものが多いこと、木製祭祀遺物が多く出土することから、寺院ではなく官衙的施設を想定する説もある。第17次調査においても、溝から人面墨書土器や木製人形、絵馬等の祭祀遺物が出土している。

台地西縁部においては、第５・６次調査が実施されたが、両調査区とも八女粘土層まで削平されており、遺構は検出されなかった。おそらく試掘状のトレンチ調査であろうが、調査番号は付与されず報告書にも記述がないので、正確な調査地点は不明である。

台地南縁部では第13次調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての井戸、土壙が検出されている。土壙３基から滑石製臼玉、ガラス小玉、碧玉製管玉が出土した。

最後に、台地上においては、第11次調査が行われたのみである。これは警察学校内の下水道工事に伴う調査で、幅１ｍ、総延長550mにおよぶトレンチ調査である。調査の結果、台地中央部は削平を受けているが、削平の影響が少ない縁辺部では遺構が残っていた。弥生時代初頭から古墳時代の竪穴住居、井戸、貯蔵穴が検出され、本来は台地全体に該期の集落が広がっていたことが予想された。また、高畑廃寺に関して、溝２条と井戸１基が検出されたが、トレンチ調査のためこの溝が寺域を画すものかどうかは分からない。

今回の第18次調査が台地上におけるはじめての面的な調査である。

第１表　高畑遺跡調査一覧表

次数	板付地点呼称	調査番号	調査面積(㎡)	主な遺構、遺物	報告
１次	板付Ｄ-9・10地点	7312	48		29集
２次	板付Ａ・B-13地点	7313	72	奈良；溝	29集
３次	板付Ｂ-12a 地点	7509	400		36集
４次	板付Ｄ-10a 地点	7933	370	古墳；溝・古式土師器、奈良；溝	57集
５次				遺構なし	
６次				遺構なし	
７次	板付Ｄ-10b 地点	8138	180	古墳；溝・古式土師器、奈良；溝	83集
８次	板付Ｂ-12b 地点	8220	330	奈良；溝・瓦・？	98集
９次	板付Ｂ-12c 地点	8221	94	奈良；溝	98集
10次	板付Ｂ-11a 地点	8436	1560	古墳；溝、奈良；溝	115集
11次		8441	550	弥生・古墳；竪穴住居・井戸・貯蔵穴	115集
12次		8649	600	古墳；溝・木製品	210集
13次		8702	480	弥生・古墳；井戸・土壙	
14次		9368	566	奈良；溝	
15次		9753	254	古墳；溝	年報12
16次		9774	70	古墳；溝	
17次		9833	2063	奈良；溝・墨書土器・木製祭祀遺物	676集
18次		9936	4750	弥生・古墳；集落、古代；道路	本報告

5．調査の概要

高畑遺跡第18次調査は、福岡外環状道路の建設に先立ち、平成11年9月9日から平成12年6月28日にかけて実施した。開発面積は約11,000㎡である。昭和初期の地形図と対照すると、本地点は台地の南端部にあたる（第3図）。第11次調査の所見から、台地中央部の高い部分は削平を受けて遺構が残っていないと予想されたが、試掘調査の結果、やはり調査区の中央部では削平によって遺構は完全に消失していた。そのため、調査は調査区の東西の両サイドについて行うことに決定した。

調査にあたり、東側の調査地点をⅠ区、西側をⅡ区とした。調査はⅠ区から先行し、ある程度目途が立った時点でⅡ区の調査を併行して開始した。Ⅰ区調査は平成11年度に終了した。Ⅱ区については、幸いに当初の予想よりも遺構の残りがよく、Ⅱ区北側の開発地内未調査部分にも遺跡が残存して続いていることが確実になった。そのため、この部分に調査区を拡張しⅢ区とした（第4図）。

Ⅰ区とⅡ・Ⅲ区とは調査地点が離れている上に、検出された遺構もまったく性格の異なるものであった。そのため、本書では両地区を別々に扱ったほうがよいと判断し、第二章でⅠ区の調査、第三章でⅡ・Ⅲ区の調査について報告している。

調査区東側のⅠ区では、調査区東側で南北方向に軸をとる波板状遺構が検出された。これは道路遺構であり、古代の官道が台地上を縦断していることが明らかとなった。波板状遺構等から大量の瓦・塼が出土した。また、弥生時代前期～中期の貯蔵穴4基、弥生時代中期の竪穴住居跡1棟、古墳時代前期の竪穴住居跡1棟が検出されており、削平を受けて残存状況が悪いものの、該期の集落が広がっていたと推測される。

調査区西側のⅡ・Ⅲ区では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡を検出した。主な検出遺構は竪穴住居跡13軒、掘立柱建物6棟、井戸13基、土壙15基、溝1条である。古墳時代中期末の竪穴住居跡の1軒は滑石製臼玉の製作工房で、関連遺物が多く出土した。臼玉の製作工程を復元するうえで貴重な資料である。弥生土器、土師器が大量に出土した。

第4図　調査区位置図（1/1500）

第二章　Ⅰ区の調査

1　調査概要

Ⅰ区は対象地の東半部分にあたる。高畑遺跡群の立地する洪積台地は調査地点で幅約300ｍを測り、台地尾根線は北西方向に延びている。調査時点では九州管区警察学校敷地であり、現況標高は12.2ｍでほぼ平坦な状態であった。近隣からの聞き取りおよび昭和初期前後の地図によると、戦前までは台地高所部分は桑畑、低地部分は水田として使用されていたようである。その後戦時中に板付地区の台地土をトロッコで運搬して現況に近い状態に造成したとのことである。なおこの造成は現地の高所を削平して行ったものではないようである。その後戦時中は軍用機の部品工場が建設され、戦後米軍用地を経て現在に至っている。

調査は重機による表土除去から行った。東側には戦時中の造成土が厚く堆積しその上面には以前の建物の基礎が存在していた（第５図）。東側端では竪穴住居跡を確認しており、遺構の残存状態は比較的良好である。また西半は遺構面である鳥栖ローム層直上に40cmほどの表土がのるのみで、遺構面には建物の基礎が格子状に残る。台地尾根部分にあたる調査区東半部分は遺構の残存状況から削平がかなり進んでいるものと考えられるが、弥生時代の貯蔵穴が40cm程しか残っていないのに比べると、中世前半の溝の残存状況が比較的良好なことから、これ以前の造成による遺構の削平が比較的大きなものと考えられる。具体的な時期については明らかでないものの、遺構・遺物報告の項で後述するように古代に位置付けられる瓦が多量に出土していることや、官道の存在を考えると古代～中世の間に大規模な造成が行われた可能性が高い。Ⅱ区では弥生～古墳時代の生活遺構が広がっており、本来的にはⅠ区にも同様の遺構群が形成されていたと考えられるが、古代～中世の遺構埋土からはこの時期の遺物がほとんど出土しておらず、該期の遺構が埋没する段階ではすでにそれ以前の遺構が大きく失われていたものと考えられる。遺構面標高は西端で12.2ｍ、中央部で11.6ｍ、東端では11.3ｍである（調査区南壁土層図およびＳＣ００１土層図参照）。

主な検出遺構は弥生時代前期～中期の貯蔵穴４基、弥生時代中期の竪穴住居跡１棟、古墳時代前期の竪穴住居跡１棟、古代の官道・土坑１基・溝１条、中世前期の溝２条、近世～現代の溝１条である。

2　弥生時代～古墳時代の遺構

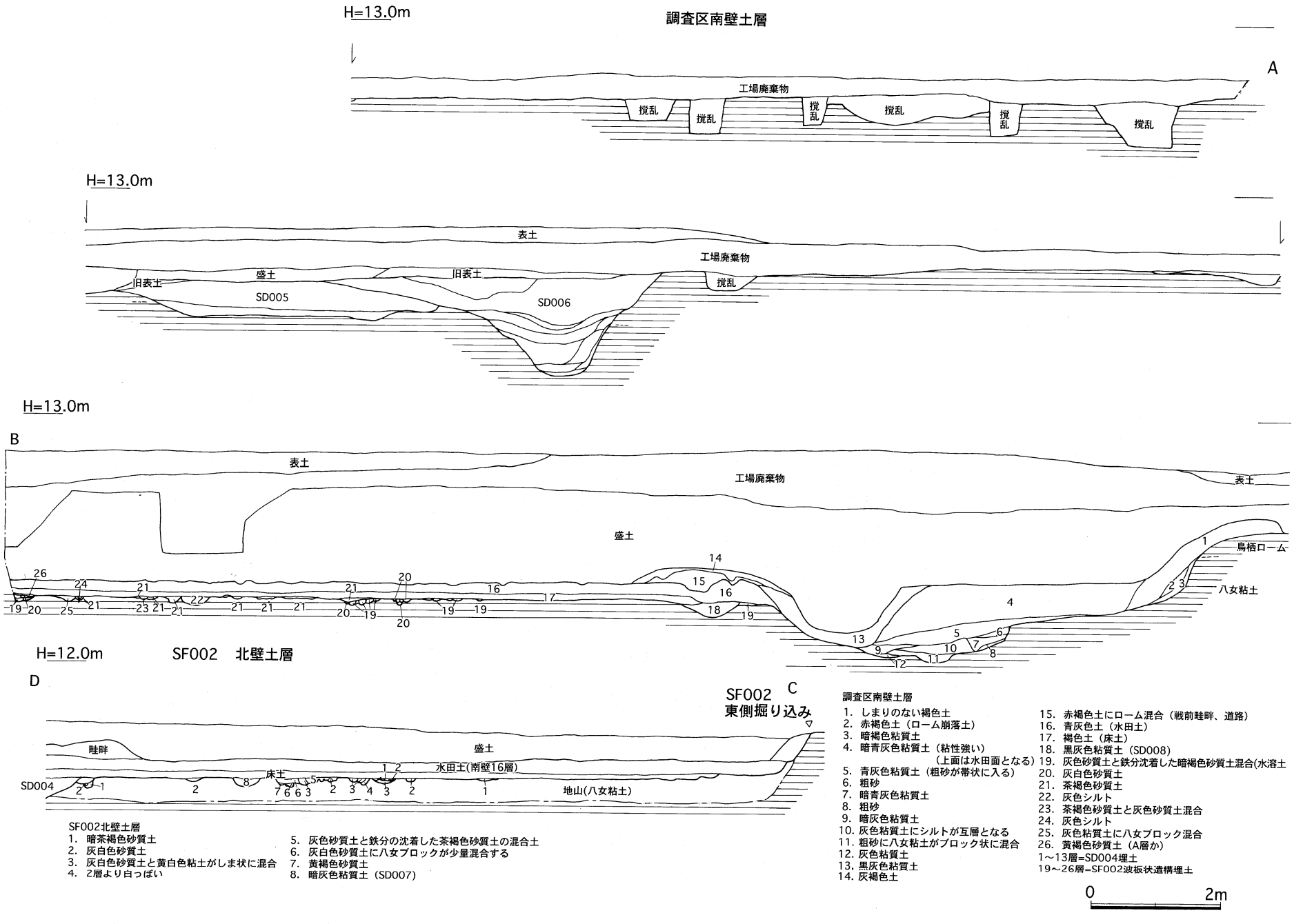
前項でも述べたようにこの時期の遺構は古代以降と考えられる削平により依存状態が極めて不良で、掘り込みの深い遺構が残存するのみである。

竪穴住居跡（ＳＣ）

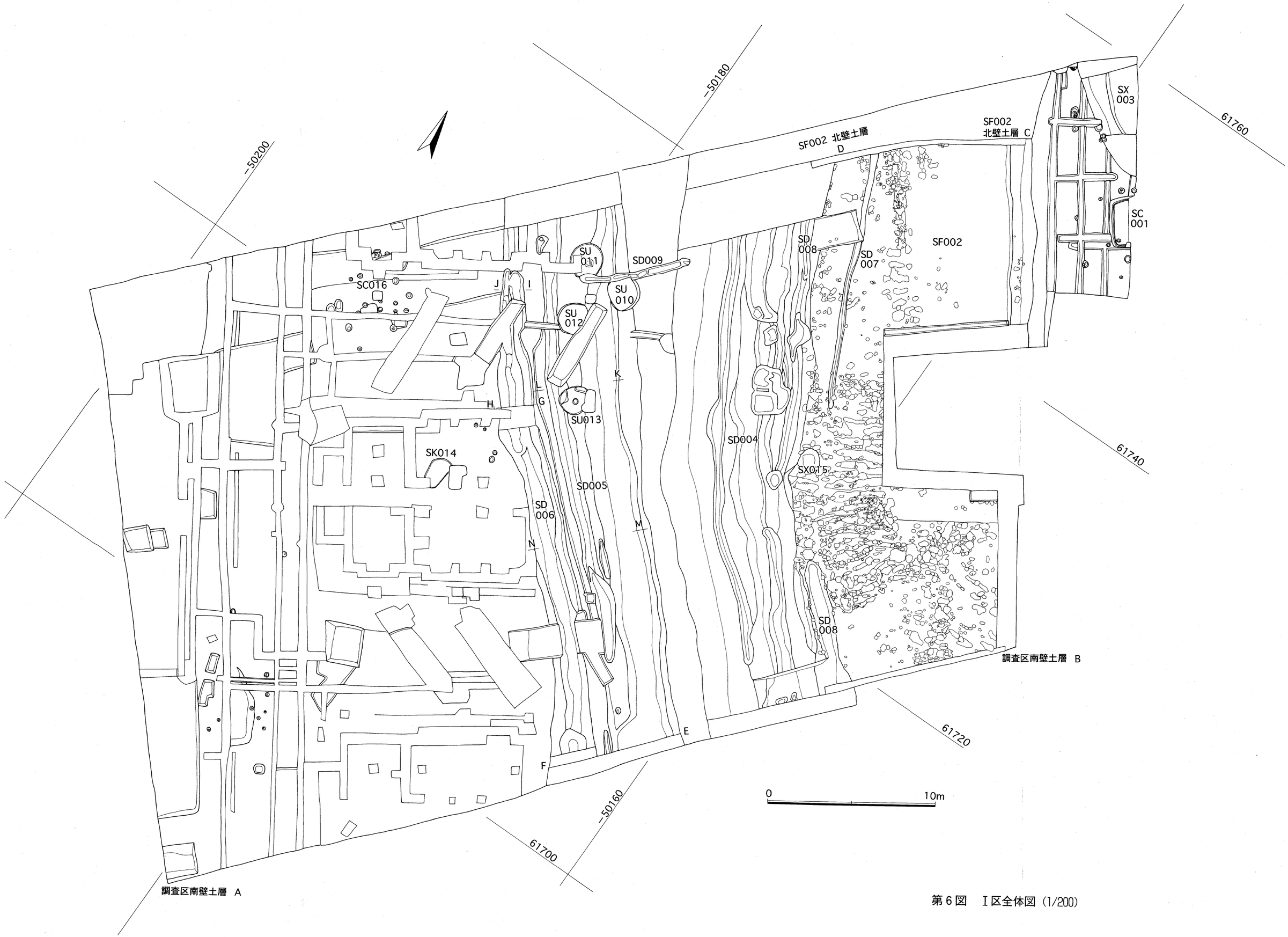
ＳＣ００１（第７図）

調査区東端で検出する。東側は調査区外に延びており未掘である。南北長３ｍ、遺構面からの深さ70cmを測る。全体に厚さ５cmほどの貼り床（５層）を施し、周囲には壁溝が巡る。床面直上のほぼ全面には焼土および炭化物層が広がり消失家屋の可能性が考えられる。掘り方は中央部分がわずかに高く、壁際がやや低くなっている。遺物の大半は１・２層からの出土で土師器甕の小破片のみである。古墳時代前期に位置付けられる。

出土遺物（第７図）　１は布留式甕の上半部小破片である。口縁端部はわずかに上方につまみ上げている。摩滅が著しく調整には不明瞭な点が多いが頸部から胴部にかけては横刷毛が残る。胴部内面は斜め上方に削り上げている。２は小型の壺である。胎土は精良で器壁は薄手に仕上げている。色調は赤みの強い褐色を呈する。摩滅のため調整は不明である。

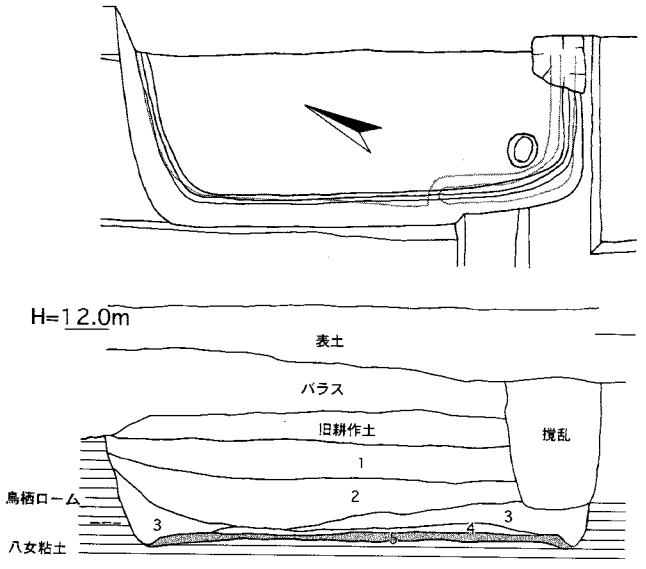


第5図　調査区土層図（1/80）

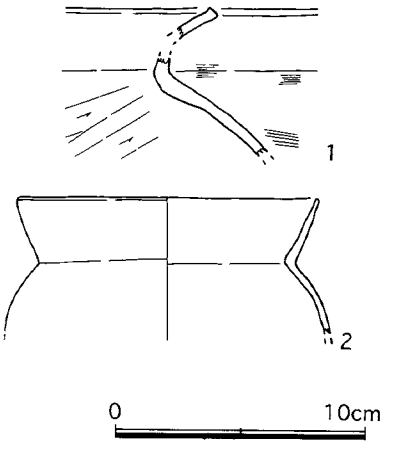


第６図　Ⅰ区全体図（1/200）

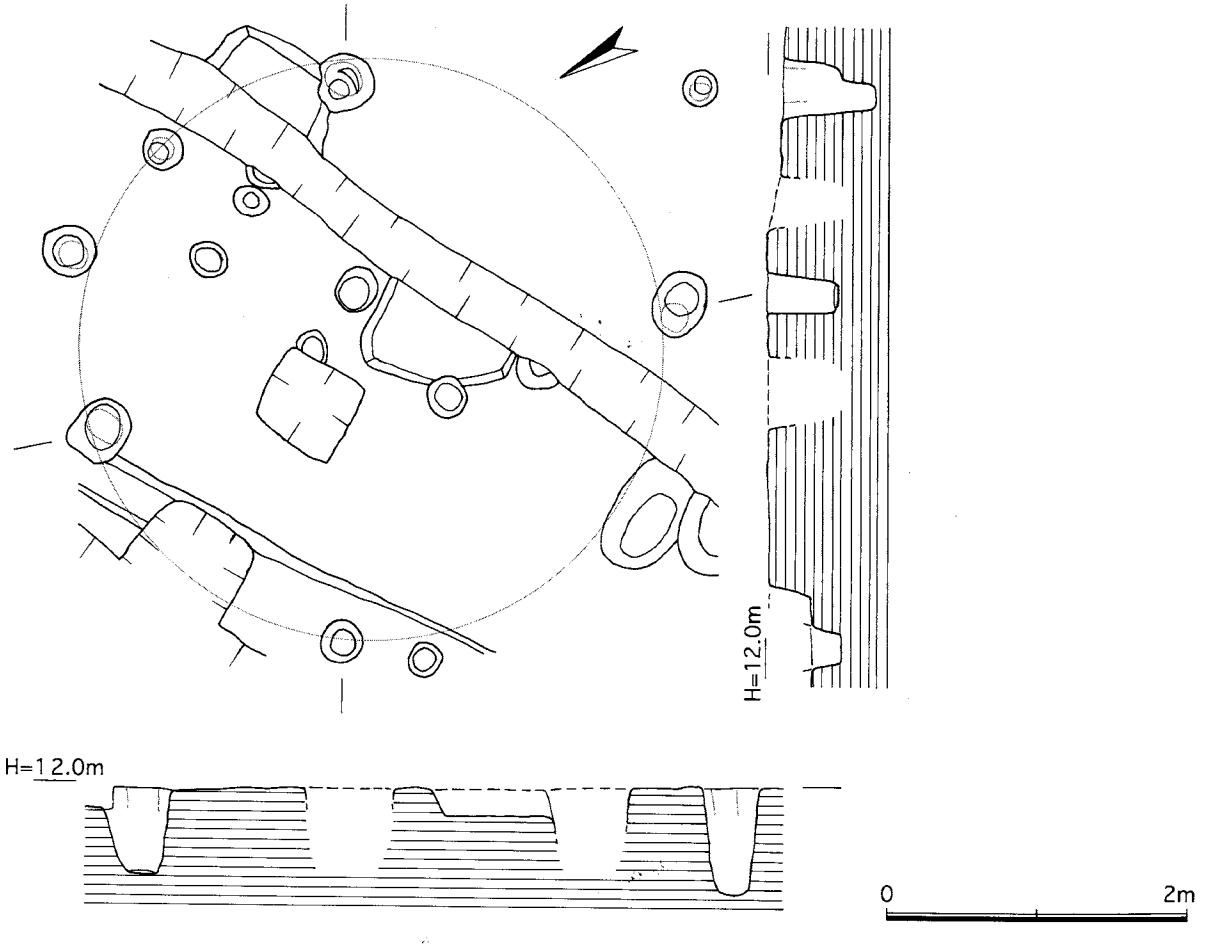
SC001



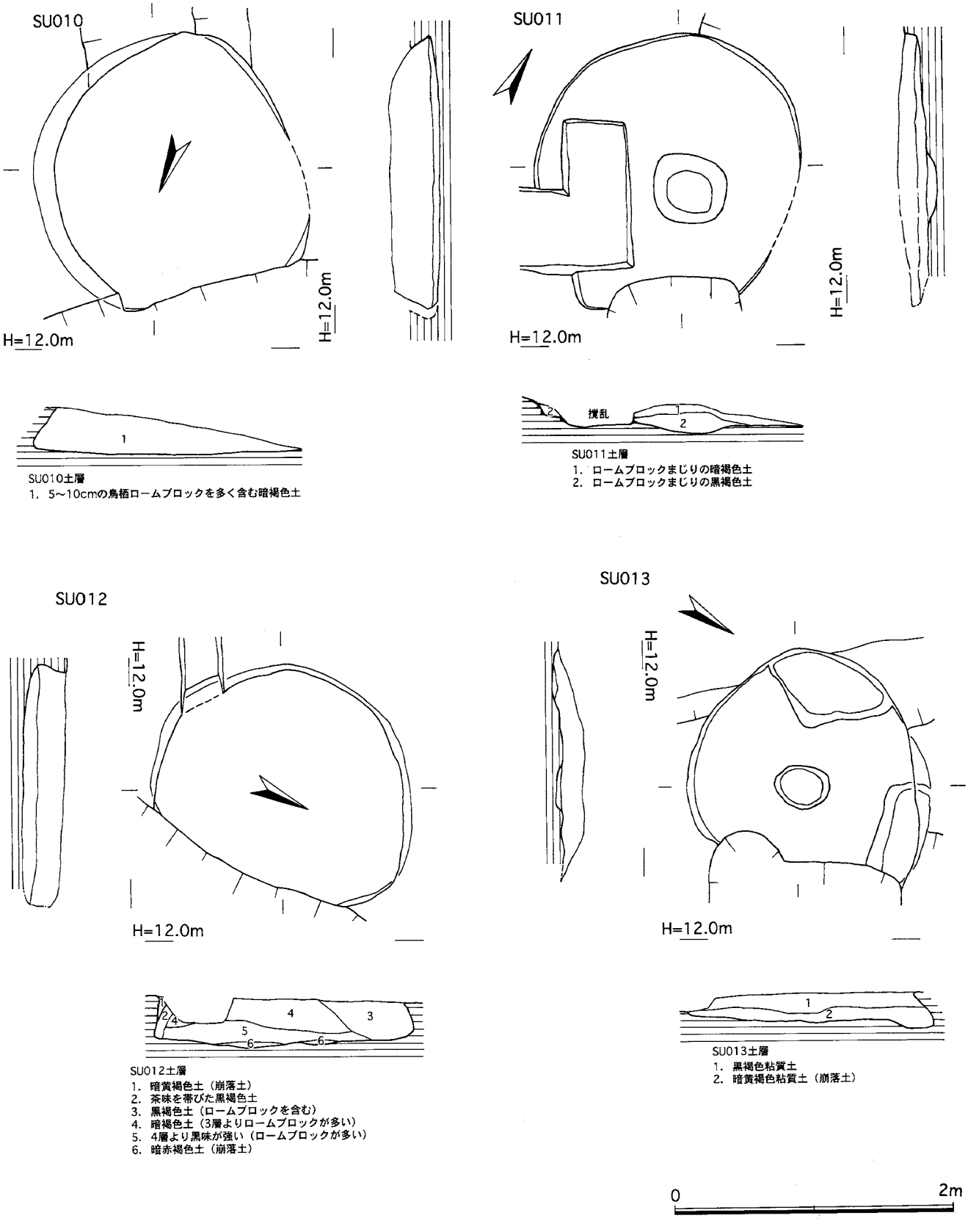
SC001土層
1. 暗褐色土
2. ロームブロックが混ざる茶味を帯びた暗褐色土
3. ロームブロックが2層より多い茶褐色土
4. 焼土+炭化物層
5. 暗黄褐色土（貼床）



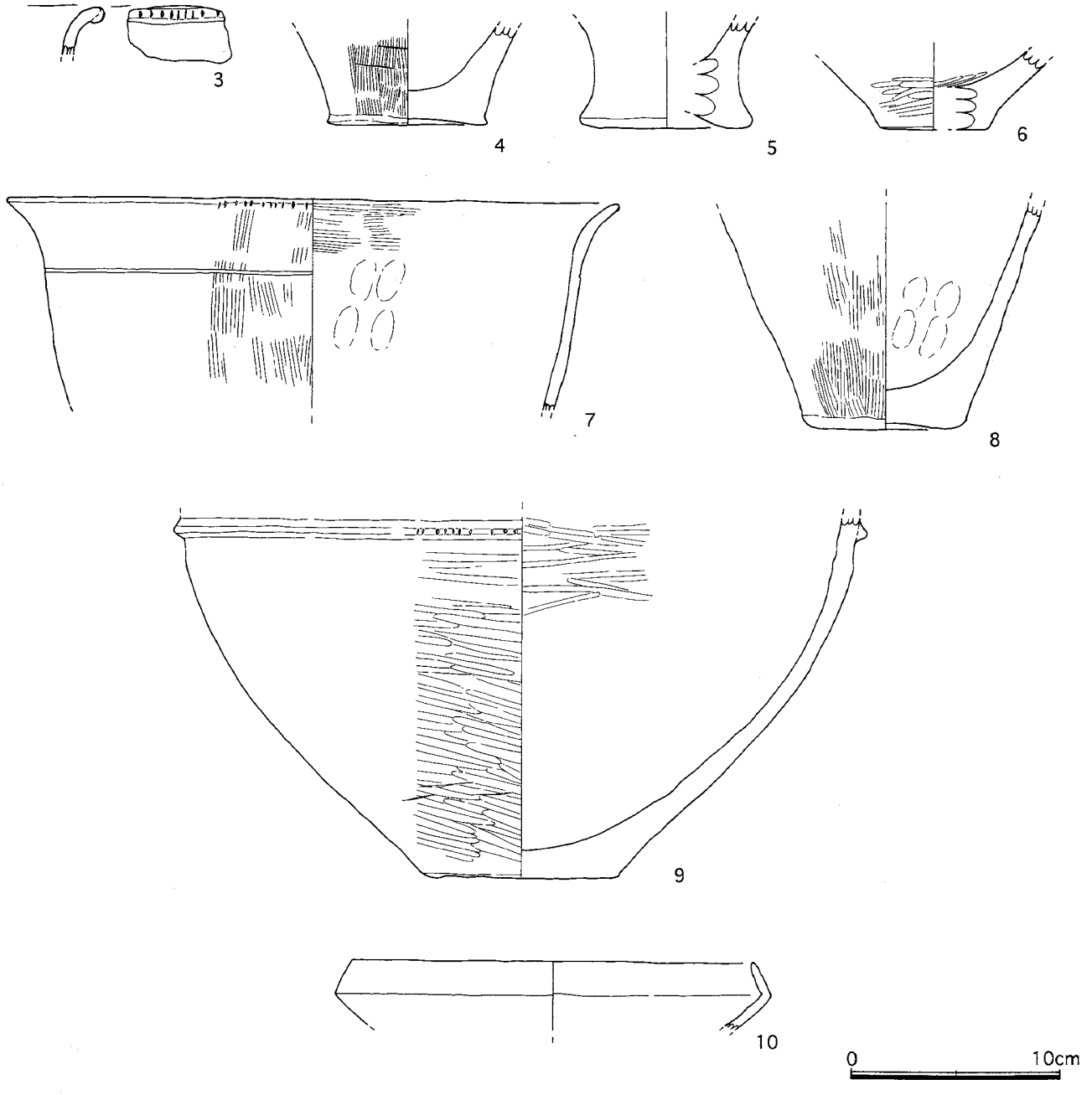
SC016



第７図　ＳＣ001・016及び出土遺物実測図（1/50、1/3）



第8図　SU010・011・012・013実測図（1/40）



第９図　ＳＵ010・012・013出土遺物実測図（1/3）

ＳＣ０１６（第７図）

調査区西北側で検出する。この周囲は削平を受けながらも比較的ピットの残存状態が良好であるため竪穴住居跡の存在が想定できるが、かろうじて遺構としてまとめることができたものはこの１棟のみである。竪穴の掘り方は失われているが、柱間径４ｍの円形竪穴住居跡と考えられる。主柱は10本ほどで構成されるものと考えられるが欠失しているものも半数近い。残存している柱の深さを考えると円形住居としてまとめるのもやや不安定である。柱掘り方は径40cm前後、深さは50～70cm、柱痕跡径15～20cmを測る。柱以外の屋内土坑等は削平されており確認できていない。小破片のみで図示できる遺物はないが形状から弥生中期に位置付けられるものであろうか。

貯蔵穴（ＳＵ）

調査区内で４基の貯蔵穴を確認している。いずれも削平が著しく確認面は鳥栖ローム層の最下部で床面が八女粘土層の直上となる。掘り方は貯蔵穴の基底面から20～40cm程しか残っていない。調査区に中央ややまとまって北寄りに位置しており、削平・官道の掘削等で失われたものも多いと考えられる。

ＳＵ０１０（第８図）

検出面での上面径２ｍ、検出面からの深さは最大で30cmを測る。北側と西側の一部は削平により壁が失われている。東側の壁面はオーバーハングしているが、西側では削平も有りその痕跡は確認できていない。床面はほぼ平坦である。遺物は破片が少量出土している。弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

出土遺物（第９図　３～６）　３は如意形に屈曲する甕の口縁部破片である。端部の刻み目は前面に行なわれる。鈍い赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。４・５は甕の底部である。４は平底で外面に縦刷毛を施し、底部との境は軽く横なでを行なう。内面及び外底面はなでている。５は上げ底の底部である。内外面なでによる調整を行なう。６は壺の底部である。内外面にヘラ状工具による磨きを行なう。

ＳＵ０１１（第８図）

検出面での上面径1.9ｍを測り、平面径はやや歪な円形を呈する。検出面からの深さは20cmを測るが東側では中世溝により壁がほとんど失われている。床面はほぼ平坦であるが中央部分に深さ10cm弱のくぼみが残る。遺物は小破片が数点のみで図示できるものはない。

ＳＵ０１２（第８図）

東側を削平により失うが検出面での上面径1.8ｍの円形に復元できる。検出面からの深さは40cmを測る。壁面はややオーバーハングする。床面は中央部に向かってわずかにくぼんでいる。出土遺物には甕・壺があり、弥生時代前期後半～末に位置付けられる。

出土遺物（第９図　７～９）　７・８は甕である。７は上半部分の破片である。口縁部は緩く外反し端部はわずかに面取りしている。刻み目は口縁下端部分に行なう。胴部外面は縦刷毛を施し、上部に１条の沈線をめぐらせる。口縁部内面は横刷毛を行い、以下はなでによる調整である。８はやや上げ底気味の底部である。外面は縦刷毛、内面はなでを行なう。９は壺の下半部分である。胴部に断面三角形の突帯を巡らせ、突帯頂部に刻みを施す。内外面に磨きを行なうが、外面は比較的緻密に磨くが、内面はなでの後やや粗い磨きを行なっている。

ＳＵ０１３（第８図）

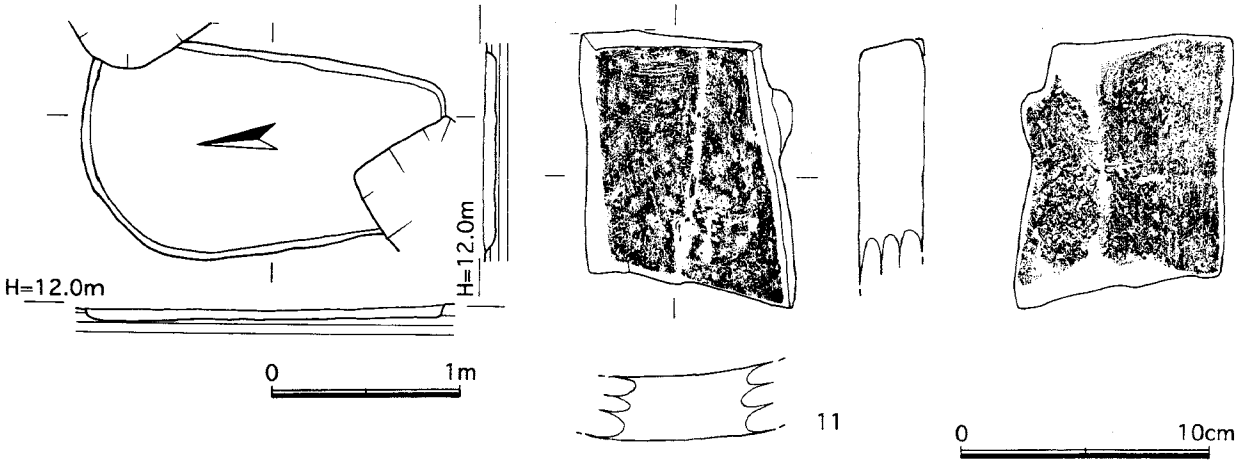
検出面での上面径1.6ｍを測り、平面径はやや歪な円形を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。床面は凹凸が残り、壁際の一部および床面中央部に緩やかな掘り込みがある。遺物は小破片が数点のみである。図示し得た遺物以外に外面縦刷毛、内面ナデを行い、胎土に砂粒を多く含む甕の胴部破片が出土しており、この遺構の時期は弥生時代前期の範疇で捉えられよう。

出土遺物（第９図　10）　10は暗褐色を呈し、胴部を「く」字状に屈曲させている。摩滅のため不明瞭であるが縄文時代後期に位置付けられる浅鉢の破片であろうか。

３　古代～中世の遺構

土坑（ＳＫ）

ＳＫ０１４（第10図）



第10図　SK014及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

調査区中央部分で検出する。長軸1.9m、短軸1.1mを測り、平面形はやや不整な隅丸長方形を呈する。削平が著しく検出面からの深さは5cm前後である。埋土は褐色土にロームを混合している。床面はほぼ平坦である。遺物は土師器・須恵器・瓦の小破片が出土している。残存状況が悪く、機能・用途は不明である。

出土遺物（第10図）　図示し得たのはこの1点のみである。平瓦の先端部破片である。焼成はあまく淡黄色を呈し器面の摩滅が進んでいる。凹面はわずかに痕跡的に布痕が確認できる。凸面には長軸方向に平行な縄目が残る。また器面の剝落・断面の状況から粘土板の接合と考えられる。

溝（SD）

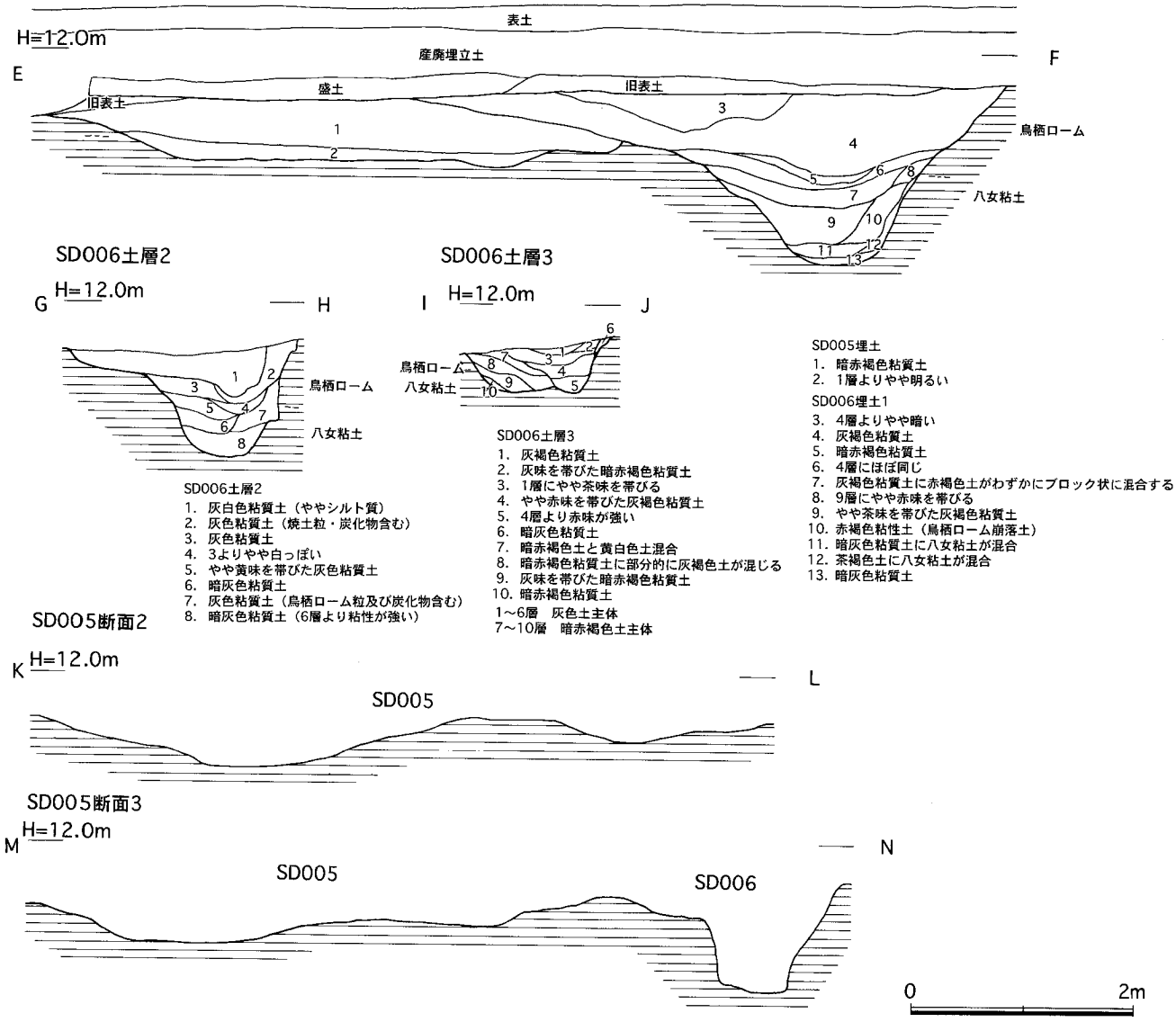
SD005・006（第11図）

いずれもSD004の西側で検出された溝で、これにほぼ並行して南北方向に延びる。表土掘削時にSD005の溝埋土部分を遺構面上層の土と誤認して埋土の2／3程を掘り下げたため、平面的には切りあい関係が不明であったが、土層観察の結果SD005→SD006の先後関係が確認できた。

SD005は東側に位置する溝である。溝幅4～5mを測り、検出面からの深さ30～50cm前後となる。断面形状は一定していないが、南端部分では低平な皿状を呈し、北半部分の底面では2条の溝が並行しているような状態である。埋土は赤褐色土を主体とし、しまりがない。遺物は2層を中心に出土しており、大半が古代に位置付けられる瓦でコンテナ10箱程出土している。他に土師器、陶磁器、瓦質土器が少量出土している。細かな位置付けは不明であるが、中世前半期の12世紀中頃～13世紀代に位置付けられる。

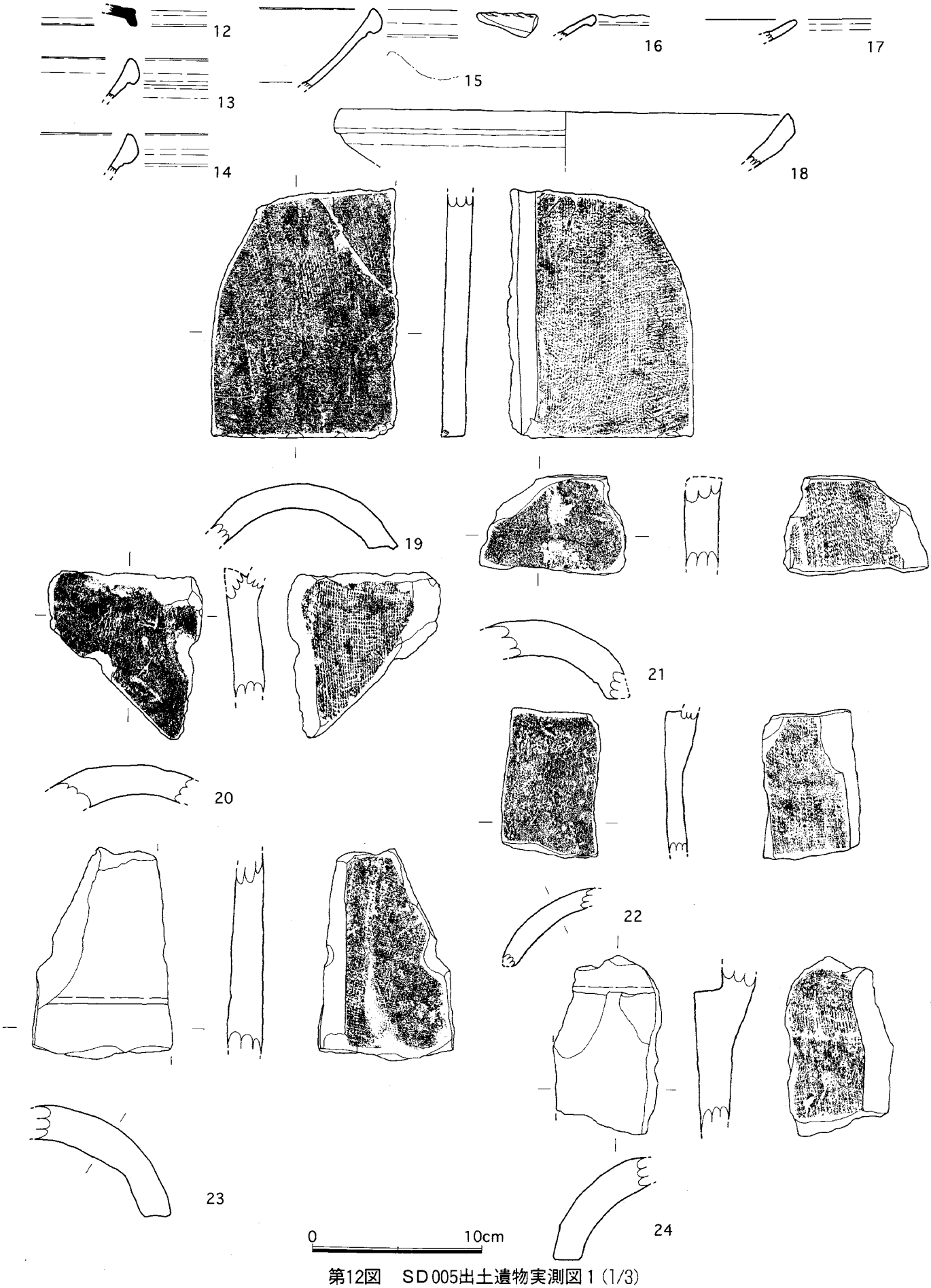
SD006はSD005の西側に位置する。SD005の蛇行に伴って同様に屈曲しておりほぼ並行している。検出面での幅は南側で2～3m、北端付近で1m前後を測るが、土層図面からみると本来的には幅5m程度と考えられる。掘削深は北側ほど浅くなっており、北端部分では検出面から30cm程となっている。また土層から埋没途中の掘りなおしが想定できる。出土遺物はSD005同様に瓦が主体を占めるが、SD005に比べると相対的に量は少ない。出土遺物・位置的な関係などからSD005埋没後に掘削されているものの、時期的な間隙はあまりなかったものと考えられる。出土遺物はコンテナ4箱で、SD005同様瓦が主体を占めているが、陶磁器等を若干含んでいる。

出土遺物（第12～16図）　第12～14図（12～35）はSD005出土、第15・16図（36～51）はSD006出土遺物である。

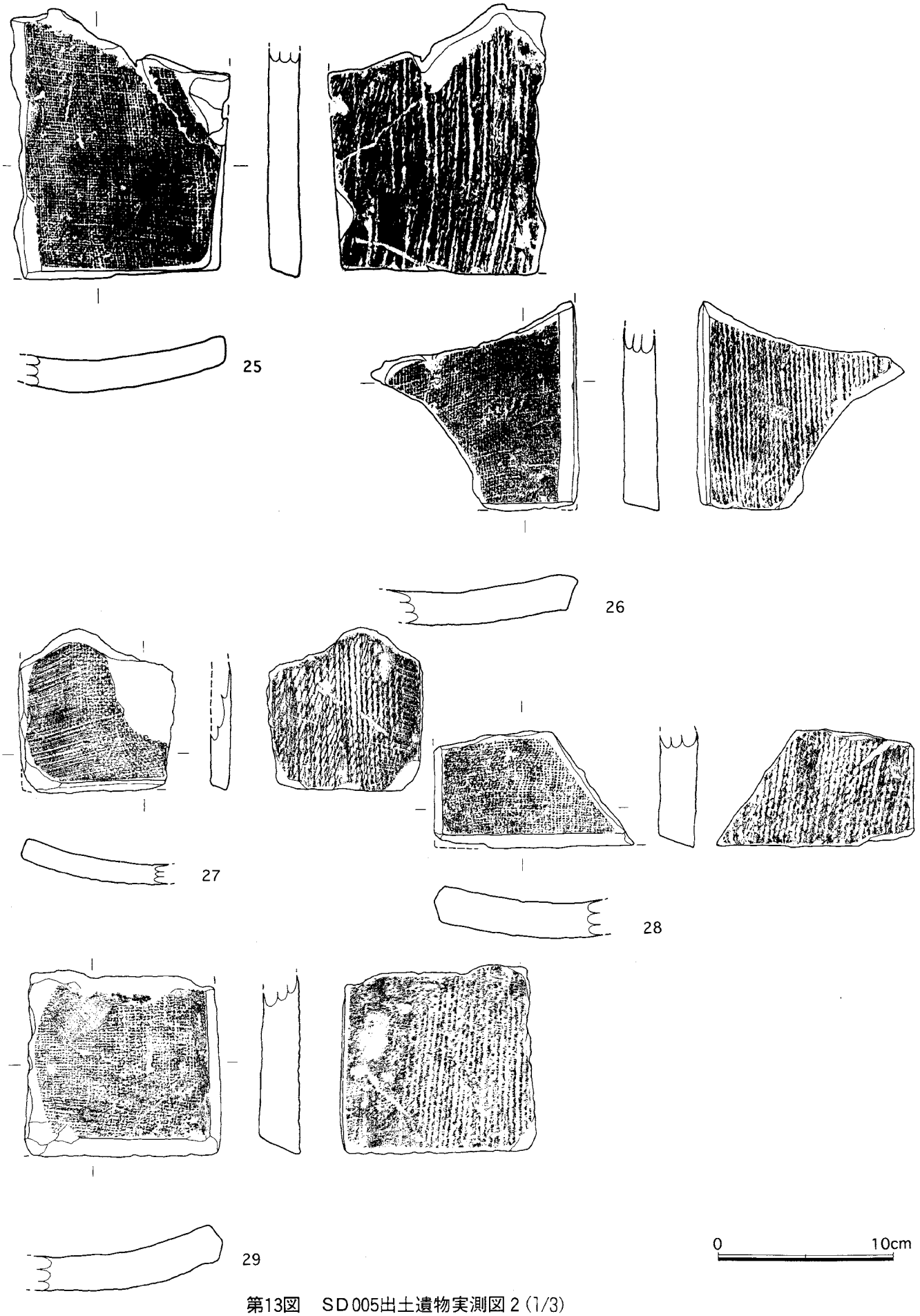


第11図　SD005・006土層実測図（1/60）

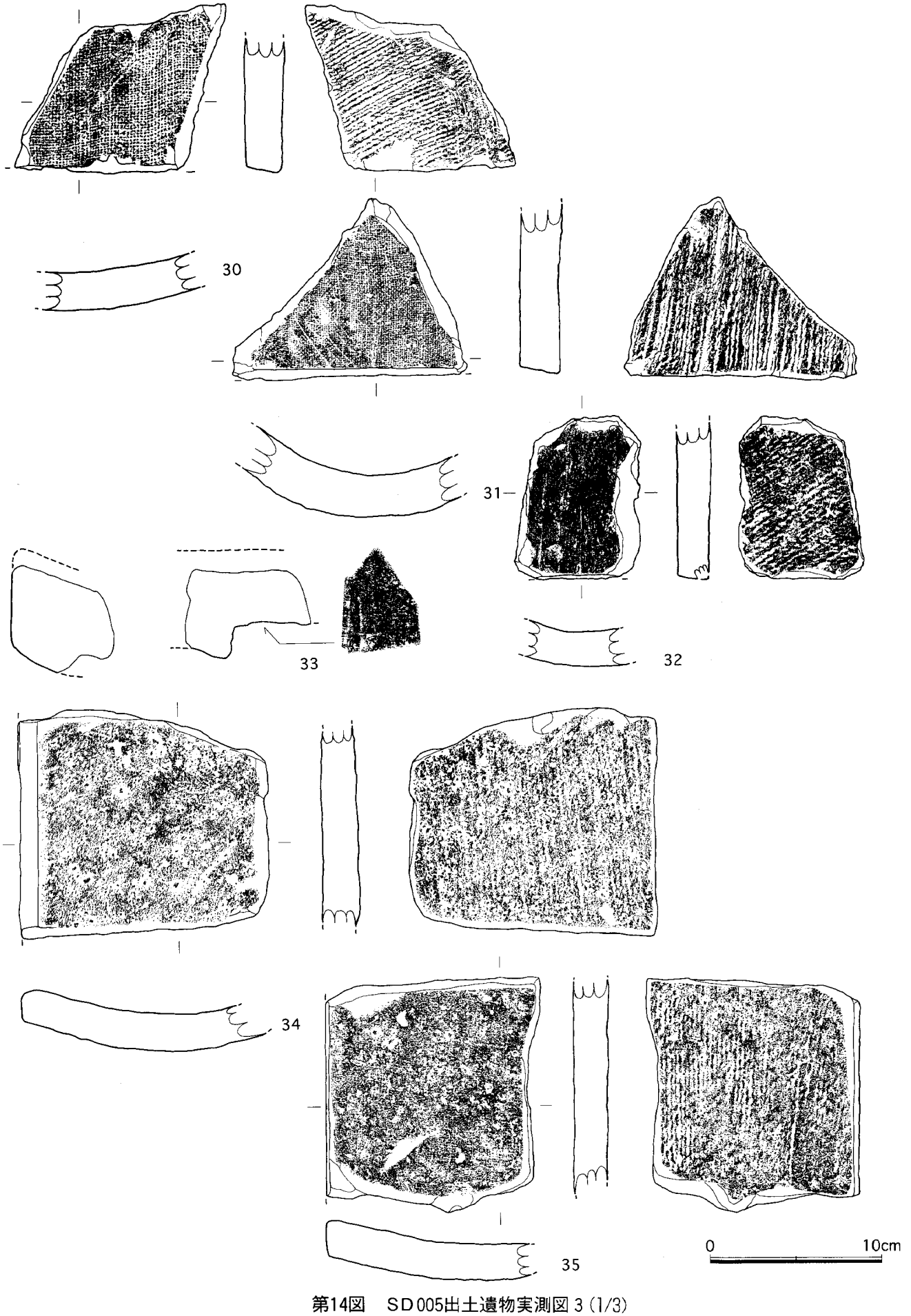
12は須恵器蓋である。口縁端部は直立する。13～15は白磁碗Ⅳ類である。16は白磁皿で、内面からの切込みで口縁端部を波状に作る。17は青磁皿である。18は口縁端部を玉縁に作る土師質の鍋である。器面調整は不明瞭である。19～24は丸瓦である。焼成は19～21が須恵質で灰色を呈し、22～24は焼成不良で端黄色を呈し摩滅が進んでいる。また20・22・24が玉縁式である。24では粘土板の合わせ目部分での剝落が見られるが、露出した面にも叩きの痕跡が残っている。いずれにも凹面には布目が残っている。凸面は剝落もあり不明瞭であるが、19・20は縄目の叩きの後になで消している。21はなでのみが観察される。22・24にも痕跡的に縄目が残る。23は凸面に痕跡的な段を有し、なでによる調整を行なっている。25～35は平瓦である。25～32は須恵質の焼成、33～35は焼成不良である。凹面は33・34は摩滅により不明であるが、35がなでの他はすべて布目が残る。凸面にはすべて縄目が残るが、29には縄目の後に一部指押えを行なっている。側面及び端面はいずれもヘラ削りにより整形するが、側面は面取りを1面行なうのみのもの（27）と、「く」字状に2面行なうもの（28・29）がある。また



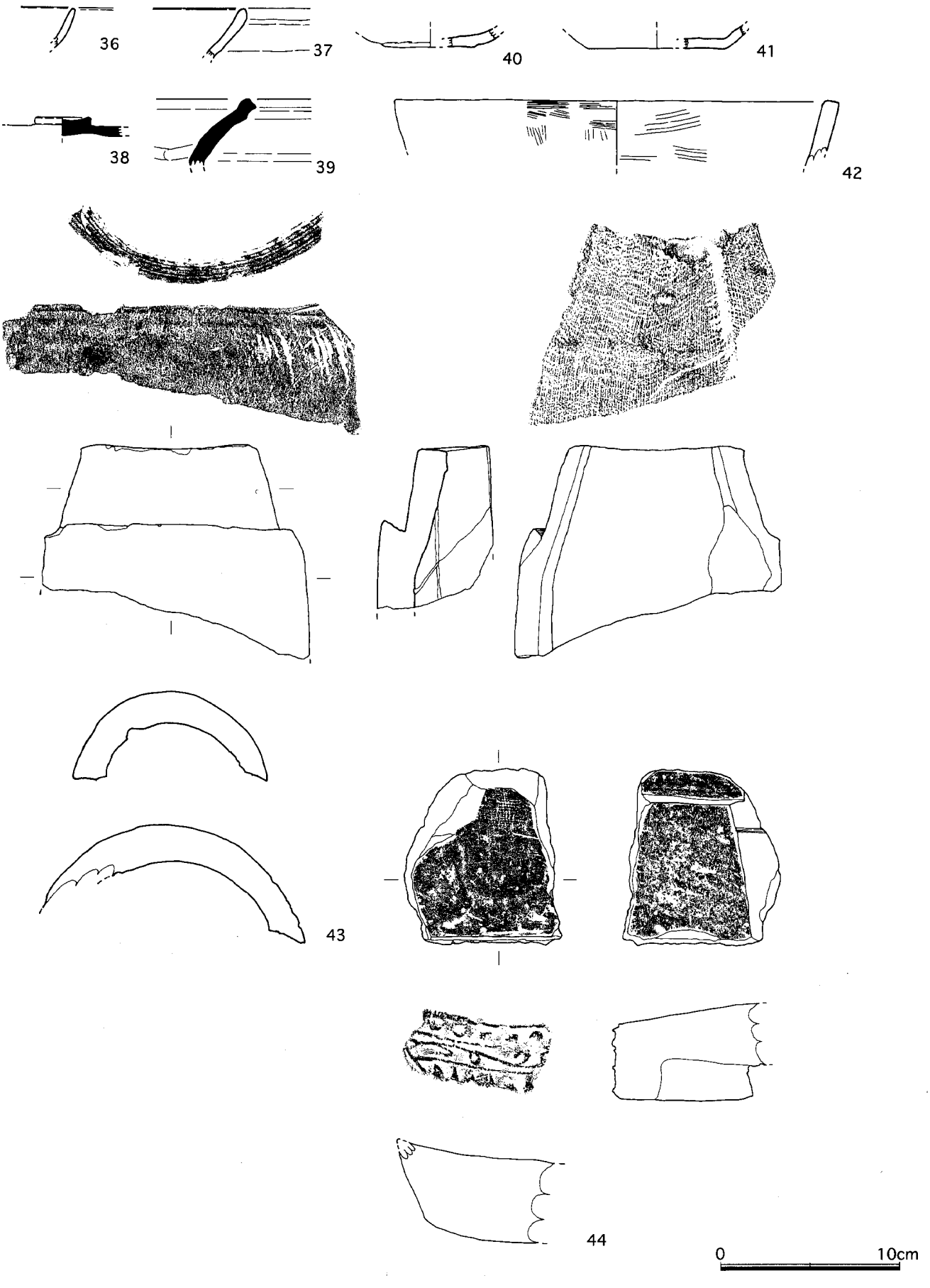
第12図　SD005出土遺物実測図1 (1/3)



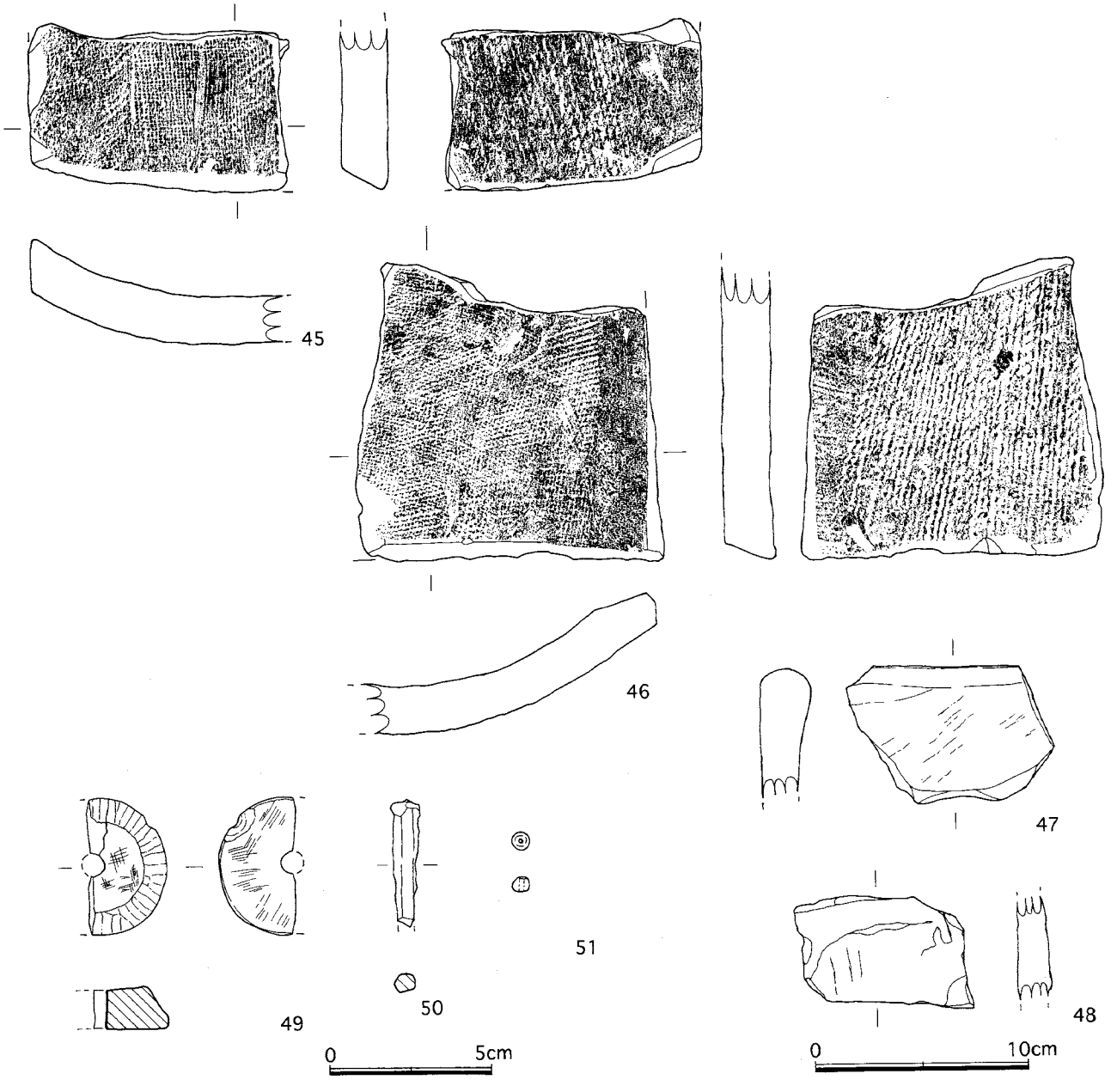
第13図　SD005出土遺物実測図２(1/3)



第14図　SD005出土遺物実測図３(1/3)



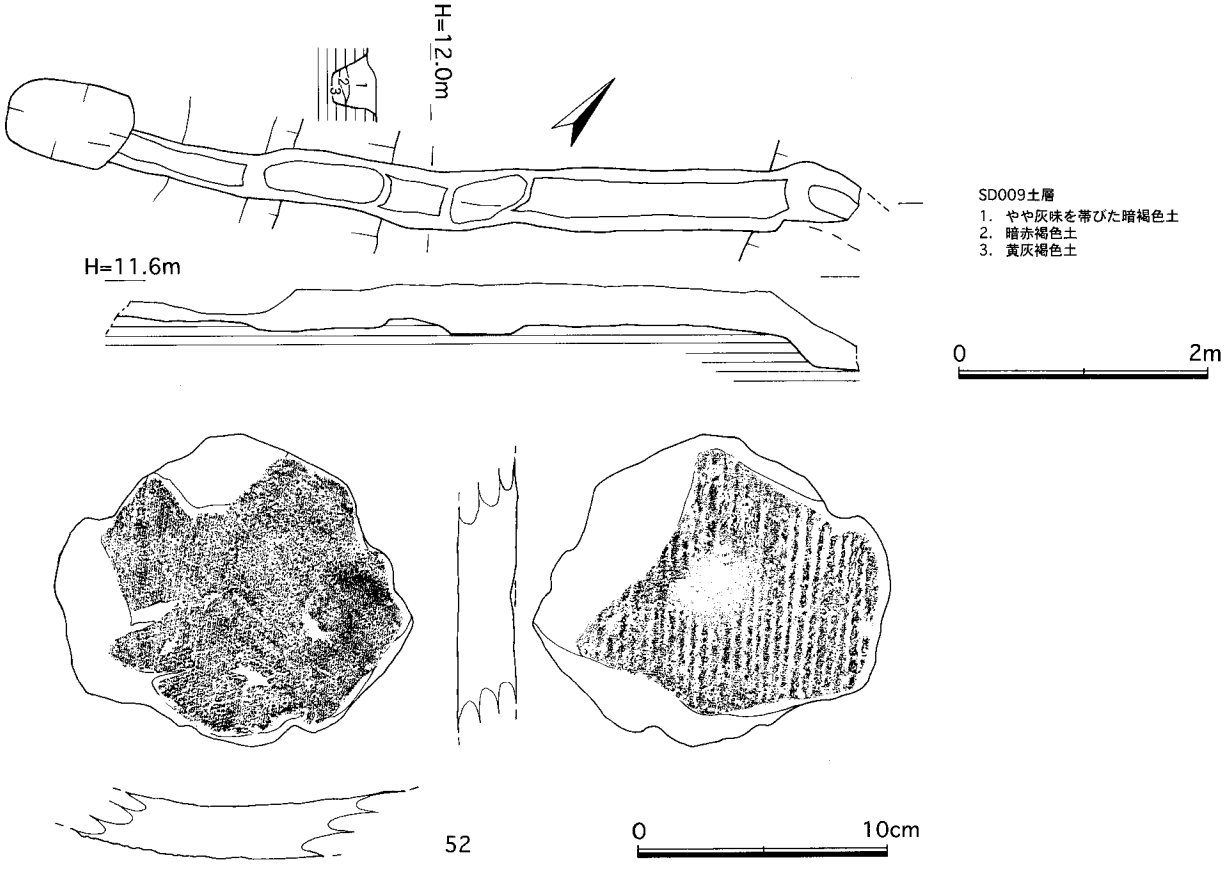
第15図　SD006出土遺物実測図１（1/3）



第16図　SD006出土遺物実測図２（49～51は1/2、その他は1/3）

凹面の側面側にヘラ削りを行なうもの（25・26・34・35）もある。33は破損が著しいが、軒平瓦の一部である。側面の一部が残存し、瓦当部分は欠失している。

36は青磁皿、37は白磁碗の小破片である。38・39は須恵器である。40・41は土師器坏である。外底面には糸切りが行なわれる。42は土師質の鍋である。内外面に刷毛目が施される。43は玉縁式の丸瓦である。焼成は堅緻な須恵質で灰色を呈する。玉縁部分は両側面が残っている。側面は凹面から１／３はヘラ切りを行なうが、これより外側は割り取られたような痕跡を残す。凸面は横なでを行なうが、胴部には一部縄目が残る。また連結面には５条の圏線が巡る。凹面には全体に布目が残るが、布が寄ったような痕跡が残る。44は軒平瓦である。焼成はやや不良で淡灰白色を呈する。凹面は顎部には板なで状のヘラ削りを行い、胴部には布目が残る。また凸面は顎部・胴部共に縄目が残る。凹面のヘラ削



第17図　ＳＤ009及び出土遺物実測図（1/60、1/3）

り部分にあわせて、側面には段が残る。瓦当は周囲を圏線で縁取り、内部を３段の文様帯にほぼ均等に分割する。文様は上区に連珠文、中区に偏行唐草文、下段に鋸歯文を陽刻する。45・46は須恵質の平瓦である。凹面には布目、凸面には縄目が残る。46は側面を２面に面取りをし、凹面端部もやや幅広のヘラ削りを行なう。47・48は砂岩製の砥石である。49は滑石製の紡錘車、50は鉄釘、51はコバルトブルーを呈するガラス小玉である。

ＳＤ００９（第17図）

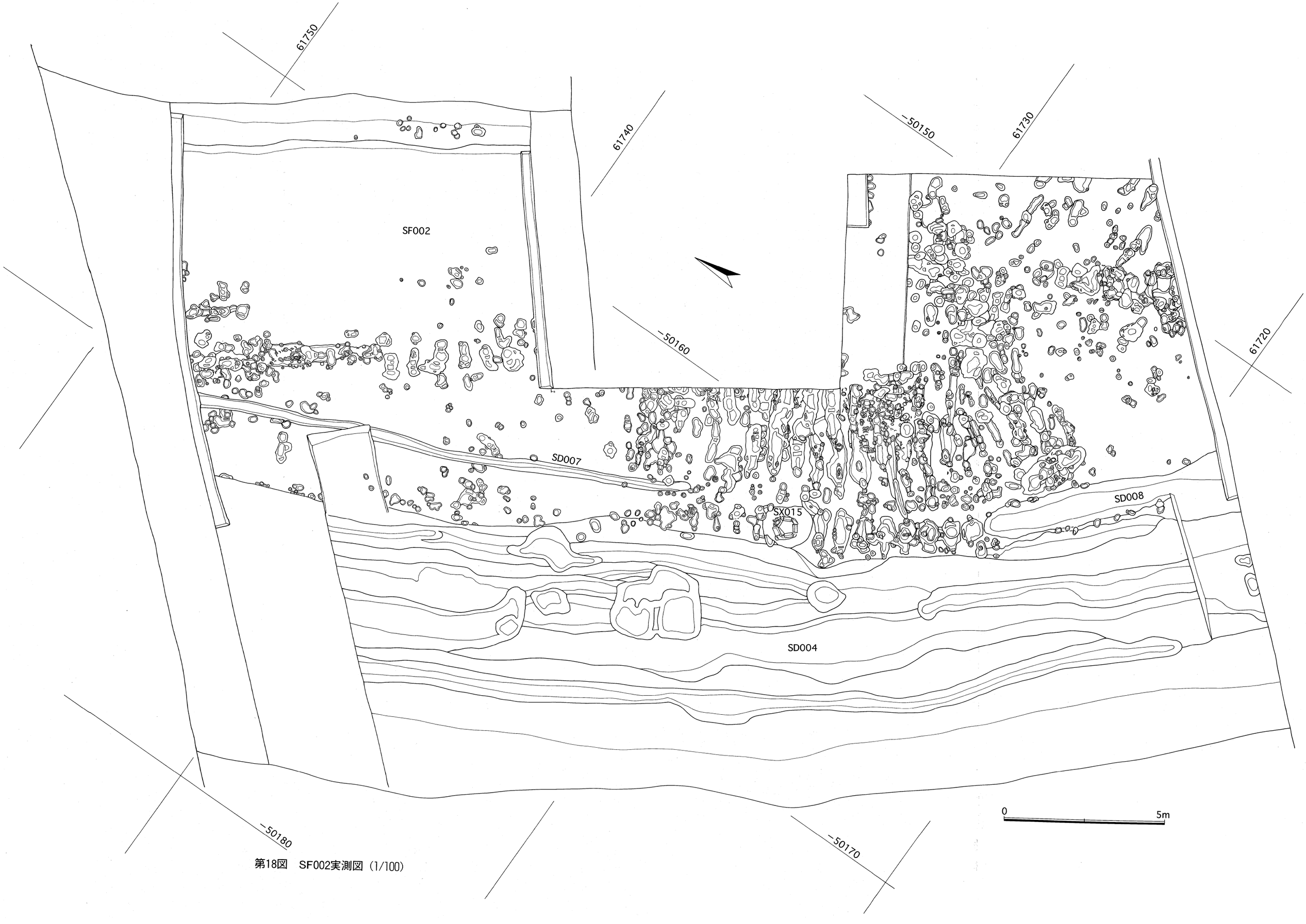
調査区中央北側で検出する。斜面に直交するように東西方向に比較的直線的に延びる。西側は撹乱を受け自然に立ち上がり、東側はＳＤ００４により削平されている。溝横断面形は比較的均整の取れた箱型に近い逆台形を呈し、延伸方向の溝底断面は面的な凹凸を有する。土師器・須恵器・瓦が少量出土している。

出土遺物（第17図）　52は平瓦である。淡灰色を呈し本来須恵質であると考えられるが、焼成が不良で器面は大きく摩滅している。凹面には痕跡的に布目が残存しているが、製作時の粘土のしまりが悪く、表面に亀裂が生じている。また凸面には縄目が残っている。

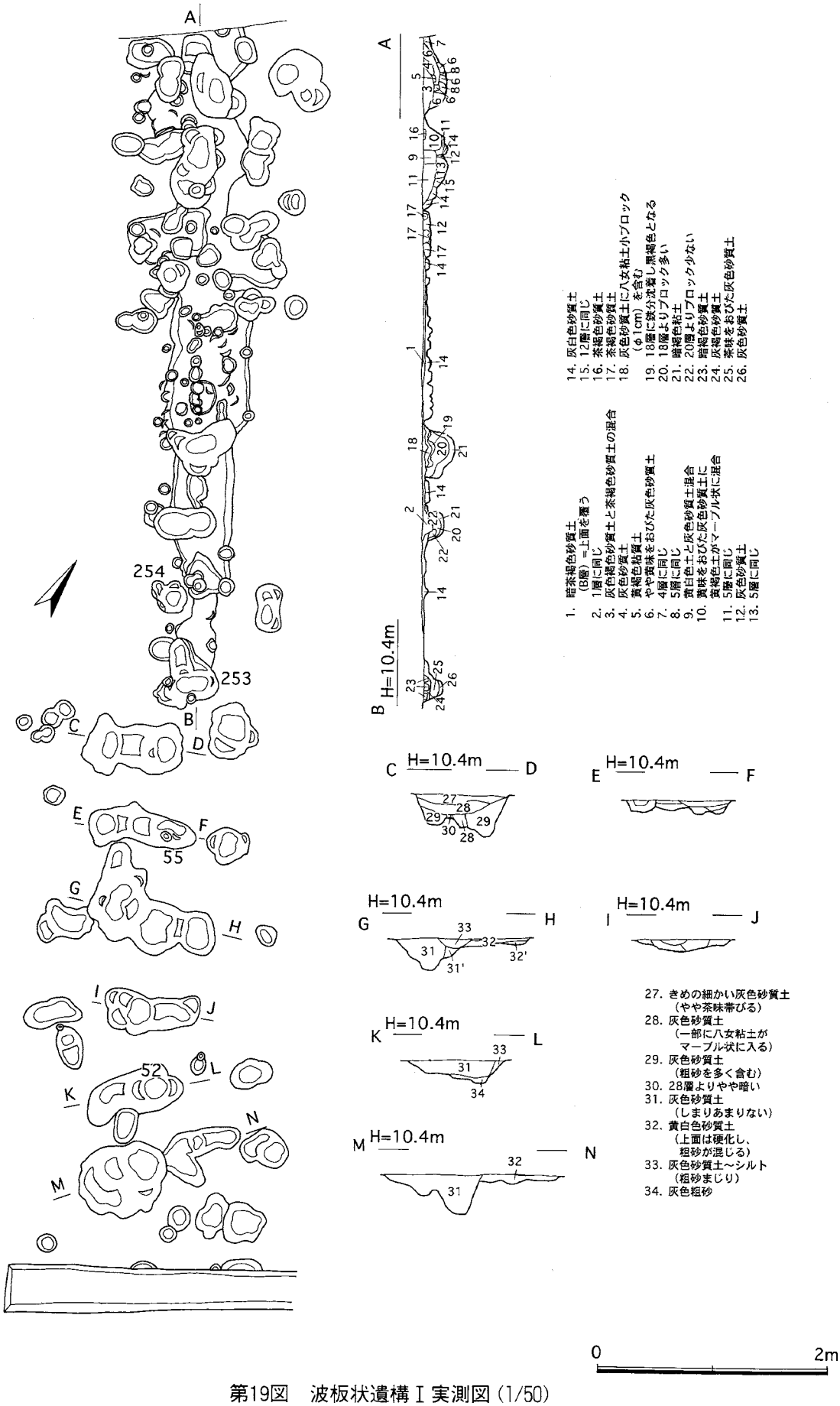
道路（ＳＦ）

ＳＦ００２（第18図）

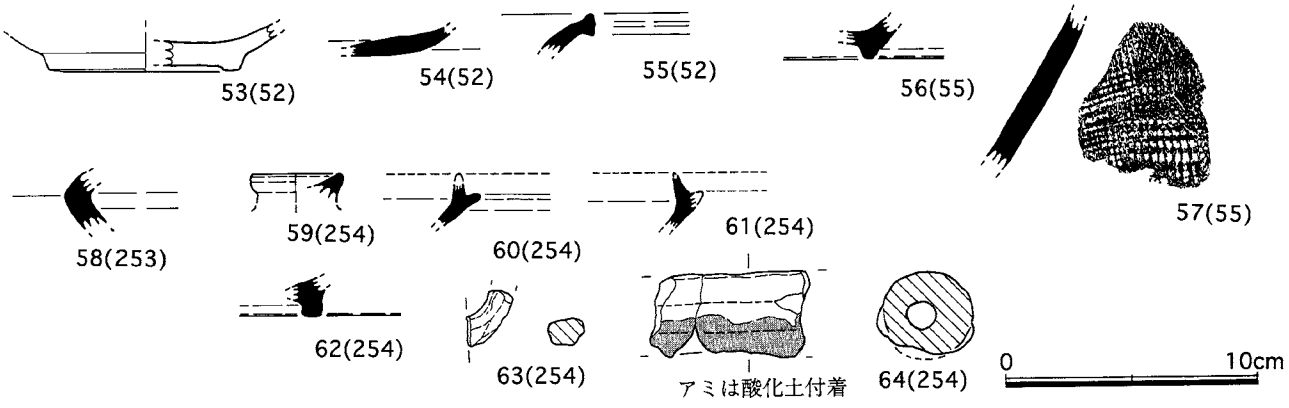
本調査地点は水城東端部分の切り通し部分（推定東門跡）から博多遺跡群に向けて直進する官道（水城東門ルート）の通過地点として、歴史地理学・考古学的な成果から調査前より指摘されていた地点



第18図　SF002実測図（1/100）



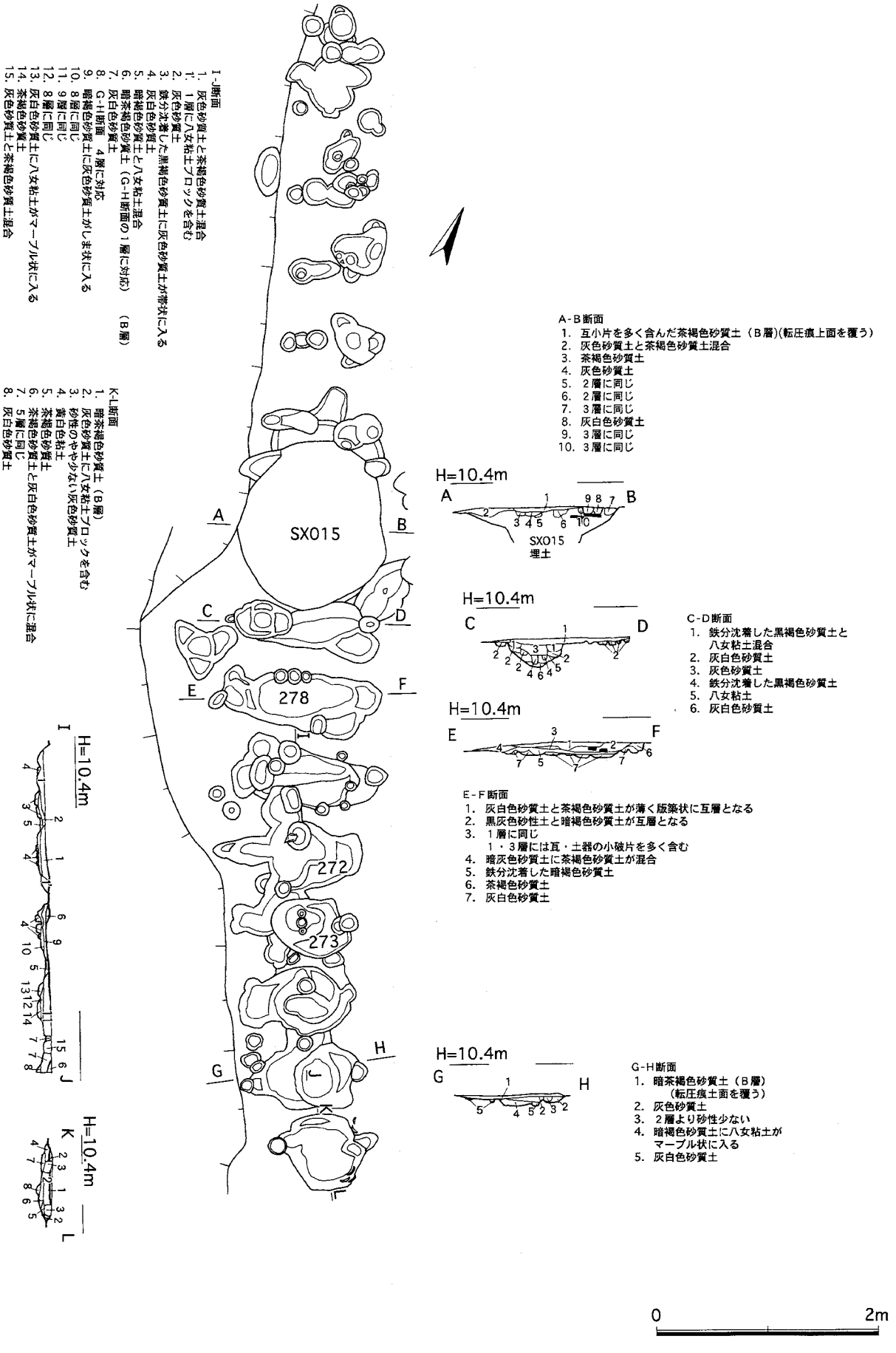
第19図　波板状遺構Ⅰ実測図 (1/50)



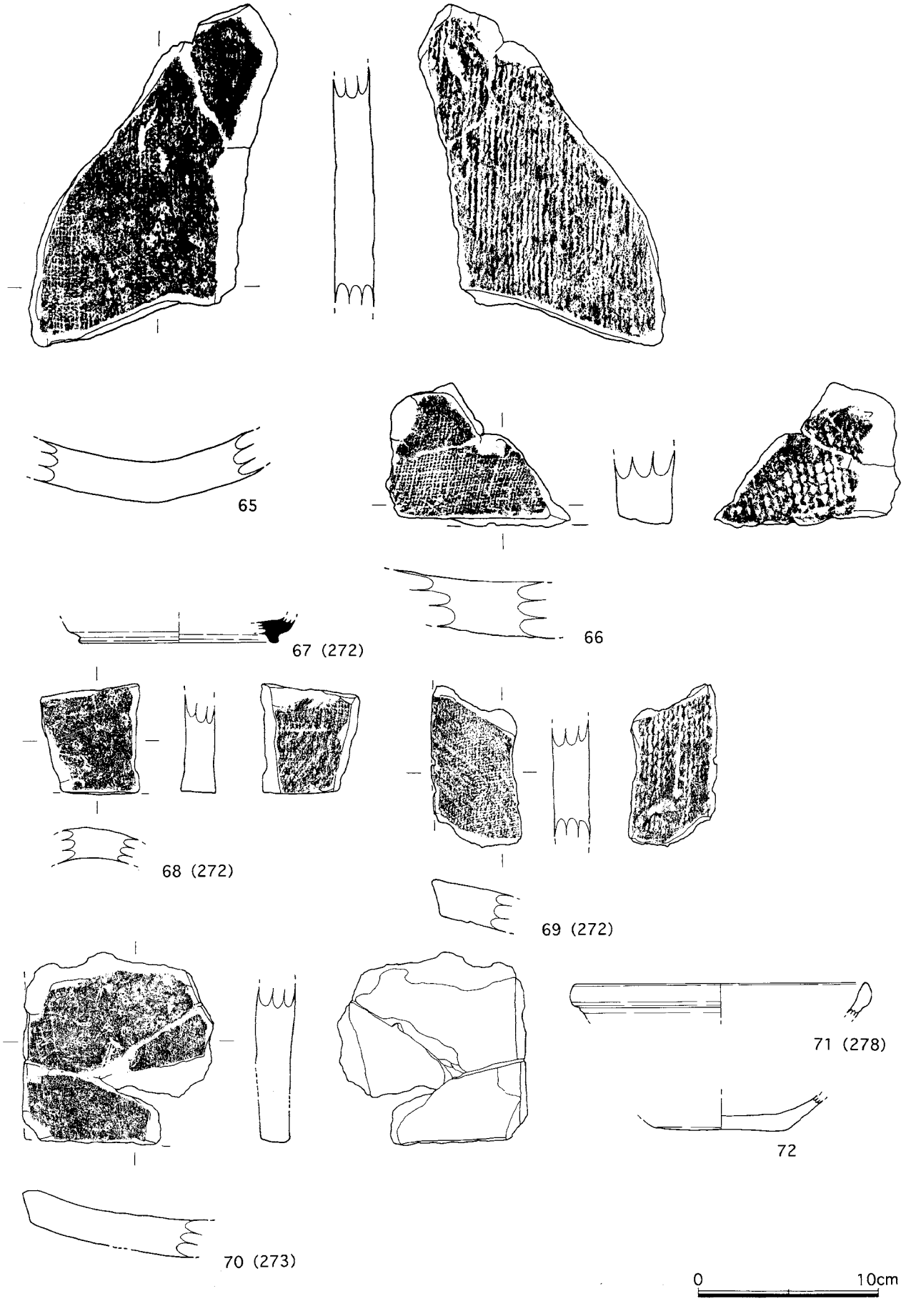
第20図　波板状遺構Ⅰ出土遺物実測図（1/3）

である。大正末～昭和初期に作製された地図（第３図）においても丘陵の尾根線に並行して全長約400ｍ、幅10～20ｍ程度の切り通しが表現されている。切り通しには細かな蛇行が見られるものの巨視的には南東方向から北西方向にほぼ直進して掘削されている。切り通し内部には通路及び水路が走り、他は周囲の低地部分同様水田として表現されている。本調査地点は低平な独立丘陵の南側にあたり、切り通しの最南端部分に位置している。切り通し南西側には幅150ｍ程の丘陵が広がり、北東側には幅10ｍ、長さ35ｍ程の小島状になった丘陵端部が残されている。この部分での切り通し幅は約20ｍである。この地図に示された切り通しはⅠ区の東側で確認された。概要の項で述べたように切り通しの上部には２ｍ程度の盛り土が行なわれており、それを除去すると北側の上端幅で22ｍを測る切り通しが確認できた。なお東側中央部分にコンクリート柱が存在していたため凸字状に未掘部分ができている。切り通し内では戦前まで使用されていた水田・畦畔・水路が認められた。水路（ＳＤ００４）は切り通しの西側壁沿いに掘削されている。上端幅７～９ｍを測り、第５図５～12層に見られるように流水の状況が認められるが、その後４層は滞水状況の中で堆積したようである。なお４層上面（水路の西側）も戦前には水田となっていたものと考えられる。また13層上面が大正末～昭和初期の地図に示された水路にあたるものである。ＳＤ００４出土遺物は第38図に一部を掲げているが、下層の５～12層からは中世前半の土器、４層からは近世の陶磁器が出土している。ＳＤ００４は官道廃絶後の水田化に伴ない開削され、形状を変えながら戦前に至ったものと考えられる。畦畔は戦前のもので、幅1.9ｍで水路の東側に沿う。上面に幅１ｍの轍が残っており（写真17）、道路としての使用が伺われる。なお道路底面で確認した２条の南北溝（ＳＤ００７・００８）は水田に伴うものであろう。

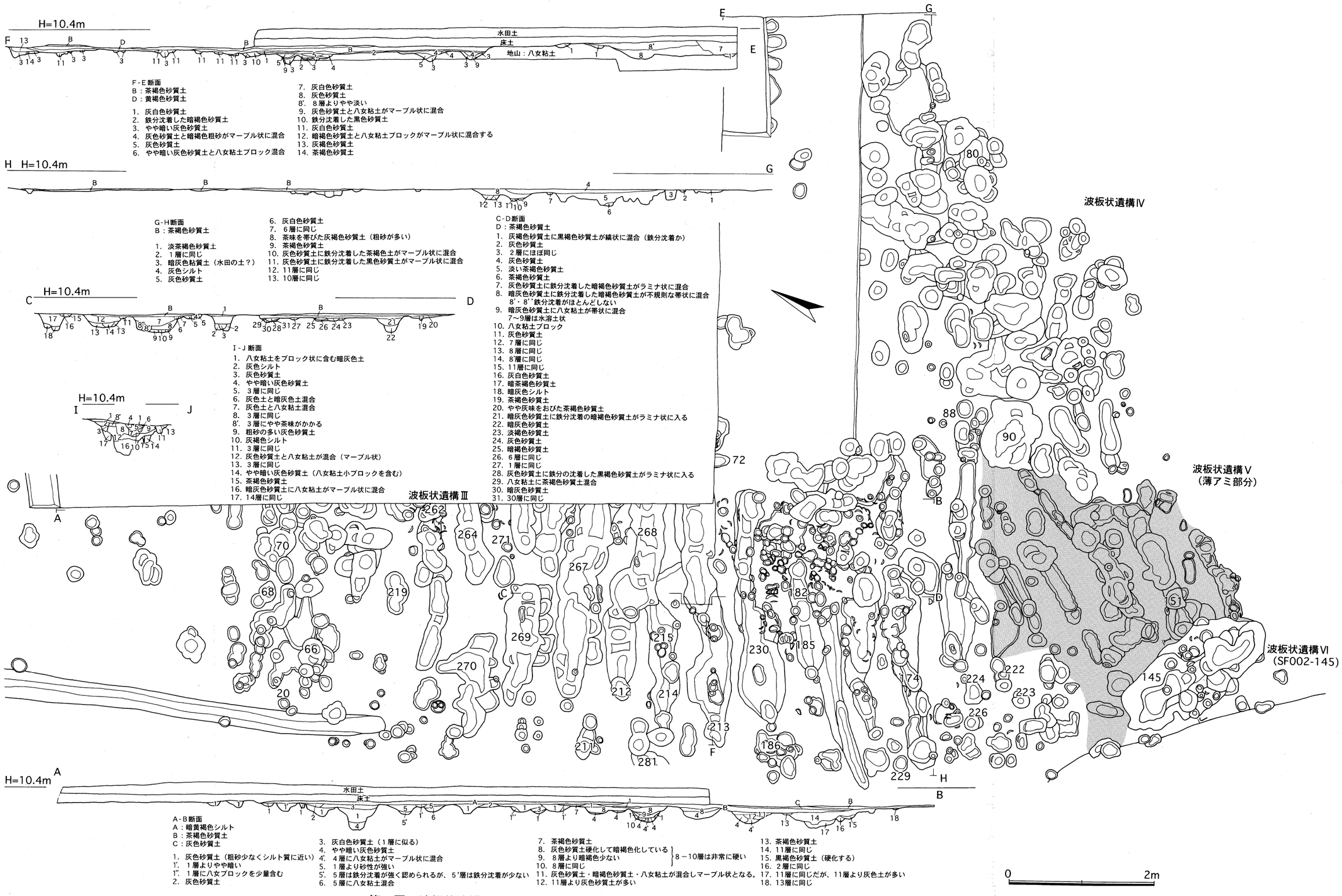
水田土・床土を除去したところで八女粘土が露出し、官道に伴なう波板状遺構・地鎮状遺構（ＳＸ０１５）が確認できた。この他には道路内に同時期の遺構は存在しない。道路の延伸方位にはやや蛇行が見られるが東側掘下げの直線部分で真北からＮ－38°－Ｗの方位をとる。幅については波板状遺構の分布を考えると、東側の肩は水田化においても道路使用時のものがほぼ踏襲されていたものと考えられる。西側はＳＤ００４が現状の１／３強を占めており、道路使用時の確実な西側肩は不明確であるが、地図に示された小島状に残された丘陵部分と考えられる東側の肩が水田化の際にも削平されていないことを考えると、切り通しに新たな造作を加えるより現状をそのまま利用して水田化した可能性のほうが高いと考えられ、西側についても道路使用時の肩がそのまま残存しているものと考える。現状では道路としての使用時には切り通しの上端の幅22ｍ、下端で幅18ｍ前後の幅員が考えられる。また底面には道路関連の遺構として側溝等は認められず、前述のように波板状遺構と波板状遺構に切



第21図　波板状遺構Ⅱ実測図（1/50）



第22図　波板状遺構Ⅱ出土遺物実測図 (1/3)



第23図　波板状遺構Ⅲ～Ⅵ実測図（1/50）

られる地鎮状遺構のみが確認できる。なお切り通しの東側肩の南半分を確認するためトレンチを設定したが、撹乱が著しく確認できなかった。

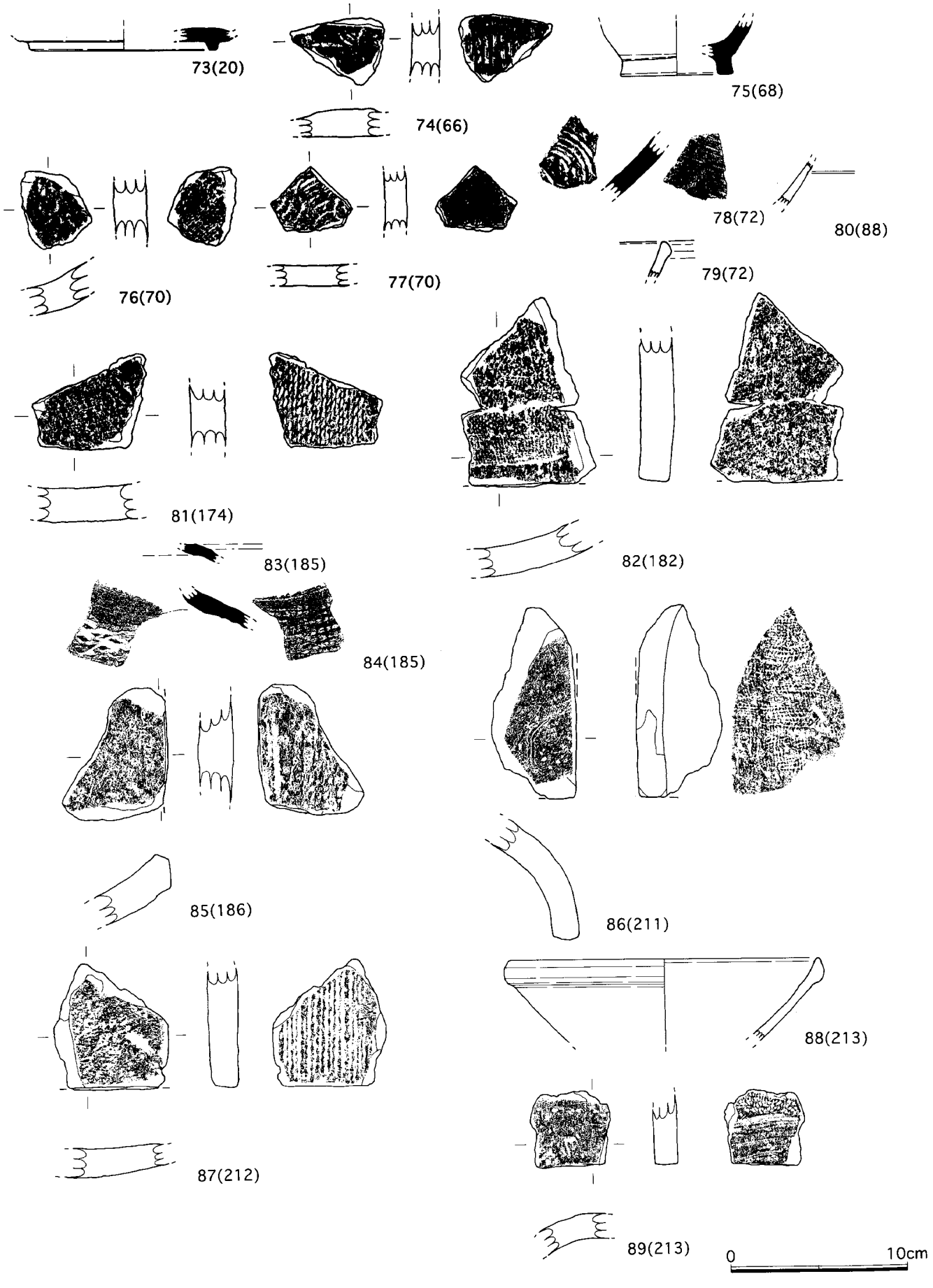
調査時点で道路底面のレベルは標高10.2mでほぼ平坦である。底面の確認時には茶褐色砂質土が面的に広がる部分（中央から南寄り）と砂質土が比較的面的に広がらず波板状遺構が観察できるもの（北半分と南端）が存在する。砂質土が広がる部分については極一部を除いて切り合い関係が認められないため土層用のベルトを残して面的に掘下げた。その結果除去後に複数の波板状遺構のまとまりを確認した。波板状遺構は平面的には切りあい関係も確認できず、特に密集部分ではまとまりを抽出することが困難であるが、方位・掘削状況などから一連のまとまり（単位）を有すると考えられるものがある。波板状遺構埋土は主に地山とは異なる砂質土を投入しており、この中から土師器・須恵器・陶磁器・瓦の小破片が多く出土しており、特に5cm角以下の瓦小破片がその大半を占める。破片はいずれも摩滅が進み極小破片となっているが、他地域の例で見られるような石敷き、土器敷きとでも言うようなまでの密集部分は見られなかった。ここでは調査時点で抽出した波板状遺構の単位をⅠ～Ⅶとし、それぞれから出土した遺物を掲載する。なお遺物の取り上げにおいては各掘り込みごとにＳＦ００２－１から枝番号を振って取り上げており、報告でもこの枝番号を生かしてこれ毎に出土遺物を掲載している。なお説明時には枝番号の頭に付した『ＳＦ００２－　』は省略している。

波板状遺構Ⅰ（第19図）　道路北側で検出する。溝状の掘り込みの南側に同一方向の土坑状の掘り込みが連なる。主軸方位は道路主軸にほぼ平行し、真北からＮ－40°－Ｗの方位をとる。溝状の掘り込みは深さ5cm以下で底面に径10cm程度の圧痕が残る。圧痕は特に中央部分に顕著で主軸に平行に並んでいる状態が認められる。圧痕の深さは数センチで丸太状の木材小口部分で路底をたたき占めた痕跡であろう。また土層観察からピット状の掘り込み埋土にも圧痕が認められる。この埋土には砂質土がマーブル状になっているものも見られ、これは地山（八女粘土）と異なる砂質土を水分の多い状態（泥土状）で投入しこれを圧迫・乾燥させることにより路底面を強化させることを目的としたものと考えられる。上面に硬化した砂質土が堆積しているが、これは後世の水田使用による鉄分・マンガンの沈着によるものと考えられる。また南側の土坑状の掘り込み埋土は前者と異なり、圧痕はほとんど見られなかった。埋土も比較的しまりがなくどちらかといえば軟弱である。ただし粗砂を混合しているため地山に比べるとしまりがでており、特に雨などで地山が軟弱になった時にはその差は明瞭である。

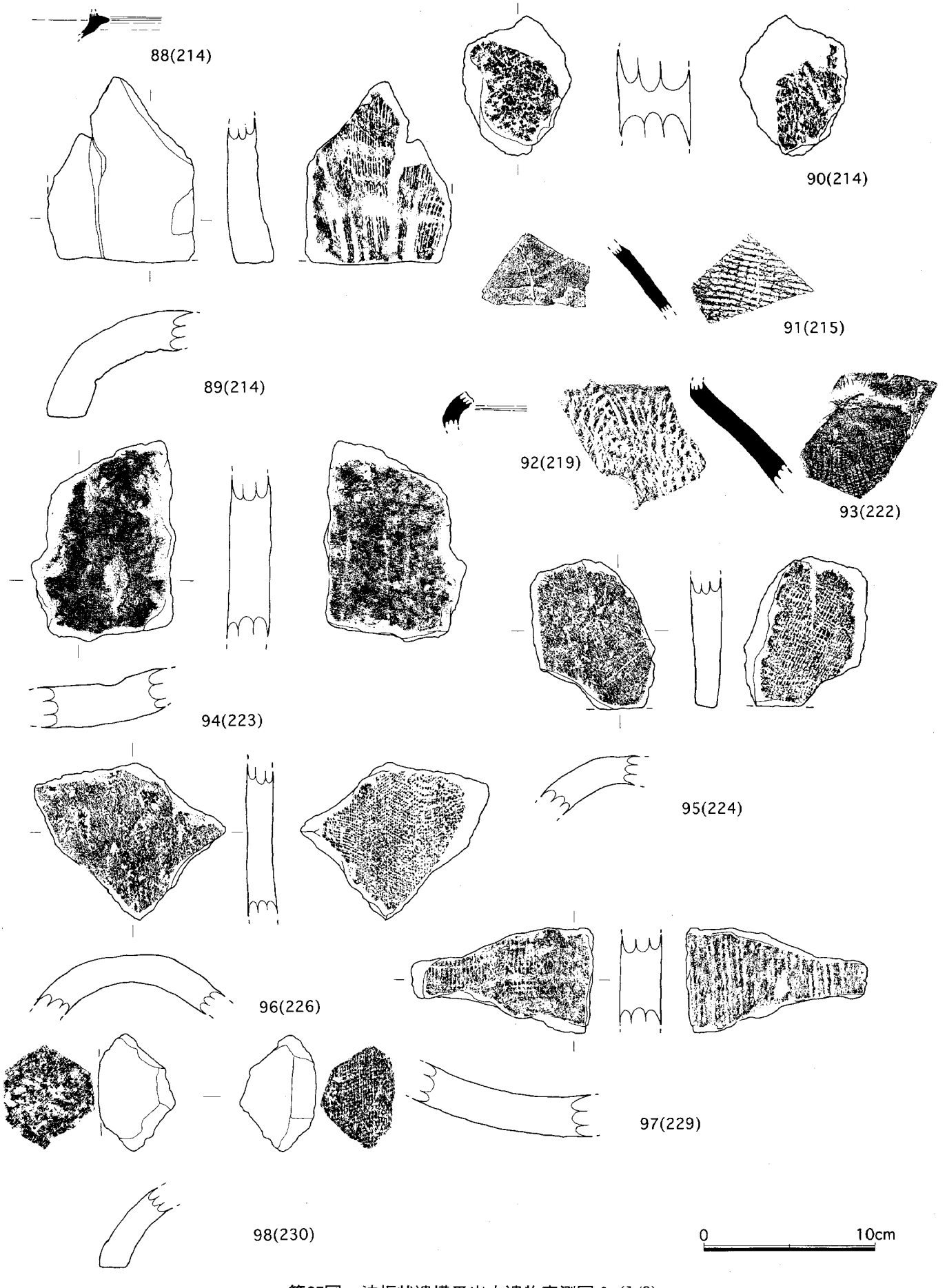
出土遺物（第20図）　白磁（53）、須恵器（54～63）、土錘（64）を図示している。出土遺物はいずれも小破片で摩滅が進んでいる。特に254出土須恵器は2～3cm角の小破片である。53はⅣ－1類碗の底部であり、時期的に最も新出するものである。

波板状遺構Ⅱ（第21図）　中央南寄り、ＳＤ００４に接して検出する。北側は不規則なピット状の掘り込み、南側は円形～長さ1m強の溝状の掘り込みとなる。主軸方位は真北からＮ－35°－Ｗとなる。各掘り込みは深さ15cm程度の浅いもので、底面には圧痕が残る。また埋土途中にも転圧痕が観察できる。ここで確認できた転圧痕跡には径10cm強のものと径5cm程度の2種類があり、複数サイズの転圧道具が使用されたことがわかるが、その使い分けについては明確ではない。転圧痕の上面には、転圧後に面的に投入されたと考えられる暗茶褐色砂質土（Ｂ層）が堆積している。また中央部分には波板状遺構除去後にＳＸ０１５が確認されている。詳細は後述するが道路の使用時期を推定する遺構である。

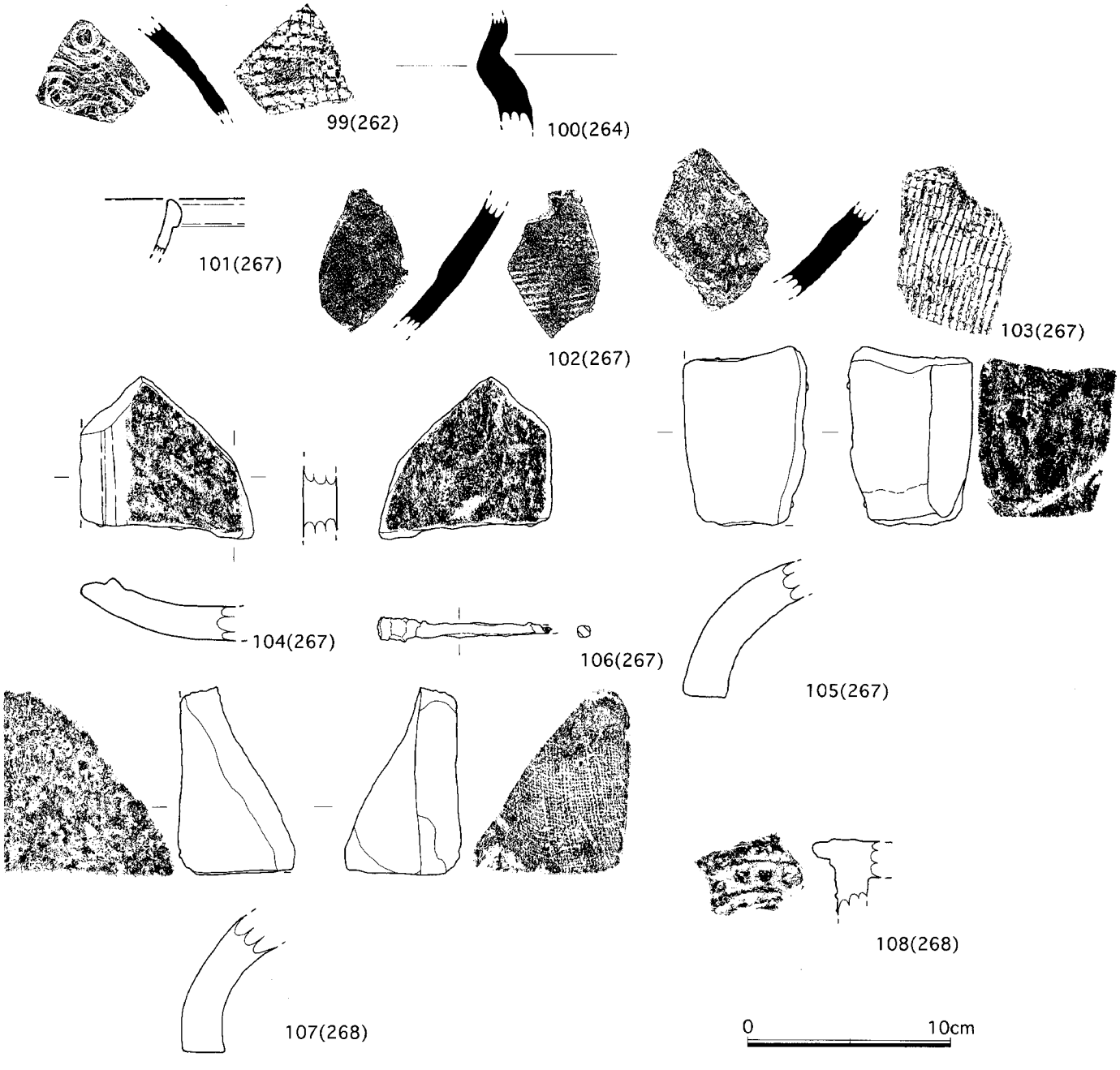
出土遺物（第22図）　65・66は南側の上面から出土している平瓦である。凹面布目、凸面縄目が残る。67～71は各掘り込み出土遺物である。68丸瓦は凸面をヘラ状工具によりなでを行なう。平瓦は69



第24図　波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図１（1/3）



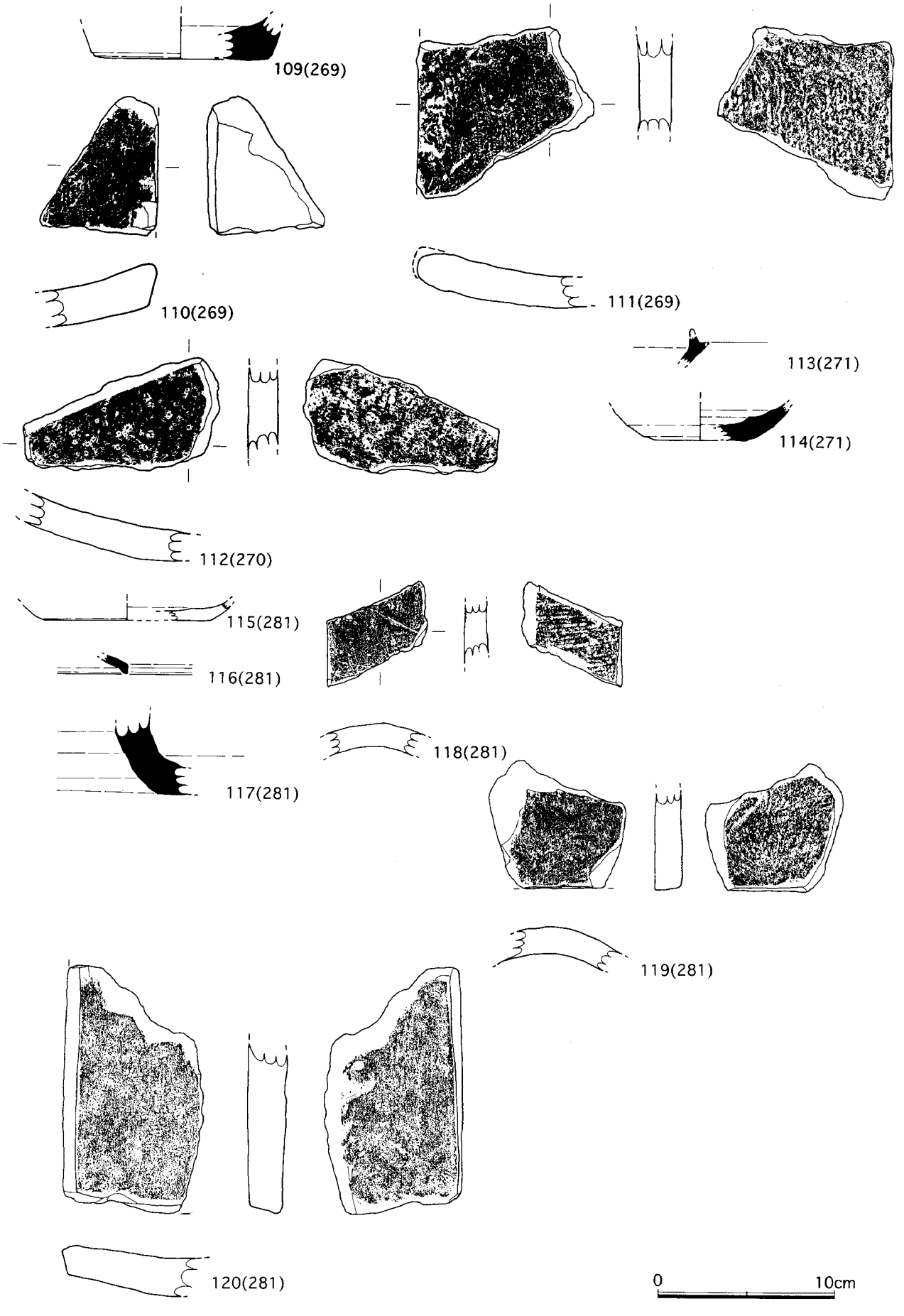
第25図　波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図２（1/3）



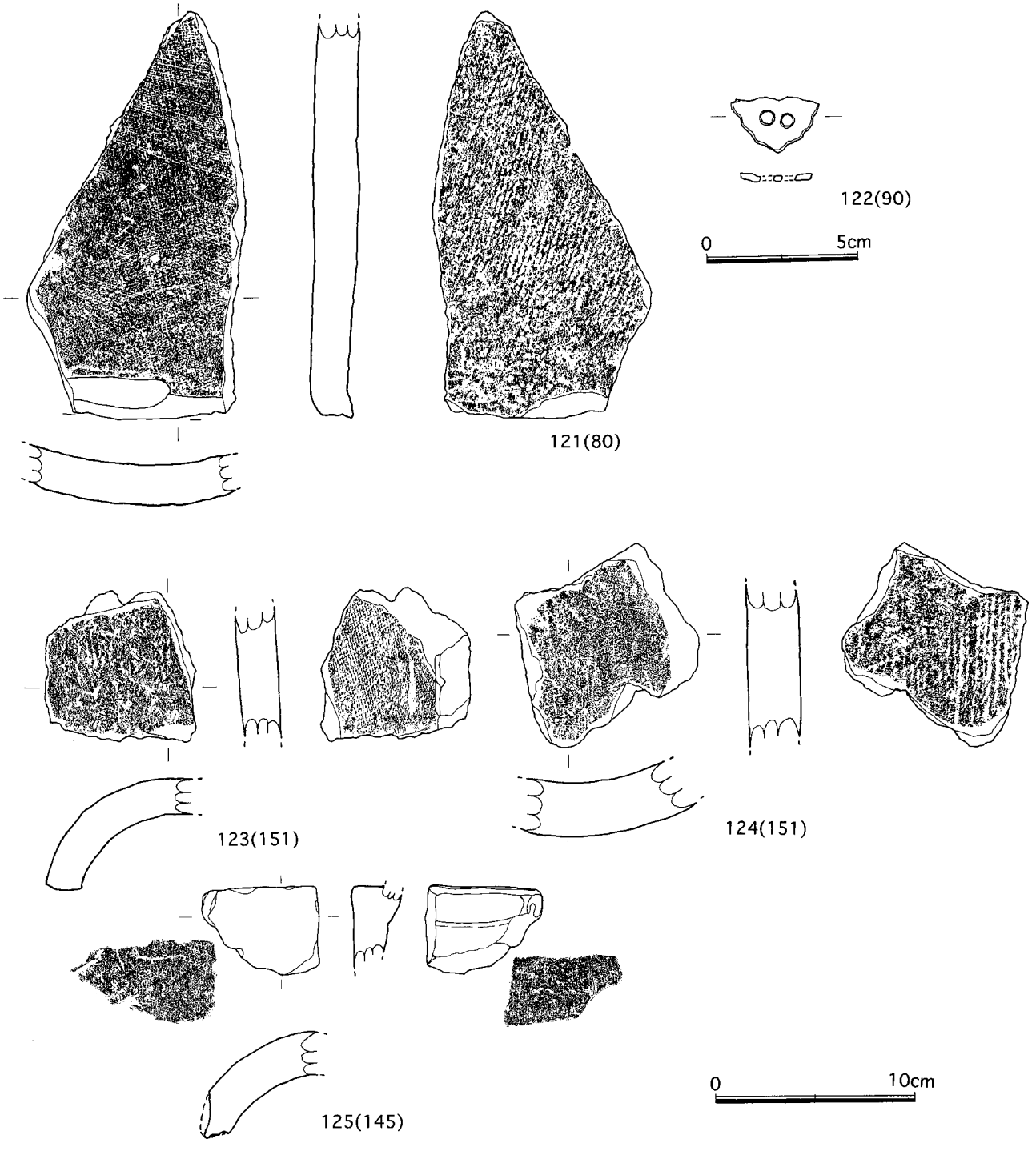
第26図　波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図３（1/3）

が須恵質、70は焼成不良であるが、共に凹面布目、凸面縄目が残る。71はⅣ類白磁碗の口縁部である。72はＳＸ０１５上面の砂質土層出土の土師器坏である。外底面は回転ヘラ削りを行なう。

波板状遺構Ⅲ（第23図）　中央南寄り、波板状遺構Ⅱの東側に位置し主軸方位はこれとほぼ同じである。北側はランダムなピット状の掘り込みであるが、中央部分は長さ３ｍ程度、幅20～50cmの溝状を呈する。更に南側では径10cm前後の転圧痕跡が地山直上に密集して確認される。波板Ⅲ～Ⅵの間は上面に砂質土（Ｂ～Ｄ層）が広がっている。土層から波板状の掘り込みを埋め戻した後、面的に投入されているようである。またＡ層は主に北側で確認しているが、砂質土の更に上面に広げられているシルト層である。これらは波板状に凹凸面を埋め立てた上で面的に広げられたものと考えられ、



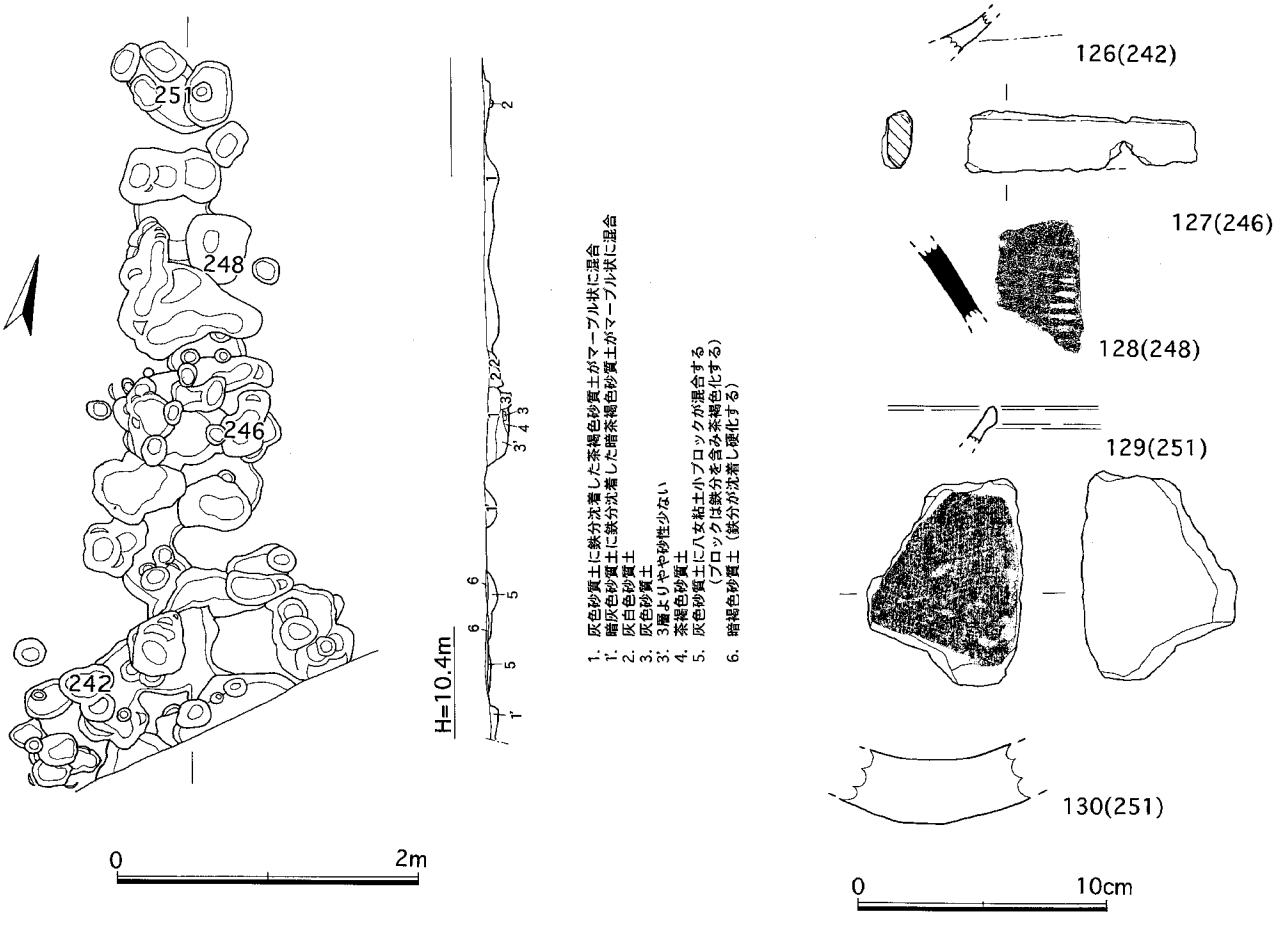
第27図　波板状遺構Ⅲ出土遺物実測図４（1/3）



第28図　波板状遺構Ⅳ～Ⅵ出土遺物実測図（122は1/2、その他は1/3）

官道の路盤を構成するものと考えられる。溝状の凹凸部分では転圧の痕跡が明瞭な部分とそうでない部分があるが、痕跡が確認できないところでも底面の地山に土器小破片が砂質土と共に埋まり込んだような部分が多く見られ、凹凸面埋めたて時に転圧が行なわれたことを示している。また南側を中心に凹凸部分埋土がマーブル状になるものが多く見られる。

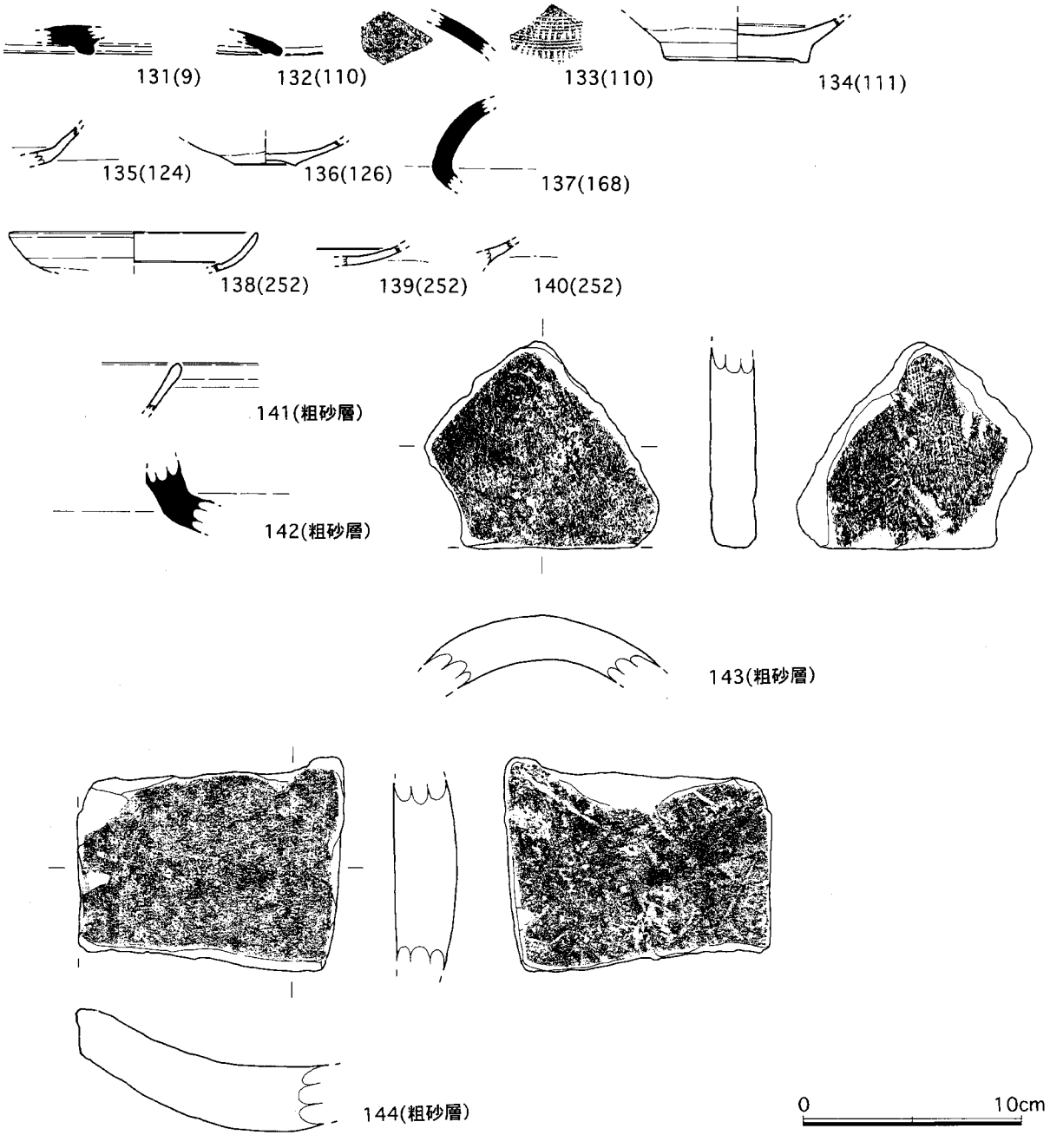
出土遺物（第24～27図）　第24図の73・75・78・83・84は須恵器である。80は越州窯系青磁の皿で



第29図　波板状遺構Ⅶ及び出土遺物実測図（1/50、1/3）

あろうか。破片部分は前面に施釉され、外面に1条沈線が残る。79・88は白磁Ⅳ類碗である。他はいずれも須恵質の瓦である。85・89は表面を燻している。86・89は丸瓦で凸面へラナデ、凹面布目が残る。89の凹面端部は回転の横ナデが残る。他は平瓦である。74は凹面青海波当て具痕、凸面平行叩きを行なう。77は凹面青海波当て具痕、凸面擬格子叩きが残る。76は凹面布目で凸面はナデか。81・87は凹面布目、凸面縄目。82は凹面布目、凸面縄目の後へラナデを行なう。85は凹面ナデで、凸面には縄目が残る。21図は88・91～93が須恵器である。89・95・96・98は丸瓦である。89は軟質で凸面は縄目か。凹面は布目が残り、端部に布が寄った痕跡が残り、横方向に紐紺が観察できる。95・96は須恵質で凸面へラナデ、凹面布目である。95には吊り縄の痕跡が残る。98は軟質で凹面布目、凸面は縄目か。90・97は平瓦である。90は須恵質で縄目が残る。97は凹面布目、凸面縄目である。22図は101がⅣ類白磁碗である。99・100・102・103は須恵器である。104は軟質の平瓦である。凹面に布目が残り、凸面はへラナデを行なっている。105は軟質、107は須恵質の丸瓦である。凸面へラナデ、凹面には布目が残る。108は軒丸瓦の瓦当破片である。焼成は軟質であるが表面を燻している。圏線内に珠文を配する。106は鉄釘か。23図は115が土師器坏である。小破片で不明瞭であるが外底面はへラ切りであろう。109・113・114・116・117は須恵器である。110～112・118～120は瓦である。110～112は須恵質の平瓦である。110は凹面布目、凸面へラナデを行なう。111・112は凹面へラナデ、凸面縄目である。120は軟質の平瓦である。側面は2面面取りを行なう。凹面・凸面ともにへラナデを行なう。118・119は丸瓦である。共に凸面へラナデ、凹面布目が残るが、118は凹面に横なでを行なう。

波板状遺構Ⅳ（第23図）　波板状遺構Ⅲの東側に位置する。他の凹凸部分と異なり深いピット状の



第30図　ＳＦ002出土その他の遺物（1/3）

掘り込みが密集している。埋土は灰色～灰白色のシルト質で他と比べやや軟質であり、上面を被覆する土砂も灰色シルトでやや軟弱である。掘り込みの下層にマーブル状となる埋土が見られる。

出土遺物（第28図　121・122）　121は須恵質の平瓦である。凹面布目、凸面縄目が残る。122は青銅製品である。径4.5㎜の孔が２個並ぶ。飾り金具であろうか。

波板状遺構Ⅴ（第23図）　波板状遺構Ⅳの南側に連なる。幅20～40cmの溝状の掘り込みを基本とする。埋土、掘り込みの形状の類似性などから波板状遺構Ⅲの延長とも考えられるが、主軸方向がⅢよりも西に振れており、Ⅳの延長により近い。

出土遺物（第28図　123・124）　いずれも焼成不良の須恵質である。123は丸瓦で凸面縄目の後へ

ラナデ、凹面は布目が残る。124は平瓦で凹面はナデ、凸面は縄目を施す。

波板状遺構Ⅵ（第23図）　長軸2.3m、短軸1mの土坑状の掘り込みである。主軸方位は真北からN－70°－Wをとる。埋土は灰色砂質土～シルトを主体としている。土層からは径10cm程度の転圧痕が多く見られ、マーブル状の堆積も見られるが、特に硬化した部分はない。平面的には波板Ⅴの埋土を切っている。波板状遺構Ⅳ～Ⅵは方向的に一連のものであり、官道の直進方向に対して斜交している。また特にⅣとⅥは埋土の類似性も高い。

出土遺物（第28図　125）　玉縁が結合面から欠失した丸瓦である。焼成は軟質であるが、表面は燻しの加工が行なわれる。凸面ナデ、凹面布目が残る。

波板状遺構Ⅶ（第29図）　南端で検出する。ランダムなピット状の掘り込みがつながるが、Ⅳ程密集していない。砂質土を主体とし、特に中央部分に径10cm程の転圧痕が残る。主軸はおおよそ真北からN－26°－Wをとる。

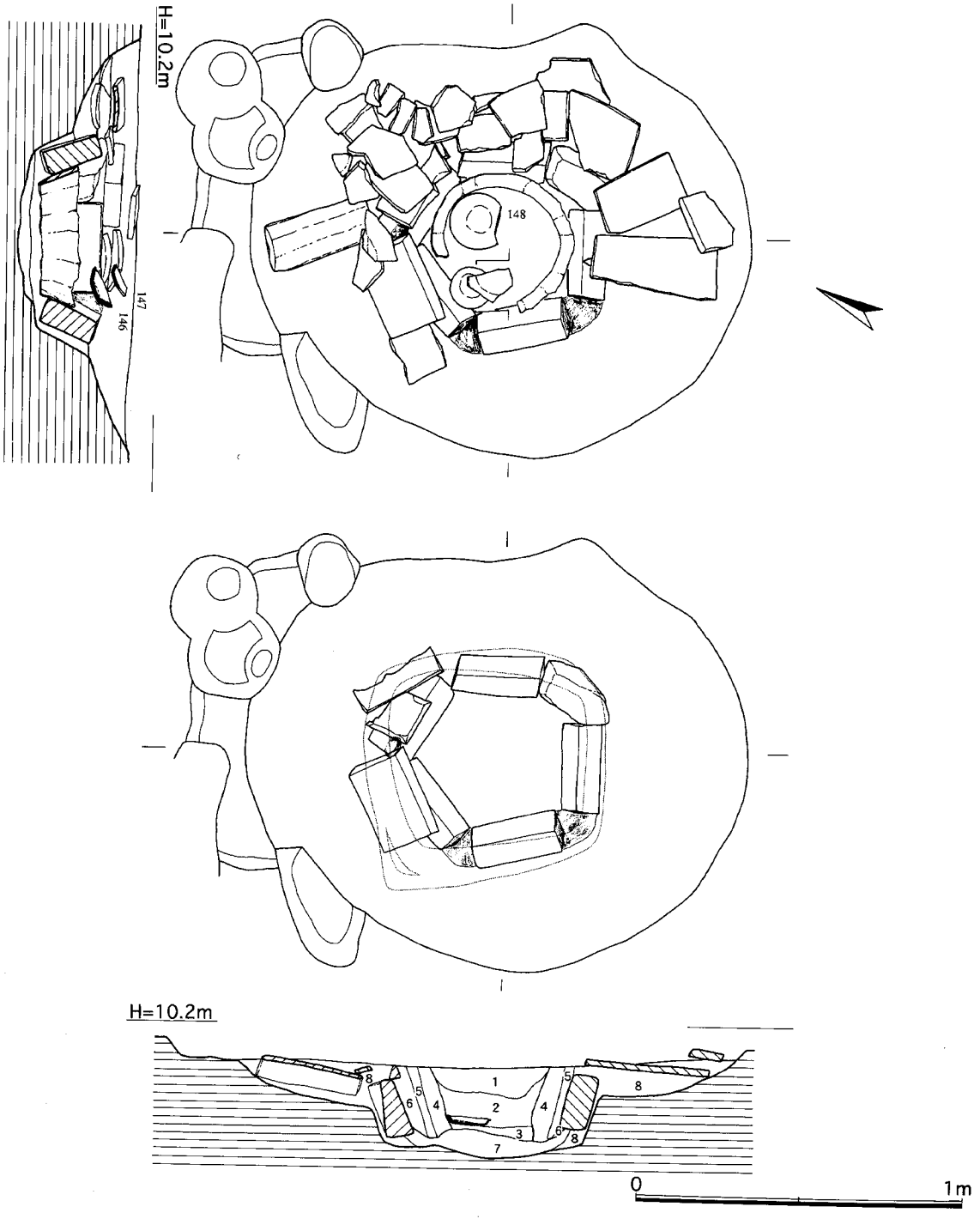
出土遺物（第29図）　126・129は白磁である。126は胴部下半に施釉の境がある。128は須恵器の胴部破片である。内面ナデ、外面擬格子の叩きが残る。130は軟質の平瓦である。凹面に布目が残る。凸面は不明瞭である。127は錆化が著しく膨れているが、断面形状から刀子と考えられる。

その他の遺物（第30図）

131～140は前述以外の波板状遺構から出土した遺物である。131～133・137は須恵器である。蓋坏、甕が出土している。いずれも極小破片である。134は白磁Ⅳ類碗である。135・136・138～140は白磁皿の小破片である。141～144は主に波板状遺構Ⅳ上面の砂質土層を掘下げ中に出土した遺物である。141は口縁部を小さな玉縁に作る白磁である。142は須恵器甕の頸部である。143は須恵質の丸瓦である。凸面にはナデを行い、凹面には布目が残る。144は軟質の平瓦である。摩滅が著しいが、凹面布目、凸面縄目が観察できる。

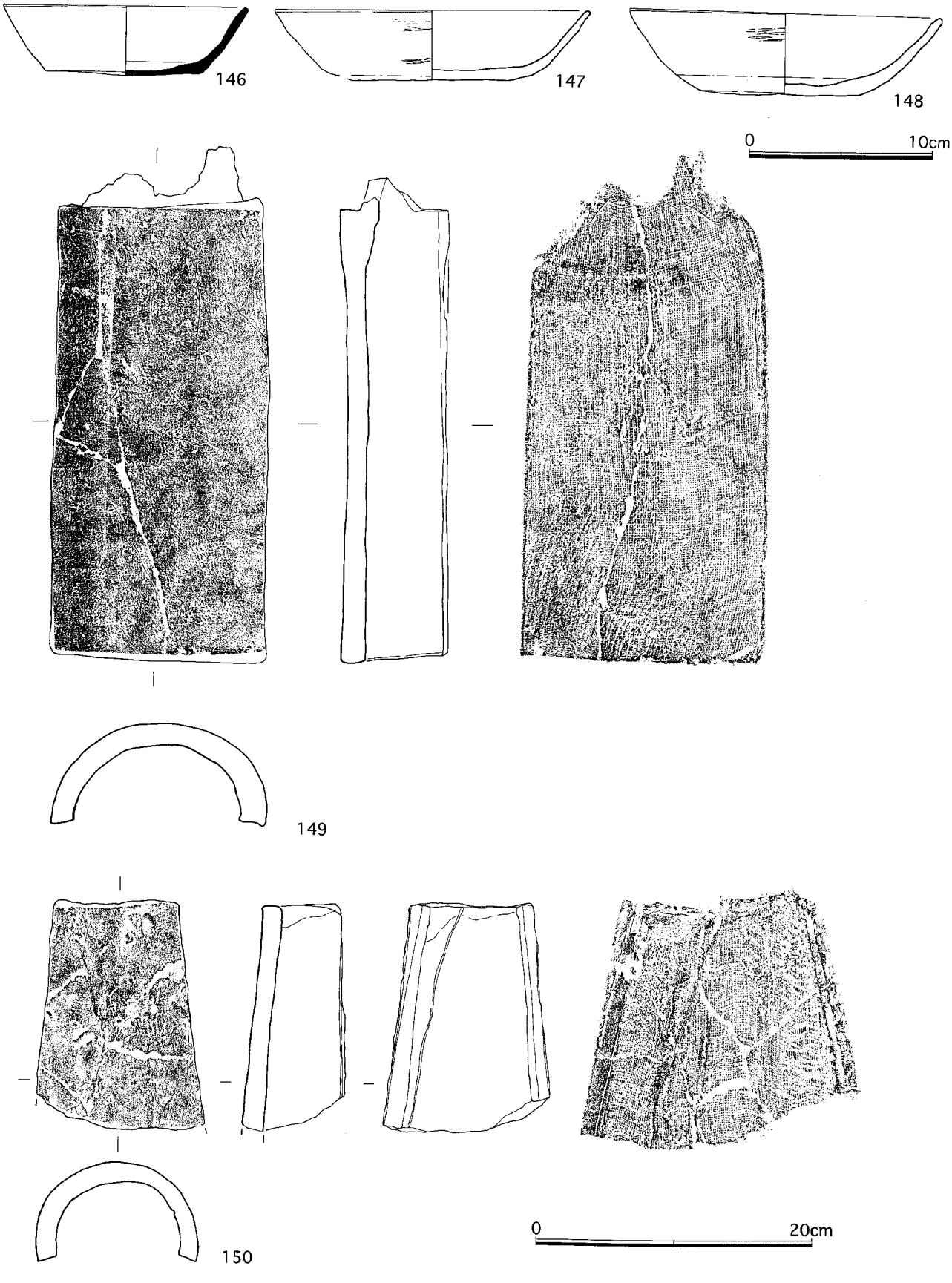
ＳＸ０１５（第31図）

波板状遺構Ⅱの中央部で検出する。波板状遺構に伴なう砂質土を除去した後に検出しており、第21図Ａ－Ｂ土層からも、この遺構が波板状遺構に先出することが確認できる。平面プランは1.25×1.55mとわずかに楕円を呈する。掘り方は２段に行なわれており、２段目は平面70cm程度の隅丸方形に掘下げられる。２段目の掘り方内には、５cm程の砂質土～細砂上に素文塼６個、自然石１個を略五角形に組み、間隙には暗褐色の粘土を充填し目張りを行なっている。この内側には木材を刳り貫いた筒を据えている。筒は鉢状にやや下がすぼまり、木質の上面外径48cm、下端外径38cmを測る。現状で木質は厚さ２cm程しか残存しておらず（５層）、依存状況も不良であったが、断面の観察により４層も木質の痕跡と考えられる。これにより内径を復元すると上面径35cm、下端径25cmとなる。木質と塼の間には白色粘土（６層）が詰められ、安定を図っている。筒内埋土は最下層に薄くべたべたした黒褐色土が堆積し、その上面から完形に近い土師器碗（148）が正位で出土している。また上層には水分を含んでややしっとりとした焼土がレンズ状に堆積しており、ここからは完形の須恵器坏（146）が出土する。塼上面～掘り方外周にかけては汚れた白色粘土を充填しながら主に平瓦が２～３段平積みされている（一部丸瓦・塼を含む）。瓦組みは粘土上面から行なわれたものではなく、ランダムに平積みした瓦も粘土内に埋め込まれたような状況であったと考えられる。遺物の接合を行なったところ、やや離れた（40cm）破片が接合したものもある（152）ことなどからも、破片も多く用いた乱雑ともいえる組み方であるといえる。この瓦積みは波板状遺構構築の際の転圧等による破壊が行なわれているようで、現状では積まれている瓦も壊れているものが多い。また８層上面にも転圧痕が残されていたり、瓦の上面まで転圧痕が確認されたりしている。なお西半部分では平積みの瓦・塼がほとん

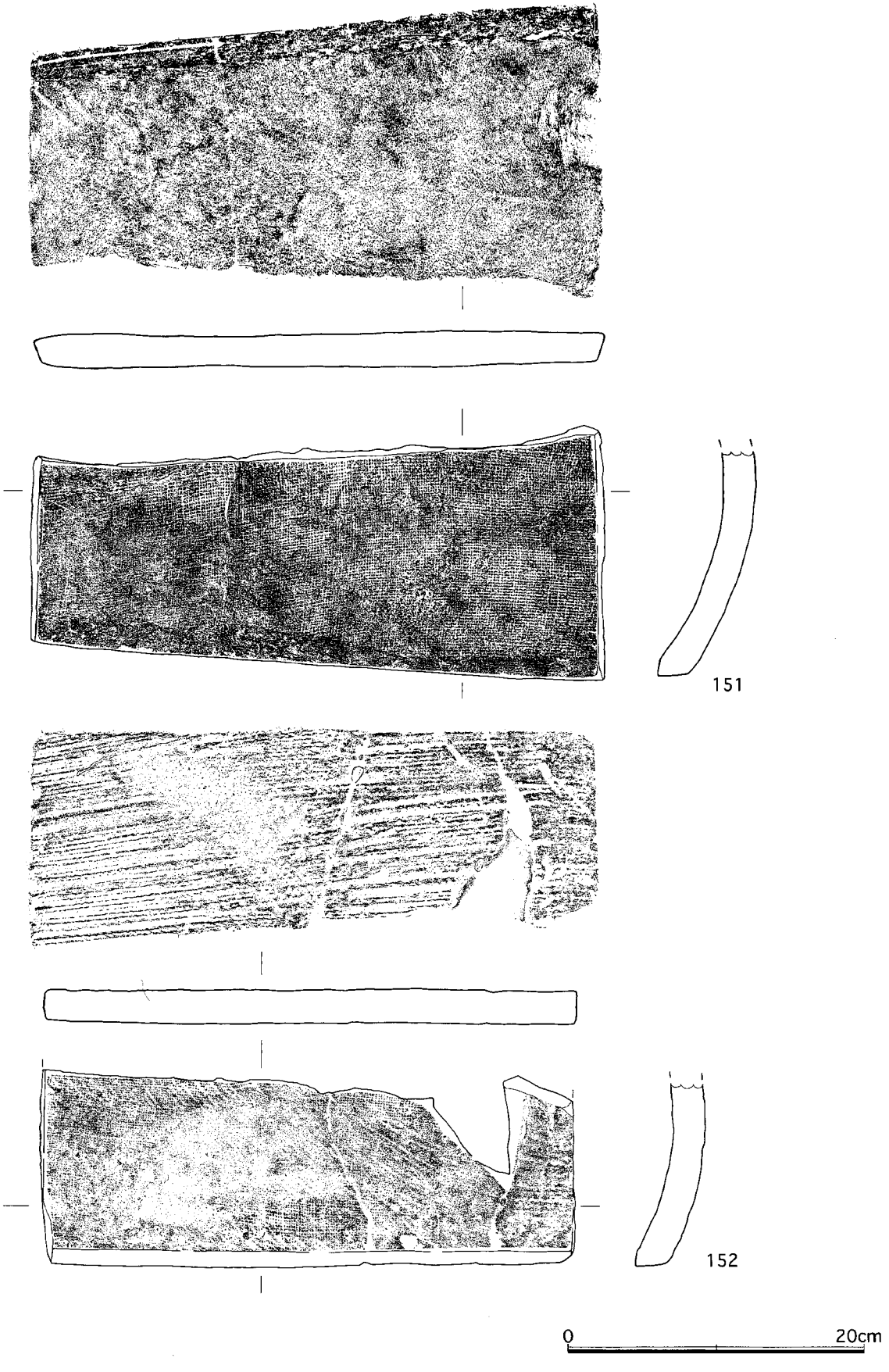


1. しっとりした暗赤褐色粘質土（鳥栖ロームブロックを少量含む、焼土）
2. 暗赤褐色粘質土（ロームブロックを含まない、1層よりボロボロしている）
3. 黒褐色粘質土（べたべたして水気が多い）
4. 茶褐色粘質土（鉄分が沈着しスカスカである。木質の残骸か）
5. 木質
6. 白色粘土（礫と木質の間につめている）
7. 灰白色砂質土ー細砂
8. やや汚れた黄白色（八女粘土の埋土）

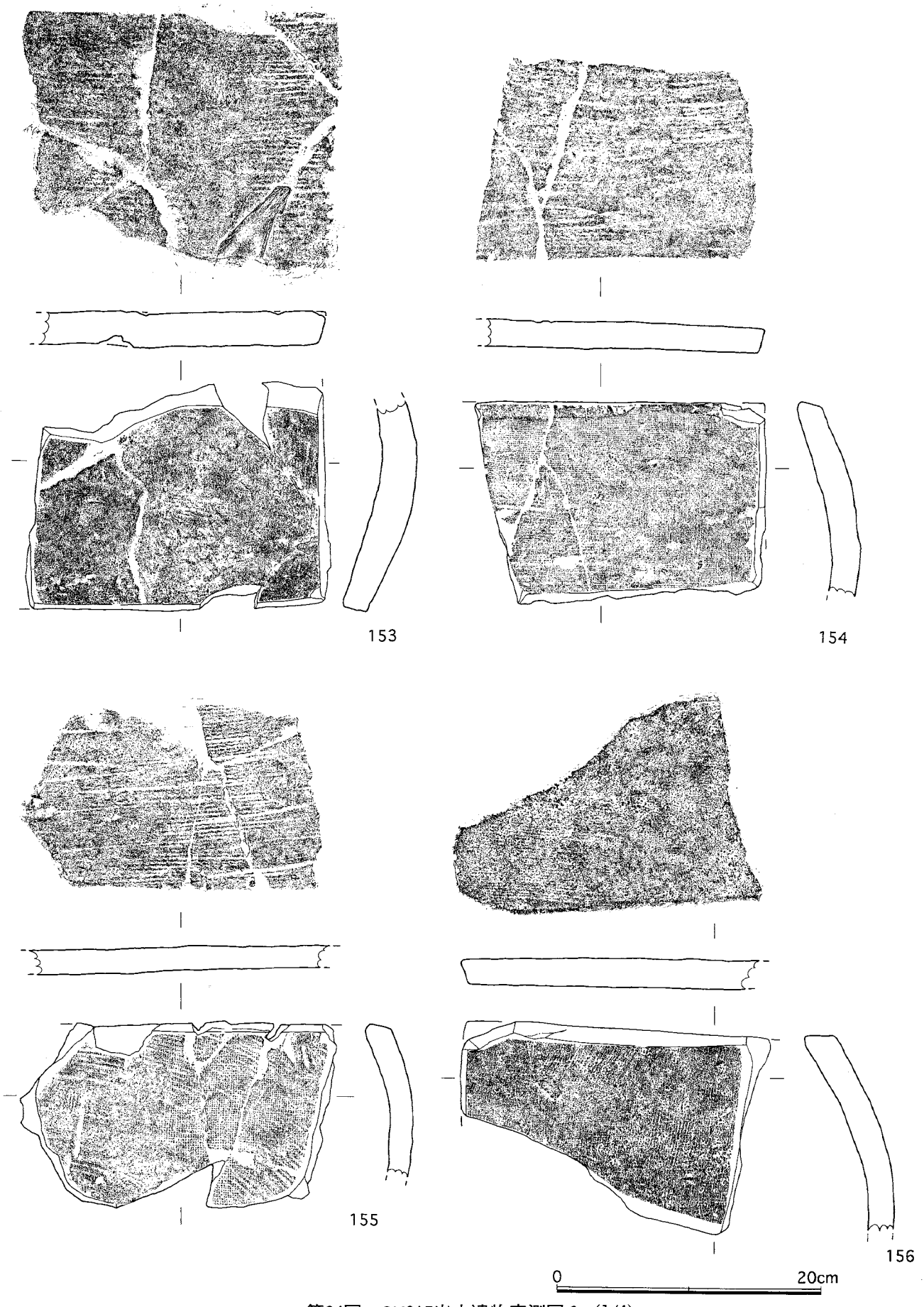
第31図　ＳＸ015実測図（1/20）



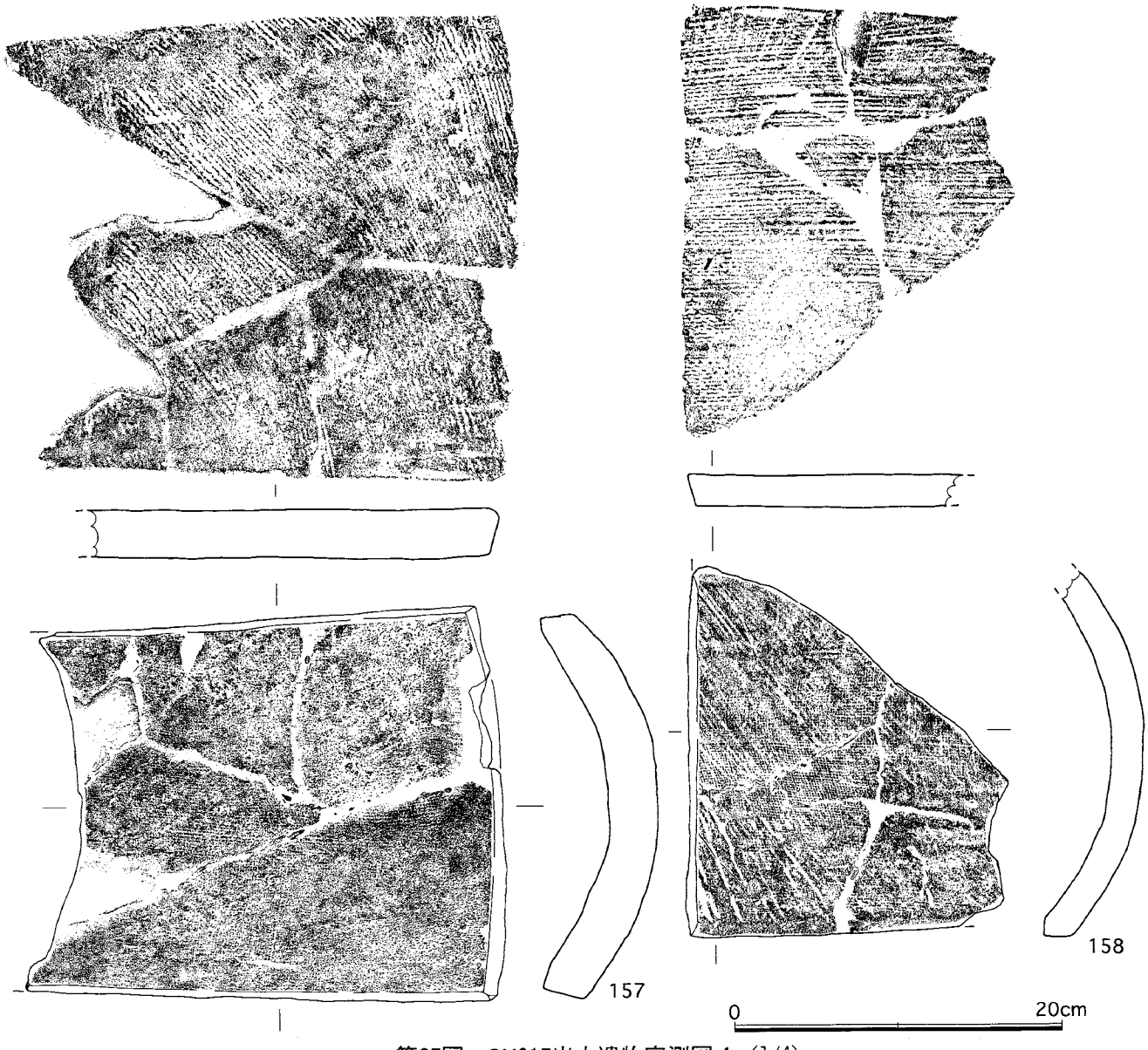
第32図　SX015出土遺物実測図１（146～148は1/3、149、150は1/4）



第33図　SX015出土遺物実測図２（1/4）



第34図　SX015出土遺物実測図３（1/4）

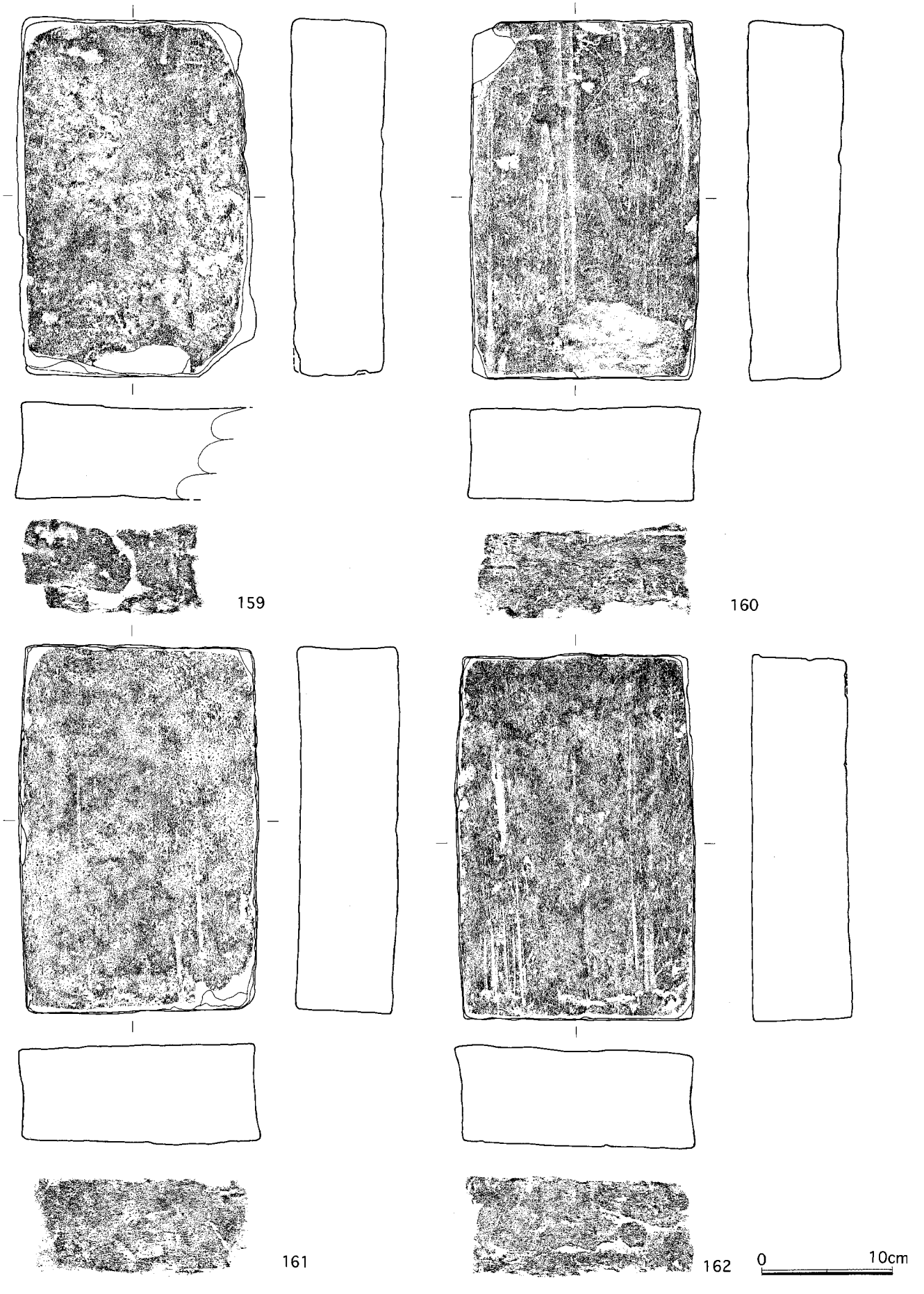


第35図　SX015出土遺物実測図４（1/4）

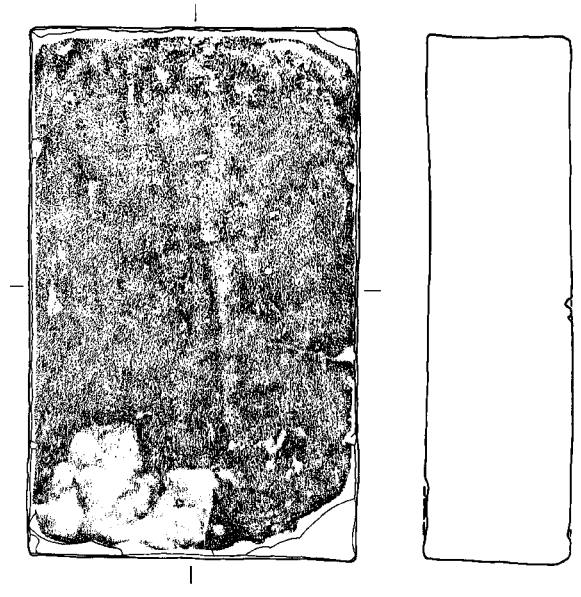
ど確認されていない。使用されている瓦自体は波板状遺構内から出土するものと同様のものであるが、破片は大きく摩滅もあまり進んでいない。遺物の大半は瓦組み部分もしくは掘り方内からの出土であるが、木質内からも土師器、須恵器、瓦、塼の破片が出土している。しかし両者の間に遺物の接合関係は見られなかった。

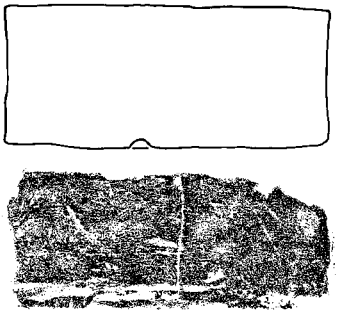
本遺構は出土遺物から８世紀後半～９世紀初頭に位置付けられるものと考えられる。本遺構の特異な形態から、道路に伴なう祭祀的な意味合いを有する遺構と考えておきたい。なお時期的にはずれがあるものの、ＳＸ０１５の位置は波板状遺構が交差する部分にあたる。道路の交差する地点に土器を埋納する例があり、ＳＸ０１５掘削時にもこの道路に取り付く支線のような施設が存在していたのかもしれない。

出土遺物（第32～37図）　146～148は木質内出土の遺物である。またこの他の瓦塼は掘り方内に組まれたもの及び掘り方出土との接合資料である。146は須恵器坏である。口縁端部の一部分を欠くが

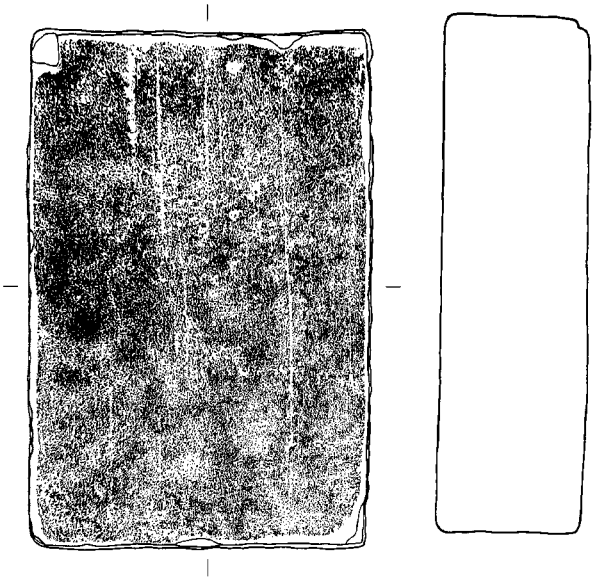


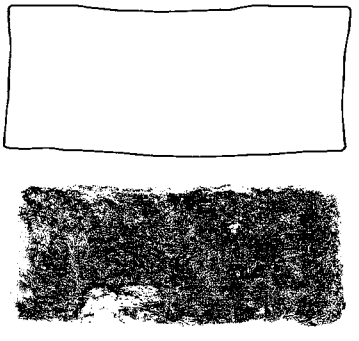
第36図　SX015出土遺物実測図５（1/4）



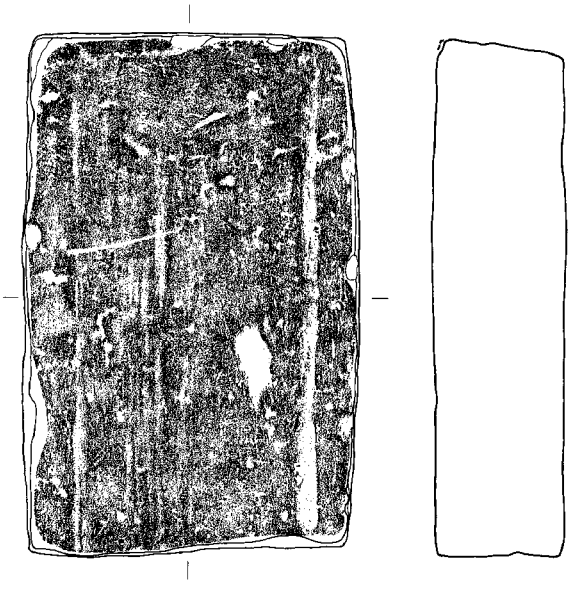


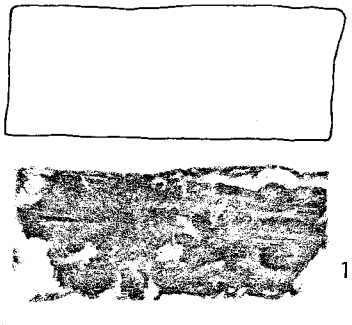
163





164





165

0 20cm

第37図　SX015出土遺物実測図６（1/4）

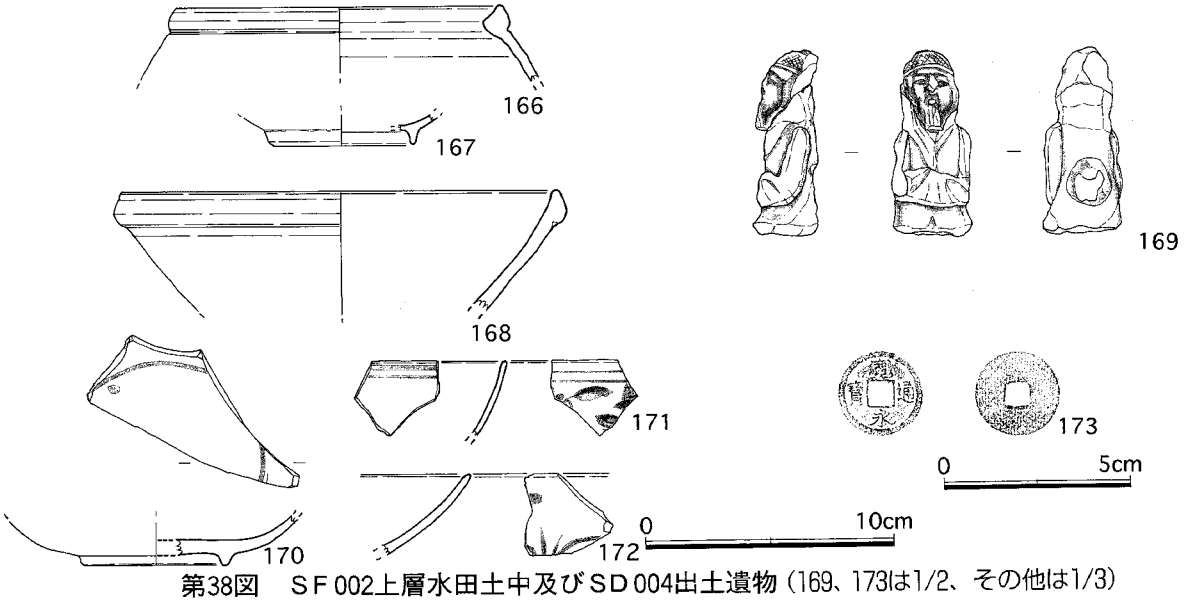
ほぼ完形である。口径13.2cm、底径8.4cm、器高3.8cmを測る。器面は全体に摩滅が進んでおり調整は不明瞭である。外底面にはヘラ状工具による削り痕跡が明瞭に認められないが、外縁部にヘラ切りの痕跡がわずかに確認できる。147・148は土師器坏である。法量は147が復元口径17cm、器高3.8cm、148が口径17cm、器高4.6cmを測る。いずれも体部下半から外底面は回転のヘラ削りを行なっている。器面調整は剝落が進んでおり明瞭でないが、一部に横方向のヘラ磨き状の痕跡が残る。149・150は丸瓦である。149は玉縁式で玉縁部分を欠くほかはほぼ完存する。焼成はやや軟質である。凸面は胴部に平行する縄目叩きののちナデを行なう。また横方向ランダムな段が残るが、製作道具の痕跡であろう。凸面は全体に布目が残る。150は行基式で狭端部分が残る。焼成は須恵質で灰白色を呈する。凹面は叩きの後に丁寧なナデを行い、凸面は全体に布目が残る。また布目には布が寄った部分が認められる。151～158は平瓦である。完形に復元できるものはなく最大でも1／2強の残存である。いずれも凹面に布目が残っている。凸面は151がナデの他は縄目の叩きが残る。叩きは157が長軸に斜交するほかは、長軸方向に平行している。159～165はいずれもほぼ完存する素文塼である。159・164は瓦組み内出土で、他の５個体は下段で組み合わされたものである。形状は規格的で長さ27.5～28.5cm、幅18cm前後、厚さ7.5cm前後である。重量は５～６㎏である。表面はいずれもなでによる整形を行なっている。

ＳＦ００２関係その他の遺物（第38図）

166～169はＳＦ００２直上の水田土中から出土した遺物である。この水田は戦前まで使用されていたものである。166は陶器壺、167は瓦器椀、168は白磁碗である。169は白磁の人形である。頭部全面には褐色釉が塗布される。頭部背面は釉が剝落しており、飾りとして接着していたものであろうか。170～173はＳＤ００４出土である。170～172は近世陶磁器、173は寛永通宝である。ＳＤ００４の埋土最上層は戦前まで水田となっていたようであるが、溝の掘削時期については道路廃絶以降としかいえない。

4　小結

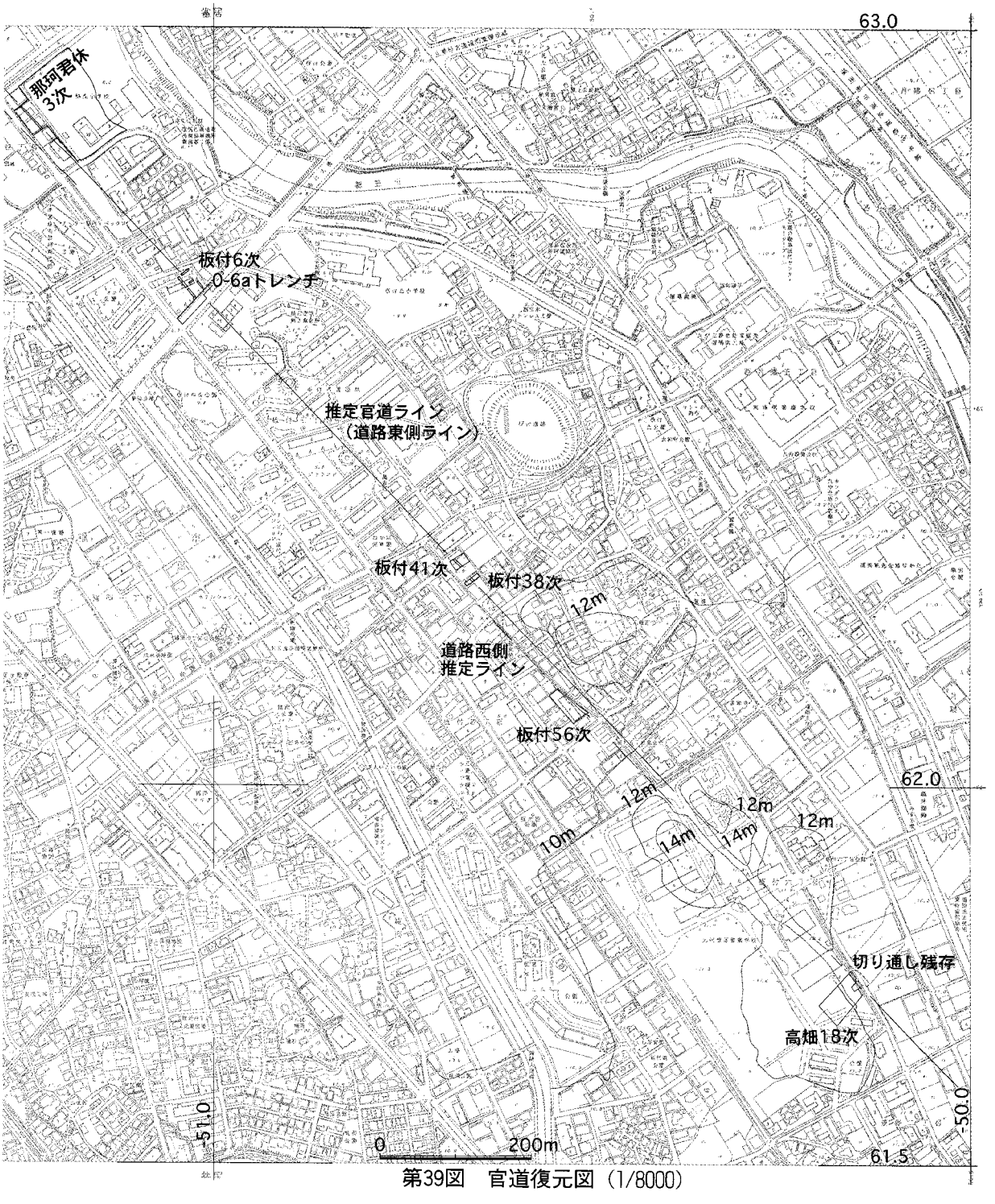
今回のＩ区の調査では、削平が著しかったものの弥生時代～戦前に至る遺構・遺物が確認された。中でも切り通しにより造られた官道は注目すべき遺構である。ここでは周辺の調査事例を含めて官道



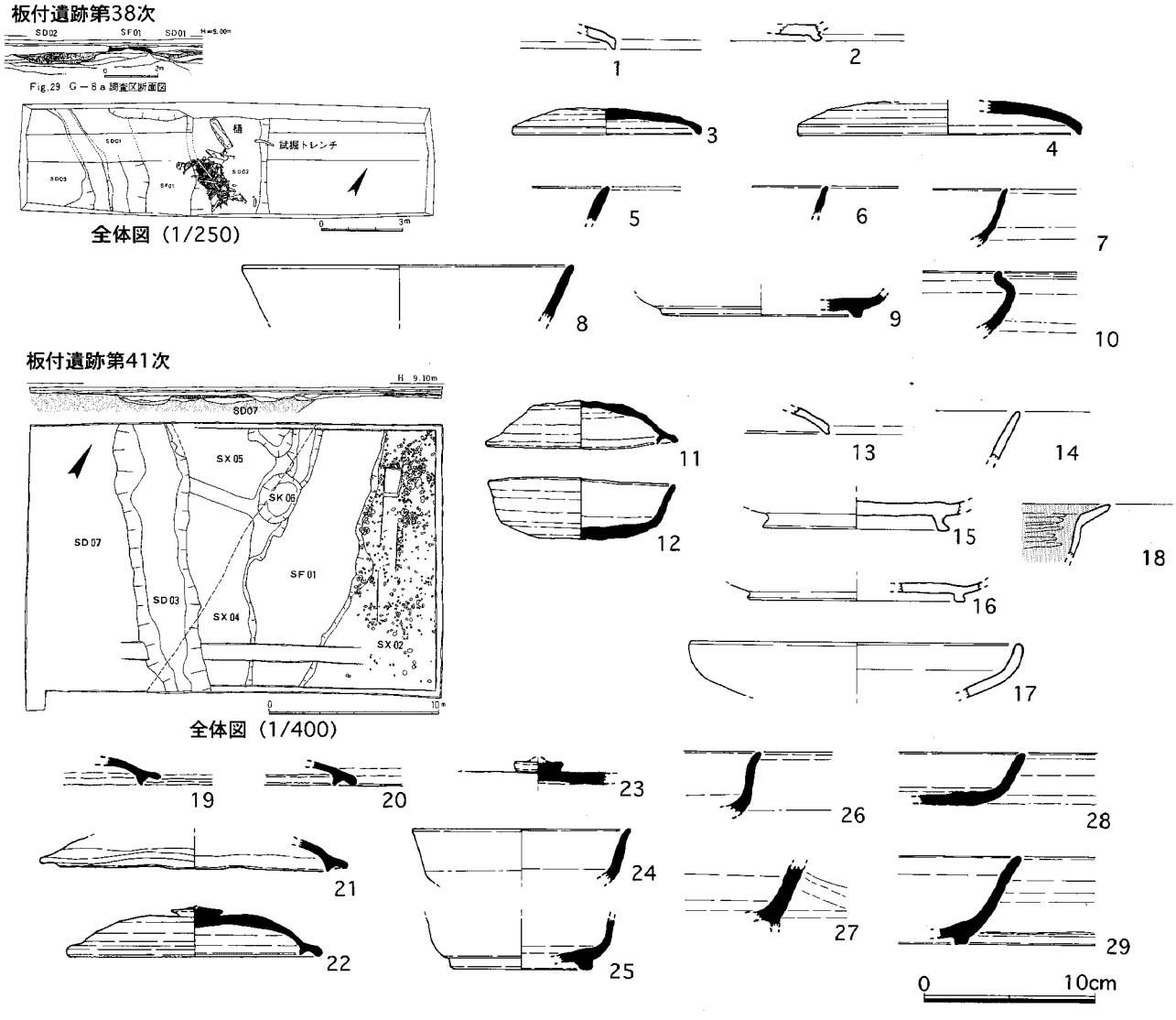
第38図　ＳＦ002上層水田土中及びＳＤ004出土遺物（169、173は1/2、その他は1/3）

について簡単に述べておきたい。

官道の復元等についてはこれまで歴史地理学・考古学の分野から研究が行なわれており、ルートの解明・歴史的意義などについて検討が加えられている。今回確認された官道は水城東門跡から博多遺跡群を直線的に結ぶと考えられている「東門ルート」と呼称されているものの一部である。これまでの成果から東門ルートは８世紀中頃以降に使用が開始され、12世紀代まで保持されていたと考えられている。ここで今回の調査成果と照らし合わせてみたい。



第39図　官道復元図（1/8000）



第40図　板付遺跡第38次、41次全体図及び出土遺物実測図（1/250、1/400、1/4）
（1～10は38次SD02出土、11・12は41次SX05出土、13～29は41次SD03出土）

まず今回特に特徴的な波板状遺構について概要をまとめたい。まずその配置はいくつかのまとまりに分けることができ、各まとまりで主軸方向が異なっている。このため道路の直進方向に必ずしも沿う方向となっていないものもある。また分布に粗密があり、路面全体には行なわれていない。このことは掘削時期の相違とも考えられるが少なくとも出土遺物・埋土からはそのような状態を見出すことはできなかった。また埋土には水溶土砂が多く投入されており、マーブル状の土層を示す部分が多く見られた。遺構面は比較的軟弱な八女粘土層で、前述のような土砂及び土器・瓦小破片を投入し転圧することにより路底面の強化を意図しているものと考えられる。この成果は調査時に雨水により八女粘土が露出している部分がべたべたになったときでも、波板状遺構上面は比較的安定していることに現れている。また凹凸面に土砂を充填後、面的に砂質土・シルトをひいている部分が確認でき、舗装材のような性格を有するものと考えたが、路面全体で確認できたわけでなく、部分的な造作に終わる可能性もある。次に時期的な問題であるが、波板状遺構の埋土から出土した遺物をみると、陶磁器については同安窯系・龍泉窯系の青磁は見られず、白磁はⅣ類のみでⅤ類はほとんど認められない。また土師坏・皿類は一部糸切りのものが混在するもののヘラ切りが大半であるという特徴を有する。こ

れらのことから波板状遺構が11世紀後半～12世紀前半代に形成されのものと考えられ、これ以降の遺物も認められないことから道路の廃絶の時期もこれに近接した時期が考えられよう。なお調査において確認できた波板状遺構は埋土・遺物からいずれも時期的に近接したものと考えられ、この遺構が道路が保持された最終段階のものであると考えられる。なお出土遺物を見ると、大半は瓦類が占めるが、他の遺物では８世紀代～９世紀初頭までの須恵器・土師器が見られ、その後の遺物はほとんど認められず、時期的には空白の状態となる。その後11世紀後半～12世紀前半代の遺物がまとまり、この後廃絶されるという推移を辿るようである。空白となる９世紀前半～11世紀中頃迄の時期は道路としての使用が停止されたものと考えられる。

次にＳＸ０１５について見てみたい。本遺構は切り合い関係・出土遺物から波板状遺構に先行する８世紀後半～９世紀初頭の遺構と考えられる。後に概要を記している板付遺跡の調査事例などからも９・10世紀の遺物が見られないことから、ＳＸ０１５は道路開設後一旦使用が停止される直前の遺構である可能性が高い。地鎮的性格もしくは道路廃棄に伴なう祭祀的な遺構と考えておきたい。また遺構を構成する遺物は８世紀前半～中頃に造営されたとされる官衙的施設（「高畑廃寺」）に使用されたと考えられる瓦塼が転用されている。時期的に遺物を共有したとは考えにくく、瓦の使用状況などから施設廃絶後に現地で調達した瓦塼を用いたものと考えられる。なお現在の高畑廃寺の推定ライン（第２図）は道路との位置関係・主軸方位が整合しておらず、本来は官道の西側、現警察学校内に位置した可能性もある。

ここで周辺の調査事例について概観していきたい。

１）　那珂君休遺跡第３次調査（小学校建設）

東門ルートに関して市内で確認されている最も北側の調査である。磁北からＮ－42°－Ｗの方位をとる１号溝を検出し、この西側には人力では掘下げられないほどの硬化面が調査区境界まで幅８ｍ確認されている。溝底から鴻臚館敷軒丸瓦、上面から白磁が出土している。なお硬化面からはの遺物はほとんどない。また出土遺物は８世紀代及び12世紀代に位置付けられるものが主体で、９・10世紀の遺物はほとんど認められない。

２）　板付遺跡第６次調査（市営住宅建設）

全容は明らかでないが、第４区　Ｏ－６ａトレンチで溝状遺構が検出されている。位置的には那珂君休遺跡３次調査検出溝の延長部分にあたる可能性もある。出土遺物から古代以降に位置付けられるものと考えられる。この周辺のＰ－３ａ、ｂトレンチからは古代に位置付けられる須恵器が出土すると共にこの上層からは青磁が出土しているようである。

３）板付遺跡第38次調査（Ｇ８ａ区）

ＳＤ０２は41次調査のＳＤ０３につながるものと考えられ、８世紀代の須恵器が出土している。この溝の西側に沿うように明灰褐色砂質土を盛り上げて作られた道路状遺構ＳＦ01が確認されているが、全体の規模については明らかでない。

４）板付遺跡第41次調査（Ｇ７ｄ区）

38次調査区の北側に位置する。ＳＤ０３は磁北からＮ－40°－Ｗの方位をとり、７世紀後半～末の水田（ＳＸ０５）を切っている（ＳＸ０５出土遺物は第40図11・12）。溝は８世紀末までには埋没しているようである。溝の東側に略南北の方位をとる道路（ＳＦ０１）を確認しているが、今回官道との関連は不明である。復元ラインからの推定では溝の西側に官道の路面が存在していたものと考えられる。

3） 板付遺跡第56次調査

調査区の東側沿いに現況の道路にほぼ平行にＳＦ21を検出する。遺構は縁辺部分が乱れてはいるがおおよその方位をＮ－42°－Ｗにとり、遺構面から20cm程度掘下げられている。埋土は砂・シルト・粘質土が不規則に堆積したような状態であり、底面の凹凸は著しい。また硬化面は確認できていない。出土遺物は少量であるが、８世紀代の土師器・須恵器及び白磁破片が出土しており、９・10世紀に位置付けられる遺物は出土していない。本調査地点は丘陵の末端部分に位置し、高畑遺跡より始まる切り通しの北端にあたるものと考えられる。

4） 井相田Ｃ遺跡第１次調査

調査区南西隅でＮ－39°－Ｗの方位をとる溝群を検出した。溝は９世紀初頭埋没の溝に切られ、９世紀後半～10世紀初頭の溝群と考えられている。また12世紀後半～13世紀には水田が上層を覆っている。本調査では８世紀後半を主体とした建物群と墨書土器・人面墨書土器が出土している。同様の遺物が高畑遺跡17次調査（官道の東隣）などでも出土しており、その類似性が注目される。

最後に本調査及び周辺の調査事例から考えられる道路の消長について簡単にまとめておきたい。古代の交通制度については文献史学の立場から、駅制・伝馬制・伝制の三重構造を有するものと考えられている。本調査における道路は規模・直進性から駅路に相当するものと考えられる。駅路の整備については７世紀後半代には多くの地域で整備が進められていたとし、また延暦14年（795年）に近江・若狭国における駅路廃止、翌15年に諸国地図の作成の記事が見られ、これ以降駅路・駅家の改廃記事が集中することから、この時期を画期として交通網の再編成が行なわれてきたと指摘されている。また考古学的な調査結果からも、平安時代に駅路の規模が縮小する等の事実が確認されている。今回調査を行なった東門ルートについてもこのような大きな流れを元に考えてみたい。ルート内の部分的な調査成果を元にすれば、道路出現の時期については板付遺跡41次調査のＳＸ０５との切り合い関係が注目される。７世紀後半～末の水田遺構と考えられ、道路側溝と考えられるＳＤ０３はこれを切って構築されている。また「高畑廃寺」との関連を考えると、他地域で指摘されているような官道と官衙的施設建設の前後関係からの推定を重ねることが許されるならば、高畑廃寺建設以前に道路が開設された可能性が高いと考えられる。以上のことから道路開設を７世紀末～８世紀の早い段階に考えておきたい。各調査の出土遺物から８世紀段階では全面的に道路が使用されており、各調査地点において側溝と考えられる遺構からはこの時期の遺物が多く出土している。次に「高畑廃寺」廃絶後８世紀後半～９世紀初頭にＳＸ０１５が構築され、更にこれから近い時期には道路は一旦使用が停止されたものと考えられる。このような状況は全国的な駅路の形態変化にも整合している。その後中世前半期に再整備が行なわれたものの、12世紀中頃以降には完全に廃絶され水田化されたものと考えられる。なおこの間の遺物についてはほとんど出土例が見られないことから、道路としては形骸化しており維持・補修は行なわれていなかったものと考えられるが、建物その他の遺構は現在までのところ認められていないことなどから、一定の空間としては認識されていた可能性は考えられる。なお以上の状況は板付～高畑遺跡間での状況をまとめたものである。前述の井相田遺跡の調査結果は、逆に９・10世紀の道路と考えられる遺構であり、ここでは参考資料としてとどめているが、空白の時期を埋めるものとして今後の検討課題としたい。

以上本調査例から東門ルートの消長について簡単に述べてきたが、交通制度を取り巻く問題は単に道路の消長のみならず、古代国家全般にわたる課題を提示するものといえる。今後周辺の調査事例を踏まえ、複視的に考えていく必要があろう。

○福岡県内の道路状遺構（古代から中世を中心に）

（福岡市）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
有田遺跡群Ⅰ区	早良区有田1・2丁目地内	I04SD24	1				○				中世？	83次の延長	市報266集
		I05SD28と29の間	1	2	敷石		○				中世？	I04と83次と繋がる	
有田遺跡群3次	早良区有田1丁目23-1	1号溝	63.6	9～			○				平安	肥前北部ルート	市報155集山村1993
有田遺跡群35次	早良区小田部5丁目150	1と2・3号溝の間	22.5	1.4～2			○				16C	道路？	市報173集
有田遺跡群49次	早良区小田部2丁目20-21	2・3号溝	5.3・7.8				○					肥前北部ルート	市報110集山村1993
有田遺跡群72次	早良区有田1丁目26-3	3と4号溝の間	9	2.4			○				中世	道路側溝	市報173集
		10号溝	3.8				○				中世末～近世	道路改修の痕跡	
有田遺跡群80次	早良区小田部1丁目168	溝SD02と03の間	4.75～11.6	1.2～2			○				中世？	道路？	市報547集
有田遺跡群81次	早良区有田1丁目	溝状遺構SD17	2.5～				○					肥前北部ルート	市報129集山村1993
有田遺跡群83次	早良区有田1丁目127-3	道路状遺構（1と2号溝の間）	13	2～2.6	礫		○		○			中世の城跡に懸わる	市報139集
			13	1.3～3.7			○			○		中世の城跡に懸わる	
			13	0.6～1			○			○	～16C末	中世の城跡に懸わる	
有田遺跡群124次	早良区有田1丁目24-4						○				平安	肥前北部ルート	年報21山村1993
有田遺跡群164次	早良区小田部2丁目106	溝状遺構SD01	28	4.5～			○				奈良（8～9C初）	肥前北部ルート	市報308集山村1993
有田遺跡群169次	早良区有田1丁目25-1他	溝SD105	18				○				平安初	肥前北部ルート	市報339集
有田遺跡群174次	早良区小田部2丁目194他						○？					肥前北部ルート？	年報8
有田遺跡群179次	早良区小田部2丁目102他	溝SD07	2.96				○				奈良～平安？	164次SD01の延長？	市報513集
飯倉D遺跡	城南区七隈3丁目844他	溝SD942	22	0.3					○			道路？	市報440集
飯倉G遺跡1次	城南区干隈2丁目482-2	道路状遺構SF01	20	1	炭化物・焼土など				○		6C末～7C初	製鉄炉と関連通路	市報334集
梅林遺跡3次	城南区梅林3丁目455-7他										室町～戦国	道路（里道）跡	年報13
浦江谷遺跡群1次	西区大字金武字浦江谷他	6区SD003（SD011も一連）	52	～1.8					○		中世		市報614集
		SD006	18？	1～2？			○		○？			道路又は側溝	
井相田C遺跡1次	博多区井相田2丁目12-6	溝状遺構SD231～234	110	5～8			○				7C末～9C前	大溝SD01に沿う道路側溝	市報152集
		溝状遺構SD292と293の間	52	8〈11〉			○				9C後～10C初	水城東門ルート	山村1993
井相田C遺跡2次	博多区井相田2丁目	Ⅱ区溝SD94	12				○				室町	水城東門ルート	市報179集山村1993
板付遺跡群6次(O-6a)	博多区板付2・3丁目	溝状遺構					○？				古代～	水城東門ルート？	市報35集
板付遺跡群38次(G8ａ区)	博多区板付5丁目1-20	道路状遺構SF01	3.4	1.5～2.7	砂質土		○？				8C	水城東門ルート	市報83集大庭2001
板付遺跡群41次(G7ｄ区)	博多区板付5丁目1-14	道路状遺構SF01	16	3～5			○？				8C	水城東門ルート	市報115集山村1993
板付遺跡群56次		SF21										水城東門ルート	今年度報告
入部3次調査	早良区大字重留字松本他	10地点Ⅱ区SD01	4	2～					○？		古代末～中世	8・9地点に繋がる	市報268集
		12地点Ⅱ区SD01	98	1～	砂礫		○		○		中世	4地点SD26に繋がる	
大橋E遺跡4次	南区大橋4丁目	溝状・畝状遺構SD003と012の間	12～17	〈13前後〉			○	○			7C代	三宅廃寺に関連	市報511集
		SD006と013の間	17～27	(9.5～10.5)			○	○			7C代	三宅廃寺に関連	
香椎B遺跡1～4次	東区大字香椎字寺熊他	階段状通路遺構SW614	7					○				階段状もしくは道路遺構	市報621集
		SW615	5					○				階段状もしくは道路遺構	
		SW616	3.2					○				階段状もしくは道路遺構	
		SW618	9.6					○				階段状もしくは道路遺構	
		SW619	3.2					○				階段状もしくは道路遺構	
		SW620						○				階段状もしくは道路遺構	
		SW623	6.6					○				階段状もしくは道路遺構	
香椎B遺跡5次	東区大字香椎字寺熊他	SD06と07の間	0.7	6.8			○					道路？	市報621集
金武城田遺跡	西区金武字城田	Ⅱ区SX26列石遺構	16？	3	礫・土器片？						8C前～中	道路？	市報186集
蒲田遺跡	東区大字蒲田	敷石遺構南北敷石	48	2～6	敷石		○		○		中世	区画または道路	市報33集大庭2001
		東西敷石	94	1.5～7	敷石		○		○		中世	区画または道路	
警弥郷遺跡3次	南区弥永5丁目1-1	溝SD01と04の間	14.5	6～6.25			○				古墳前	集落間を結ぶ道路	市報414集久住1999
鴻臚館跡17次	中央区平和台球場跡地	大走り通路SF1055									奈良～平安		市報695集
		通路SF1060									奈良～平安		
次郎丸高石遺跡3次	早良区賀茂3丁目他	2と7号溝の間	30	4前後			○				13C前～15C		市報536集
高畑遺跡18次	博多区板付6丁目地内	SF002	33	18前後				○	○		7C後～9C初	水城東門ルート	本報告
多々良込田遺跡群7次	東区多の津2丁目地内	B区溝SD005と008の間	70	2.5～5〈5〉			○				弥生終～古墳前	道路？	市報549集
谷口遺跡1次1地点	早良区大字鮫山字谷口	旧道								○？	中世～現代	佐賀方面への路線	市報269集
寺島遺跡1次								○					
那珂遺跡群9次	博多区竹下5丁目463	SD02・21と03の間	22.5	7.5～7.8			○				奈良前後？	並列二条溝	市報598集久住1999
那珂遺跡群13次	博多区那珂2丁目地内	溝785と960間	9	1.8？			○				7C前	道路側溝？	市報222集
那珂遺跡群15次	博多区竹下3丁目	第4・5・15Cトレンチ溝状遺構					○				古墳前	並列二条溝	市報267集久住1999
那珂遺跡群16次	博多区竹下3丁目1-1	溝SD37	35				○				弥生後～古墳初	15次に繋がる並列二条溝	市報291集久住1999
那珂遺跡群32次	博多区那珂1丁目822他	溝SD2005・3004	1.8～2.8				○				弥生中期後半	並列二条溝	市報365集久住1999
		溝SD2001と3002の間	11.4～15	5.2～5.4			○				12C代	道路？	
那珂遺跡群33次	博多区那珂2丁目249-1	溝SD009	8				○				中世？	9次SD02の延長並列二条溝	市報364集久住1999
那珂遺跡群48次	博多区那珂6丁目290他	溝状遺構SD22	26				○					9次の延長並列二条溝	市報455集久住1999
那珂遺跡群58次	博多区那珂1丁目486他	SX45	16.5	0.7				○				橋列？	市報563集大庭2001
那珂遺跡群62次	博多区那珂1丁目838-1他	溝SD009と024の間	15.5～22	3.6			○				古墳後	並列二条溝	市報597集久住1999
		SD048	2.1	2			○	○			6C末～7C前	道路？	
那珂遺跡群71次	博多区那珂1丁目655	溝SD02	9				○						市報659集
那珂君休遺跡3次	博多区那珂4丁目	第1号溝	39				○				8C～12C	水城東門ルート	市報133集山村1993
野多目A遺跡3次	南区野多目1丁目地内	道路状遺構（溝5と6の間）	23	1.5～2			○				中世？		市報263集
野多目A遺跡4次	南区野多目1丁目地内	溝状遺構SD24	15	2					○		16C後～17C代	小規模の登坂道	市報527集
博多遺跡群築港線1次	博多区上呉服町地内	H区3面1号道路状遺構			瓦・土器	○					14～16C		市報183集
博多遺跡群築港線3次	博多区上呉服町1	Ⅳ面13と14号溝の間	3.5～5.5	1.5前後			○				14～15C		市報204集
博多遺跡群築港線4次	博多区上呉服町地内	Ⅱ－Ⅲ面間SX37瓦敷遺構	2.2(東西)	1.8(南北)	瓦・礫・土器						13C前	築1次の道路に似る	市報205集
博多遺跡群	博多区馬場新町	Q区SD01	10？				○				4C中～後	博多17次SD161の続き	市報193集久住2001
博多遺跡群1次	博多区御供所町150-1	舗道状遺構（4と6号溝間）	9	1	瓦・土器片・小礫	○	○				14C中～		市報543集
博多遺跡群8次	博多区御供所町150-1	Ⅱ区1・2・6号溝	～15				○				14C代	道路側溝または区画溝	市報543集
博多遺跡群17次	博多区駅前1丁目97	溝SD159と161の間	38	4～4.7	砂・粘質土		○			○	古墳前	道路側溝または区画溝	市報118集久住1999
博多遺跡群26次	博多区上呉服町34	Ⅴ面2号溝2号溝東分岐	8				○				14C代	道路側溝	市報144集大庭2001
博多遺跡群35次	博多区上呉服町56地内	道路SF049と1面SD020と030	23	3.5～4			○				15C前～中		市報177集
		2面SD052	20	3.4～4.2			○				15C初～前		
		2～3面間SD056	19	3.2～4.1			○						
		3面SD074	19	3.5～6.3	玉砂利・貝殻		○				14C中～末	舗装されている	
		4面SD082・127・128	20	3.6～4.6			○				14C前～中		
		5面SD109・135	20	3～4.5			○				13C末～14C初		
博多遺跡群37次	博多区博多駅1丁目129他	1面溝状遺構SD260	8～13	3.4～4			○				16C後～近世	道路側溝	市報244集
		2面SD74と388の間	2.4～3.6	4.6〈5.7〉			○				16C	道路側溝	
博多遺跡群38次	博多区店屋町1-30	3面溝状遺構SD335と336の間	5	4〈4.5〉			○				14C～16C	40次20号溝と直交	市報280集
博多遺跡群40次	博多区呉服町251他	1面道路（5と6号溝の間）	15.3～19.8	3.3〈3.9〉	泥土		○			○	16C	基幹道路	市報230集
		2面道路（10と11・12号溝の間）	19.2	3.6～4.4			○				15C	基幹道路	
		13号溝	6.7				○					道路側溝2面道路より先行	
		3面道路（21・22と23号溝の間）	15.6	2～4.2	砂利・泥土		○			○？	14C	基幹道路	
博多遺跡群43次	博多区店屋町8他	Ⅰ面SD121	15				○				15C代を中心	太閤町割り以前の遺構	市報246集大庭2001
博多遺跡群48次	博多区御供所町40他	Ⅳ面290と300号溝の間	12.5	1.7～2.2			○				12C後～13C前	聖福寺創建当初門前道路	市報282集
博多遺跡群53次	博多区中呉服町154他	溝SD01・02	4.5				○				中世後～？	道路側溝または区画溝	市報284集
博多遺跡群62次	博多区御供所町224他	1面道路	40	3.2			○				14C前～中世末	支線道路	市報397集
		溝状遺構178号遺構	4.5				○					基幹道路の側溝	
		2面道路	34	2前後		○	○				13C後？	支線道路	
		溝状遺構382号遺構	10.5				○					基幹道路の側溝	
		3面道路	34	3.6～4	小石・土器片	○	○				12C後～13C中	支線道路轍の痕跡？	
		溝状遺構382号遺構？	7.5				○					基幹道路の側溝	
博多遺跡群64次	博多区博多駅前1丁目101	3面SD32と74・SX37の間	28.4	3.3～3.7	土器片		○				14C前～16C末	35次と同一	市報396集
博多遺跡群74次	博多区上呉服町131-2	2面道路遺構	20.5	3.3～	砂質土・土器片	○	○				15C～16C	聖福寺寺内町を通る道路	市報395集
		3面道路遺構	17	1.5～		○	○				13C後～14C前	聖福寺寺内町を通る道路	
博多遺跡群76次	博多区上呉服町596他	道路状遺構SG354（第3～5面に）	5.3	2.8	真砂土	○	○			○	14C前～15C後	道路もしくは築地基礎部分	市報332集
博多遺跡群79次	博多区冷泉町46他	D-1区4面道路状遺構	1.5	0.84	砂質土	○					12C前	道路（路地？）	市報447集
		5面道路状遺構	4.5	0.5～1	砂質土	○						落ち込んだ浅い溝状部分	
博多遺跡群80次	博多区冷泉町304-1	2と3面道路遺構SD→40		～7.2	小石・土器片	○	○				14C前～15C前	溝と溝の間に道路面あり	市報448集
博多遺跡群84次	博多区上呉服町119他	1面道路遺構				○					16C後	太閤町割り以前の道路	市報521集
		2面道路遺構	5.5	2	玉砂利・砂質土	○	○				16C代		
博多遺跡群87次	博多区上川端町7	1面と2面の間			砂質土	○					16C	道路の整地層を確認	市報443集
博多遺跡群90次	博多区冷泉町216	道路遺構SF46	8.4	1.2～1.5			○				13C後～	62次の延長にあたる	市報557集

博多遺跡群95次	博多区店屋町8-10	1～3面					○				15C～16C後	基幹道路	年報10
博多遺跡群115次	博多区店屋町34他										11C以降	39次から延びる道路	年報14
博多遺跡群124次						○	○					未報告	大庭2001
原遺跡10次	早良区原5丁目1225-7他	大溝SD06	49～57.6	5.3～5.8			○				～12C以前	肥前北部ルート	市報215集山村1993
原遺跡14次	早良区原6丁目21-35	溝SD07	18	5.2			○				8･9～12C	肥前北部ルート	市報295集山村1993
比恵遺跡群22次	博多区博多駅南4丁目19-2	溝SD018･079と009･010の間	1.2	9.4～9.6			○				古墳前	並列二条溝	年報4久住1999
比恵遺跡群30次	博多区博多駅南4丁目221	溝SD001	18.8				○				古墳前期	並列二条溝	市報289集久住1999
比恵遺跡群31次	博多区博多駅南4丁目201	溝SD001と002の間	8.5～14.5	2.8～3.4			○				弥生中期後半	並列二条溝	市報289集久住1999
		溝SD005	11	3前後			○				古墳前	比恵59次2号溝に続く	
比恵遺跡群45次	博多区博多駅南6丁目24-1	溝SD05と09の間	15	5.2〈6〉			○				古墳前	並列二条溝	市報402集久住1999
比恵遺跡群50次	博多区博多駅南4丁目49	溝SD292と294の間	43.1	6〈7～8〉			○				弥生終～古墳初	道並列二条溝	市報451集久住1999
比恵遺跡群51次	博多区博多駅南4丁目86	溝状遺構SD203	13？	0.5			○				古代（8C）	道路側溝	市報452集
		SD209･301	19？	0.4			○				中近世？	道路側溝	
比恵遺跡群55次	博多区博多駅南6丁目16-2	溝11と13の間	6～10	6〈7〉			○				弥生後～	並列二条溝	市報442集久住1999
比恵遺跡群59次	博多区博多駅南4丁目120-1	1号溝	4.6				○				弥生中～後	比恵31次SD001･002に続く	市報562集久住2001
		2号溝	6.3				○				古墳前	比恵30･31次に続く	
比恵遺跡群62次	博多区博多駅南6丁目25-1	溝33と2の間	14.5	6〈7〉			○				弥生終～古墳初	並列二条溝	市報595集久住1999
		溝32と9･10･37の間	9.4～14.2	4.2～6.1			○				弥生後期後～終		
比恵遺跡群63次	博多区博多駅5丁目17-5	道路状遺構（硬化面遺構2･溝1･3）	16	1.2～1.5	小礫･土器片	○	○				奈良	鴻臚館に関連	市報595集
東入部遺跡群10次	早良区東入部1098-2他	1-3区昇降用道路遺構0003	6.5	0.4～0.8		○			○		～9C代	旧河川への昇降用道路	市報485集
		H-7区0040	2.5	0.5～？		○			○		0003と近い年代	旧河川への昇降用道路	
		B-4区0059	4.5	0.4～？		○			○		～9C代	旧河川への昇降用道路	
		B-3区0060	6.5	0.4～？		○			○		～8C	旧河川への昇降用道路	
		B-5区0065	3.5	0.4～？		○			○		9C？	旧河川への昇降用道路	
東那珂遺跡群1次	博多区東那珂1丁目423	道路状遺構SF50	47	0.8～2.7			○				8C後～末	集落の中を通る里道的な道路	市報400集
元岡･桑原遺跡群7次	西区大字元岡字池ノ浦	道路状遺構	50	〈2.7〉		○	○				飛鳥～奈良		市報693集
吉塚祝町遺跡群1次	博多区吉塚2丁目地内	8区1面01号遺構		1.4前後		○	○				14C	一時的に使用された路地	市報624集
		14区1と2面道路状遺構			砂質土	○				○？	～13C	数回に渡り作り直す	
吉武遺跡群3次			7			○					奈良		市報437集 横山邦継氏ご教示
吉武遺跡群6次								○					横山邦継氏ご教示
和田B遺跡A地区	南区野多目3丁目地内	溝状遺構SD103A	27	1～2.5					○			山道の跡	市報413集
		SD103B	21	1～3.2	礫				○			道路風化層跡	
		SD104と105の間	25	1			○					道路	

（朝倉郡朝倉町）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
長島遺跡C地区	大字須川字長島1943他	通路状遺構	17.5	～2.4					○			谷と平野部の往来に使用	九州横断自動車道34
		道路状遺構	16	～2.2	玉砂利･砂･粘土								
長島遺跡2次	大字須川字長島1943他	1号通路	17	～2.4					○		奈良？		九州横断自動車道55
		2号通路	13	1					○		鎌倉	丘陵と平野部を往来する道	
		3号通路	13.2	5.5					○		鎌倉	丘陵と平野部を往来する道	
		4号通路	35	2.5～3.5					○		弥生	本来の機能は溝か	
		5号通路	7	3.4					○		鎌倉	丘陵と平野部を往来する道	
原の東遺跡Ⅳ区	大字菱野字原の東	3号溝	6	～2.3					○			谷から台地への道	九州横断自動車道50

（朝倉郡杷木町）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
大谷遺跡	大字若市字大谷	SR1	12	～3					○			道？	九州横断自動車道41
笹隈遺跡	大字久喜宮字笹隈152他	4号溝（6区SD01一連？）	16.4	～2.3	炭化物･礫･焼土				○		弥生終･8C代	二つの時代に使用か	九州横断自動車道44
志波桑の本遺跡	大字志波字桑ノ本	1号通路状遺構	11.2	～4.2	土器･炭･円礫				○		12C～13C	階段状を呈する	九州横断自動車道45
		2号通路状遺構	2.5	～2.2					○		12C～13C	階段状を呈する	
		3号通路状遺構	4.6	～2.3					○		12C～13C	階段状を呈する	

（朝倉郡夜須町）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
砥上林遺跡	大字砥上字上林108他	20と21号溝の間	26～41	6.3～6.8			○				14C	道路？	町報27集
	大字砥上字上林107-1他	通路状遺構	12	～5				○？	○		5C後～7C後	丘陵から谷におりる	県報103集

（甘木市）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
下浦宮原遺跡	大字下浦字宮原2092他	溝状遺構1号溝	29.6	0.3～1.8		○					奈良	通路	市報33集
		2号溝	17	0.4～0.6		○					奈良	1号溝と同様か	
宮原遺跡D地区	大字下浦字宮原2092	通路状遺構					○					多数あり	九州横断自動車道51
		11･12号溝の間	50～	2.5～2.7			○					通路	

（糸島郡二丈町）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
塚田南遺跡	大字深江2055-1他		120	〈6〉		○		○			7C末～8C初	古代道路跡	県年報平成8年度 日野1999
石崎･曲り田遺跡3次	大字石崎字曲り田			6		○	○		○			西海道跡	県年報平成11年度 日野1999

（浮羽郡吉井町）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
界町遺跡	大字生葉	道路状遺構	9	1.3	小角礫				○？		13C～？	旧郡境に沿う道路	浮羽バイパス8
塚堂遺跡	大字宮田	E地区22～27号ピット列群						○					浮羽バイパス5近江1998

（大野城市）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
池田遺跡	大字上大利398-8他	盛土状遺構	12～15	～34						○	8C前	水城西門ルート	市報51集
御供田遺跡	白木原1丁目308-2他	SD314と401の間	30.8～46.8	2.8～3.8			○				平安	主要道ではない官道	市報32集
島本遺跡													
谷川遺跡	下大利4丁目742-1	溝SD01･03	5.8～13	9〈10.5〉			○				7C後～12C初	水城西門ルート	市報51集

（小郡市）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
一ノ口遺跡Ⅰ地点	三沢字一ノ口	1号道状遺構	9.6	1					○		弥生	集落や外部への昇降口	市報74･86･91集
		2号道状遺構	60	5.7					○		弥生	集落や外部への昇降口	
		3号道状遺構	16.4	2.1					○		弥生	集落や外部への昇降口	
		4号道状遺構	12	5					○		弥生	集落や外部への昇降口	
		5号道状遺構	9.3	2.1					○		古墳後期	古墳への墓道	
大板井遺跡10次	大板井字野畑438他	溝SD3	31	4～5			○		○				市報76集
小郡前伏遺跡	小郡	溝1･2の間	36.8～48	6							8C前～中	境界または道	九州横断自動車道11
北松尾口遺跡Ⅲ地点	三沢字北松尾口	1号溝状遺構	6	～1.2					○		古墳後期	古墳へのアクセス道路	市報77集
小板井京塚遺跡2	小板井字京塚310-1	道状遺構	18	1.6～2.3				○	○		8～9C		市報113集
上岩田遺跡	上岩田字西大塚他	道路状遺構		6前後								道路多数あり	市報142集
北山遺跡A地点	三沢地内												市報88集
勝負板遺跡J地点	三沢地内	道状遺構											市報88集
勝負坂遺跡K地点	三沢地内	道状遺構											市報88集
津古狸原遺跡	大字津古字狸原826他	溝状遺構1	33	0.6～3					○		弥生？	道？	市報84集
永浦遺跡C地点	三沢字永浦	道状遺構		1.7～2.5					○		古墳？		市報80･101集
干潟遺跡	干潟地内		50	1.5				○			7C～8C	集落内部を結ぶ生活道路跡	県報59集
干潟城山遺跡	干潟字城山	道路状遺構D29, 30とD31, 32の間	200	2.2～2.3			○				7～8C？	集落に伴う道路	市報102集
三沢古墳群	三沢地内	道状遺構							○		古墳後期	6条あり	市報62集
栗節堂東遺跡	大字井上字東山ノ後985他	道路状遺構	90	2～3.4			○	○			7C後～8C前	集落の幹線道路	九州横断自動車道13

（遠賀郡岡垣町）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
友田遺跡群1区	大字鍋塚字友田103他	6と7号溝の間	10～12.4	6			○					丘陵へ登るための道路	町報8集

（春日市）

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
春日公園内遺跡			200～	9		○	○				～9C中	水城西門ルート	山村1993春日市史
上平田遺跡	大和町5丁目12	道	13～18	1							弥生後？		年報1
九大筑紫地区遺跡群	春日公園6-1	溝SD101	99				○				平安	道路側溝水城西門ルート	九大第二冊山村1993
		SD703と704の間	2	3.9			○				鎌倉	SD522と523に続く	
		SD522と523の間	22～37				○				平安後	幹線道路	九大第三冊山村1993
		SD208と209の間		3～5.6			○				平安後		
		版築状遺構SX301		～30						○	～12C	水城西門ルート	
先の原遺跡1次	航空自衛隊春日基地内			10			○					道路側溝水城西門ルート	山村1993春日市史
先の原遺跡2次							○					道路側溝水城西門ルート	山村1993
須玖唐梨遺跡	大字須玖968-1他	溝1と5の間	～36	10.5			○					道路？	市報19集久住1999
駿河遺跡B地点3次	春日原南町4丁目43		19～19.7	1.7〈2.2〉			○					道路？	年報6
駿河遺跡C地点	春日原東町2丁目45	道路状遺構	14	0.5～0.7				○					年報4
原遺跡	大字上白水字原	溝状遺構	12.1	2.4～2.6					○		～弥生中期後	墓地に登る道	山陽新幹線10集

門田遺跡辻田地区	人字上白水門田辻田	溝A	15	~1.2						○		~古墳後	道路？	山陽新幹線7集

(糟屋郡粕屋町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
阿恵古屋敷遺跡	大字阿恵294-1他	5B・6号溝の間	18.8	2~2.8			○				8C後~9C代		町報9集

(糟屋郡志免町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
中山遺跡	大字別府字角石地内	10号溝	38.4~	~1.8							中世~	中世から使用された里道か	町報9集

(北九州市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
井上遺跡2区	小倉南区沼本町3丁目	径路状遺構SF1	7.5	0.7	円礫				○		15~16C	谷地あるいは井戸への通路	市報163集
潤崎遺跡第8地点	小倉南区東貫2丁目	2号溝状遺構	11.5~	0.5~0.75					○			谷部と丘陵部とを結ぶ通路	市報214集
		3号溝状遺構	22	0.5~1	鉄滓				○		13後~14前C	谷部と丘陵部とを結ぶ通路	
金丸遺跡1次	八幡西区大字野面	Ⅱ・Ⅲ区径路状遺構(2号溝)	54.8	~3.5	小石				○		12C~13C代	集落と谷地を結ぶ	市報210集
金丸遺跡4次	八幡西区大字野面	小道状遺構		0.3~1.5	小礫				○		12C~13C	坂道	年報14
金丸遺跡6次	八幡西区大字野面	1号溝状遺構			礫など						12C	道	年報16
小倉城跡Ⅰ区	小倉北区城内	中世道1	38~	3~5.4	小砂利	○	○			○	16C後		市報196集
		中世道2			小砂利	○	○			○	16C後		
上貫遺跡C4区	小倉南区大字中貫字大日	1~4号溝状遺構	2~	1					○			溝そのものか道	市報264集
高津尾遺跡	小倉南区大字高津尾	3区1号溝状遺構	18[40]	9	礫				○		12C代	尾根上と河川敷を結ぶ道	市報115集
高野遺跡	小倉南区高野2丁目10	1号通路状遺構	20	1.5~3.5	石・木材					○	11C頃	谷部を渡るために造られた	市報198集
		2号通路状遺構	15	2.5~4	石・木材					○	8C	谷部を渡るために造られた	
		3号通路状遺構	15	2.5~4	石・木材					○	8C	谷部を渡るために造られた	
寺町遺跡3次	小倉南区蒲生5丁目4	径路状遺構	49	2.5							12C~13C代	住居と耕作地を結ぶ通路	年報16
長野A遺跡	小倉南区長野2丁目	V区土器状遺構	22	3.4~21.2						○?	奈良末~平安初	Ⅶ・Ⅷ区と続く道	市報55集
		Ⅶ区1号溝	46	~9		○		○?	○		奈良末~平安初	V・Ⅷ区と続く道	
		Ⅷ区1号溝	35	~6.5				○?	○		奈良末~平安初	V・Ⅶ区と続く道	
長野小西田遺跡	小倉南区大字長野520-4他	土手状遺構	8.6	1							弥生	作業用通路	市報262集
		木道(作業用通路)	15	0.25~0.3	板材						弥生	作業用通路	
八反田遺跡Ⅲ区	八幡西区大字永大丸	1号径路状遺構	3.5	1.1	小礫				○		14C後~15C	川と水田・井戸への通路	市報183集
		2号径路状遺構	5	2.3	小礫				○		14C後~15C	川と水田・井戸への通路	
八反田遺跡Ⅴ区	八幡西区大字永大丸他	A区道状遺構1号溝	2.5~	0.65~1.5					○	○	12C後~13C	集落外への道	市報216集

(京都郡犀川町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
大熊条里遺跡	大字本庄字栗ヶ坪84他	道路状遺構									古墳前		県年報平成7年度
味噌谷越古道跡	大字木井馬場972		50	1	川原石・側石						中世~現代	木井嶽麓の石畳と呼ばれる里道	県年報平成7年度

(京都郡豊津町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
苅見橋ノ口遺跡	大字苅見912-3	道路跡	1.7~2.5	6.8~11.4	砂利・土器片	○	○			○	8C中	豊前・豊後国府を結ぶ道路	町報22集
上荒谷北遺跡	大字豊津字上荒谷1323-4他	溝状遺構SD001	30.9	~2.4								延長上に小土壙あり	町報19集

(久留米市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
大島井遺跡1次	御井川字大島井	溝SD4とSの間	12~13	6.4~6.8			○					横道SF325に繋がる	市報49集
草地遺跡3次	藤光町字草地	西海道側溝SD01と02A溝の間	50	~9 (10)			○		○?		奈良~平安	西海道	市報145集
古賀前遺跡4次	上津町字古賀前	道路状遺構SF30	7~23	9 (10.5)			○				奈良~平安	西海道	市報111集
古賀前遺跡10次	上津町字古賀前	西海道	7~20.5	9			○				~中世	西海道	市報130集
古賀前遺跡13次	上津町字古賀前	道路遺構	55?	~9			○				~中世	西海道	市報145集
小寺遺跡	荒木町荒木字小寺1372-2他	道路遺構		3~3.5			○				~15C末	荒木近藤氏館跡に向かう	県年報平成7年度
西海道跡1次	諏訪野町字上牟田1762-2他	道路状遺構SF1	68	9 (13)前後	バラス		○				8C前~13C	西海道	市報76集
西海道跡2次	荒木町荒木字東3801-1	道路跡SF1	2.7	(9~12.5)			○		○		~14C代	西海道	市報140集
筑後国府跡21次	御井町字三丁野1441-1他	溝状遺構SD925	3.8				○				10C	61次に繋がる	市報20集
筑後国府跡22次	合川町字滝尻63-1-2他	道路遺構SF956	19	7~8 (9)		○	○				~9C前	西海道	市報20集
筑後国府跡28次	合川町字広野158-5	溝SD1190	1.6				○				9C後	西海道	市報23集
筑後国府跡32次	合川町字柿内271-1	溝SD1355	2	5.5			○		○			西海道	市報23集
筑後国府跡45次	合川町字柿内369他	溝SD1355	9.5	5			○		○			西海道	市報26集
筑後国府跡48次	合川町字大林1186-1	溝SD2103A・Bと2108の間	2.8	5			○				平安	62次に繋がる	市報33集
筑後国府跡50次	合川町字柿ノ内375-1他	道路遺構SF2388	45?	5.5~6	バラス・砂質土	○	○		○		9C後~11C初	西海道	市報33・41集
		SF2438	20?	5~6	バラス・砂質土	○	○		○		9C後~11C初	32・44次も同様にあり	
筑後国府跡51次	東合川町字上142-4	溝SD2553	2.7	2			○		○			西海道	市報41集
筑後国府跡54次	合川町字久保野138-2	SX2645	5	1前後		○					~10C初	国司館と神社を繋ぐ道路	市報41集
筑後国府跡55次	東合川町字上143-1	道路SF2708と2725	17.5・20.5	2.5~4.5		○	○		○		10C中~11C後	T字路を形成する	市報41集
		SF2709上層	16	~5.5[8~]	砂質土	○					10C中~11C後	西海道	
		下層	16	~5.5[8~]	小礫	○			○		8C初~10C前	西海道	
筑後国府跡56次	合川町字広野163-3	道路状遺構SF2753			粘土	○	○					55次SF2709と似る	市報41集
筑後国府跡57次	東合川町字朝妻193他	道路SF2761		14	礫							西海道へボノ木62次で再調査	市報41集
筑後国府跡61次	御井町字三丁野1442-4	溝SD925	4.5				○				~11C後	21次と繋がる	市報44集
筑後国府跡62次	合川町字大林1186-1	溝SD2103A・Bと2985・2986の間	11.8				○				~13C中	48次に繋がる	市報44集
筑後国府跡72次	御井町字三丁野1453-1	道路遺構SF3251	14.5	2.1~2.8	砂利・土器・砂質土	○			○		~10C初	国司館と神社を繋ぐ道路	市報51集
		SF3253	10	2	砂利	○			○		~10C中	国司館と神社を繋ぐ道路	
筑後国府跡78次	御井町朝妻1411他	道路遺構SF2709A下層路面	34.5	5.5[10~]	円礫	○	○		○		~10C中	西海道	市報54集
		SF2709B上層路面	34.5	5.5[10~]		○					10C中~11C後	西海道	
筑後国府跡84次	合川町字ギャクシ185-2	不明遺構SX3607					○?	○				道路？	市報59集
筑後国府跡86次	御井町字三丁野1416-1	道路状遺構SF3714	4	2	円礫	○					12C前		市報62集
筑後国府跡95次	朝妻町字三丁野1446-1	溝SD3973	4.5				○?						市報67集
筑後国府跡96次	合川町字広野171-1	道路状遺構SF3980	1	8		○	○				9C後~11C初	西海道50次SF2438に続く	市報67集
筑後国府跡98次	合川町字広野140-1	道路状遺構SF4014	6.5(東西)	7.5(南北)		○					~10C初	国司館と神社を繋ぐ道路	市報67集
筑後国府跡103次	合川町字久保野153	溝SD4151	33				○				10C後~11C後	西海道	市報70集
筑後国府跡109次	朝妻町字三丁野1423-1	溝SD4204	13	2~4	小礫	○					11C~12C初	道路？	市報70集
筑後国府跡110次	東合川町字井田190-1	道路遺構SF2709			円礫	○					~9C後	西海道	市報70集
筑後国府跡115次	合川町字田代1212-11	溝SD4171と4173の間	10	1.7前後			○				~12C代	104次と繋がる	市報81集
筑後国府跡117次	朝妻町字三丁野1454-3	道路状遺構SF4253	4.6	0.3~0.6	礫	○			○			国司館と神社を繋ぐ道路	市報81集
筑後国府跡120次	朝妻町字三丁野1145-1	溝SD4306	36				○				~10C初	道路側溝または区画溝？	市報89集
筑後国府跡121次	朝妻町字三丁野1420-1	溝SD4317	5	0.5~0.9		○					11C代	道路？	市報89集
筑後国府跡131次	朝妻町1415-5	道路状遺構SF2709A下層道路		[10前後]	円礫				○			西海道	市報113集
		SF2709B上層道路		[10前後]							10C中~	西海道	
筑後国府跡132次	合川町字広野180-1	道路状遺構SF4470	22	1.6~3.2		○			○		12C代	国司館と神社を繋ぐ道路	市報113集
		SF4471	23	2.5~3	小礫		○		○		~10C後	国司館と神社を繋ぐ道路	
筑後国府跡134次	合川町162-5他						○					道路側溝	県年報平成7年度
筑後国府跡146次	合川町132-2他	道路状遺構SF33	14~	2.5	砂礫・土器	○		○	○?		平安	国司館と神社を繋ぐ道路	市報131集
筑後国府跡153次	野中町415-11他	道路状遺構					○					22次に繋がる	県年報平成9年度
筑後国府跡154次	東合川町字楽山1218-1	溝SD10と15の間	7.7~7.8	1.3~1.7②			○				8C後	通路？	市報149集
筑後国府跡160次	朝妻町字三丁野11-18	道路状遺構SF20	12	2.3~2.7	砂利・土器片	○		○			~10C後	国司館と神社を繋ぐ道路	市報162集
		SF35			砂利	○					~10C後	国司館と神社を繋ぐ道路	
筑後国府跡165次	合川町205-1	道路状遺構SF23	35~?	2.3~?	小礫・土器片	○	○		○		10C後~		市報162集
筑後国府跡169次	東合川町字上362-1他	道路遺構SF1上層道路	20	4~	粘土	○			○		10C中~13C	西海道	市報170集
		下層道路	20	4~	バラス・土器	○	○?				7C末~10C中	西海道	
		SF60	36?	3~?	バラス・土器	○	○				13C代	55次SF2708の一連	
		SF160			バラス	○					10C中~12C初	西海道廃絶後の道路遺構	
筑後国府跡170次	合川町189	溝SD160と176の間	14.3~15.2	6~7前後			○					道路？84次と関連	市報168集
東光寺遺跡Ⅳ区	山川町字東光寺	切通し状遺構	16.5	2.2					○		中世	吉見獄城址へ続く通路	市報9集
野中上ノ原遺跡	野中町字上ノ原297-1	溝SD1	20				○				8C中？	国府・国分寺連絡道路側溝	市報89集
ヘボノ木遺跡13次	東合河町291他	西区溝SD1309と1312の間	14.5	6~7.5			○					23次と繋がる	市報50集
ヘボノ木遺跡16次	東合川町字上ヘボノ木291他	道路状遺構SF1470	18?	3前後	砂礫・土器	○	○						市報45集
		SF1483	12?	2					○				
		SF1484・1~5期	51.5?	3.2	砂礫	○	○		○		9C後~12C中	伝馬道	
ヘボノ木遺跡17次	東合川町字朝妻196他	道路状遺構SF1570		3前後	砂礫	○					~12C代	西海道	市報45集
ヘボノ木遺跡19次	東合川町字山ノ下221	道路状遺構SF1583		3		○					10C前~中	伝馬道	市報45集
		SF1594		2	石・土器片など	○	○				7C後~8C後		
ヘボノ木遺跡23次	東合川町第288号保留地	道路状遺構SF1470	24	6~7	砂利	○	○				10C後~11C	13・16次と繋がる	市報50集
ヘボノ木遺跡24次	東合川町第158-1街区	道路状遺構SF1484	5.5?	0.3~1.3	砂礫							伝馬道2面あり	市報53集
ヘボノ木遺跡28次	東合川町第290号保留地	道路状遺構SF1484			砂利						12C中	伝馬道	市報53集
ヘボノ木遺跡29次	東合川町第289号保留地	道路状遺構SF1484	12	~5	砂利	○?					10C中	伝馬道	市報53集
ヘボノ木遺跡39次	東合川町水洗347-1	道路SF1570	6	7.5	小礫・砂	○							市報61集

		SF1884(1～5期)	10.5	1.1～							～12C代	16次D・E区、24次の延長	
		SF2125	10.4	1.6～2.2		○							
ヘボノ木遺跡51次	東合川3丁目19-1他	道路SF2441	2	5～6								伝馬道	市報83集
		不明遺構SX2447	4.5	2.5	川原石・土器・瓦							道路？	
ヘボノ木遺跡53次	東合川町3丁目15-1	道路遺構SF2481	12.5	5.5～		○					9C後～10C初	伝馬道	市報90集
ヘボノ木遺跡55次	東合川町3丁目14-9他	道路状遺構SF2519	12.5	4	小礫	○	○				～10C後	伝馬道	市報98集
ヘボノ木遺跡62次	東合川町3丁目20-1他	道路跡SF400	37	7.5～	バラス	○					10C～12C代	西海道	市報121集
横道遺跡3・4次	御井町1498-1	D・E区道路状遺構SF325	150	7～8			○				12C前		市報49集
		7区SF462		1.9～2.2		○?	○		○?				

(古賀市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
川原西遺跡第3地点	大字川原1525-1他	4区1号道状遺構	4.1	1				○			古代～	枕木の痕跡	県報160集

(太宰府)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
浦ノ田遺跡3次	大字太宰府	道路状遺構									12C後	B区2SX003石畳列から続く	県年報平成11年度
国分千足町遺跡5次	国分3丁目337-1	溝(落ちの可能性あり)					○?				奈良～平安	水域東門ルート？	県年報平成7年度
国分松本遺跡2次		2SD070と080の間	17～40	4～5			○				奈良		市報33集
国分松本遺跡6次	国分3丁目477-2他	SF015								○	奈良中～		県年報平成9年度
大宰府史跡46次	大字大宰府2611	溝SD1330と1331の間	47～？	3			○				～11C後	条坊関連道路南北	太宰府市史
大宰府史跡67次	大字観世音寺字今光寺991-1	道路状遺構SX1670A・B・C		4			○		○?			歩廊状遺構に寄かる	九歴1981
大宰府史跡97次	大字観世音寺字今光寺991-1	道路状遺構SX2846		1.6～2.5					○			推定今光寺の東端の道路	九歴1988
大宰府史跡107次	大字観世音寺字今光寺990他	通路状遺構SX3137・3138										排水も重ねた施設	九歴1988
大宰府史跡126次	観世音寺132	通路状遺構SX3780	5	2.4							8C前	講堂と僧房を繋ぐ通路	九歴1992
大宰府史跡134次	大字観世音寺字不丁287-1	溝SD3930					○				14C代	道路側溝	九歴1992
大宰府史跡181次	観世音寺4丁目559-2	溝状遺構SD4426	5	1前後					○			通路	九歴1999
大宰府条坊(五条地区)		Dトレンチ					○						福岡南バイパス1
		Eトレンチ		12									
御笠川南条坊遺跡3次	大字太宰府字泉水2743-1	溝SD306・307・308					○?				11C後～12C前	条坊関連道路	福岡南バイパス3太宰府市史
御笠川南条坊遺跡4次	大字太宰府字泉水2791-7	溝SD402・403・404					○?				11C後～12C前	条坊関連道路	福岡南バイパス3太宰府市史
御笠川南条坊遺跡5次	大字太宰府字平野他	溝SD503・504・505					○?				11C後～12C前	条坊関連道路	福岡南バイパス2太宰府市史
御笠川南条坊遺跡6次	大字太宰府字泉水2695	溝SD606・609					○?				11C後～12C前	条坊関連道路	福岡南バイパス6太宰府市史
大宰府条坊跡16次	大字通古賀1018-1他	溝16SD087と088の間	10	3			○				～11C後	条坊関連道路	市報7集太宰府市史
		溝16SD092	4.6				○				～11C後	条坊関連道路	
大宰府条坊跡34次	大字通古賀1088-1	溝34SD080と090の間	36	3			○				～奈良	条坊関連道路	太宰府市史
		34SD225と232の間	36	3?			○				11C	条坊関連道路	
大宰府条坊跡44次	大字通古賀1087	溝44SD005と025の間	6	4			○				～11C後	条坊関連道路	市報28集太宰府市史
大宰府条坊跡53次	大字通古賀1071	溝53SD045	4				○				～11C後	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡58次	大字通古賀42-1他						○				11C後～12C前	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡60次	大字通古賀42-1他	溝60SD023など					○				11C後～12C前	交差点の一部と考えられる	太宰府市史
大宰府条坊跡61次	大字通古賀42-1他						○				11C後～12C前		太宰府市史
大宰府条坊跡64次	大字南287他	溝64SD140	23.3	【36.6】			○				8C前～後	朱雀大路東側溝	市報37集山村1993
		64SD110(64SD150)	19.5				○				9C中～後	朱雀大路東側溝	山村1993
大宰府条坊跡69次	大字通古賀42-1他						○				11C後～12C前	南北路側溝を数条確認	太宰府市史
大宰府条坊跡71次	大字観世音寺123	71SX600A	23	2.5～10.4			○				11C後～12C前	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡75次	大字通古賀42-1他	溝75SD003と050の間					○				11C後～12C前	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡81次	大字通古賀1088-3	溝81SD245	5				○				～11C後	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡87次	通古賀2丁目249-3他	道路87SF100	22	2.5～3			○				10C後～11C前	条坊関連道路	市報30集太宰府市史
		道路87SF150	2	2.7			○				10C後～11C前	条坊関連道路	
大宰府条坊跡88次	大字太宰府2684-1	溝SD400と595の間		3			○				9C代	交差点または道路のコーナー	太宰府市史
		SD300と650の間		2.5			○				11C後	交差点南北	
大宰府条坊跡89次	大字通古賀1016-1他	道路状遺構88SF150	11	3			○				9C～11C後		市報28集太宰府市史
大宰府条坊跡90次	大字太宰府2686-1	溝90SD045	8				○				9C代	条坊関連道路	太宰府市史
		90SD024と030の間	15	2			○				～11C後	条坊関連道路	
大宰府条坊跡91次	大字太宰府2590-7	溝SD001	3.95				○				11C後	朱雀大路東側溝	市報37集山村1993
大宰府条坊跡92次	大字太宰府2630-14	溝92SD002と004の間	24	1前後			○				10C代	条坊関連道路	太宰府市史
		92SD006と009の間	24	9			○				11C代	条坊関連道路	
大宰府条坊跡93次	大字太宰府2567-2他	溝93SD314と324の間	4.2	2.5(3.6)			○				8C代	条坊関連道路	太宰府市史
		93SD270と265・275の間	9.6	2.2(3.6)			○				～9C後	条坊関連道路	
大宰府条坊跡95次	大字通古賀804-1・7	溝95SD040	5.2				○				8C前～中	条坊関連道路	太宰府市史
		95SD050	12				○				10C後～11C前	条坊関連道路	
		95SD077(065と対になる？)	4	3			○				9C末～10C前	条坊関連道路	
大宰府条坊跡106次	大字通古賀2丁目250-1他	道路106SF100	21	1.4～2.1			○				8C前～後	条坊関連道路	市報30集太宰府市史
大宰府条坊跡118次	通古賀2丁目248-1他	道路118SF100	13	3			○					条坊関連道路87次延長部分	市報30集
大宰府条坊跡120次	都府楼南4丁目566-383	溝120SD027と059・091の間	24.5？	1.5～3？			○					条坊関連道路条路痕跡	市報48集
		溝120SD020・025・030	22				○					条坊関連道路坊路痕跡	
大宰府条坊跡122次	都府楼南2丁目	溝1と2の間または溝3も関連					○					条坊関連道路	狭川1995
大宰府条坊跡133次	大字南字芝原323-1	溝133SD010・015・SX020					○					朱雀大路西側側溝29	
大宰府条坊跡141次	通古賀3丁目236他	溝141SD010と100の間	29	2～3(3)			○				10C中～11C前	条坊関連道路	市報30集
大宰府条坊跡154次	都府楼南3丁目665-1	溝154SD008とSX012	5.5～				○					道路痕跡	市報48集
		154SD075					○					条坊痕跡	
大宰府条坊跡168次	朱雀3丁目305-2他						○				奈良・平安	朱雀大路東側溝など？	県年報平成7年度
大宰府条坊跡176次	都府楼南2丁目447-4他						○?				平安後	条路側溝？	県年報平成7年度
大宰府条坊跡178次	都府楼南5丁目923-1						○				8C後	条坊関連道路条路の側溝	県年報平成8年度
大宰府条坊跡181次	朱雀4丁目270他						○				奈良	朱雀大路東側溝	県年報平成8年度
大宰府条坊跡191次	朱雀5丁目73						○				8C～11C後	条坊関連道路	県年報平成9年度
大宰府条坊跡194次	都府楼南4丁目789-1	溝194SD001					○					条坊関連道路条坊痕跡	市報48集
大宰府条坊跡198次	都府楼南1丁目489-5	198SD020					○				12C末～13C初	南北溝条坊に関連	県年報平成10年度
大宰府条坊跡199次	朱雀4丁目270-1	199SD070・075・080					○				奈良・平安	条坊関連道路	県年報平成10年度
大宰府条坊跡201次	通古賀5丁目1221-1他						○					条坊関連道路	県年報平成10年度
大宰府条坊跡207次	都府楼南4丁目771-1	溝207SD030・035・040					○					坊路に関連？	県年報平成11年度
筑前国分寺跡5次	大字国分字堀田736-1	溝SD45	2				○					国分寺の南の東西道路	筑前国分寺昭和52年度
筑前国分寺跡17次	大字国分626他	17SD030と034間	17？	8.5			○				～平安	国分寺の南の東西道路	市報32集
筑前国分尼寺跡4次	大字国分寺松本449-1	道路状遺構4SF050	12.5	11.4(12.3)			○				8C後	筑前国分尼寺に続く参道	市報25集
筑前国分尼寺跡12次	大字国分428-2他	溝12SD005	4.2				○				～8C代	水域東門ルート	市報16集山村1993
辻遺跡1次	国分4丁目5他	溝1SD010・170と180の間	61.5	4 (6)			○				8C前～9C後	国分寺の南の東西道路	市報33集
原口遺跡2次	大字向佐野字原口	溝2SD045と050の間	89	7			○				7C後～8C前	水域造営に関わる道路	狭川1993山村1993
宝満山遺跡群16次	大字北谷字熊崎	B区16SF008		2		○					11C～現代	馬根筋を通る踏み分け道	市報34集
前田遺跡1・3・4・5次	大字向佐野444-1他		157	9(11)			○				奈良	水域西門ルート	山村1993太宰府市史
前田遺跡10次	大字向佐野字前田703	溝10SD001と100の間	8.2～10.2				○				～9C	水域西門ルート	市報44集
水城跡20次	大字国分195	Bトレンチ										水域東門跡からの道路の一部	九歴1994
水城跡26次	大字吉松字ヶ浦447-1他	溝SD101と102の間	9.2～47	12			○				8C	水域西門ルート	県年報平成7年度九歴1996
試掘調査	通古賀3丁目236他	溝1と2の間	10	2.3～3			○					87次西延長	市報30集
試掘調査	大字坂本字関屋											8世紀の溝状遺構を検出	山村1993

(筑後市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
榎崎遺跡	大字下北島字榎崎940他	道路状遺構SF190第一硬化面	3	2？	砂質土	○	○			○	16C	A区SF200と同時期	市報9集
		A区SF200Ⅰ期	20.5	1.5			○		○		14C代	3期に分けられる	
		(中層)Ⅱ期第一硬化面	20.5	1.9		○	○			○	16C	Ⅰ期からⅡ期にかけて修復	
		(上層)Ⅲ期第二硬化面	20.5	4.2～4.5	砂質土	○				○	～明治	主要村道として使われる	
		D区SF200Ⅰ期	13.5	1.3～1.5	礫		○	○	○		14C代	3期に分けられる	
		(中層)Ⅱ期第一硬化面	13.5	1～1.2	礫・粘質土	○	○			○	16C	Ⅰ期からⅡ期にかけて修復	
		(上層)Ⅲ期第二硬化面	13.5	3.2～3.8	砂質土	○				○	～明治	主要村道として使われる	
久恵今町遺跡	大字久恵字今町	SX008	7	～2				○				榧で突かれた痕跡あり	市報30集
		SX012	6	～0.5				○				階段状の遺構	
		SX027	8.7	～3		○		○				道路部分の一部	
		SX035(SX036も一連)	15	～3				○					
鶴田本屋ノ角遺跡1次	大字鶴田字本屋ノ角549他	道路状遺構SF20					○				～8C後	西海道跡	市報36集
鶴田中市ノ坂遺跡1・3次	大字鶴田417他	道路状遺構					○					西海道跡	県年報平成7・8年度
羽大塚射場ノ本遺跡	大字羽大塚字射場ノ本30-2	1SX040	3.1(東西)	2.5(南北)		○							市報17集
		溝2SD260・265と261・266の間	9	6.5			○				8C	支線的な道路	
山ノ井川口遺跡	大字山ノ井828-1他											西海道跡	県年報平成10年度

(筑紫郡那珂川町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
後野・山ノ神前遺跡群	大字後野字早口574-2他	Ⅰ区参道状遺構	29	1前後							8C代	20と23号祭祀遺構に続く	市報49集
深原遺跡	大字中原字深原他	溝状遺構	4.8	2.9前後					○		古墳後期？	古墳群の根道	山陽新幹線8集

(筑紫野市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
東遺跡	大字下見172-1他	溝状遺構SD1・2・3・15	17.5～				○				～9C初	SD01は岡田SD04と繋がる	市報51集
		SD4	21	2.5～3	砂利	○		○			～9C		
牛島宮崎遺跡	大字牛島32-5他	道路SF0184		(12)			○?						県年報平成11年度
岡田地区遺跡群	大字岡田425-2他	Ⅰ区道路SF(溝01と04の間)	360	(9～9.4)		○	○	○	○		8C中～12C初	西海道豊後ルート	市報56集
仮塚南遺跡	大字諸田字仮塚	1号道状遺構	6.6	～3.5					○		古墳後	集落に入る道	筑紫バイパス3
		2号道状遺構	7.7	1	小礫				○		古墳後	集落に入る道	
大宰府条坊跡99次	大字杉塚166	道路状遺構99SF002	31.8	9 (1)			○				～8C後	水城西門ルート	市報52集
大宰府条坊跡107次	大字立明寺	溝107SD001	25	[35]			○				～8C後	朱雀大路西側溝	太宰府市史
大宰府条坊跡200次	大字二日市700-1		56				○	○			奈良	朱雀大路西側溝	筑紫野市史
常松遺跡2次	大字常松302-2他	溝状遺構SD1と2の間	31	1.5(2.5)			○					神社に関連した古道？	市報55集
若江神社前遺跡	大字若江37-1他		100	(6)		○					中世		筑紫野市史

(築上郡椎田町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
越路鍛冶屋原遺跡	大字越路300	道状遺構											県年報平成11年度
越路二月田遺跡	大字越路481他			6			○					古代官道の一部	県年報平成10年度
坂本正毛田遺跡	大字坂本61他											溝状遺構あり	県年報平成10年度

(築上郡新吉富村)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
池ノ口遺跡	大字葦水字三ッ溝他	道路状遺構	60	6	礫石	○	○			○?	8C前～12C前	官道	豊前バイパス3
		溝状遺構A-1と2号の間	48?	0.9～2.1			○				12C前	道路遺構？	

(築上郡大平村)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
上唐原了清遺跡	大字上唐原字了清	3号道路状遺構	12	0.4～0.85		○					古代末～中世		一級河川6

(築上郡築城町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
安武・深田遺跡	大字安武1421他	道路状遺構	21	1～			○	○				24号溝が併走する	椎田バイパス4
松丸・宇都宮氏館跡1次	大字松丸848他	通路跡									中世後	館の入り口と思われる	県年報平成11年度

(豊前市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
荒堀大保遺跡	大字荒堀	道路遺構1		5.2									市報10集豊前市史
		道路遺構2	5	(6)			○						
荒堀車地遺跡	大字荒堀			4～5					○		鎌倉～室町	各居館を結ぶ道路状遺構	市報7集
		溝SD10と11の間		2～3			○				鎌倉～室町	居館2と3の間の通路	
		溝SD13と14の間		2～3			○				鎌倉～室町	居館3と4の間の通路	
今市向野遺跡A地点	大字今市191-1	道路状遺構	26	6.0～6.3			○				7C後	周辺集落と海岸を繋ぐ道路	市報10集
久路土六田遺跡	大字久路土279他	道路状遺構	50	5							奈良		県年報平成10年度
小石原泉遺跡3次			7.3	5～6.5				○					市報10集

(前原市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
志登遺跡群B地点	大字志登	SD01	44				○				弥生中～後	道路？	市報16集久住1999
		SD02	40				○				弥生後～終	道路？	久住1999
		SD03	41.8	0.8～4？	土器・礫				○		古代	道路	
篠原熊ノ後遺跡	大字篠原字熊ノ後	2と3号溝の間	14.3～17	6.4～8			○					道路？	市報54集
上鍋子遺跡	大字有田字上上鍋子746-1他										奈良	道路跡	県年報平成6年度
奈良尾遺跡	大字多久839-1他	第1号道状遺構	9.5	0.4～2.8							奈良～平安初	木材伐採の山道	今宿バイパス13集
		第2号道状遺構	14.4	0.5～1.5							平安初前後	日常生活道	
ワレ塚古墳	大字曽根431	SX01	3.2～3.5	1.5～2(3)			○					道路？	町報27集

(三井郡北野町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
北大手木遺跡	北野町大字今山2701他	道路状遺構(10と11号溝の間)	30	7～7.7(8)			○					西海道と伝馬道を結ぶ道	県151集

(三井郡大刀洗町)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
下高橋馬屋元遺跡	大字下高橋字丸石他	道路遺構SX01	15	1.5～2		○			○		古代	SD10AとBに関連	県報129集
		SX05	17	2前後								SD10AとBに関連？	
		SD10AとBの間	15.5・26.5	3.5～4			○				古代	道路として利用か	
		SD11	13				○				古代	道路側溝SD10間を通過する	
高橋塚添遺跡	大字高橋992-2他										弥生中期前	墓道	県年報平成7年度
冨多若草遺跡1次	大字冨多字若草	Ⅰ区道路状遺構	3	0.55～1.1				○				2条検出する	町報18集
			2	0.2～0.3				○					
春園遺跡	大字山隈字春園	7と8号溝の間	15	5.4			○				奈良		九州横断自動車道26
宮嶌遺跡	大字山隈字宮嶌	道路状遺構(1と2号溝の間)	85	4.5～6			○				8C	轍の跡？筑紫と豊を結ぶ道	九州横断自動車道26

(宗像市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
久原瀧ヶ下遺跡	大字久原字瀧ヶ下108他	溝SD4と5の間	17～20	0.7～1			○					道路？	市報48集
冨地原梅木遺跡	大字冨地原他	道路状遺構SF01	50	～8					○		6C・13C中	墓道を中世に再利用	市報25集

(八女市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
明州遺跡	大字忠見字明州			1								石敷きの通路	市報57集
黒土・新替遺跡1地点	大字黒土字新替23他	道路遺構SR01(SR02も一連)	22				○				平安	風流松遺跡2地点に続く	市報53集
		SR02									平安		
		SR03									平安		
		SR04	3～								平安		
		SR05									平安		
黒土・新替遺跡4地点	大字黒土字新替23他	道路遺構		～7							平安末		市報53集
黒土・新替遺跡5地点	大字黒土字新替23他	道路遺構										4地点の道路遺構と関連	市報53集
西小牟田遺跡2次	大字忠見字西小牟田	7号溝	34	1.5～3							8C	道路？	市報60集
野ノ内遺跡3次	大字黒土90-1他	道路状遺構									平安		県年報平成10年度
風流松遺跡2地点	大字忠見字風流松3他	残敷道SA01	9	～1				○?				黒土・新替遺跡1地点に続く	市報53集

(行橋市)

遺跡名	所在地	遺構名	長さ(M)	幅(M)	路面の状態	硬化	側溝	波板	掘込	盛土	時期	備考	文献
天生田大池遺跡	大字天生田字大池	溝状遺構SD11	10	0.3～1.35	小石				○			通路？	県報137集
		道路状遺構SF1	5	7.9前後	粘質・砂質土					○		大宰府～豊前国府を繋ぐ官道	
天生田矢萩遺跡	大字天生田111他	官道跡？	27				○				奈良	大宰府～豊前国府を繋ぐ官道	県年報平成9年度
		連続楕円形ピット(波板状凹凸面)						○			平安～鎌倉		
大谷草堀遺跡	大字大谷1264他	道路状遺構		7前後							奈良	大宰府～豊前国府を繋ぐ官道	県年報平成9年度

・長さおよび幅は道路の値である。また、【　】内は推定、〈　〉内は溝と溝の芯心間の値である。

※なお、この表は福岡県内で検出された道路状遺構を報告書・論文などから収集したものである。原典に基づいて忠実に表記したつもりだが、作成者の読み間違いなどにより、誤った表記をしている場合がある。各遺跡の報告書などを詳しくは参照してください。

(参考文献)
近江俊秀1997～1999「道路跡一覧」『古代交通研究』第7～9号
大庭康時2001「福岡市内検出の古代・中世道路遺構について」『博多研究会誌』第9号
久住猛雄1999「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号
狭川真一1993「大宰府成立期の遺構と遺物」『古文化談叢』第30集
　　1995「大宰府条坊研究の現状と課題」『大宰府陶磁研究』
山村信榮1993「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68号
日野尚志1999「最近発掘で検出された古代の道路状遺構について」『古代交通研究』第9号
久留米市教育委員会1998「第12表出土久留米市検出の道路遺構一覧表」「上津・藤光遺跡群Ⅱ」久留米市文化財調査報告書第145集
春日市編さん委員会編1995『春日市上巻』
久留米市編さん委員会編1994『久留米市第12巻資料編(考古)』
太宰府市史編集委員会編1992『太宰府市史考古資料編』
筑紫野市史編さん委員会編2001『筑紫野市史資料編（上）考古資料』
豊前市史編集委員会編1993『豊前市史考古資料編』

写真１　SF002作業風景(南から)

写真２　調査区全景（上空から）

写真３　調査区全景（北から　正面は大宰府方向）

写真 4　SC001土層

写真 5　SC001（北から）

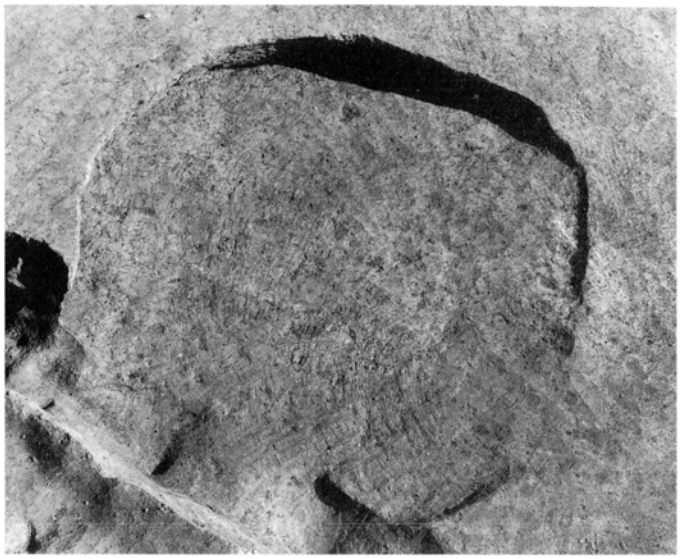


写真 6　SU010（西から）

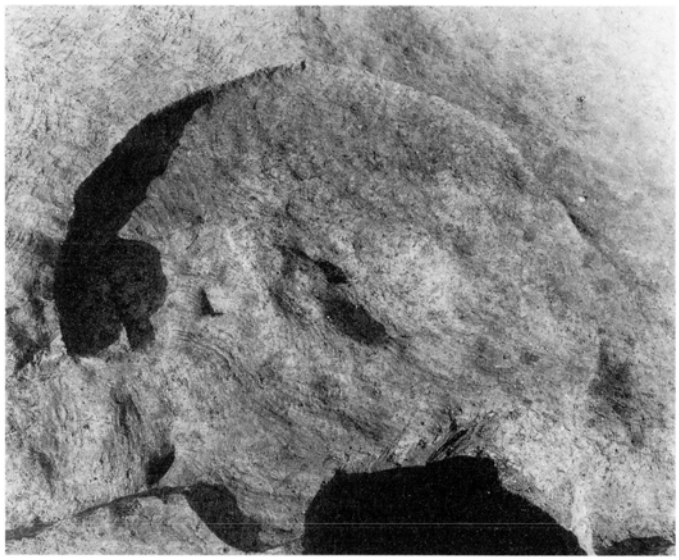


写真 7　SU011（南から）

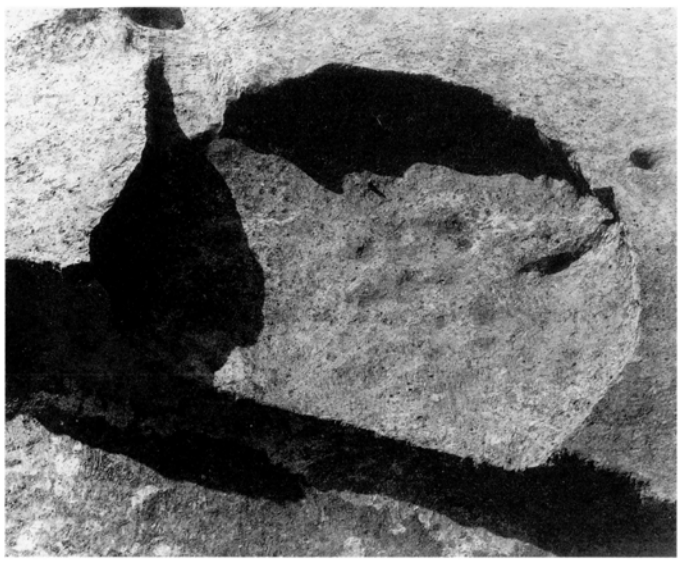


写真 8　SU012（東から）

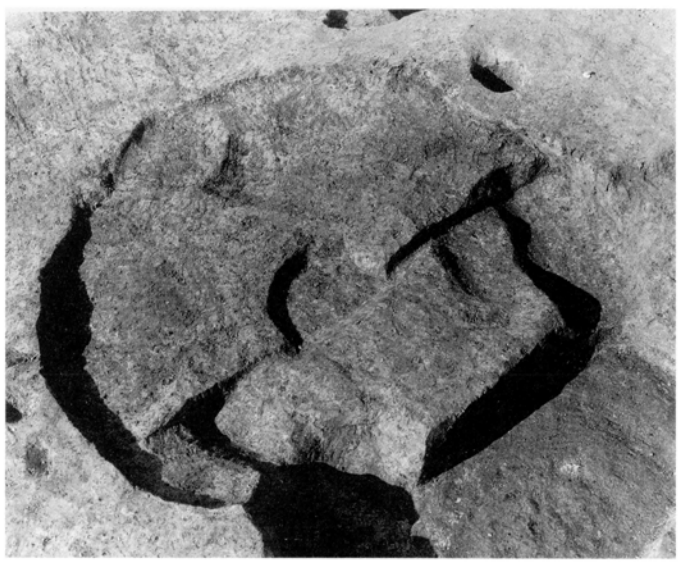


写真 9　SU013（東から）

写真10　SK014（東から）

写真11　SD005・006（南から）

写真12　SD005・006土層 1

写真13　SD006土層 2

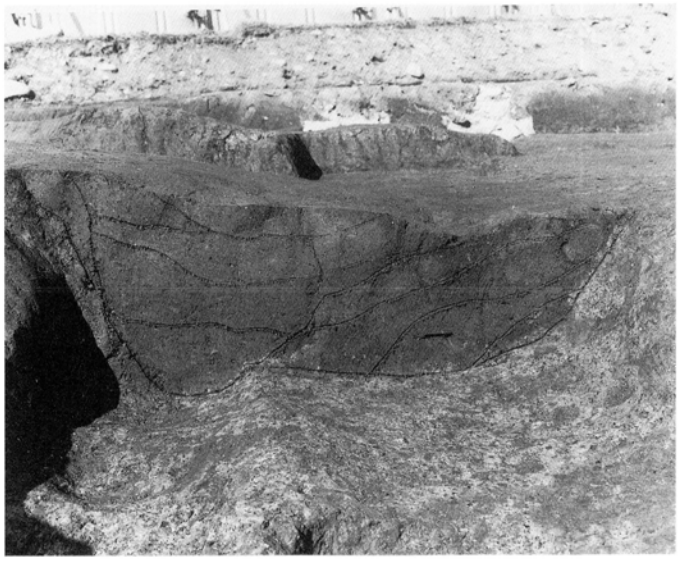


写真14　SD006土層 3

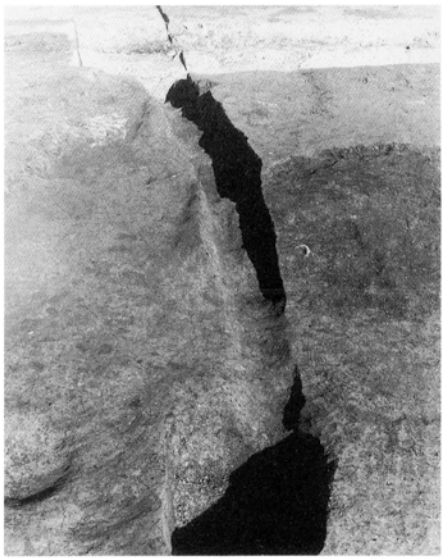


写真15　SD009（西から）

写真16　SF002南壁土層

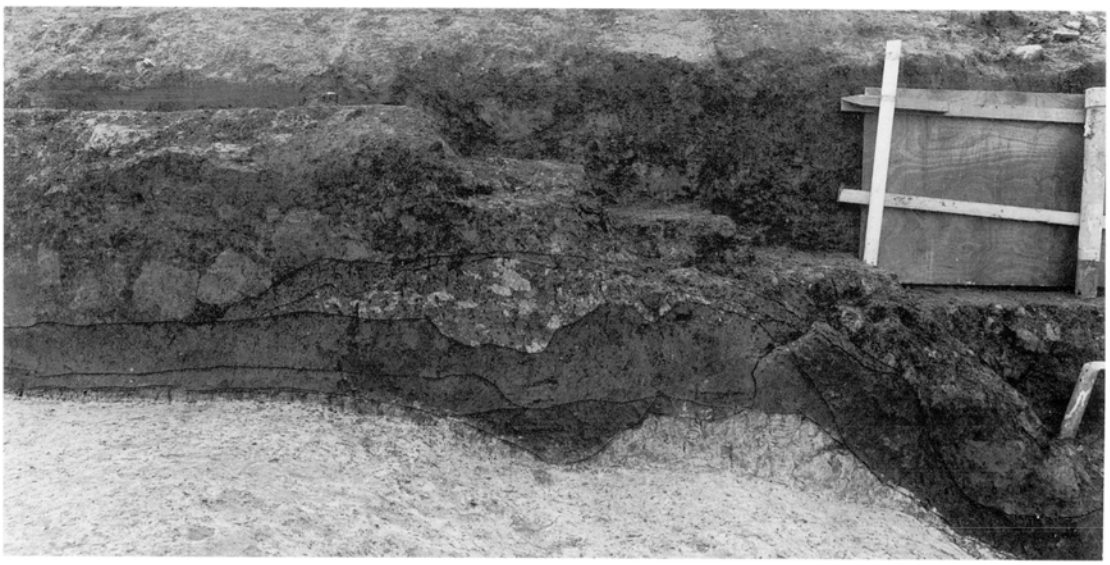


写真17　SF002土層内轍痕跡

写真18　SF002北壁土層

写真19　SF002波板状遺構掘削前全景（上空から）

写真20　SF002波板状遺構掘削後全景（上空から）

写真21　波板状遺構Ⅰ掘削前（東から）

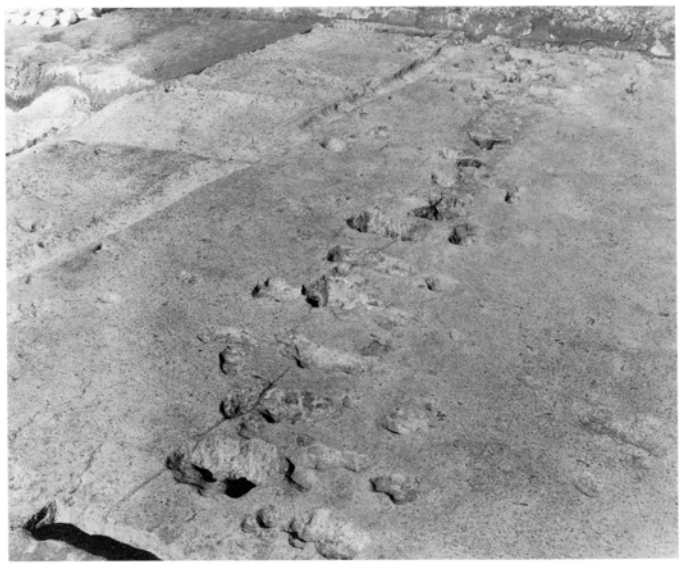


写真22　波板状遺構Ⅰ掘削後（東から）

写真23　波板状遺構Ⅱ～Ⅶ掘削前（南から）

写真24　波板状遺構Ⅱ～Ⅵ掘削後（南から）

写真25　波板状遺構Ⅱ・Ⅲ掘削後（北から）

写真26　波板状遺構Ⅲ～Ⅶ掘削後（北から）

写真27　波板状遺構Ⅳ掘削後（北から）

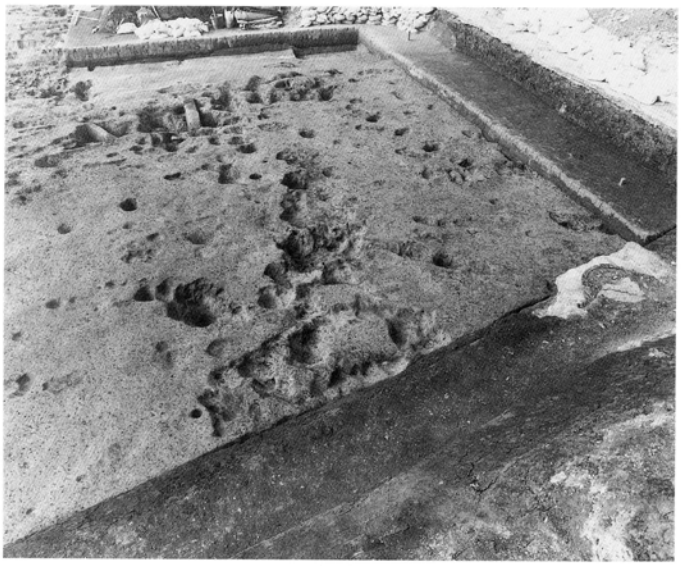


写真28　波板状遺構Ⅶ掘削後（南から）

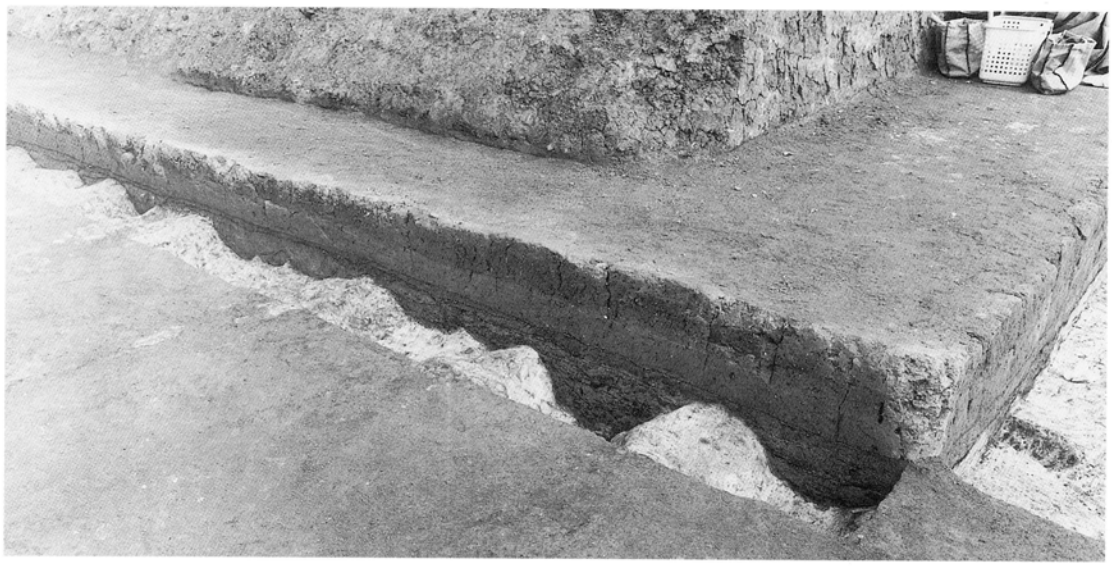


写真29　波板状遺構Ⅲ南北土層中央部分

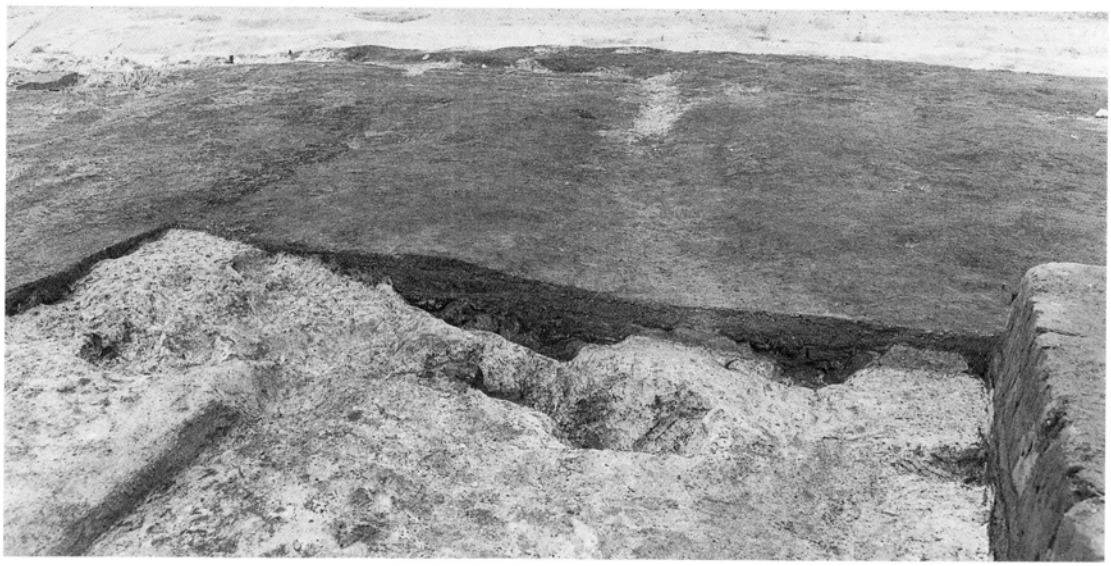


写真30　波板状遺構Ⅲ南北土層南端部分

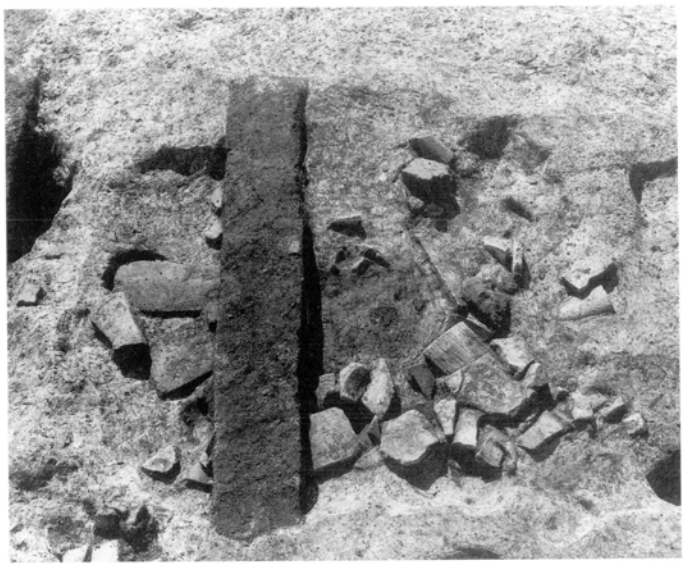


写真31　SX015検出状況（東から）

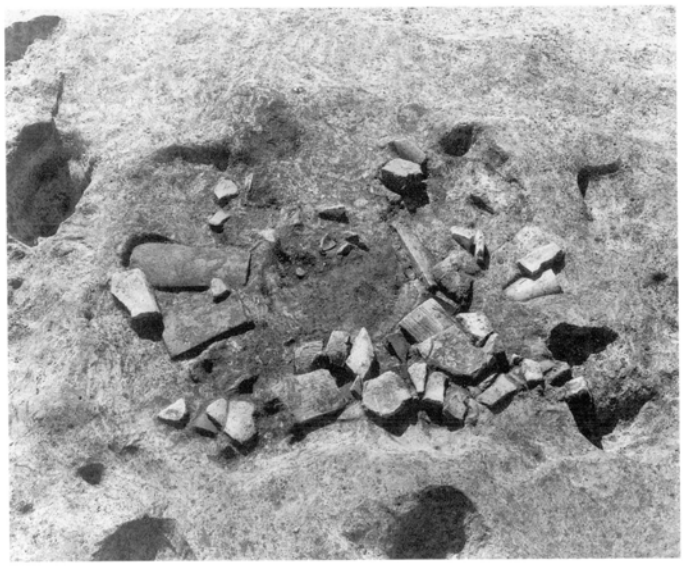


写真32　SX015上面（東から）

写真33　SX015中央筒部分掘削後（北から）

写真34　SX015中央筒部分（北から）

写真35　SX015筒部分木質除去後（東から）

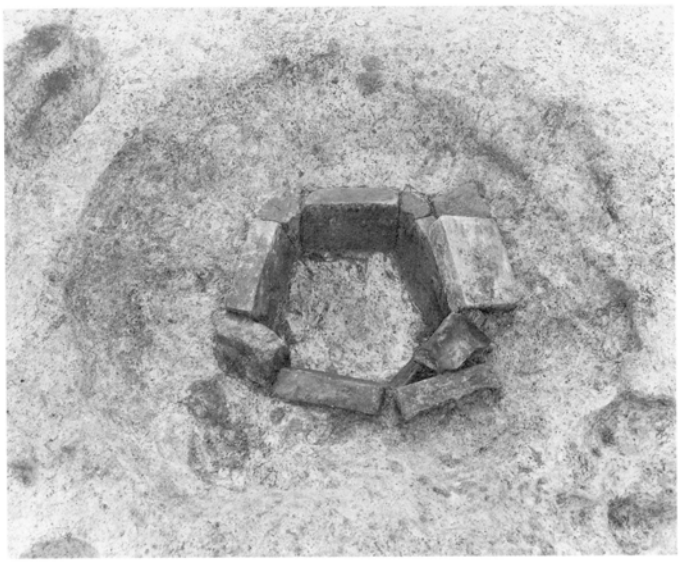


写真36　SX015瓦積み除去後（東から）

第三章　Ⅱ・Ⅲ区の調査

1．調査の概要

Ⅱ・Ⅲ区は第18次発掘調査対象地内の西側に位置し、調査面積は2750㎡である。当初、Ⅱ区1750㎡を調査した。その結果、遺構密度が予想以上に高く、Ⅱ区北側にも遺跡が続いていることが確実になった。そのため、この部分1000㎡を拡張しⅢ区とした。Ⅱ・Ⅲ区は連続しているので、遺構番号を連続してつけ、報告もまとめて行うことにする。

調査ではまず重機を使用して表土を除去した。層序の詳細については次項で述べるが、遺構検出面までの深さは東側で約40cm、西側で約180cmであり、調査区のほぼ中央に北西方向に軸をとる比高差80cmほどの段差が存在する。調査区東側の段差上には建物の基礎が格子状にはいる。

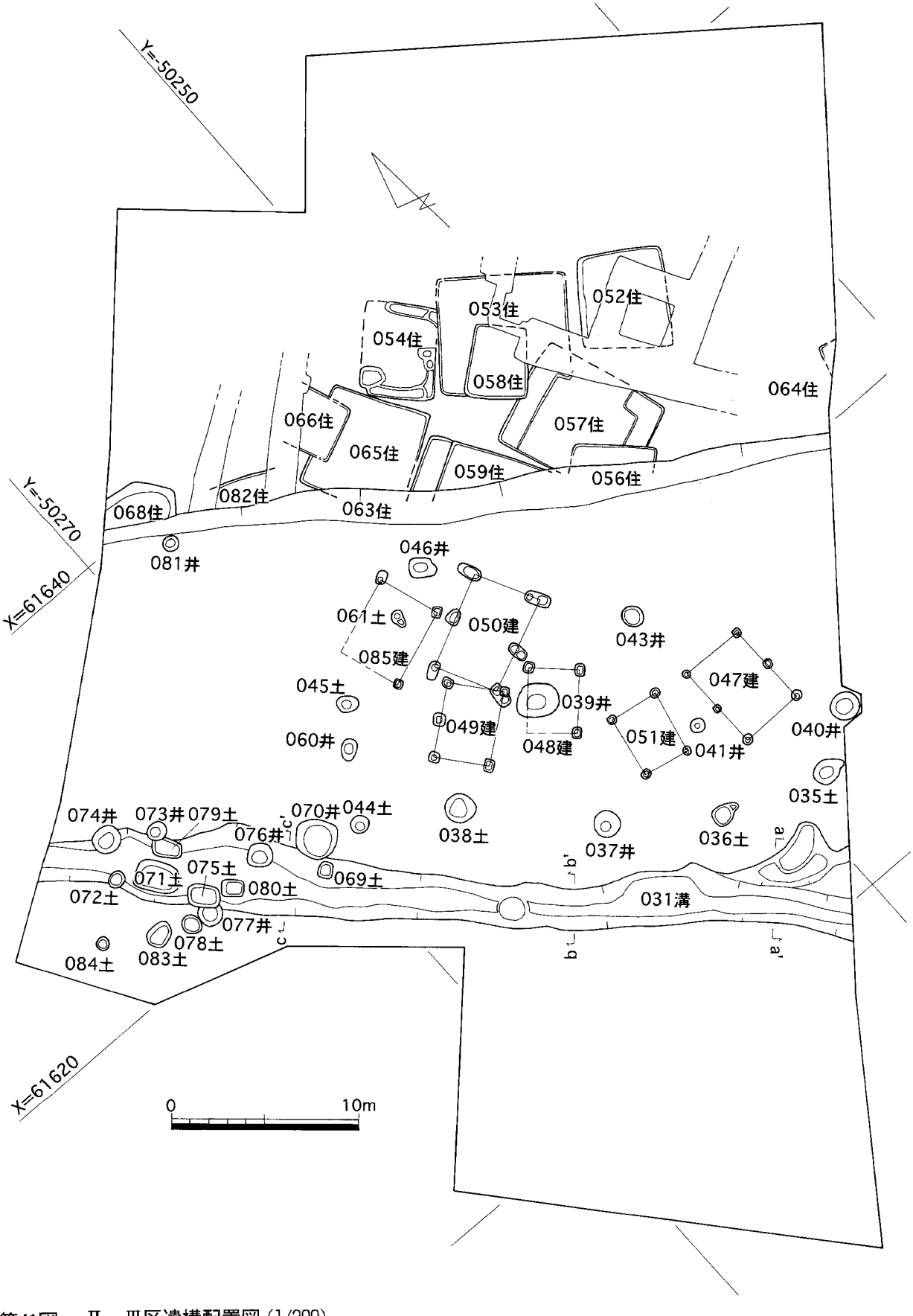
Ⅱ・Ⅲ区の調査では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡を検出した（第41図）。東側の段差上では竪穴住居跡13軒を検出した。地形の削平および撹乱による破壊を受け、遺存状況はよくない。西側の段差下では掘立柱建物６棟、井戸13基、土壙15基、溝１条を検出した。古墳時代中期のＳＣ０５８号竪穴住居跡では、滑石製臼玉、その未製品、滑石原石が出土し、滑石製品の製作工房であることを確認した。また、調査区西寄りのＳＤ０３１号溝周辺では、遺構検出面上に古墳時代から古代にかけての遺物包含層が堆積していた。包含層については調査期間の制約から重機で剝ぎ、その後遺物をその中から採集した。土師器・須恵器とともに平瓦・塼が出土している。

Ⅱ・Ⅲ区の調査ではコンテナ約200箱相当の遺物が出土した。主な出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器であり、ほかに陶質土器、古代の平瓦・塼、木製品、旧石器が少量出土している。木製品は整理作業中に紛失してしまい、現場作業中に実測していた数点を除いて報告していない。

2．基本層序

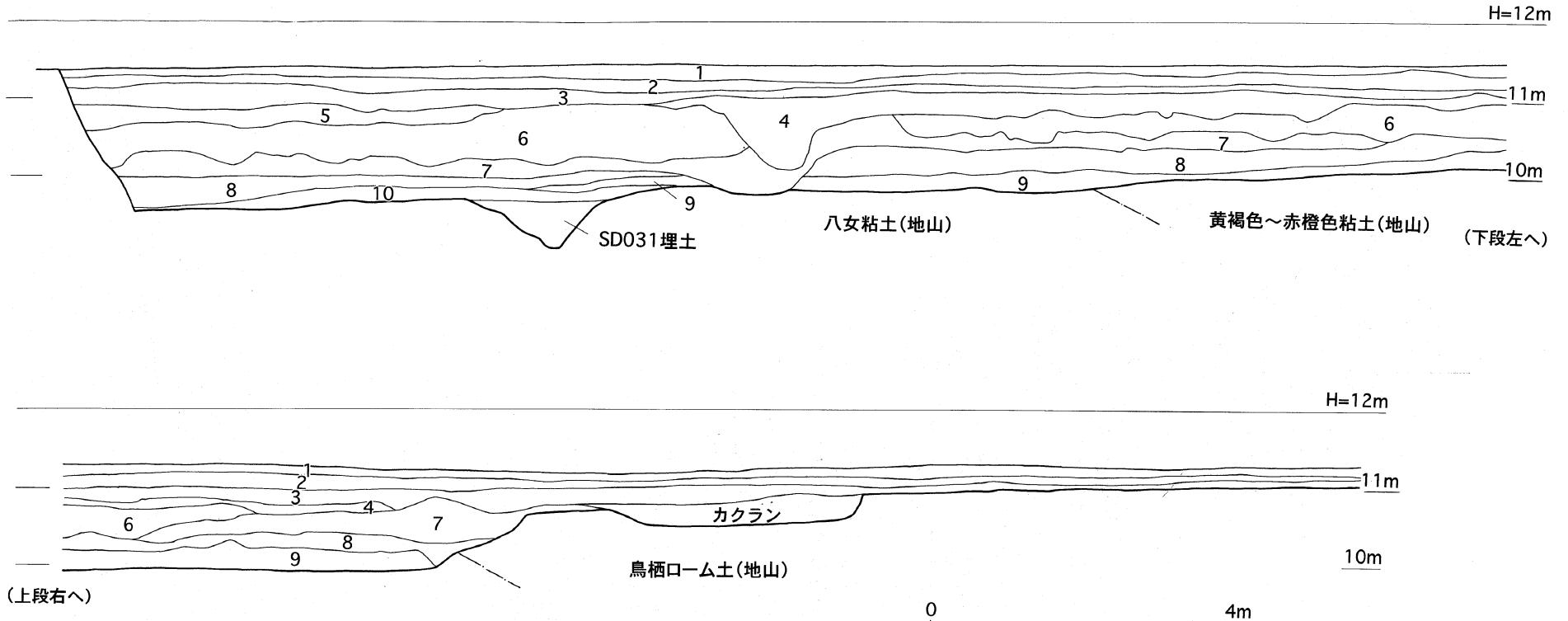
第42図はⅢ区北壁の土層図である。調査区の現況は九州管区警察学校の敷地で、標高11～12ｍの平坦な地形である。現地表下0.9～1.4ｍまで（１～７層）は盛土である。１～５層は現在の警察学校建設時の、6・7層は近代以降の造成部分である。８・９層は水田耕作土で、20～50cmの厚さで堆積する。中世の李朝白磁が１点出土したが、ほかに時期を示す遺物がなく、その詳細な時期は明らかでない。その下、調査区西側に10層の暗黒褐色粘土がうすく堆積する。これは古墳時代から古代にかけての遺物包含層である。複数の井戸の埋土上面にも包含層が沈み込んでいるのを確認したので、この包含層の堆積は地形の削平を受ける前の１次的なものと考えるのが妥当であろう。

その下が遺構検出面であり、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構が検出された。中央に比高差約80cmの段差が存在する。段差上での遺構の遺存状態は悪く、地形はかなりの削平を受けている。本来は東側の丘陵部から西側の丘陵裾に向かってなだらかに傾斜する地形であったものを、大規模な土木工事によって削平している。台地の削平を伴う土地造成は、その上面に水田耕作土が乗ることから、水田を造るためのものと考えられる。地山は、段差の東側の高い部分が鳥栖ローム、西側の段差下に鳥栖ロームから八女粘土への漸移層である黄褐色～赤橙色の粘土を部分的に挟み、その西側は灰白色で水を透過させにくい八女粘土である。



第41図　Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図（1/300）

第42図　北壁土層図（1/80）



1. 暗褐色土
2. 黒色焼土
3. 赤褐色土
4. 暗褐色土で現代建物の基礎を含む
5. 黒色粘土。レキを多く含む
6. 赤褐色土。粘性強く、黒褐色ブロックが混じる
7. 黒褐色土。粘性が強い
8. 黒みがかった暗灰色粘土
9. 灰オリーブ色粘土
10. 暗黒褐色粘土（古墳時代～古代の包含層）

3．遺構と遺物

1）竪穴住居跡

調査区東側の段差上において、竪穴住居跡が集中・重複して13軒検出された。床面までの深さが浅いものや、貼床のみ残存する状態のものが多く、地形はかなりの削平を受けている。また、建物基礎による撹乱が縦横に走り、遺存状態をさらに悪くしている。住居群の西側は段差部分で大きく削平され完全に消失するが、住居分布域が続いていたことは確実であろう。住居群の東側ではピットが少数検出されたのみで遺構密度は非常に低い。こちら側に台地の尾根が通っているので、ここも旧地形が削平されている可能性が高く、住居群が続いていたと予想される。

ＳＣ０５２号竪穴住居跡（第43図）

調査区東側の段差上に集中する住居跡群のうち南側に位置する。撹乱により中央部が大きくL字形に破壊されている。北壁は全長4.4ｍ、西壁は南端が削られており残存長4.1ｍを測る。南壁は撹乱により完全に消失するが、正方形あるいはやや南北に長い方形プランを呈すると考えられる。床面までの深さは20～30cmで、西壁沿いに床面より10cm程度高い段が20cm幅で設けられている。４本柱の住居で、検出できた主柱穴Ｐ１～Ｐ３は深さ40～55cmを測る。北西隅で完形の椀、北東隅で壷が出土した。出土遺物より古墳時代中期後半～後期初頭に位置付けられよう。

出土遺物（第45図）

コンテナ３箱の遺物が出土した。土師器の椀・甕・壷片が多く、須恵器は2点のみ出土している。土器片はほとんど接合せず、個体の半分以上が遺存するのは完形品の椀１点のみである。

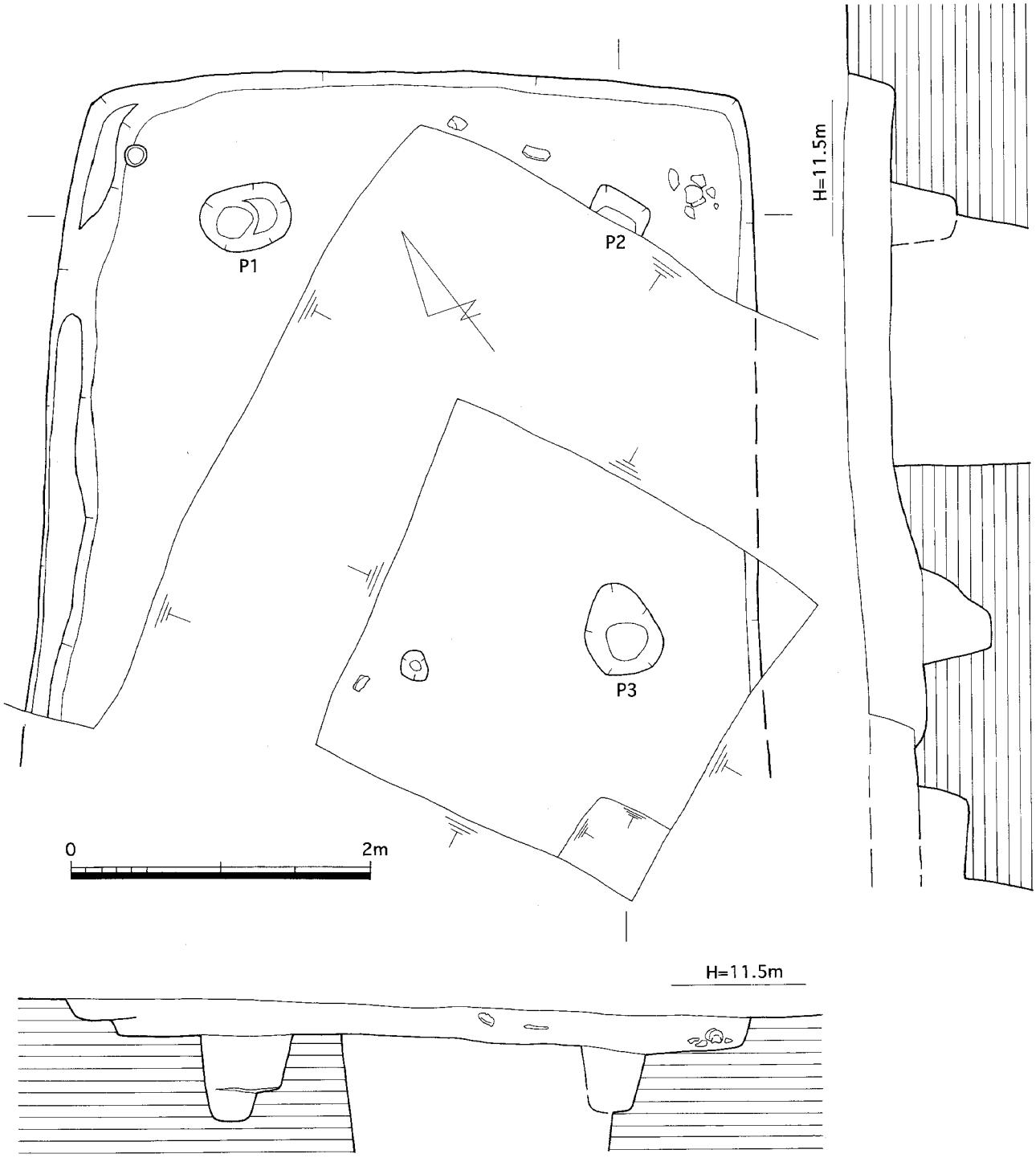
1は壷である。口縁部は短く直線的に外傾し、端部は丸くおさめる。復元口径14.4cm。磨滅が著しく調整は不明。**2**・**3**は椀である。２は完形品で、口径13.2cm、器高4.9cmを測る。外面はヘラ削り、内面は平滑にナデ調整を施す。３は復元口径13.8cm、器高4.7cmを測る。**4**は甑の口縁部である。復元口径24.4cm。口縁部は直立し、外面に粗い縦刷毛を施す。**5**は甑の把手である。**6**は須恵器の甕の胴部片である。外面には平行叩き、内面には同心円文の当て具痕がうすく残る。

ＳＣ０５３号竪穴住居跡（第44図）

ＳＣ０５２の北西に向きを揃えて隣接する。ＳＣ０５４を切り、ＳＣ０５８に切られる。また、南隅でＳＣ０５７と切り合うが、先後関係は確認できなかった。正方形プランを呈し、撹乱により隅が削平されているが、復元長で北西壁4.7ｍ、北東壁5.2ｍを測る。床面までの深さは10cmに満たず、とくに南隅は削平が床面下まで達しており壁溝も検出できなかった。そのため、ＳＣ０５７との先後関係は不明である。主柱穴はＰ１、Ｐ２を検出した。深さは40cm程度である。南西側の２本は深い撹乱により完全に消失しているが、４本柱の住居であろう。住居の周囲には北東壁中央を除いて深さ5～10cmの壁溝がめぐる。住居北東壁側、主柱穴のすぐ外に、床面を区切るように高さ３～５cmの高まりが帯状に残っている。壁沿いに高坏が６点程度出土し、出土遺物のうち高坏の割合が非常に高い点が注目される。出土遺物より古墳時代前期前半に位置付けられる。

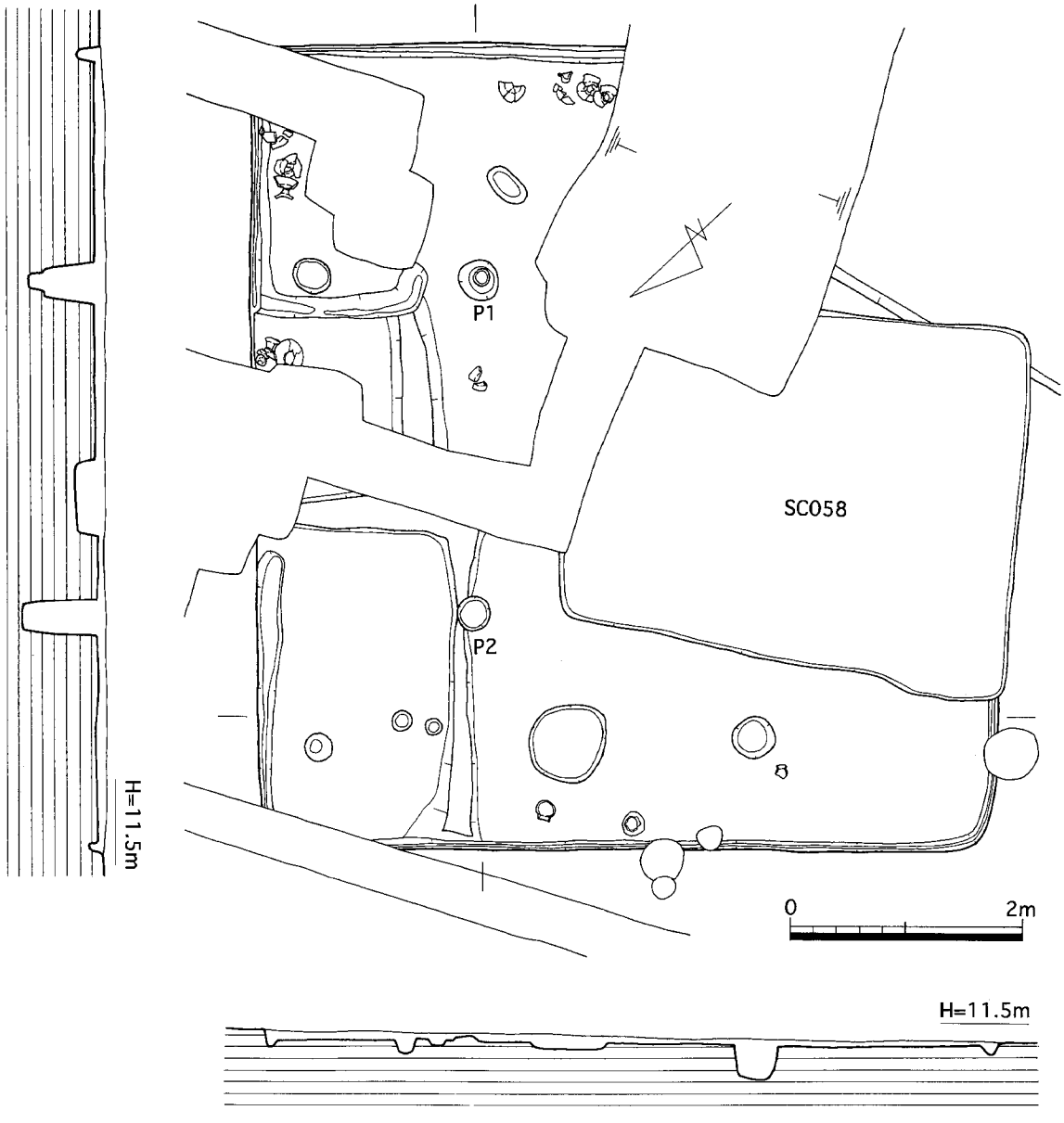
出土遺物（第45・46図）

コンテナ５箱の遺物が出土した。土師器がほとんどで須恵器はなく、弥生土器が少量混入する。高坏が多く出土しているのが特徴である。**7**は甕の口縁部である。復元口径14.0cm。口縁部は直線的に外傾する。体部外面に刷毛目、内面に削りを施す。**8**は甕である。復元口径13.0cm、器高15.3cmを測る。頸部のしまりは緩く、口縁部は直線的に外傾する。外面は体部上半を粗い縦刷毛、下半を細



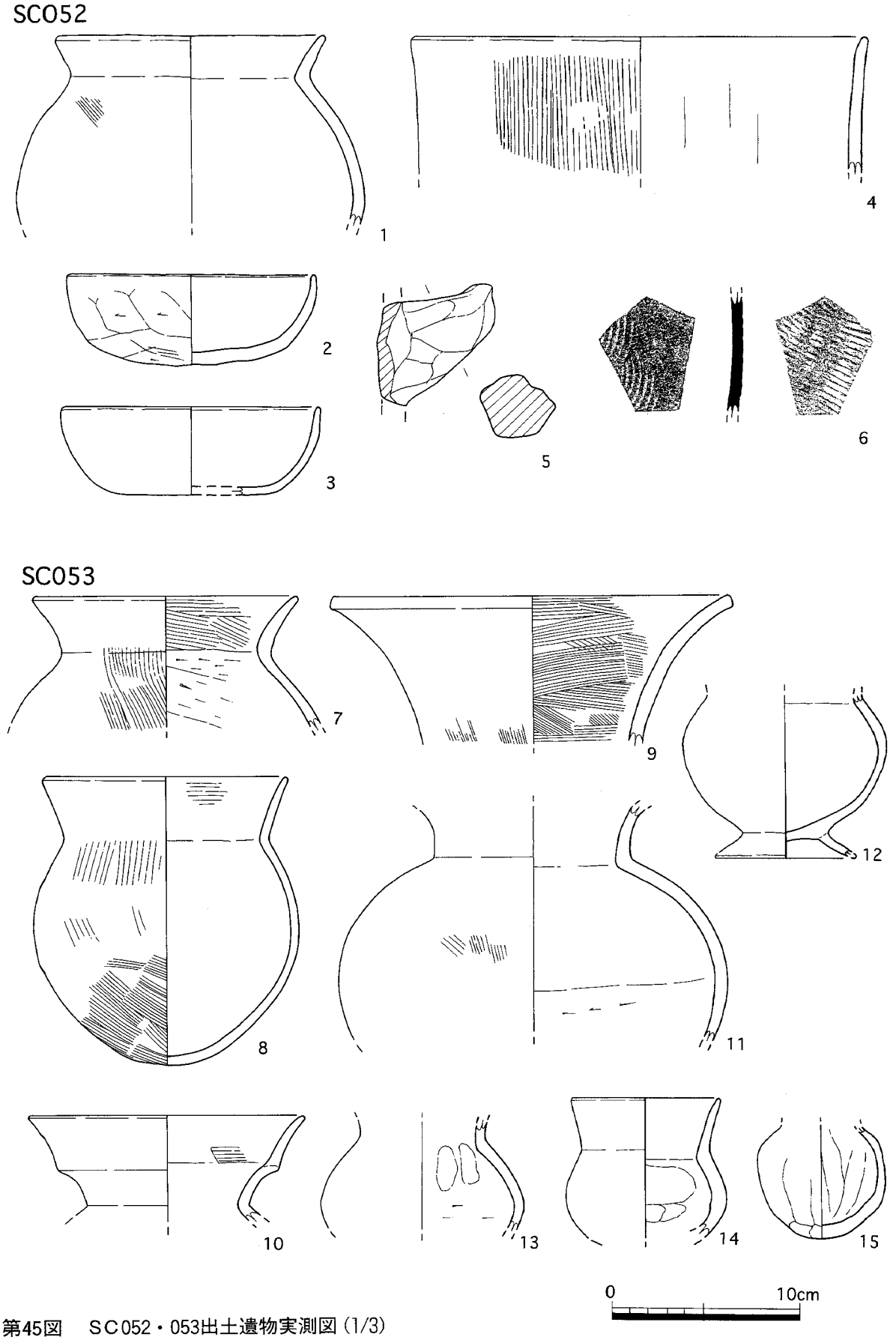
第43図　SC052実測図（1/40）

かな右下がりの刷毛目で調整する。内面は磨滅するが削りの痕跡はない。**9**は広口壷の口縁部である。復元口径21.4cmを測り、外湾して開く。内面に刷毛目が明瞭に残り、灰白色を呈する。貼床内から出土した。**10**は二重口縁壷の口縁部である。復元口径14.6cmを測り、屈曲部は稜が明確である。**11**は壷である。頸部がしまり胴部は張る。胴部最大径20.6m、頸部径10.4cmを測る。10の二重口縁壷と同一個体か。**12**は脚付壷である。球形の体部を持ち、ハの字形の短い脚がつく。復元底径7.6cmを測る。**13**は小型の壷である。内面は下半を削り、上半は指でなでる。**14・15**は小型丸底壷である。**14**

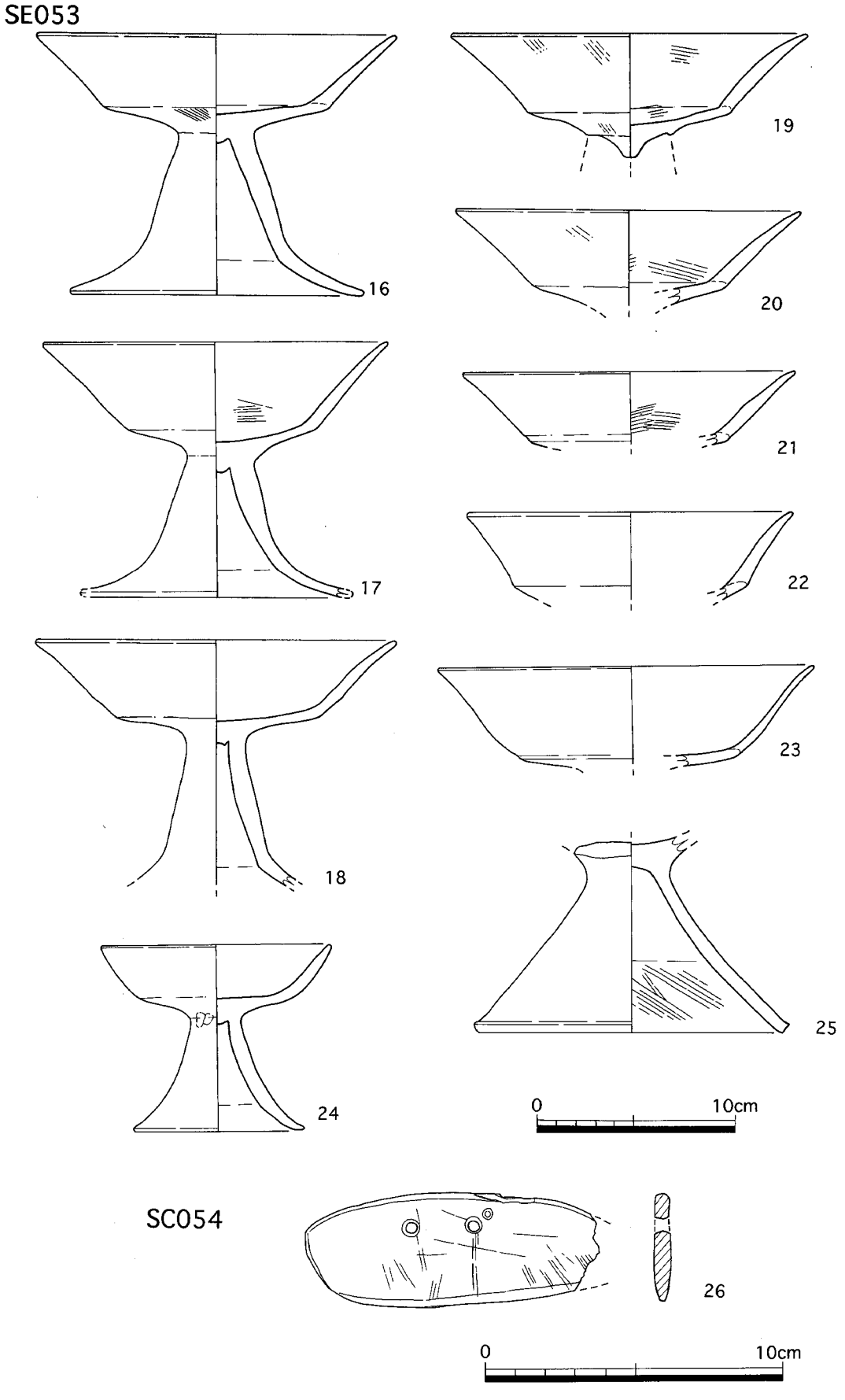


第44図　SC053実測図 (1/60)

は口径と胴部径がほぼ等しく、口縁部が外傾気味に立ち上がる。磨滅が著しいが内面は指で整形する。壁溝内から出土した。**15**は球形に近い胴部で頸部はしまる。調整は雑である。**16～25**は高坏である。坏部はやや外反気味に開くものと直線的に開くものとがある。脚柱は短く中ほどで膨らみ、裾部で緩やかに折れ外に開く。坏と脚の接合部は坏底の粘土が突出している点で共通している。坏底に粘土を充填して脚の筒に押し込む接合法であろうか。**24**は小型の高坏である。坏部の屈曲は不明瞭で脚部はハの字に開く。口径11.6cm、器高8.6cmを測る。**25**は直線的に大きく開く脚部で、内面下半は刷毛目で調整する。



第45図　SC052・053出土遺物実測図（1/3）



第46図　SC053・054出土遺物実測図（1/3、26は1/2）

ＳＣ０５４号竪穴住居跡（第47図）

ＳＣ０５３の北東側に位置する住居で、貼床のみ残存していた。ＳＣ０５３に切られる。貼床は壁沿いにコの字形に検出され、その形状から方形住居である。西壁4.0ｍ、南壁5.0ｍに復元できる。貼床は地山の鳥栖ロームを埋め戻したもので、赤褐色で汚れている。深さは20～45cmを測る。南壁沿いの中央で柱穴を検出した。東北壁の貼床から石包丁が出土した。

出土遺物（第46図）

貼床のみの検出で遺存状況が悪く、土師器が20点程度と石包丁１点が出土したのみである。土師器には高坏、壷口縁部の小片が含まれるが図化できない。**26**は石包丁である。先端の一方が欠損し、残存長9.8cm、幅3.8cmを測る。紐を通す穴を２つ開けるが、右の穴の外側に穿孔しかけて途中で止めた穴がある。位置取りに問題があったためか。

ＳＣ０５６号竪穴住居跡（第47図）

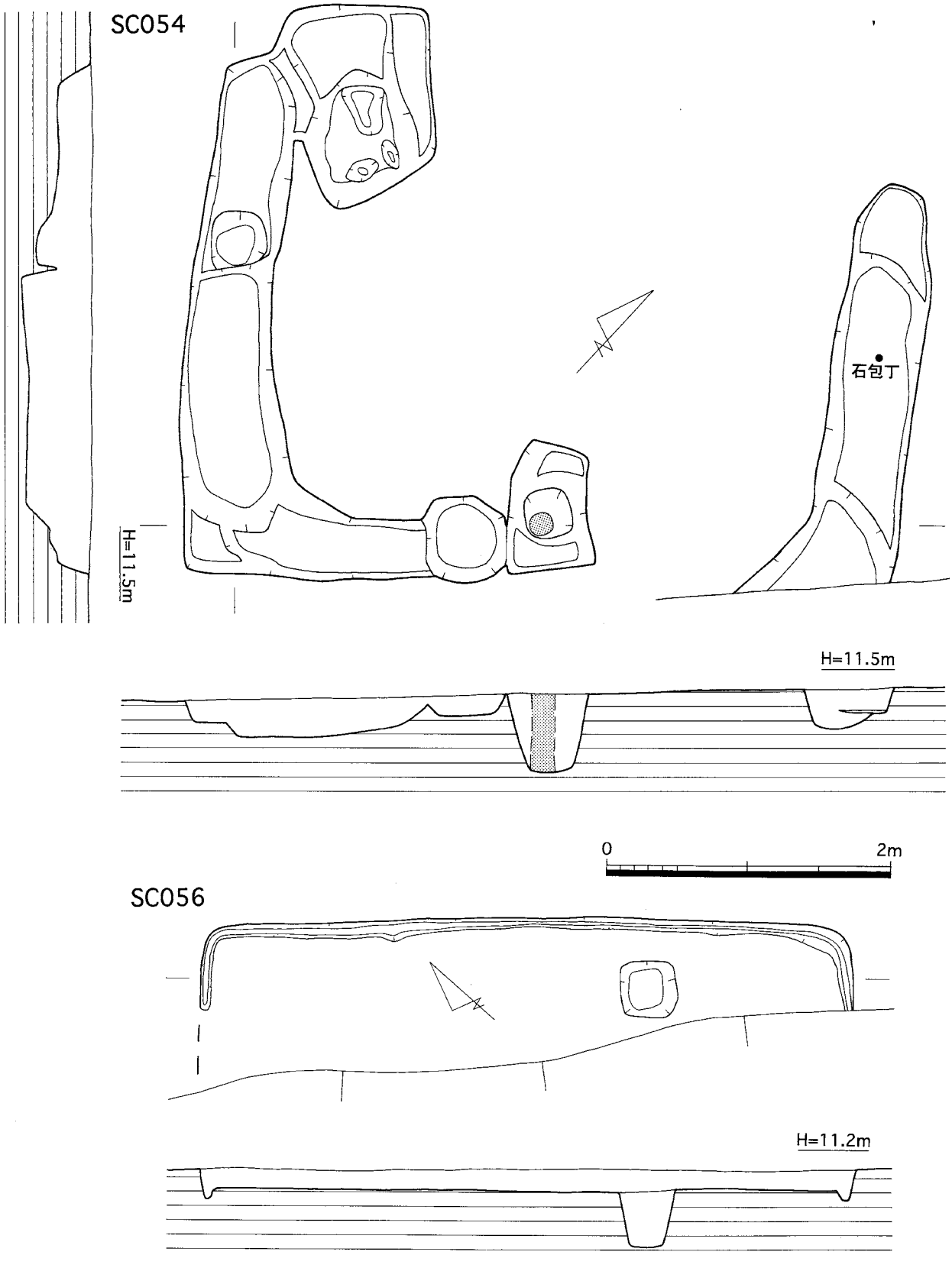
竪穴住居群の南端に位置する。大半が段差にかかって消失し、東北壁沿いがわずかに残る。東北壁の長さは4.5ｍ、床面までの深さは15cm程度を測り、深さ10cm弱の壁溝をもつ。ＳＣ０５７を切る。土器片15点ほどが出土したにとどまり、時期は特定できない。図化できる遺物はない。

ＳＣ０５７号竪穴住居跡（第48図）

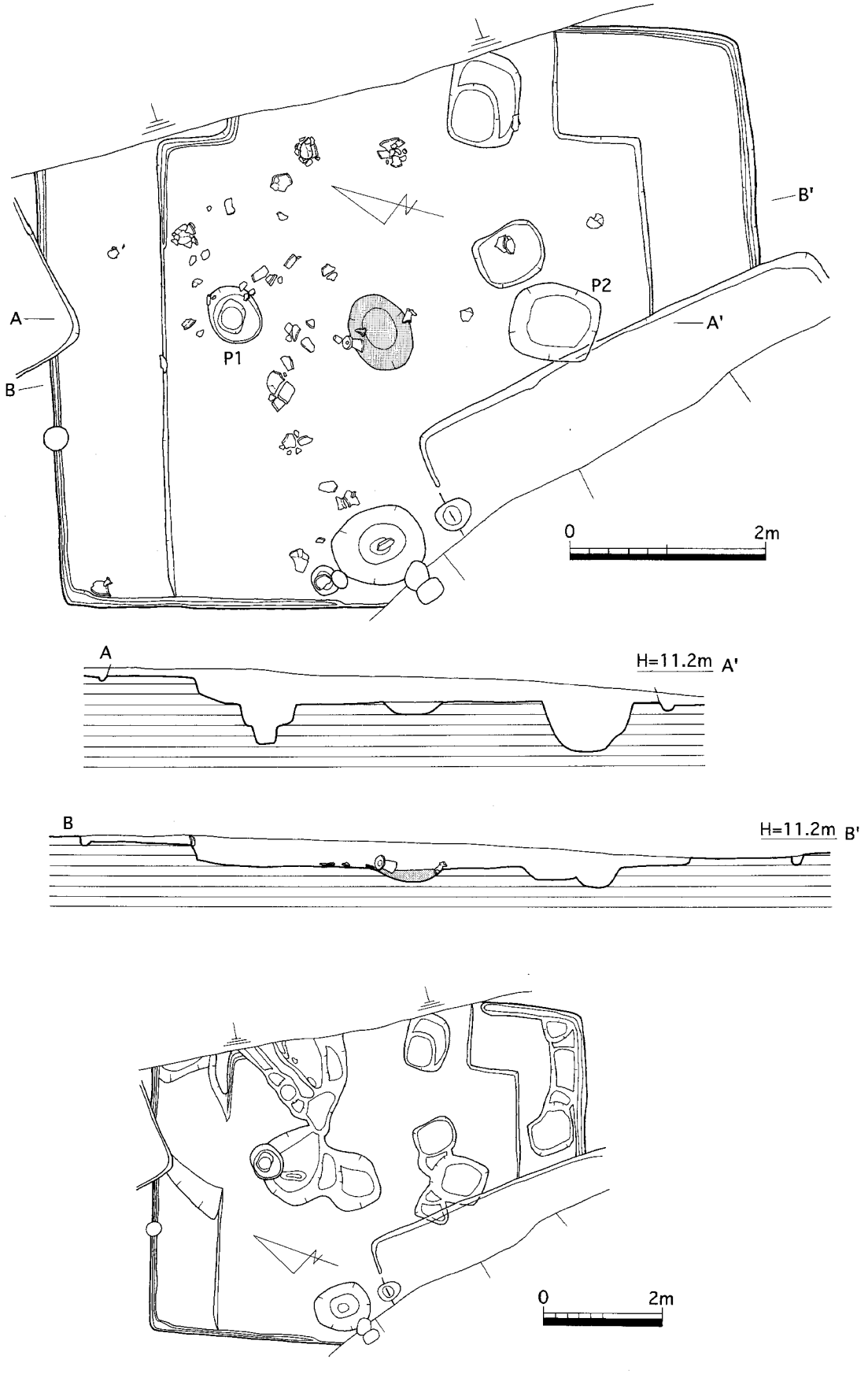
ＳＣ０５３の南側で検出された。ＳＣ０５６、ＳＣ０５８に切られる。ＳＣ０５３とも切り合うが先後関係は不明。また、北東隅と南西隅は撹乱・削平により消失する。方形プランで、長軸4.9ｍ、短軸4.0ｍ、床面までの深さ20cmを測る。南北の両壁沿いにＬ字形のベッド状遺構が設けられており、床面からの高さは約10cmである。全体に浅く、とくに南側ではベッド状遺構が検出段階ですでに削られていた。周囲の壁沿いには浅い壁溝をめぐらせる。主柱穴はＰ１、Ｐ２の２本であろう。住居中央で浅い炉跡を検出した。住居北半を中心として、床面直上で多くの土器が出土した。出土遺物から弥生時代終末に位置付けられる。

出土遺物（第49・50図）

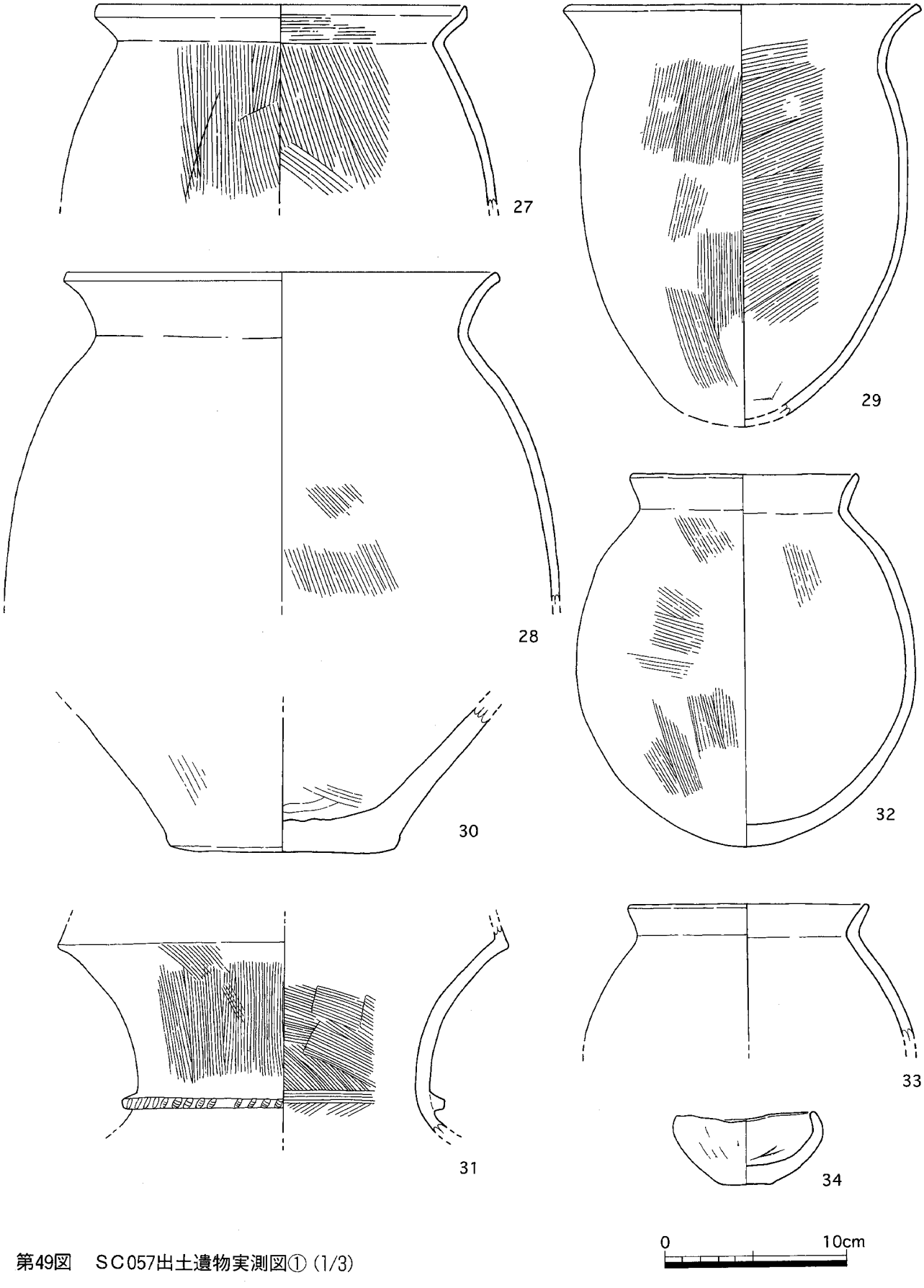
コンテナ７箱分の弥生土器、古式土師器が出土した。**27～29**は甕である。27はく字状口縁で端部が内湾する。復元口径20.6cmを測る。28は大型の甕で、口径24.0cmを測る。磨滅が著しいが内面は刷毛目を施す。口縁は外反し端部は面をもつ。器壁が非常に薄く作られている。29は小型甕でほぼ完存する。口径19.6cm、器高23.4cmを測る。薄手のつくりで外面に細かな縦刷毛、内面に横刷毛を施す。内面に黒斑を有し、外面下半には煤がうすく付着する。**30**は複合口縁壷の底部である。底径12.8cmを測る。**31**は複合口縁壷の口縁部である。頸部に刻目突帯を１条巡らしている。口径24.8cmを測る。**32・33**は壷である。32はほぼ完存し、口径12.6cm、器高20.6cm、胴部最大径18.6cmを測る。体部は球形で、口縁部が短く直立する。内外面とも細かな刷毛目を施す。33は口径13.2cmを測り、口縁部は短く外に開く。磨滅が激しく調整は不明。**34**は手づくね土器である。口径7.7cm、器高4.1cmを測る。手づくねで成形した後、ヘラ状工具で表面をなめらかに仕上げる。**35～37**は器台である。35は完形品で受け部径13.9cm、器高20.3cm、底径15.4cmを測る。36は受け部径13.9cm、器高19.6cm、底径14.4cmを測る。外面は縦刷毛の後下半に叩きを施す。37は底径16.6cmを測る。内外面ともナデを施す。**38・39**は高坏の脚部である。長くまっすぐな筒状を呈する。38は胎土が精緻で器壁は一定して薄い。39は透かし孔があり、器壁は上にいくほど厚く内部にしぼり痕をもつ。



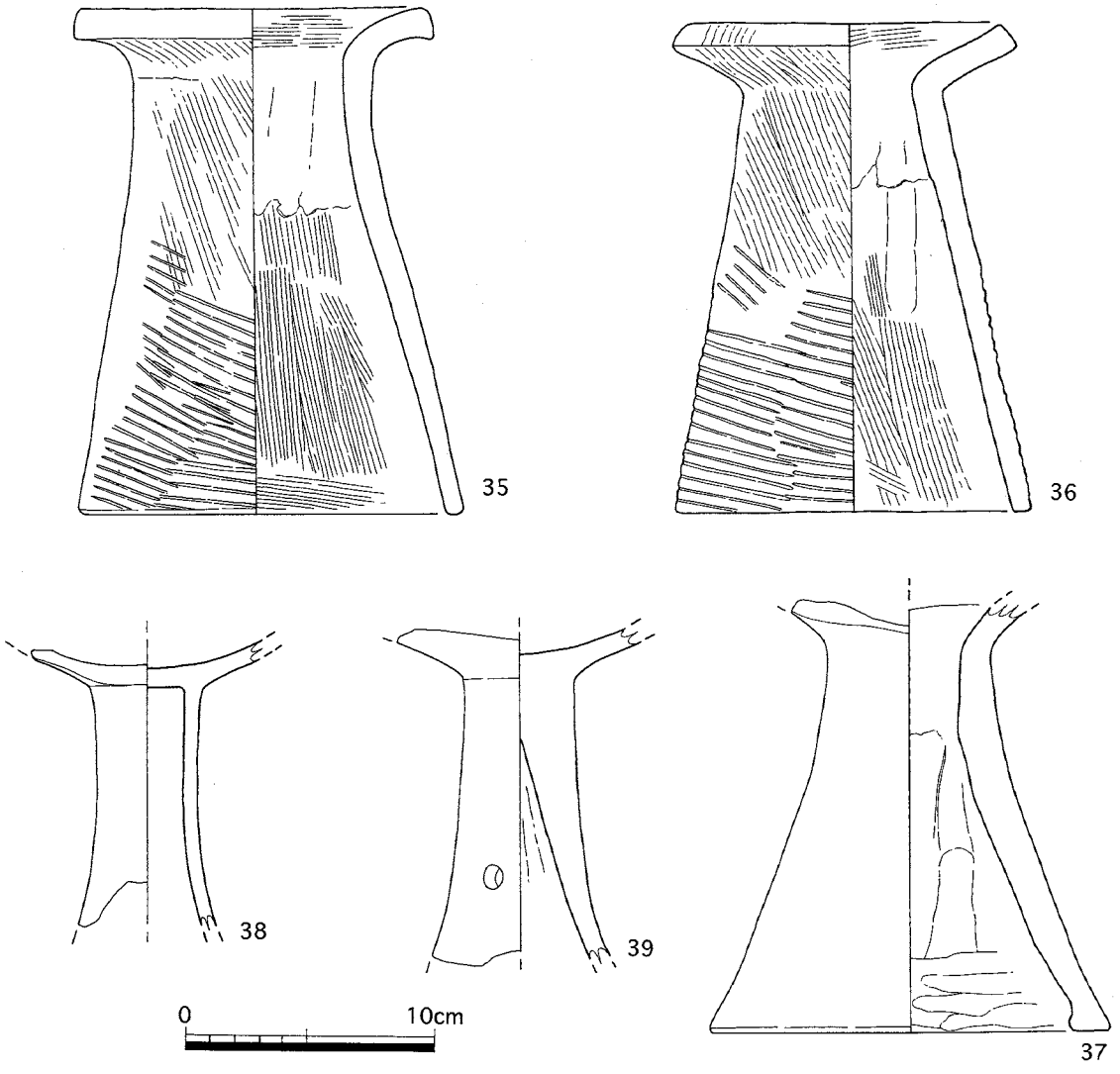
第47図　ＳＣ054・056実測図（1/40）



第48図　SC057実測図（1/60）、同貼床除去後実測図（1/100）



第49図　ＳＣ057出土遺物実測図①（1/3）

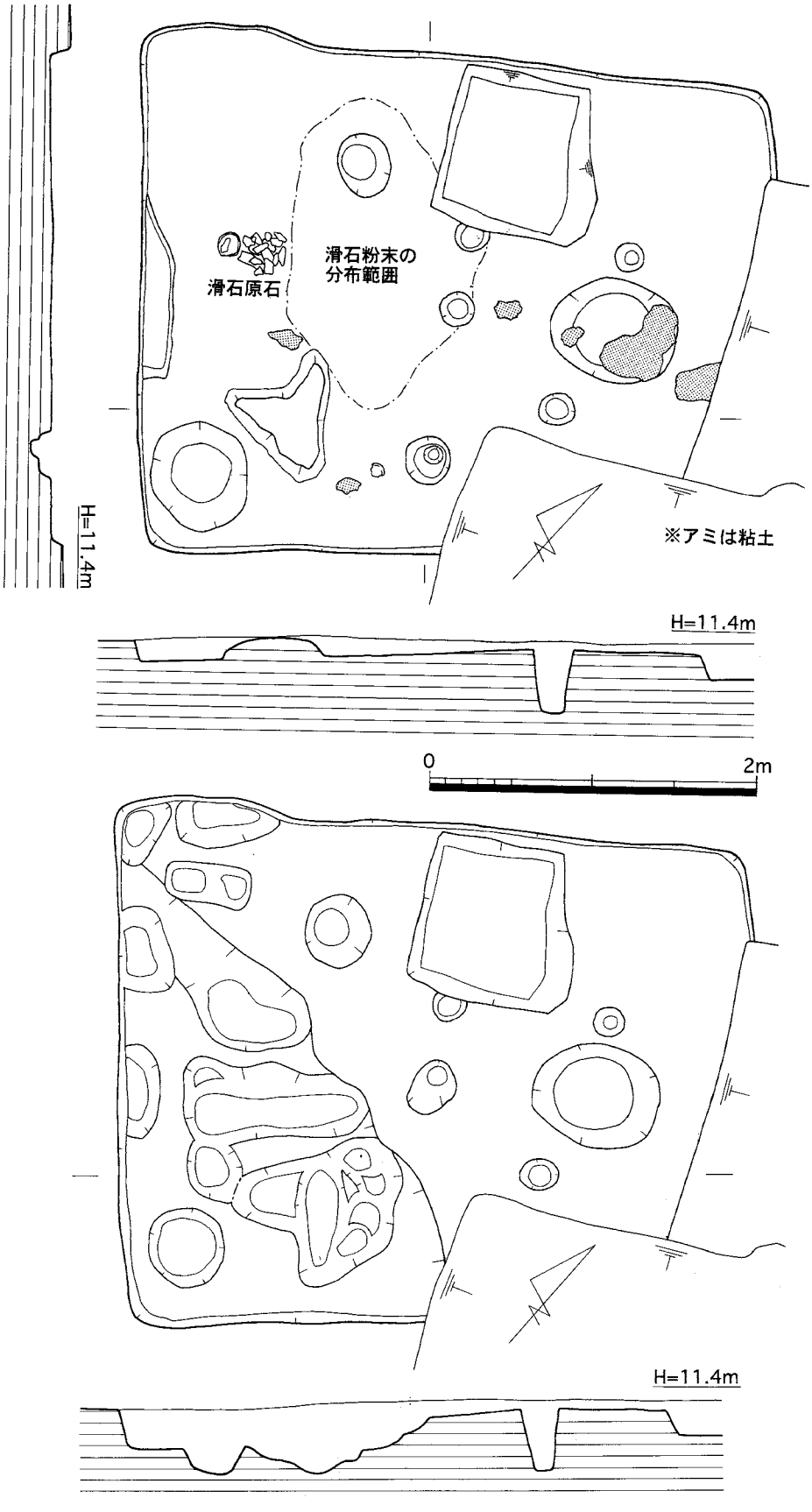


第50図　ＳＣ057出土遺物実測図②（1/3）

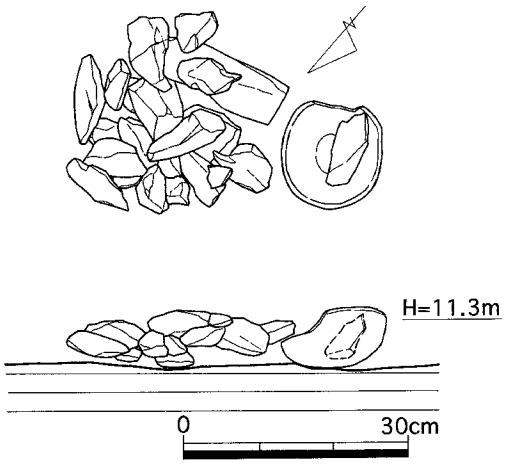
ＳＣ０５８号竪穴住居跡（第51図）

竪穴住居群の中央に位置し、ＳＣ０５３・ＳＣ０５７を切っている。長方形プランを呈し、東壁から東南隅にかけて撹乱により破壊され、北壁3.8m、西壁3.2m、床面までの深さ20cm弱を測る。柱穴をいくつか検出したが、主柱穴は不明である。住居の東寄りに焼土・黄色粘土が分布しており、その下の小土壙は炉跡であろうか。西壁の中央に一段高くしたステップを設けている。住居の西側半分には貼り床を施し、深いところで25cmに達する。出土遺物より古墳時代中期末に位置付けられる。

特筆すべきはこの遺構が滑石工房であったことである。埋土中から大量の滑石製臼玉およびその未製品、チップが出土した。住居床面の中央から西寄りにかけて滑石の粉末が分布しており、その西側には滑石の原石20個がまとめて置かれた状況で出土した（第52図、第２表）。そのうちの１つは椀に入れられていた。その南側には黄褐色土を台状に盛り固めた部分があり、作業台として使用したものと推定する。滑石や作業台の配置より、建物の中央からやや西寄りにかけての位置に腰を下ろして、滑石製品の製作をおこなったのであろう。面積が小さいこと、主たる生活関連器種である甕・壺の出土が少ない点から、住居としては使用せず、滑石工房としての用途に限って使用されたものと考える。



第51図　SC058実測図、同貼床除去後実測図（1/40）



第52図　SC058滑石原石の出土状況（1/10）

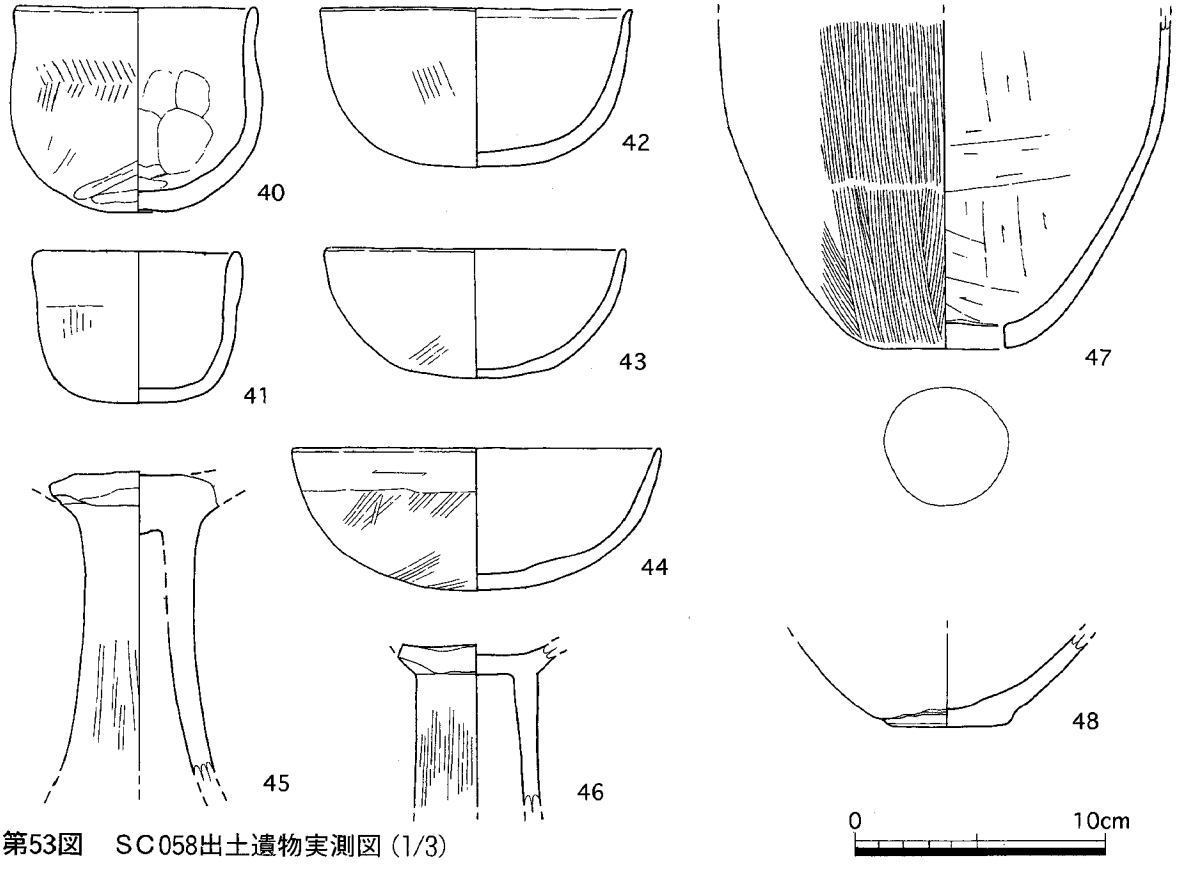
第２表　SC058出土滑石原石計測表

	重量	長さ	幅	厚み		重量	長さ	幅	厚み
原石１	180	10.5	5.5	2.0	原石11	110	9.5	3.0	2.5
原石２	100	7.0	3.0	2.3	原石12	10	3.0	2.8	1.0
原石３	50	8.7	3.6	1.0	原石13	110	6.5	5.5	2.8
原石４	130	6.5	4.5	3.3	原石14	50	7.0	5.5	1.0
原石５	70	7.0	3.5	2.0	原石15	150	6.8	3.0	2.5
原石６	190	7.0	4.0	3.0	原石16	60	5.5	3.8	2.0
原石７	260	6.5	6.0	3.4	原石17	40	3.5	3.8	1.6
原石８	200	9.5	4.0	3.0	原石18	340	10.0	9.0	2.2
原石９	200	9.5	4.0	3.4	原石19	720	17.1	6.2	3.2
原石10	20	5.0	2.5	1.5	原石20	140	10.0	4.6	2.3

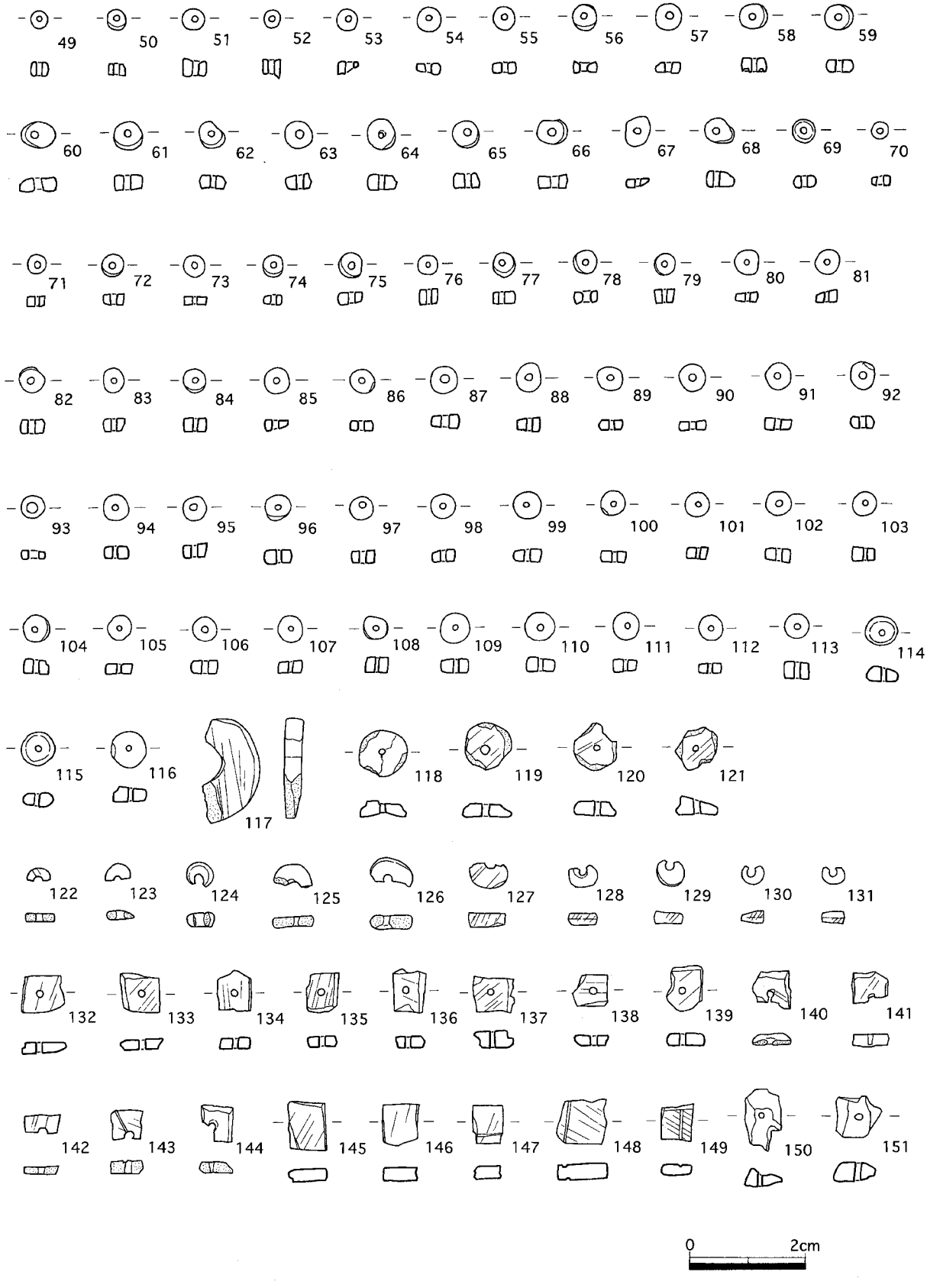
※重量（g）　長さ・幅・厚み（cm）

出土土器（第53図）

コンテナ２箱の土師器が出土した。遺物が一定量出土しているにも関わらず、甕・壷の良好な破片がない。**40**は小型の壷である。口径9.6cm、器高8.2cmを測る。外面は上半に粗い刷毛目を施し、下半をヘラ状工具で削る。内面は指で整形する。**41**は小型の鉢である。平坦な底から強く屈曲してまっすぐ立ち上がる。復元口径8.2cm、器高6.1cmを測る。**42～44**は椀である。口径・器高は42が12.4cm・6.3cm、43が12.0cm・5.2cm、44が14.6cm・5.7cmを測る。42は深い器形で口縁端部は外に短く折れる。



第53図　SC058出土遺物実測図（1/3）



第54図　SC058出土滑石製品実測図（1/1）

44はほぼ完存し、外面は刷毛目の後口縁部を横ナデ、内面はナデで調整する。椀の中に滑石原石が入れられていた。**45・46**は高坏の脚部である。脚柱は長い筒状を呈し、外面に縦刷毛を施す。**47**は単孔の甑である。底径5.6cmを測る。外面は細かい縦刷毛、内面は雑な削りを施す。**48**は壷の底部である。平底で底径5.3cmを測る。

滑石製品（第54図）

滑石製臼玉、未製品、原石およびチップが相当量出土した。その製作工程を復元できる良好な資料である。その詳細についてはまとめにおいて後述したい。

49～116は臼玉である。製品は68点ですべて図化した。径３～５mm、厚さ1.5～３mmを測る。**117**は勾玉の未製品である。両面を研磨し、側面も研磨の途中である。**118～151**は臼玉製作工程の各段階の未製品、欠損品である。量が多いため代表的なものを数点ずつ示す。**118～121**は側面を研磨整形する段階の未製品である。**122～131**は円形、穿孔の欠損品である。**132～139**は方形チップを穿孔した段階の未製品である。**140～144**は方形、穿孔の欠損品である。**145～149**は方形チップである。147～149には筋目が入る。**150・151**は板状に研磨していない不整形チップに穿孔したものである。図化した事例のほかに、滑石原石20点、製作工程で出た屑約600gが出土した。

ＳＣ０５９号竪穴住居跡（第55図）

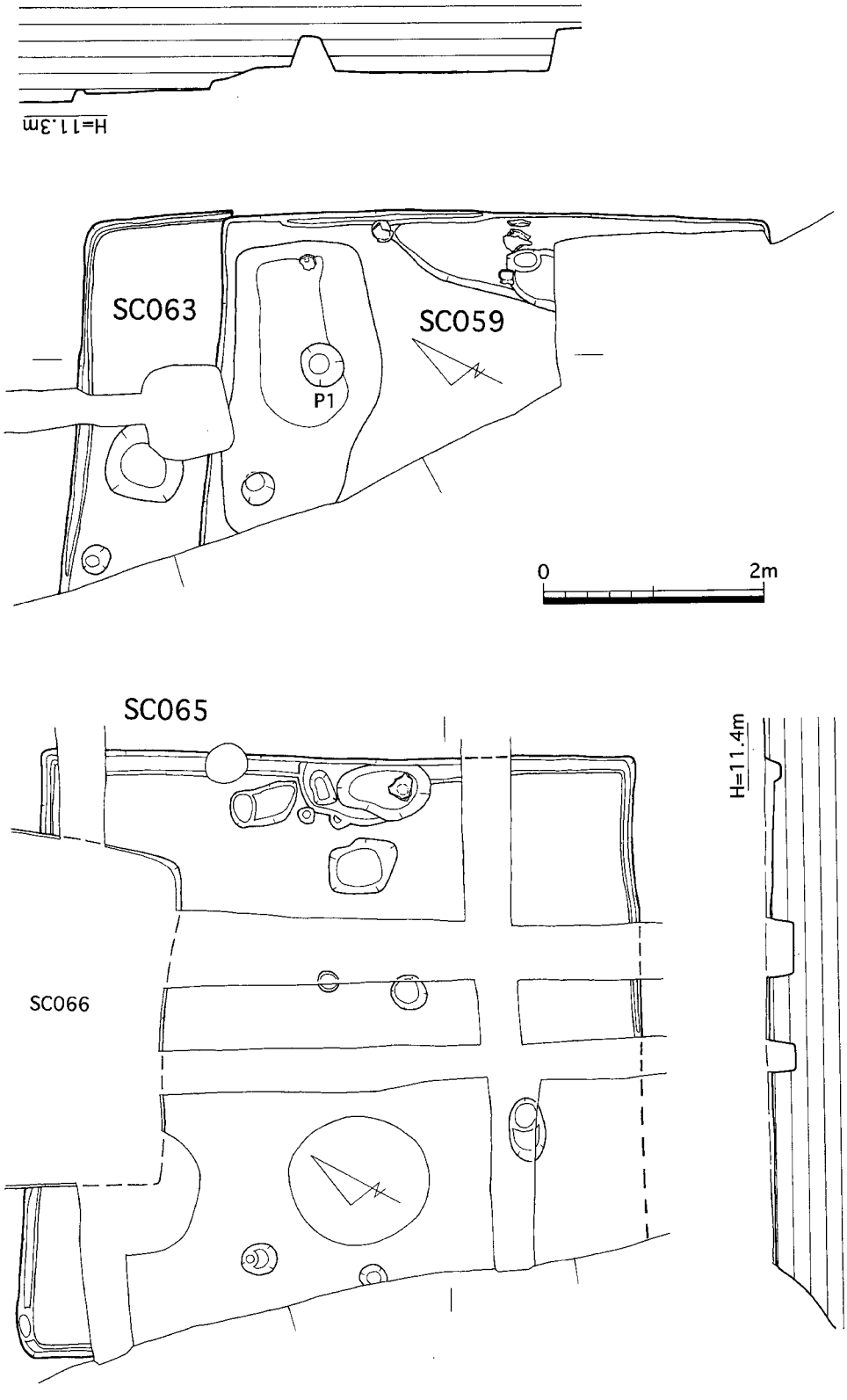
ＳＣ０５７の西側に隣接し、住居の東壁と北壁の中程まで、面積にして全体の１／３が残存し、残りは段差にかかり消失する。ＳＣ０６３を切る。東壁が全長5.0m、北壁の残存長3.0m、床面までの深さ20cmを測る。床面は平坦ではなく、壁際が５cmほど低くなっている。Ｐ１を主柱穴の１つとする４本柱建物であろう。50cm程度の深い貼床を確認した。出土遺物より弥生時代後期後半～終末に位置付けられる。

出土遺物（第56図）

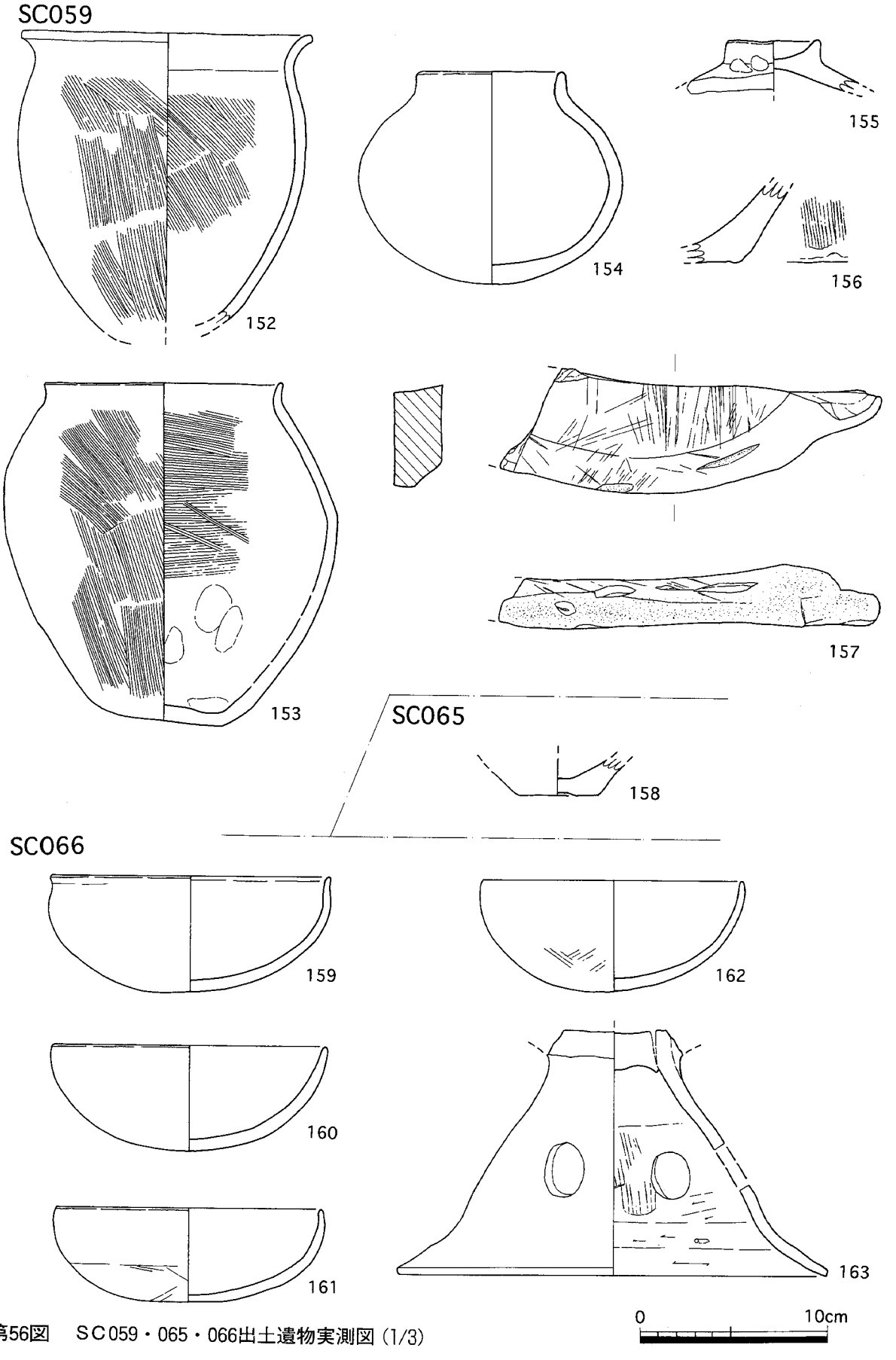
コンテナ２箱の遺物が出土した。**152**は小型の甕である。ほぼ完存し口径15.2cm、残高15.4cmを測る。口縁はゆるく外反し端部は角張る。内外面ともに細かい刷毛目で調整し、橙色を呈する。**153**は無頸壷である。ほぼ完存し口径12.6cm、器高18.1cmを測る。ひずみが大きい。平底で、外面は細かな右下がりあるいは縦方向の刷毛目で調整した後、口縁部を横ナデする。内面は上半に細かな横刷毛を施し下半は指で整える。橙色を呈し、底部付近に黒斑を有する。**154**は壷である。復元口径7.8cm、器高11.3cm、胴部最大径14.0cmを測る。丸底で体部は横長の偏球形である。器壁は厚く、磨滅により調整は不明。橙色を呈する。**155**は蓋であろう。**156**は平底の底部片である。**157**は砥石である。細長い弧状を呈したものが半ばあたりで折れた状態である。側面の一方は丸みを帯びた自然面であるが、残りの面はすべて研磨し、上下の面は特に平滑である。研ぎ痕は上の面に集中する。形状と研ぎ痕の方向から、当初円形に近い大きな砥石であったものが割れて、その割れ口を研磨し再利用したものと推定する。

ＳＣ０６３号竪穴住居跡（第55図）

ＳＣ０５９に切られた状態で検出した。方形住居で北壁3.4m、東壁1.3mが残存する。床面までの深さは３cmで、上部が削平を受けている。深さ５cm弱の周溝をめぐらし、30cm程度の貼床を施す。遺物は出土しなかった。



第55図　ＳＣ059・063・065実測図（1/60）



第56図　SC059・065・066出土遺物実測図（1/3）

ＳＣ０６４号竪穴住居跡（第57図）

竪穴住居の集中する部分から南東に10ｍ離れた調査区の南東端に位置する。床面まで5cm以下と浅く、撹乱による破壊も受けるが、形状より方形住居のコーナーと考えられる。浅い周溝がめぐる。遺物は出土しなかった。

ＳＣ０６５号竪穴住居跡（第55図）

ＳＣ０５４の西に隣接する。ＳＣ０６６に切られ、西壁は段差にかかり消失する。床面にも縦横に撹乱の溝が入る。方形プランをなし、東壁5.4ｍ、北壁5.6ｍを測る。埋土は黒褐色土で、床面までの深さは10cmに満たない。幅広で浅い周溝が周囲を巡り、東壁中央に土壙状の掘り込みがある。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物（第56図）

コンテナ１箱の土器が出土した。弥生土器が主で土師器も含まれるようだ。**158**は壷の底部か。底径4.2cmを測り底の中央がわずかに窪む。胎土は砂粒を多く含み、橙色を呈する。

ＳＣ０６６号竪穴住居跡（第57図）

ＳＣ０６５の北西側で検出した。ＳＣ０６５を切っている。方形プランをなすが、北西側が撹乱により消失、遺存部分も格子状の現代建物基礎によって破壊される。南壁の復元長3.0ｍ、東壁の残存長2.5ｍを測り、本遺跡で検出した住居群のなかではＳＣ０５８とともに著しく小さい。東壁側の中央で焼土が充填された炉跡を検出し、焼土内上層で大型甕の胴部と高坏の脚部が出土した。床面上にピットが点在するが、撹乱が激しいため、どれが主柱穴になるのか分からない。出土遺物より古墳時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物（第56図）

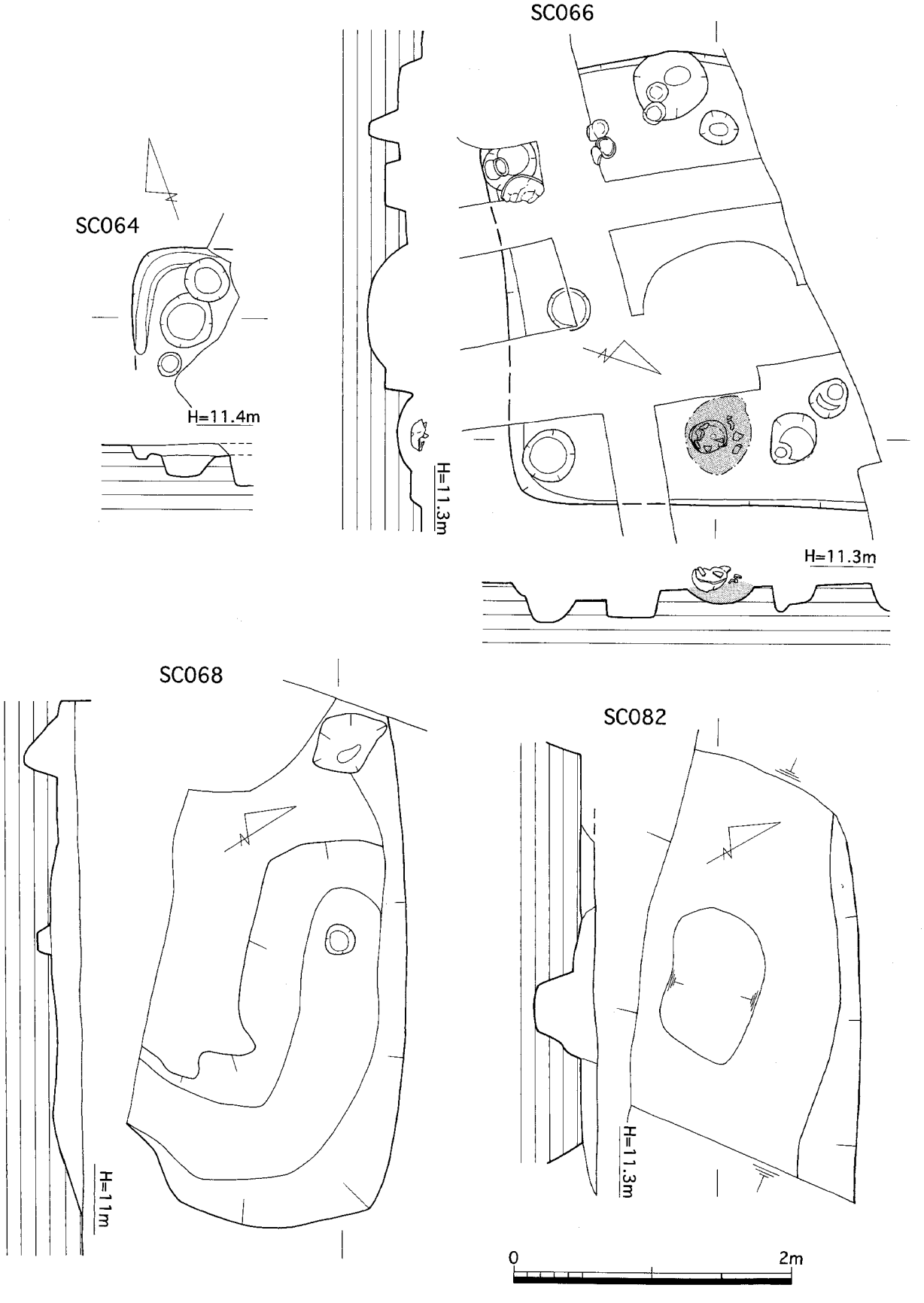
コンテナ２箱の土師器が出土した。須恵器は出土していない。**159～162**は椀である。159・162は完形品で、160・161も3／4が残存する。いずれも底が広く浅い器形である。口径・器高は159が14.8cm・6.2cm 、160が14.6cm・5.6cm、161が14.2cm・5.0cm、162が14.0cm・5.9cmを測る。外面は削りのちナデ、内面はナデで調整する。163は高坏の脚部である。底径22.8cmを測る。背が低く中ほどで膨らみながらハの字に大きく開き、裾部で外に屈曲する。大きな透かし孔を4つ有する。外面はナデ、内面は刷毛目の後、裾部を削る。炉跡の焼土内から出土したが、被熱していない。炉跡焼土内出土の大型甕は、胴部のみの残存で傾きが正確に出せなかったので図化していないが、胴部は球形に近く、肉厚で内面は削る。

ＳＣ０６８号竪穴住居跡（第57図）

調査区中央の段差上、調査区の北端で検出した。住居の床面は削平により完全に消失し、貼床のみを確認した。貼床の埋土は、他の竪穴住居の貼床と同じくよごれた赤褐色ローム土で、10～20cmの深さが残存する。住居のコーナーが確認でき、北壁の残存長は3.5ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＣ０８２号竪穴住居跡（第57図）

ＳＣ０６６の東側に位置する。地形の削平および撹乱により破壊され、北壁のみが一部確認できた。辺の残存長2.5ｍ、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。



第57図　SC064・066・068・082実測図（1/40）

2）掘立柱建物

掘立柱建物は調査区中央の段差下で6棟検出した。全般に柱穴は浅く、旧地面は明らかに削平を受けている。1間×1間の4本柱の建物については竪穴住居の柱穴のみが削平を免れた可能性もなくはないが、掘立柱建物と考えるのが妥当であろう。

ＳＢ０４７号掘立柱建物

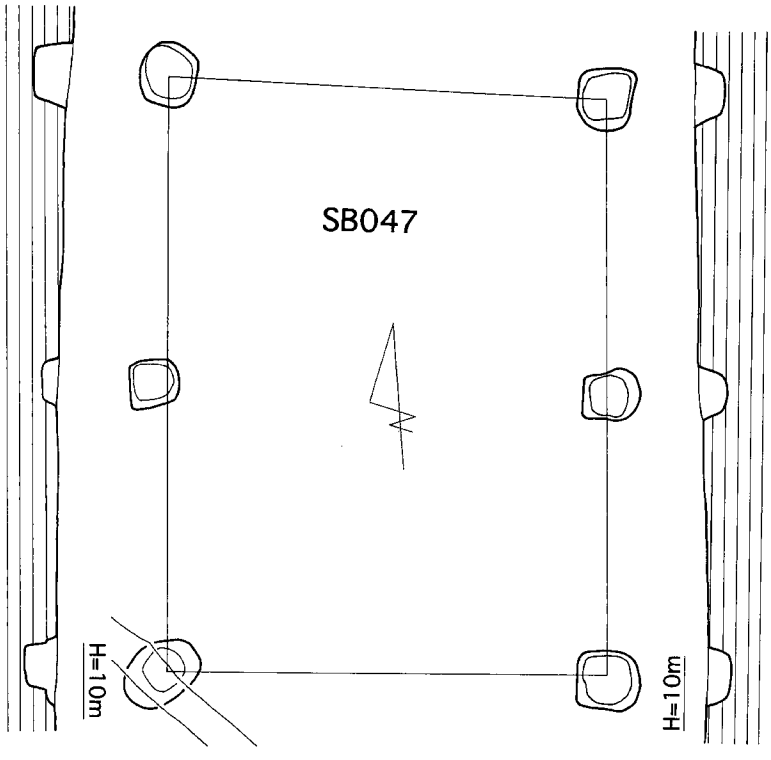
(第58図)

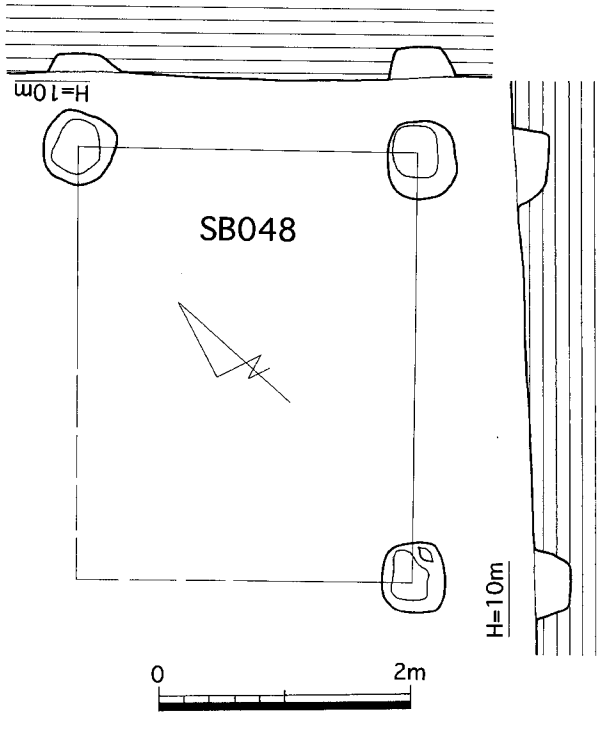
掘立柱建物群のうち、最も南東側で検出した。梁行1間(3.5m)、桁行2間（西側4.8m、東側4.7m）で、主軸方位はほぼ真北（N－3°－E）を向く。柱穴は隅丸方形で径40～60cm、深さ15～25cmを測る。弥生時代後期～終末頃の土器片が少量出土した。

ＳＢ０４８号掘立柱建物

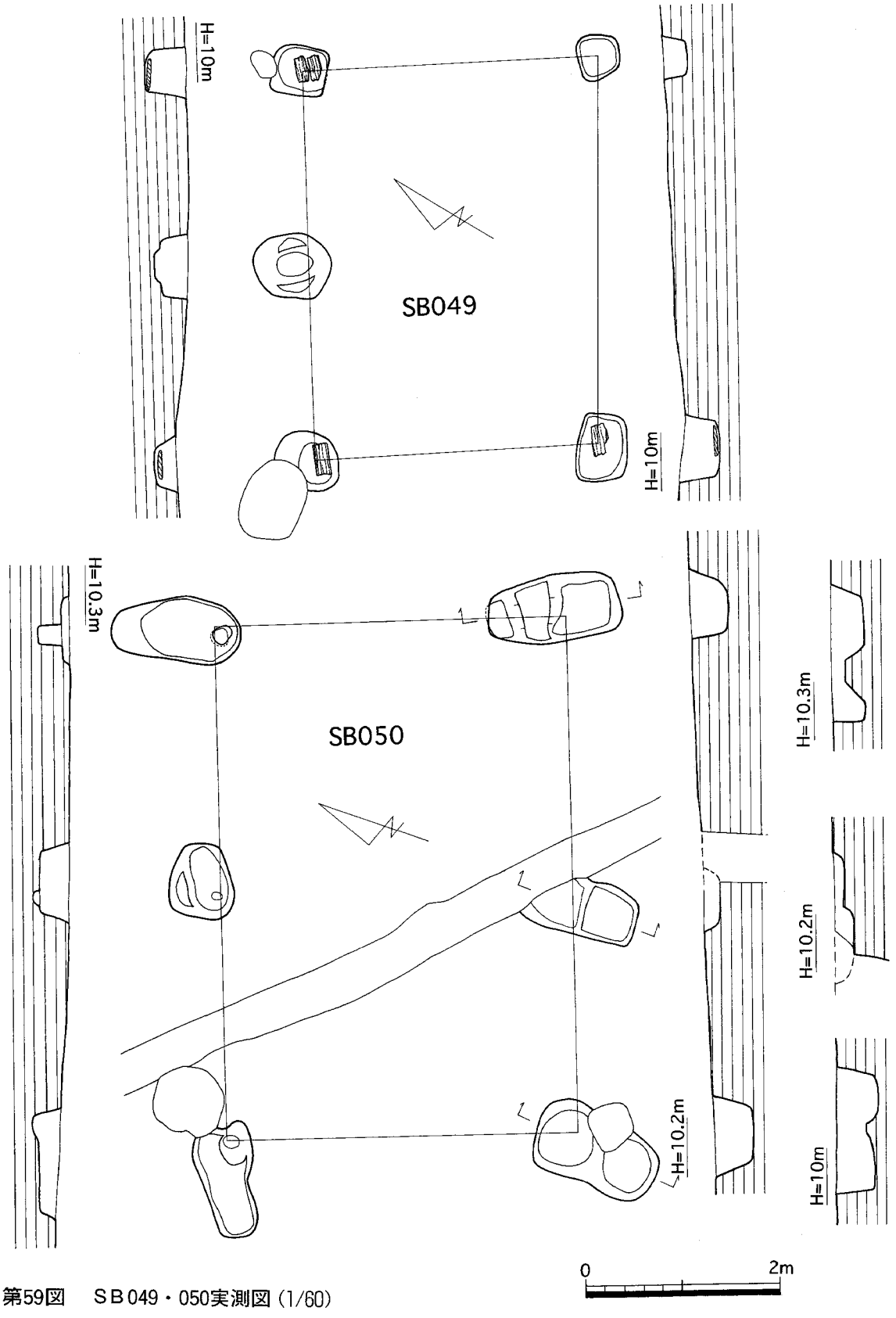
(第58図)

ＳＢ０４７の北西5mのところで検出した。梁行1間(2.7m)、桁行1間（3.5m）の掘立柱建物と考えられるが、西隅の柱穴が検出できなかった。完全に削平されたか。主軸方位は49°東偏する。柱穴は隅丸方形で径50～60cm、深さ15～25cmを測り、相当削平を受けているようだ。13点の土器片、おそらく弥生土器、が出土したが図化できるものはない。





第58図　ＳＢ047・048実測図（1/60）



第59図　ＳＢ049・050実測図（1/60）

ＳＢ０４９号掘立柱建物
(第59図)

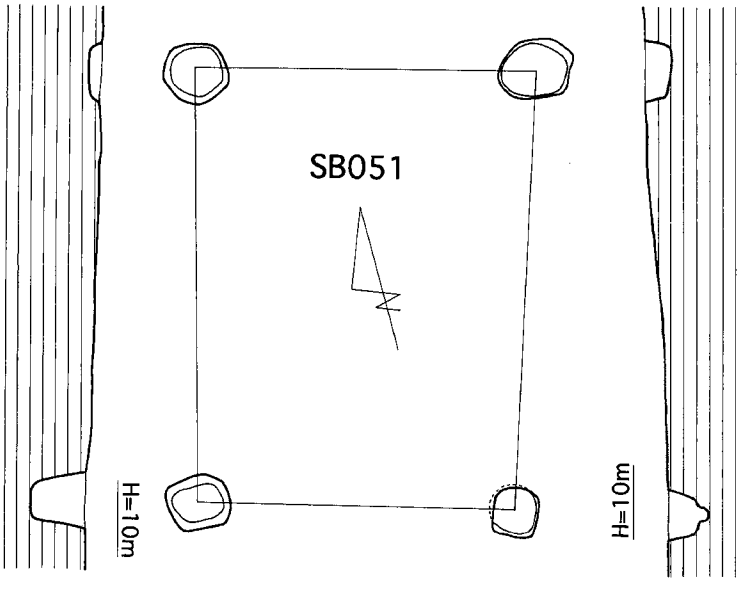
ＳＢ０４８の西側に隣接する。梁行1間（3.0m）、桁行は西側2間（4.0m）、東側1間（4.0m）で、主軸方位は58°東偏する。東隅の柱穴の切り合いからＳＢ０５０よりも新しい。柱穴は方形または隅丸方形で径50～70cm、深さ25～40cmを測り、３つの柱穴から礎板が出土した。須恵器の甕胴部片が出土し、遺構の時期は古墳時代中期～後期か。

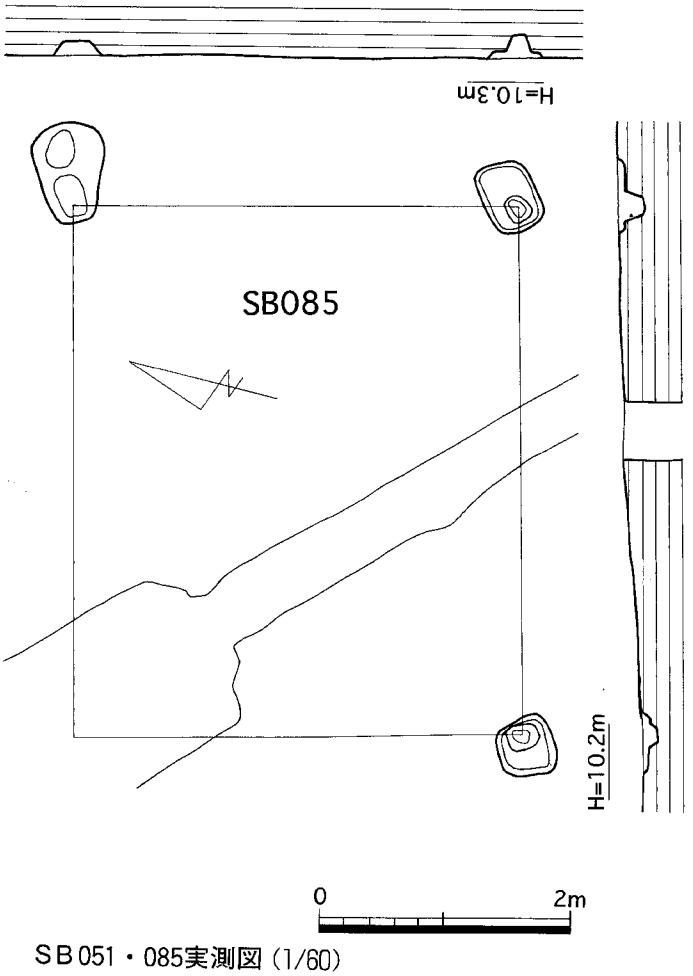
ＳＢ０５０号掘立柱建物
(第59図)

ＳＢ０４９の東側に隣接する。梁行１間（3.6m）、桁行2間（5.3m）で主軸方位は70°東偏する。柱穴は長方形のものが多く、とくに南側の柱穴はいずれも下場が2つに分かれる。深さ20～40cmを測る。少量の弥生土器片が出土したが図化できるものはない。壷の肩で突帯を有する破片がある。

ＳＢ０５１号掘立柱建物
(第60図)

ＳＢ０４７の西隣で検出した。梁行１間（北側2.7m、南側2.5m）、桁行１間(3.5m)で主軸方位は15°東偏する。柱穴は径40～50cm、深さ10～40cmを測る。弥生土器の小片が６点出土したが図化できるものはない。





第60図　ＳＢ051・085実測図（1/60）

ＳＢ０８５号掘立柱建物（第60図）

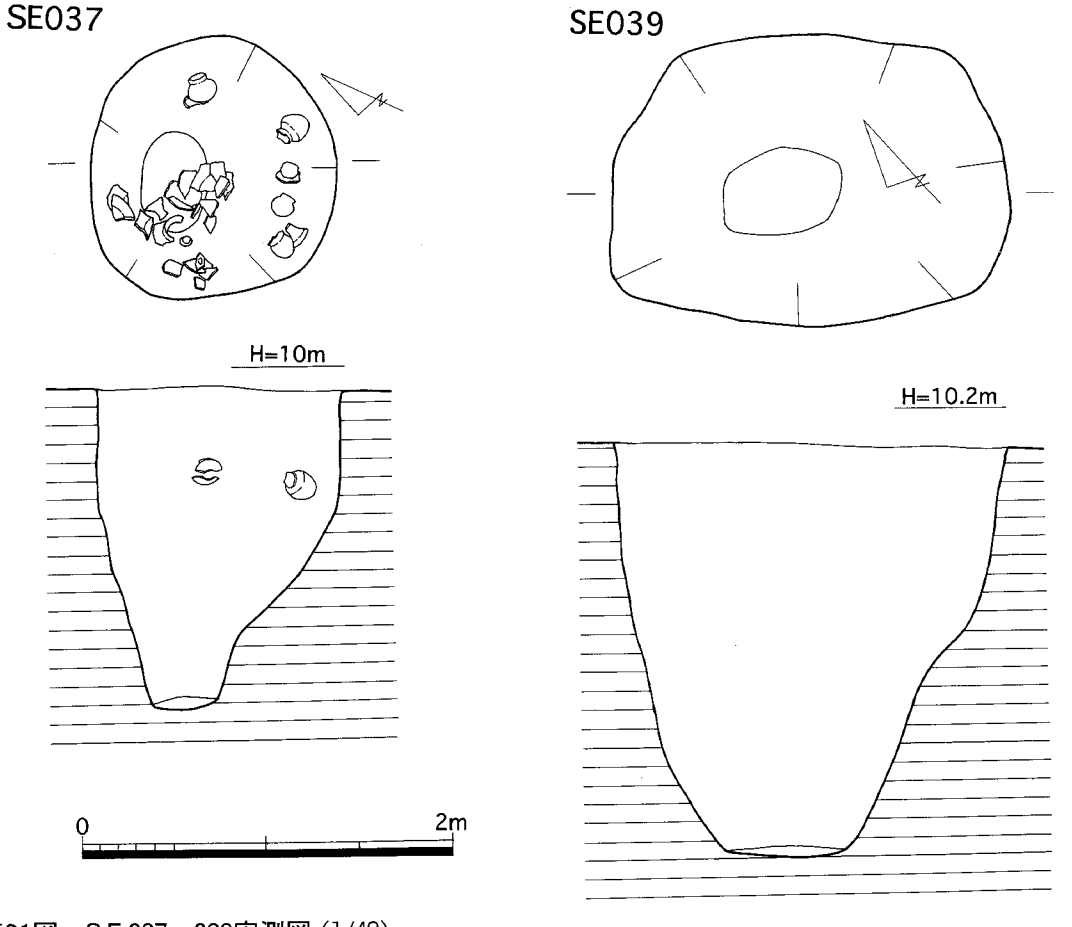
掘立柱建物群のうち、最も北に位置する。柱穴のひとつが攪乱によって消失しており、整理段階で新たに発見した。梁行1間（3.5ｍ）、桁行１間（4.2ｍ）で主軸方位は75°東偏する。柱穴は方形で径50～60cm、深さ10～20cmを測る。土器小片５点が出土したが、図化できない。

３）井戸

調査区の西側の段差下からＳＤ０３１付近にかけての範囲で13基の井戸を検出した。井戸底面のレベルは一定しない。多くの井戸は八女粘土層を掘り抜いた深い井戸である。ほかに少数ながら鳥栖ローム土と八女粘土の境界部分の湧水点まで掘った浅めの井戸がある。

ＳＥ０３７号井戸（第61図）

ＳＢ０５１の西側に位置する井戸である。検出面におけるプランは径1.3～1.4ｍの円形で、深さは170cmを測る。70cmの深さまでは垂直に掘り下げ、それ以下は狭まり底面では径0.4×0.5ｍの楕円形になる。検出面より100cm下の標高9.1ｍで湧水した。埋土は上層（60cm下まで）が粘性の強い黒色土でレンズ状に堆積、最上面には10cm程度の厚さで茶褐色土層がのる。この層は上面の包含層が沈み込んだものと考えられる。当井戸のほかにも、複数の井戸で遺構の最上面に同様の包含層の沈み込みが見られた。下層は粘性の強い黒色土で八女粘土ブロックを少量含む。上層において甕、高坏、小壷等がまとまって出土した。下層においても多量の土器片と木製品、自然木が出土した。出土遺物から古墳時代中期前半～中頃に位置付けられる。



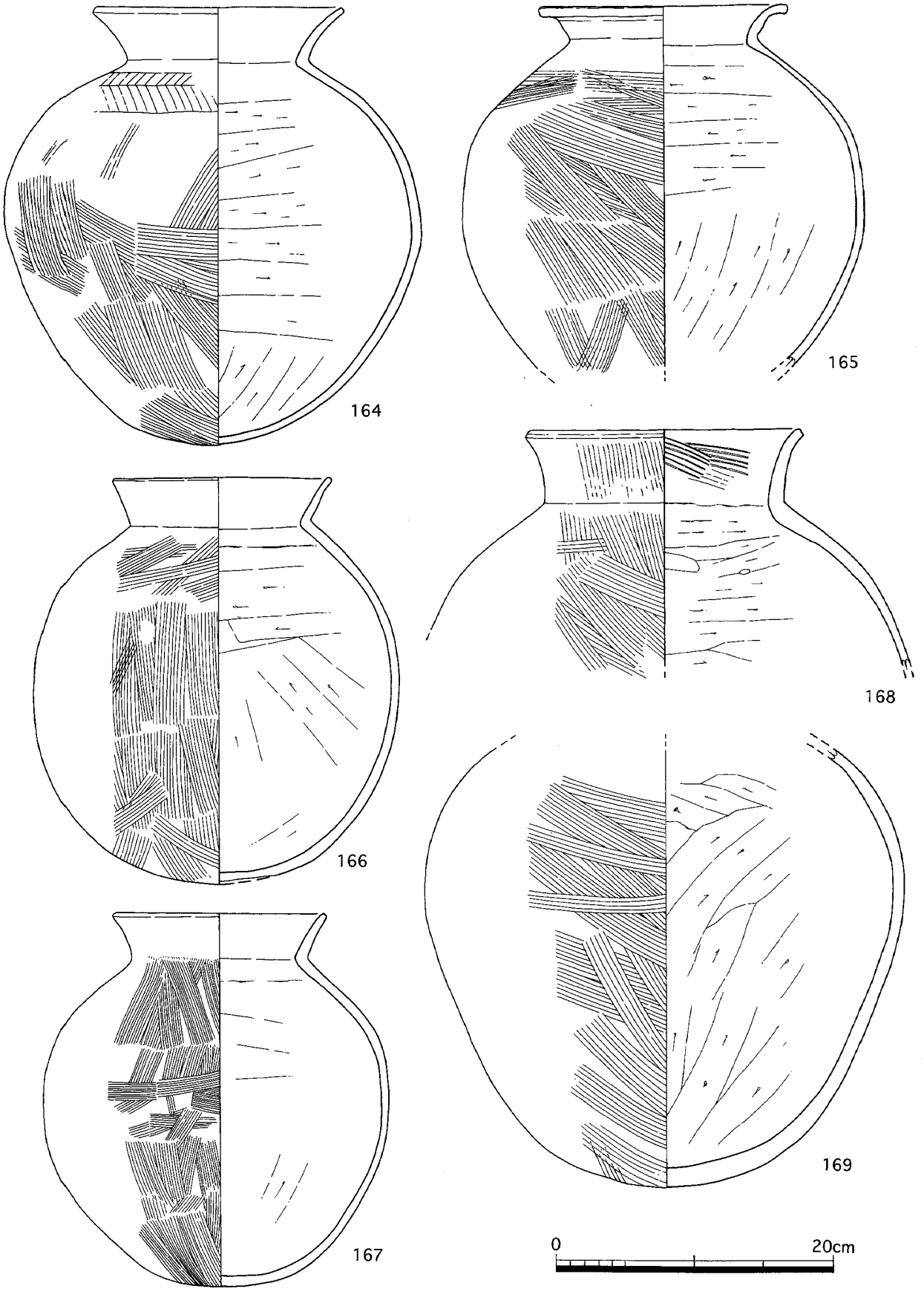
第61図　ＳＥ037・039実測図（1/40）

出土遺物（第62～65図）

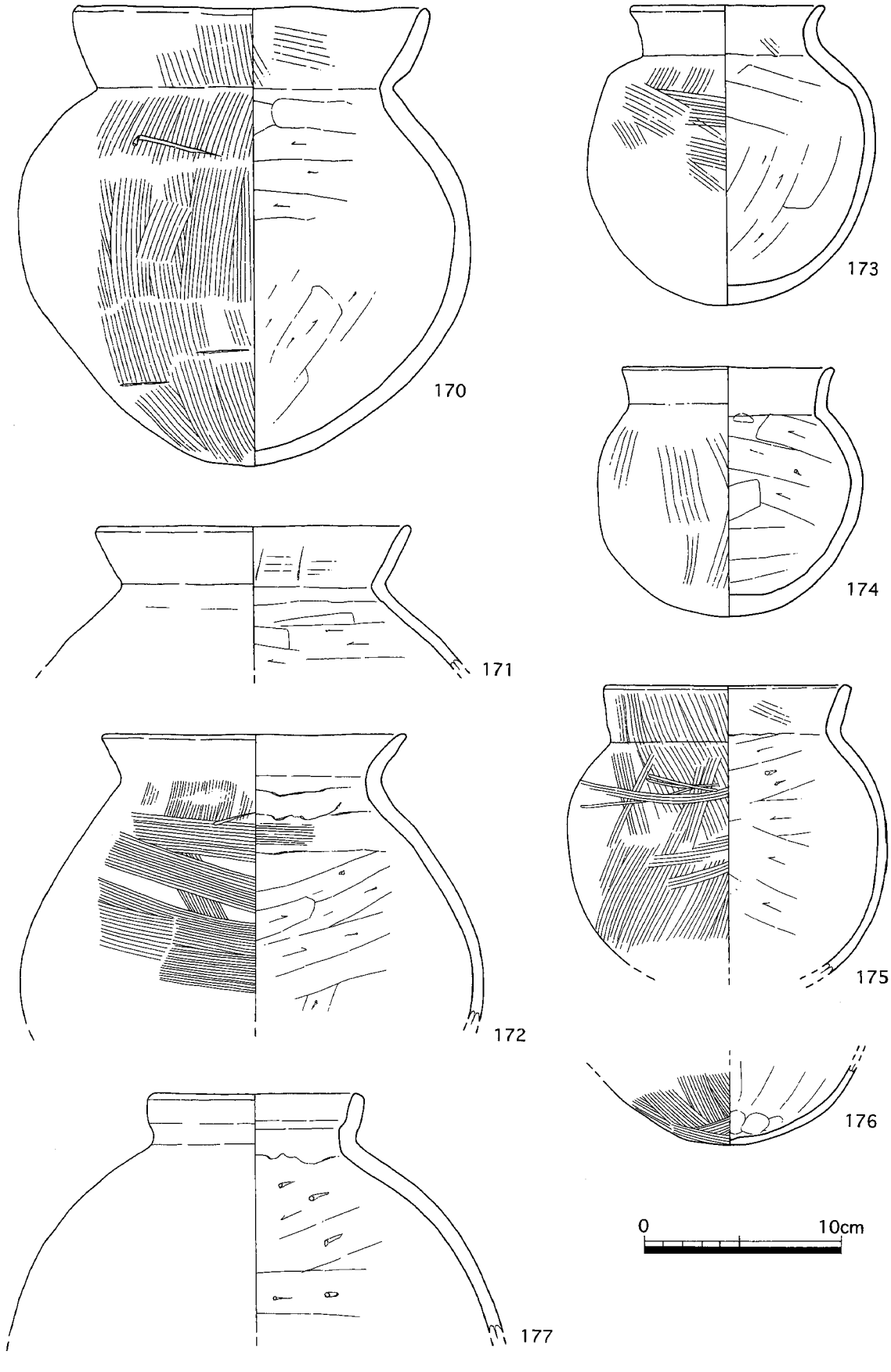
コンテナ11箱分の大量の土師器が出土し、完形品が多く存在する。初期須恵器も数点出土している。**164～172**は大型または中型の甕である。**164**はほぼ完存し口径18.0cm、器高31.3cm、胴部最大径29.7cmを測る。最大径が高い位置にある肩の張った器形で、口縁部は外反し端部は面をもつ。肩に矢羽根状の線刻を有する。**165**は復元口径18.0cmを測る。球形に近い体部で首がすぼまり、短い口縁部は外湾する。外面は全体に刷毛目を施した後、肩より上を横ナデする。内面は上半を横に下半を縦に削る。**166**はほぼ完存し口径15.7cm、器高29.2cm、胴部最大径26.0cmを測る。体部はやや縦長の球形で、口縁部は直線的に外傾する。体部外面に刷毛目、内面に削りを施す。焼成時の器面の剝落がみられる。**167**は完形品で口径15.4cm、器高26.7cm、胴部最大径24.7cmを測る。球形の体部をもち、口縁部が直線的に開く。頸部の屈曲はなだらかである。体部外面は全体に刷毛目を施し、内面は削り。底部から最大径部にかけて煤が付着する。**168**は口径20.0cmを測る。頸部はしまり、口縁部は外反する。外面は全体に刷毛目を施した後、頸部を横ナデ。内面は体部を横方向の削り、口縁部は条痕状の横刷毛で頸部には接合痕が残る。**169**は168と同一個体であろう。最大径部が上位にある縦長の不整球形をなす。外面は横あるいは右下がりの刷毛目、内面は削りで調整する。**170**はほぼ完存し口径18.1cm、器高23.4cm、胴部最大径23.8cmを測る。最大径部はほぼ中央にあり、底部に向かってすぼまっていき尖底にちかい。口縁部は内湾する。全体に凹凸が目立ち、口縁部は大きくひずむ。外面は全体を縦刷毛、内面は上半に横方向の、下半に縦方向の削りを施した後、口縁部を横ナデで仕上げる。外面は肩を中心として全体に煤が濃く付着する。**171**の口縁部は直線的に外傾し、端部は丸い。復元口径16.0cmを測る。**172**は口径15.4cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、頸部から最大径部へすらりと落ちていく撫で肩の器形を呈する。外面は縦刷毛のち横刷毛、内面は右上がりの削りで調整する。頸部内面には粘土紐積上げの痕跡が明瞭に残る。

173～176は小型の甕である。173は完形品で口径9.9cm、器高15.3cm、胴部最大径14.5cmを測る。外面は上半に粗い刷毛目を施し、下半はナデ。内面は削り。内外面に煤が付着する。**174**はほぼ完存し口径10.8cm、器高12.7cm、胴部最大径13.4cmを測る。外面は粗い刷毛目、内面は横方向の削りで調整し、口縁部を横ナデする。つくりが粗雑で器壁も厚い。**175**は口径12.5cmを測る。外面全体に刷毛目を密に施し、内面は削り。内外面ともに煤が付着する。**176**は小型甕の底部である。器壁が非常にうすく、外面は細かい刷毛目、内面は放射状に削り上げ、底には指頭痕が残る。**177**は大型の壷である。口径11.0cmを測る。頸部径が非常に小さく、口縁部は短く内湾する。

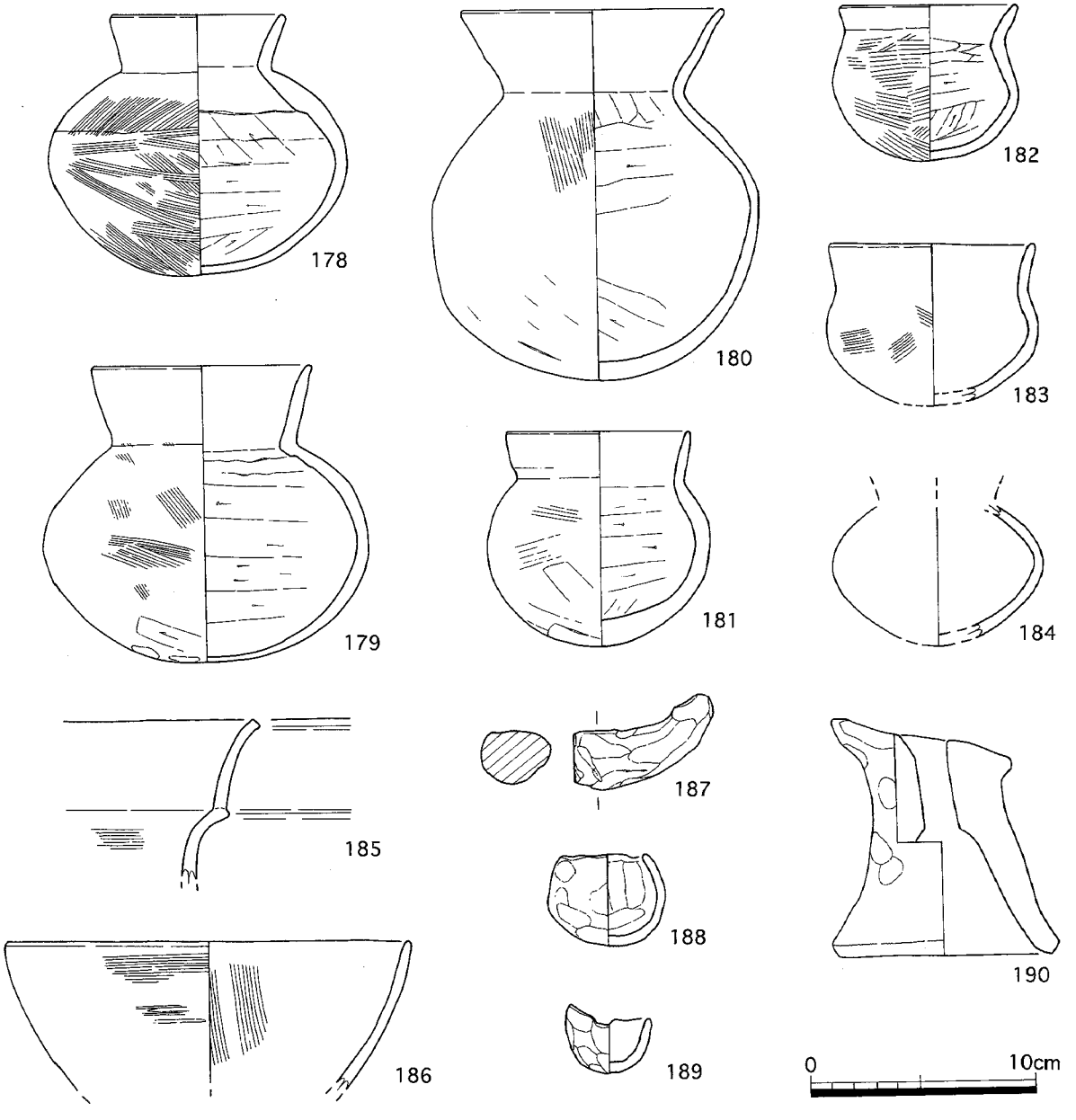
178～180は中型壷である。**178**は復元口径7.8cm、器高11.6cm、胴部最大径13.2cmを測る。体部は横長の楕円形を呈し、口縁部は短い。体部外面に細かい刷毛目、内面に削りを施す。**179**はほぼ完存し、口径9.8cm、器高13.2cm、胴部最大径14.3cmを測る。外面は上半に刷毛目を施し、下半は削りのあと指でなで、指頭痕が残る。底が非常に薄い。**180**は球形の体部で、頸部がしまり口縁部は直線的に外傾する。復元口径11.6cm、器高16.4cmを測る。外面は肩に刷毛目、底部はなめらかになでる。内面は削り。焼成がややあまく灰白色を呈する。**181～184**は小型丸底壷である。いずれもつくりが粗雑である。**181**は完形品で口径8.1cm、器高9.5cmを測る。外面は横刷毛。内面は削りで、口縁部を横ナデする。全体に調整が雑で肉厚、胎土は砂礫を多く含む。**182**は完形品で口径8.0cm、器高6.9cmを測る。外面は細かい刷毛目、内面は削りを施す。**183**は復元口径9.2cm、器高7.2cmを測る。外面に煤が付着する。**184**は胎土が精良である。器面が磨滅し調整は不明。**185**は二重口縁壷の口縁部である。屈曲部は外に突出し、口縁端部は面をもち稜が明瞭である。**186**は鉢あるいは鉢形の甑である。焼成時の器面の剝落がみられる。復元口径17.8cmを測る。**187**は甑の把手である。小型で細長い。**188・189**



第62図　ＳＥ037出土遺物実測図①（1/4）



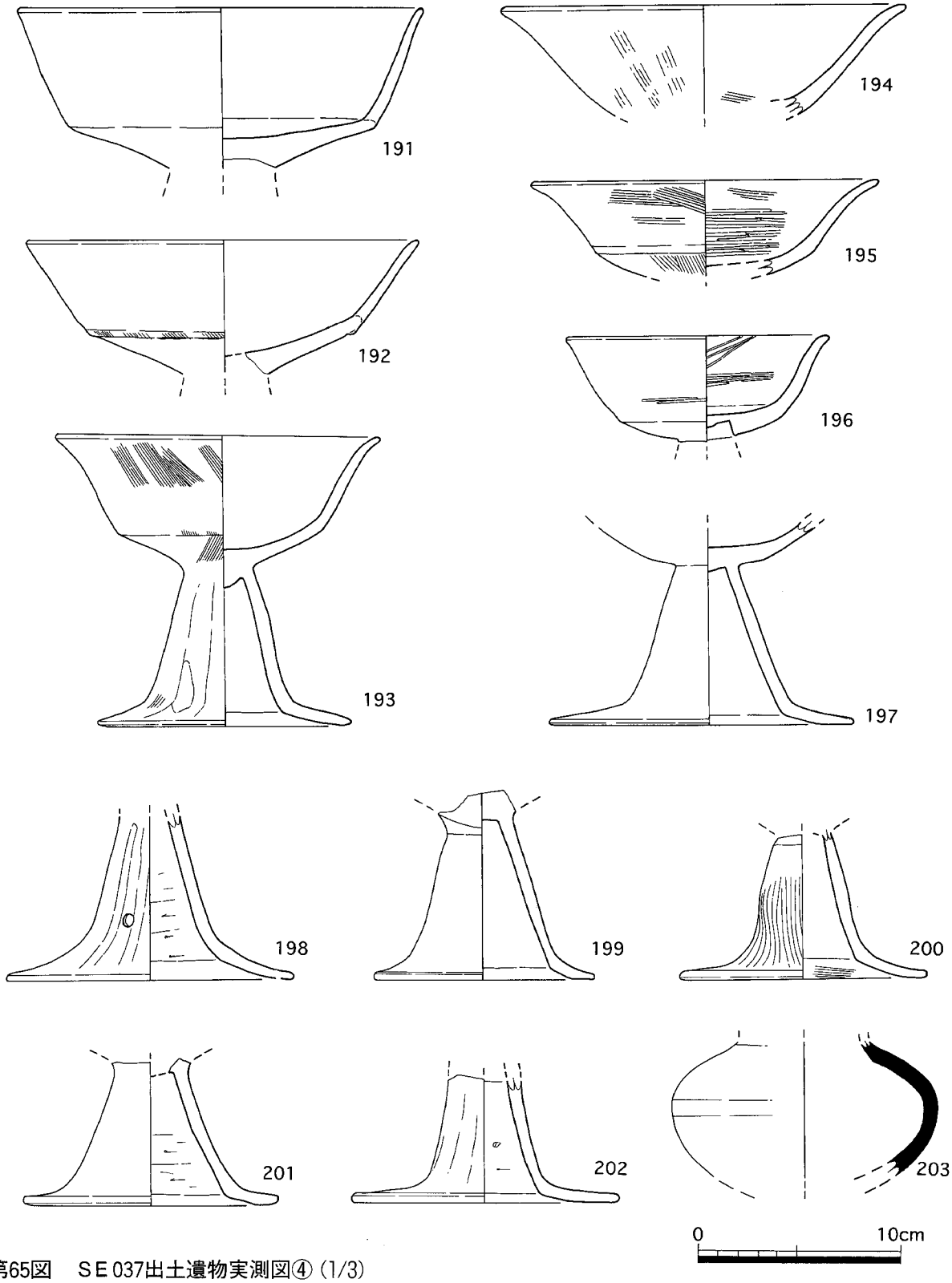
第63図　ＳＥ037出土遺物実測図②（1/3）



第64図　ＳＥ037出土遺物実測図③（1/3）

は手づくねのミニチュア土器である。**190**は支脚である。いわゆる沓形器台で、頂部に円孔をもつ。突起部周辺に煤が付着する。器高10.5cm、底径10.0cmを測る。

191～202は高坏である。坏底と口辺部との境は稜が明確で、口辺部が直線的なもの（191・192）と外反するもの（193・194）とがある。191は坏部が深く、口辺部の傾斜が垂直にちかい。口径20.2cmを測る。**192**は復元口径19.8cmを測る。器面が磨耗し調整は不明である。**193**は口径16.2cm、器高14.5cm、底径12.8cmを測る。坏部は深く、口辺部は外反する。脚部はやや膨らみながら広がり裾部で強く折れる。坏部外面に刷毛目を施す。**194**は復元口径20.2cmを測る。**195**は精製高坏である。口径17.2cm。胎土は精良で、外面に横刷毛のち横ナデ、内面に横位の細い磨きを密に施す。灰白色を呈する。**196**は小型精製高坏である。口径13.0cmを測り、内外面に磨きを施し、胎土も精緻である。坏底に窪みがあり、脚を差し込む接合法をとっている。**197～202**は高坏の脚部である。脚部は全般に短く、裾部で強く屈曲し、裾が水平に広がるもの（202）もある。底径は197が15.0cm、198が14.4cm、



第65図　ＳＥ037出土遺物実測図④（1/3）

199が11.0cm、200が12.4cm、201が12.8cm、202が13.6cmを測る。**198**は透かし孔３つを有する。**203**は初期須恵器の瑳である。周径の１/４が残存する。

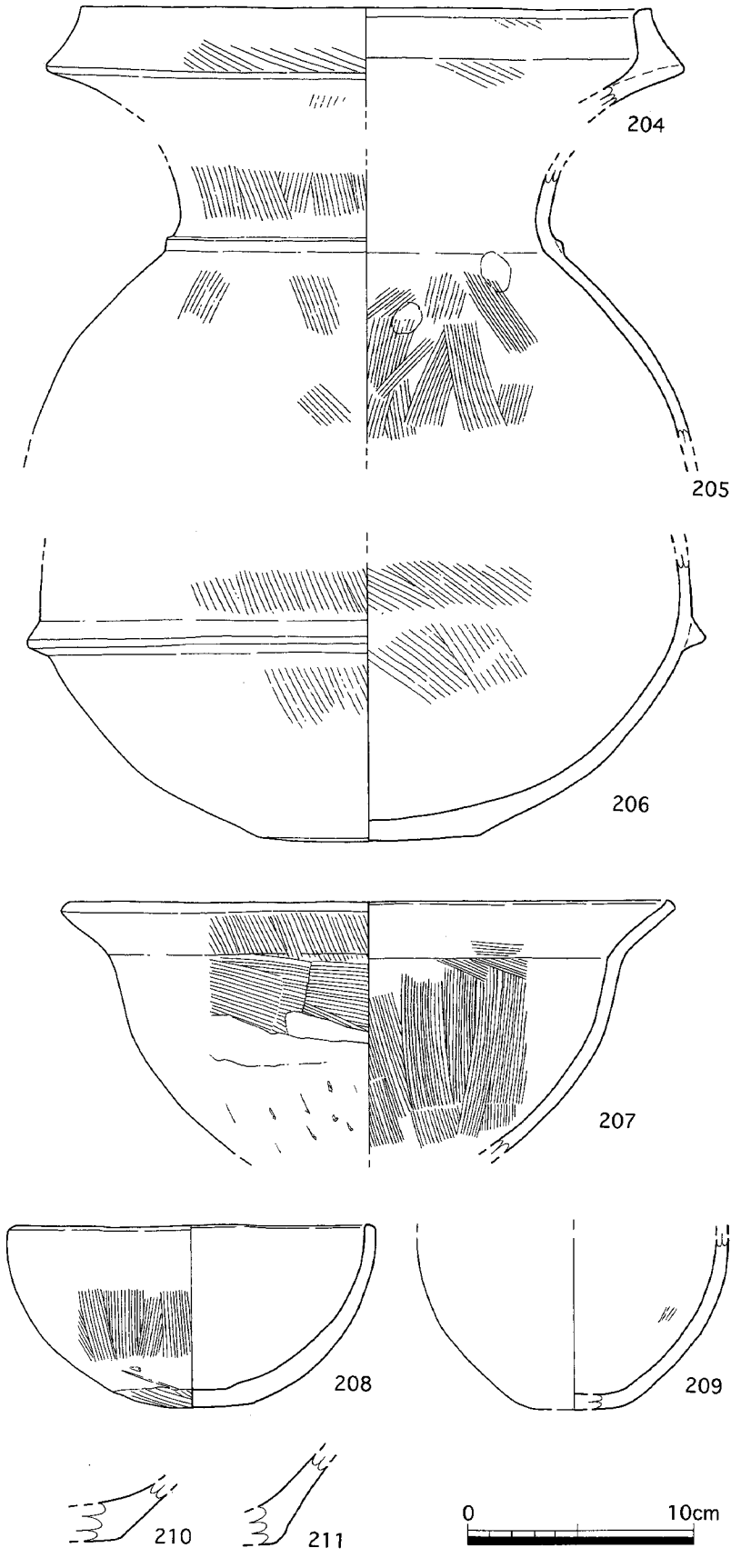
ＳＥ０３９号井戸（第61図）

ＳＢ０４８の付近に位置する。検出面で長軸2.2ｍ、短軸1.6ｍの長方形プランをなし、深さ220cmを測る。深さ100cmまで垂直に掘り下げ、それ以下は狭まっていき、底面では65×50cmの楕円形になる。底から40cmの高さまでの壁面に水錆が付着しており、この高さまで湧水していたものと考えられる。出土遺物より弥生時代後期後半に位置付けられる。

出土遺物（第66図）

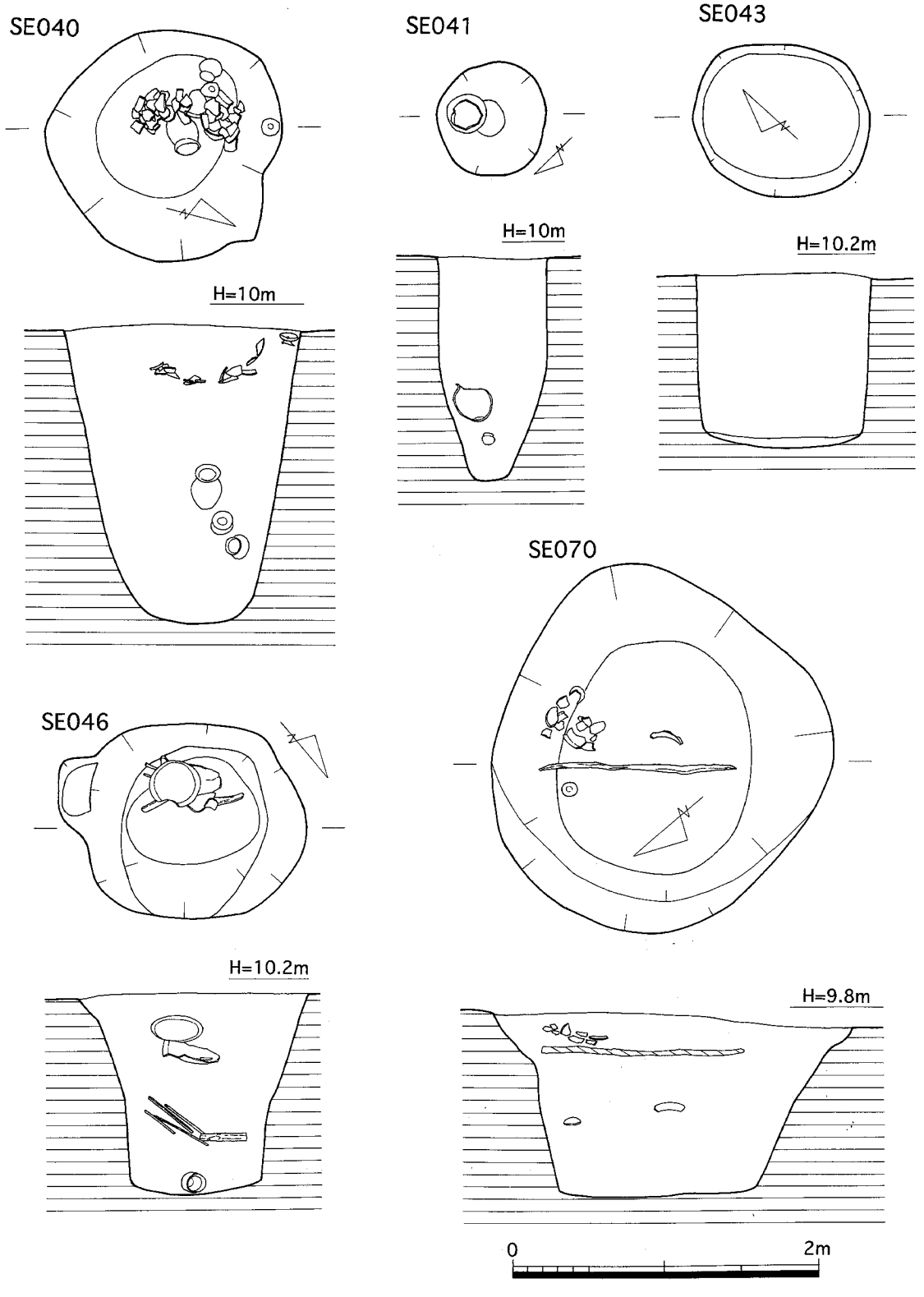
コンテナ２箱の遺物が出土した。弥生時代後期の土器が主体で、土師器少量、須恵器・瓦各1点が含まれる。

204～206は複合口縁壷である。おそらく同一個体であるが、接合できない。204の口縁部は屈曲後短く内傾するが、端部は上を向く。外面に丹塗りを施す。205は胴部から頸部にかけてである。断面三角形の突帯を頸部にめぐらす。206の底部は、まだ平底の特徴をはっきりと残しており、断面台形の突帯を胴部下位にめぐらす。底径9.6cmを測る。**207**は高坏である。復元口径27.0cmを測る。椀形の坏部は口縁付近で屈曲し外傾する。外面は上半に刷毛目、下半に削り、内面は細かい縦刷毛で調整する。**208**は鉢である。完形品で口径16.0cm、器高8.0cmを測る。凸レンズ状の底部から内湾しながら立



第66図　ＳＥ039出土遺物実測図（1/3）

ち上がる。外面は細かい刷毛目、内面はナデ調整。**209**は小型壷の底部か。**210・211**は平底の底部片である。底部と体部の境には稜をもつ。



第67図　ＳＥ040・041・043・046・070実測図（1/40）

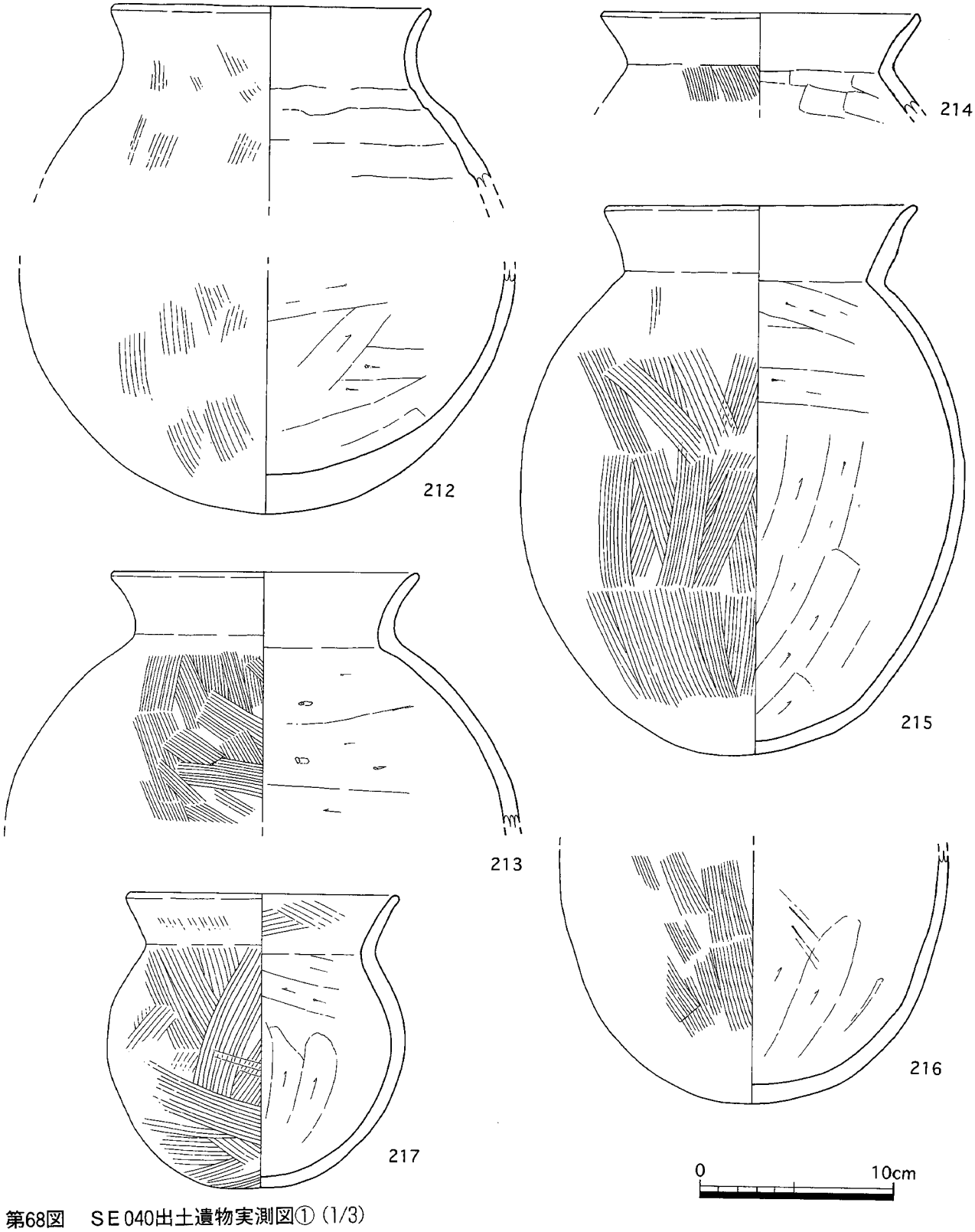
ＳＥ０４０号井戸（第67図）

調査区南壁沿いの中央に位置する。検出面の径1.5m、深さ190cmの略円形の井戸である。埋土は粘性の強い黒褐色土で、その上に古墳時代包含層の暗黒褐色土が深さ10cm程度のレンズ状に沈み込む。上層、中層、下層の３段階に分けて土器を取り上げたが、各層とも多量の土器が出土した。上層において甕、高坏等の破片が面的にまとまった状態で検出された。一方、下層においては完形の甕、壷、須恵器の瑳が出土した。出土遺物より古墳時代中期後半に位置付けられる。

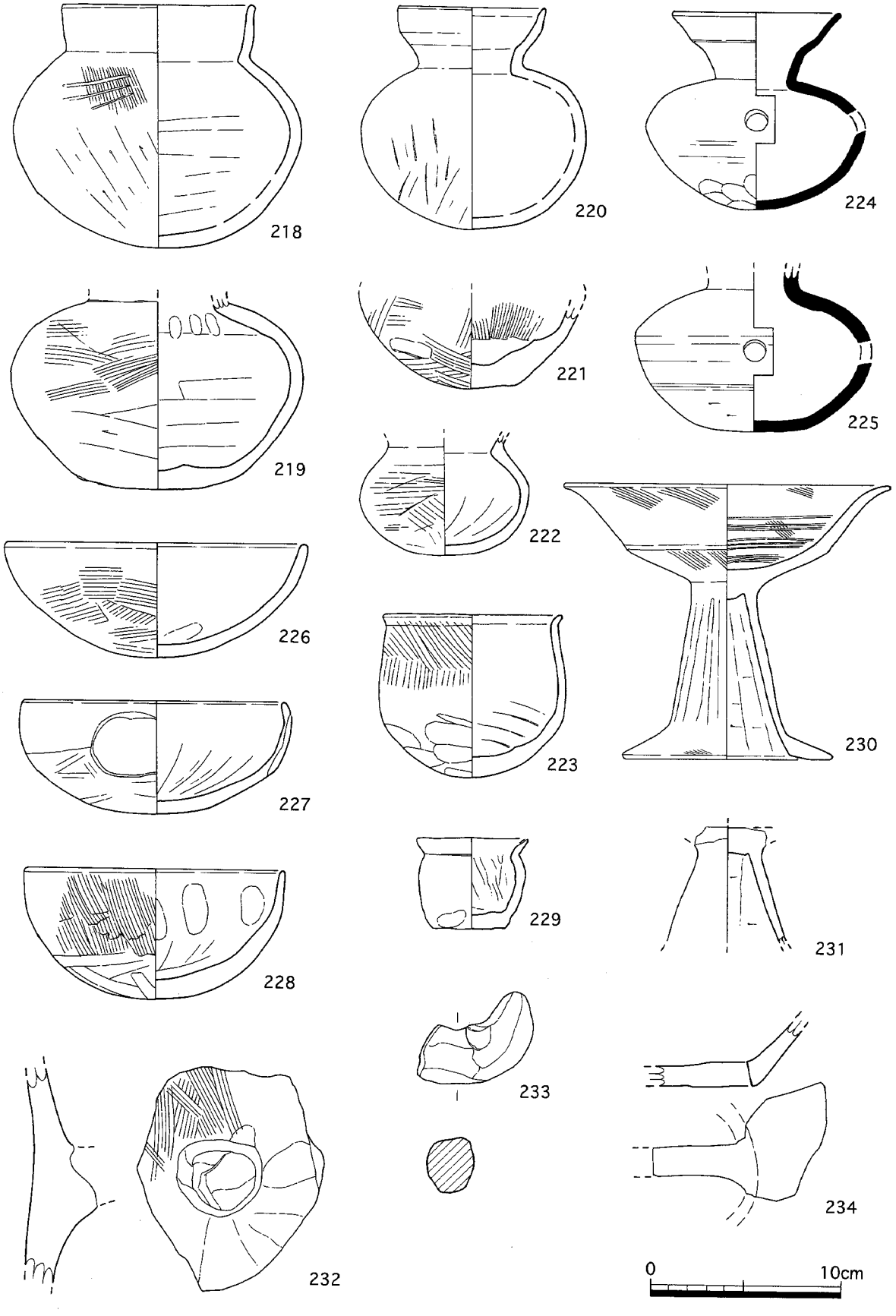
出土遺物（第68・69図）

コンテナ５箱の土師器と少量の初期須恵器が出土した。**212～216**は中型甕である。**212**は胴部で接合できず図上復元をしている。体部は球形で、頸部はなだらかに屈曲し口縁部は外反し端部を丸くおさめる。内面の肩付近に粘土紐の積上げ痕が明瞭に残る。復元口径16.6cmを測る。**213**は頸部がしまり、口縁部は外反する。口径16.0cm。外面に刷毛目、内面に横方向の削りを施す。**214**の口縁部は直線的に開き、口縁端部は面をもつ。復元口径16.6cmを測る。**215**はほぼ完存し口径16.2cm、器高28.5cm、胴部最大径22.9cmを測る。口縁部は外反気味で、頸部内面の稜がしっかりしている。胴部は長胴化し、外面に縦刷毛、内面に削りを施す。外面の下2／3と内底に煤が付着する。**216**は長胴化した甕の体部下半で、外面全体に煤が付着する。**217**は小型甕である。完形品で口径14.2cm、器高15.3cmを測る。外面に粗い刷毛目、内面に削りを施す。外面は底部を除いて煤が付着する。

218・219は中型壷である。**218**は完形品で口径10.2cm、器高12.8cmを測る。頸部は広く短い口縁部が直立する。胎土は精良。外面は上半に細かい刷毛目、下半に削りを施す。**219**は平坦な底部をもち、外面上半に横刷毛、外面下半と内面に削りを施す。**220**は直口壷である。完形品で口径7.8cm、器高11.7cm、胴部最大径11.8cmを測る。頸部はしまり、口縁部は直立後内湾気味に外に開く。外面は下半を削り、上半を横ナデ調整する。**221**は壷の底部である。外面は板で雑に整形しており、凹凸が目立つ。内面は刷毛目。底が非常に厚い。焼成時にできた器面の剝落がある。**222**は小型壷である。外面は刷毛目、内面は底に向けて放射状になでおろす。**223**は小型の無頸壷である。復元口径9.4cm、器高8.5cmを測る。丸底から直立する体部を経て、口縁部は短く外湾する。外面は上半に刷毛目、下半に指ナデを施す。内面はナデ調整で、底についた条痕はナデの際に爪が当たったもの。224・225は須恵器の瑳である。**224**は頸部の半分を欠き、口径9.0cm、器高10.4cmを測る。頸部が小さくしまり、口縁部は途中で一度屈曲しながら大きく開く。体部は最大径部で強く屈曲し、底部に向かってすぼまる。稜はナデ消しており底には指頭痕が残る。焼成は良好で青灰色を呈する。中村編年Ｉ－１・２段階に位置付けられる初期須恵器である。**225**は体部が完存する。頸部径は小さく、体部は平底気味で安定した形である。回転ヘラ削りの後、上半を横ナデする。底にはへそ状の小さな窪みがある。焼成は良好でやや黒っぽい青灰色を呈する。初期須恵器である。**226～228**は椀である。**226**は口径15.8cm、器高6.1cmを測る。外面に刷毛目を施す。**227**は完形品で口径14.2cm、器高5.9cmを測る。口縁部は内湾し、外面に焼成時にできた器面の剝落が認められる。内外面ともに削りを施す。**228**は復元口径13.6cm、器高6.8cmを測る。外面は上半を縦刷毛、下半を削り、内面は指ナデで調整する。器壁が厚い。**229**は手づくねのミニチュア土器である。平底の鉢形で復元口径5.8cm、器高4.9cm、底径4.0cmを測る。**230・231**は高坏である。**230**は復元口径17.2cm、器高14.4cm、底径11.1cmを測る。坏部は口辺が外反し、細かい刷毛目の後、坏底付近に細い磨きを施す。直線的な脚部は裾で折れて短く開き、外面は細かく面取りする。硬質に焼け灰色を呈する。**232～234**は甑である。**232**は把手の付け根である。**233**は把手である。**234**は底部で、蒸気孔は半円形の２孔である。



第68図　ＳＥ040出土遺物実測図①（1/3）



第69図　ＳＥ040出土遺物実測図②（1/3）

ＳＥ０４１号井戸（第67図）

ＳＢ０４７とＳＢ０５１の間に位置する円形の井戸である。検出面での径70cm、深さ150cmを測る。深さ70cmまで垂直に落ちたあと狭まり、底面での径は25cmを測る。埋土は黒褐色土で、最上面に古墳時代包含層の暗黒褐色土が深さ５cm程度のレンズ状に沈み込む。深さ70cm付近で湧水しはじめ、深さ90cmで甕と完形の小型壷が出土した。出土遺物より古墳時代中期に位置付けられる。

出土遺物（第70図）

コンテナ1箱の遺物が出土した。**235**は甕である。頸部径12.0cm、残高25.5cm、胴部最大径22.9cmを測る。体部は長胴化し、外面は上半を横刷毛のち右下がりの刷毛目、下半を削りで調整する。内面は上半を横方向の削り、下半は底から削り上げるが雑で削られていない部分もある。外底に黒斑を有する。**236**は小型壷である。口縁部は内湾する。体部は底が平坦で安定し、胴部はひずんでいる。胎土は精緻である。

ＳＥ０４３号井戸（第67図）

調査区中央の南寄りに位置する。検出面の径100～110cm、深さ130cmを測る円形の井戸である。壁はほぼ垂直に立つ。埋土は黒褐色で周囲に白色粘土が幅５cm程度の輪状にめぐっていた。出土遺物より弥生時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第70図）

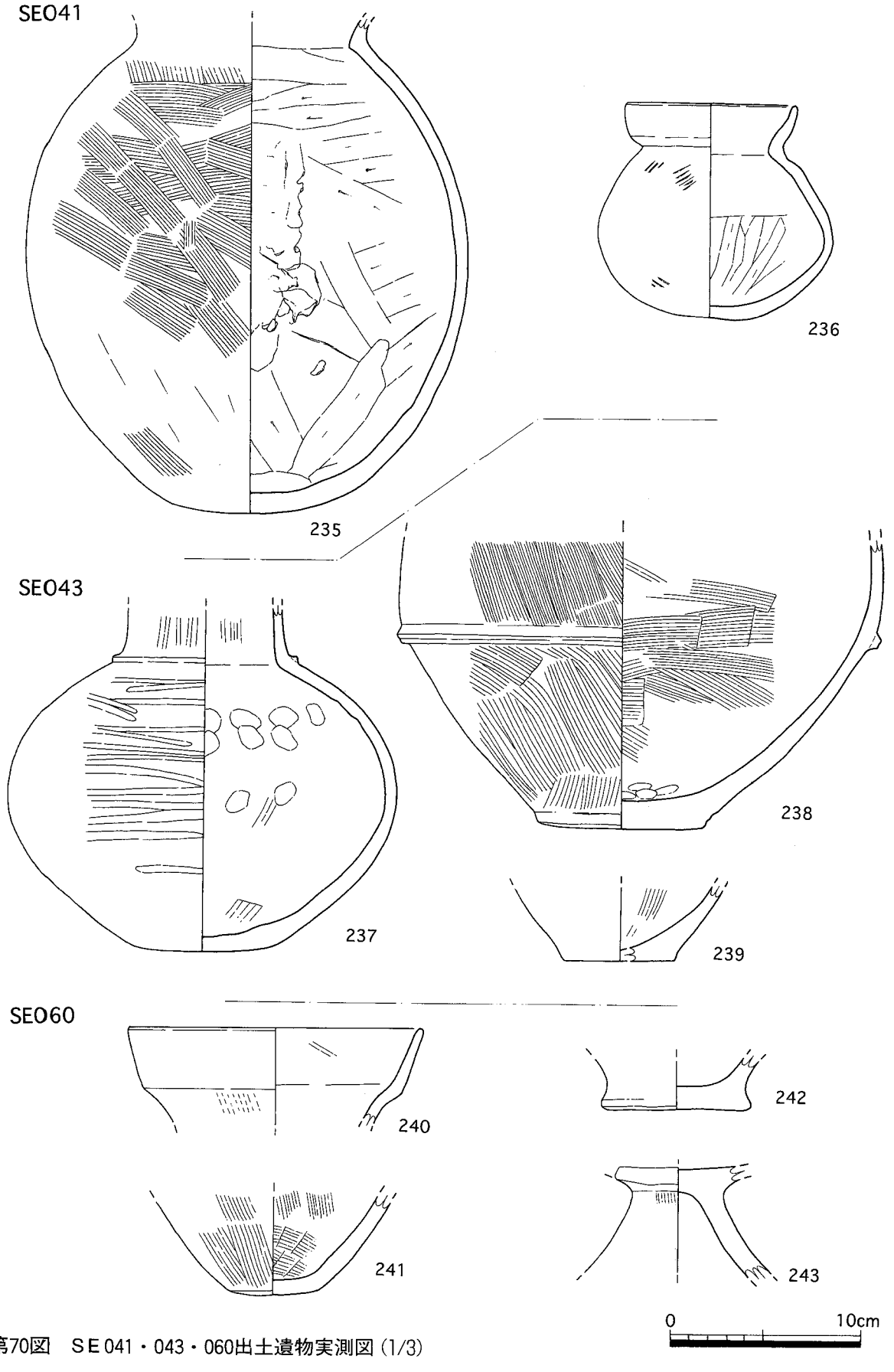
コンテナ１箱の弥生土器が出土した。上層で須恵器２点が混入する。**237**は壷である。復元値で頸部径9.6cm、胴部最大径20.2cm、残高17.9cm、底径7.2cmを測る。頸部に断面三角形の突帯が１条めぐり、胴部外面には幅広の磨きを施す。**238**は複合口縁壷の底部である。底径8.8cm、残高15.0cmを測る。厚い平底で胴部下方に断面台形の突帯がめぐる。外面に縦刷毛、内面に横刷毛を施し、内底に指頭痕が残る。**239**は小型壷の底部か。復元底径6.0cmを測る。

ＳＥ０４６号井戸（第67図）

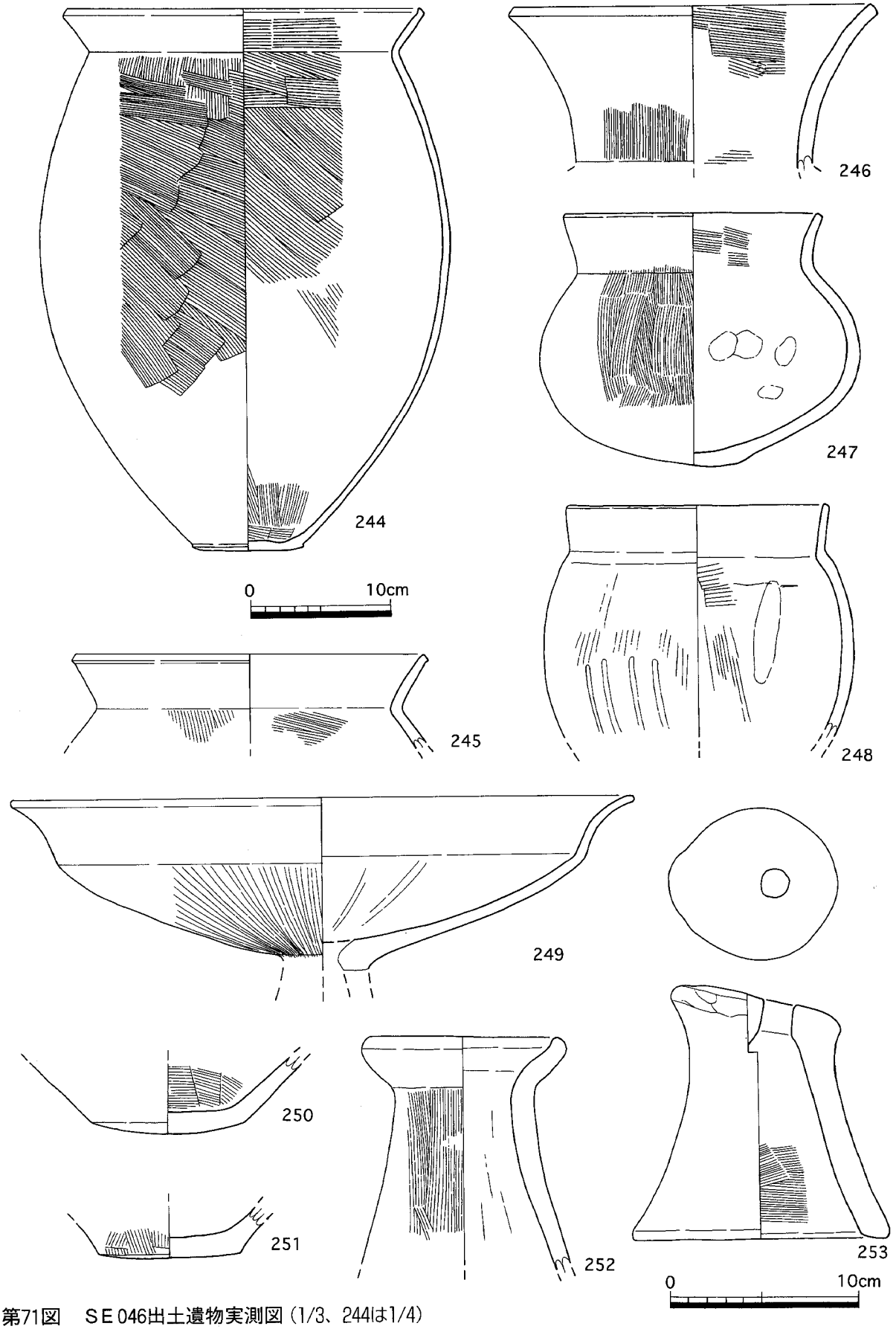
調査区中央の段差下で検出した。長軸1.6ｍ、短軸1.3ｍの不整形プランをなし、深さ130cmを測る。埋土は黒褐色で八女粘土の小ブロックが混じる。深さ30cmで、大型精製高坏の坏部完形品が正置された状態で出土、その直下で甕が出土した。中層で自然木５本、底面からは壷が出土した。出土遺物より弥生時代後期後半に位置付けられる。

出土遺物（第71図）

コンテナ６箱の遺物が出土した。弥生土器が主であるが、上面出土遺物には古代瓦や須恵器が混入する。**244**は大型甕である。復元口径25.8cm、器高39.0cm、底径8.0cmを測る。長胴で、く字状口縁は端部を面取りし、内側に稜をもつ。内外面ともに細かい刷毛目を施し、薄手のつくりである。外面に煤が付着する。**245**は甕の口縁部である。復元口径19.0cmを測る。く字状口縁で内外面とも刷毛目のち横ナデを施す。**246**は広口壷である。外反しながら高く立ち上がり、口縁端部は面を持つ。復元口径19.6cm。**247**は壷である。口径13.9cm、器高13.6cmを測る。凸レンズ状の底部で、胴部外面に細かい横刷毛を施し、内面には指頭痕が残る。外底に黒斑を有する。**248**は小型甕か。口径14.0cmを測る。口縁部は直立する。外面は刷毛目の後、下半に縦方向の磨きをまばらに施す。内面は刷毛目と指ナデで調整する。**249**は大型精製高坏である。坏部のみが完形で出土した。口径33.1cmを測る。坏底から内湾しながら立ち上がり、屈曲した後、口縁部は外湾する。内外面に放射状の磨きを施す。とくに外面の磨きは密である。**250・251**は底部片である。**250**はレンズ状の底部で、底径8.2cmを測る。

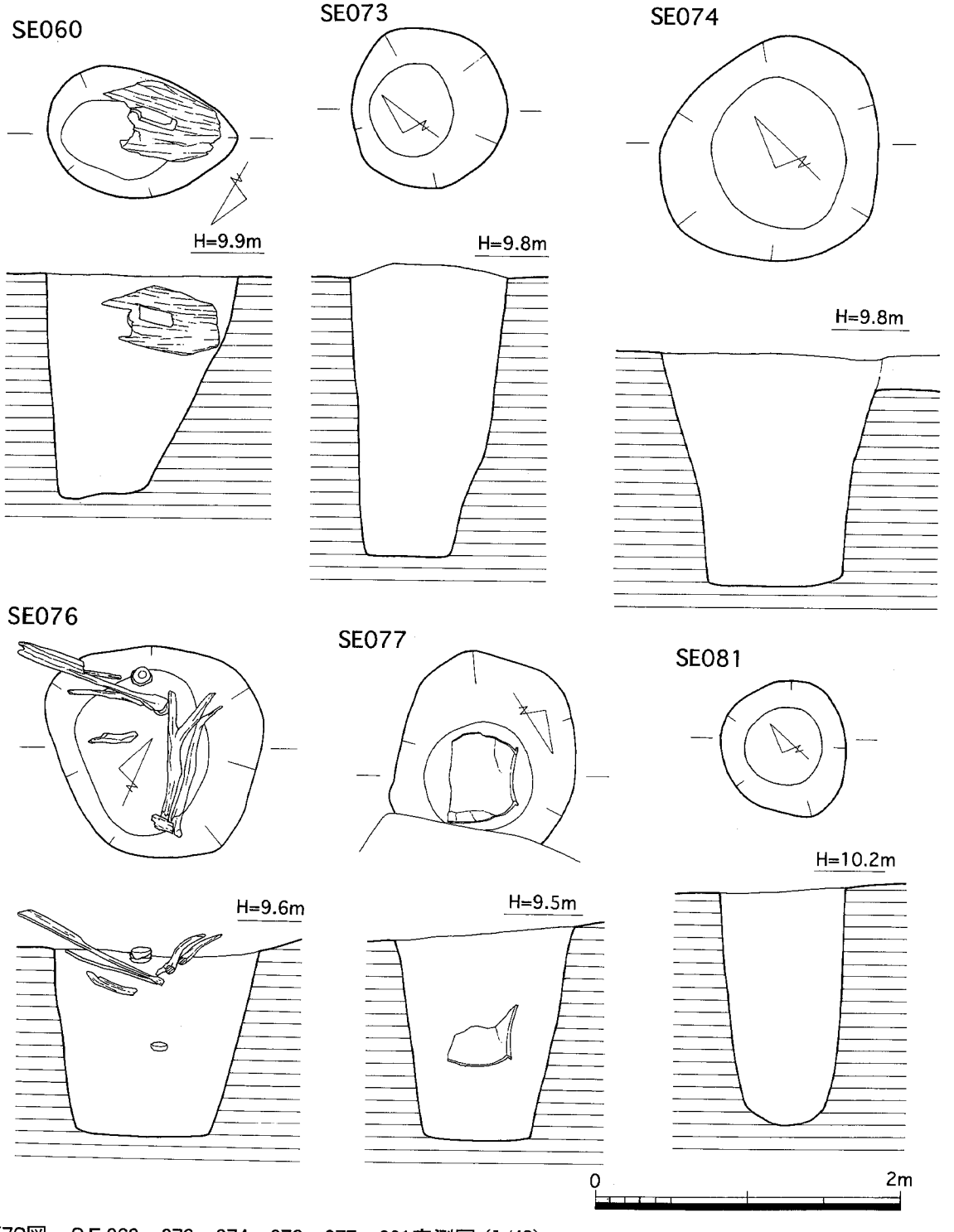


第70図　ＳＥ041・043・060出土遺物実測図（1/3）



第71図　ＳＥ046出土遺物実測図（1/3、244は1/4）

内底に簾状刷毛を施す。**251**は平底でやや外湾しながら立ち上がる。外底に煤が付着する。**252**は器台である。受け部は内湾し、口径10.8cmを測る。**253**は支脚である。底径13.6cm、器高13.6cmを測る。いわゆる沓形器台で頂部の突起は発達せず、中央に円孔を穿つ。内面に横刷毛を施す。頂部の突起周辺に煤が薄く付着する。



第72図　SE060・073・074・076・077・081実測図（1/40）

ＳＥ０６０号井戸（第72図）

ＳＥ０４５の南西に隣接する。長軸1.3m、短軸0.8m、深さ1.4mの楕円形の井戸である。西壁がやや傾斜しており、底面は0.8m×0.5mの楕円形プランを呈する。埋土は黒色土。1.1mの深さで湧水する。上層からネズミ返し状の建築材が出土した。80cm×50cm程度で中央に長方形の穴を開ける。整理作業の段階で紛失してしまった。また、底から二重口縁壷が出土した。出土遺物より古墳時代初頭に位置付けられよう。

出土遺物（第70図）

コンテナ２箱分の遺物が出土した。弥生土器・古式土師器が主で、土師器・古代瓦が少量混入する。**240**は二重口縁壷の口縁部で、口径15.4cmを測る。屈曲後やや外傾して立ち上がる。**241**は壷の底部で底径4.6cmを測る。外面に縦刷毛、内底に簾状刷毛を施す。畿内Ｖ様式系統の土器。**242**は甕もしくは壷の底部である。底径7.8cmを測る。**243**は高坏である。脚部が大きくハの字に開く。

ＳＥ０７０号井戸（第67図）

ＳＥ０６０の西側に位置する。検出面の径2.2m、深さ1.2mを測る略円形の井戸である。上層の北側で土器が集中して出土。自然木１本も出土した。中層でも若干の土器が出土したが、下層からは出土していない。出土遺物より弥生時代後期後半に位置付けられる。

出土遺物（第73図）

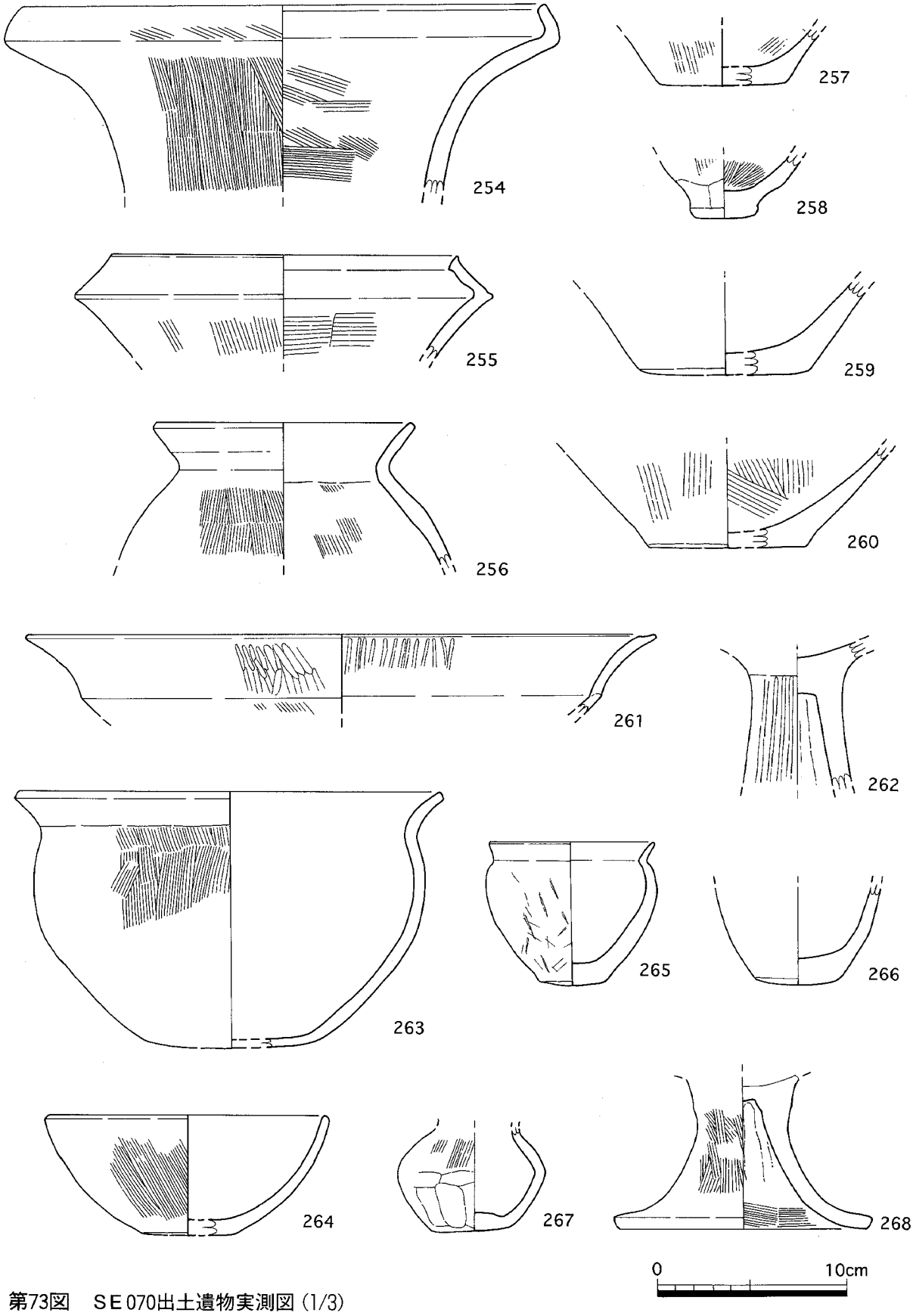
コンテナ２箱の土器が出土した。**254・255**は複合口縁壷である。いずれも口縁端部は内傾する。外面は縦刷毛、内面は横刷毛を施した後、横ナデする。254は復元口径29.0cmを測り、屈曲部は丸みを帯びる。255は復元口径22.0cmを測る。**256**は壷である。口縁部は直線的に外に開き、胴部は内外面とも刷毛目を施す。復元口径13.8cmを測り、外面に煤が付着する。**257～260**は甕もしくは壷の底部片である。258は底部から立ち上がる部分を指で強く押さえており、この部分が内側にへこむ。**261**は大型精製高坏の口縁部である。口縁部は屈曲後外湾し、内外面ともに縦方向の磨きを施す。復元口径33.0cmを測る。胎土は精緻で焼成はやや硬質、浅黄色を呈する。**262**は高坏の脚部である。外面に磨きを施す。**263**は大型の鉢である。平底で、口縁部は外反し端部は面をもつ。復元口径22.4cm、器高13.5cm、底径9.0cmを測る。外面上半に細かい刷毛目を施し、他の部分はナデ調整で仕上げる。**264**は鉢である。平底の底部から内湾しながら立ち上がりそのまま口縁にいたる。復元口径14.8cm、器高6.3cm、底径5.0cmを測る。外面に縦刷毛、内面にナデを施す。**265・266**は小型の鉢である。265は復元口径8.6cm、器高7.5cm、底径3.6cmを測る。外面に砂粒の動きが認められるが、面ではなく線的で、棒状の工具で削ったものか。内面はナデ調整。**267**は手づくねの小壷である。手づくね成形後、外面上半に縦刷毛を施す。**268**は脚付土器の脚部である。

ＳＥ０７３号井戸（第72図）

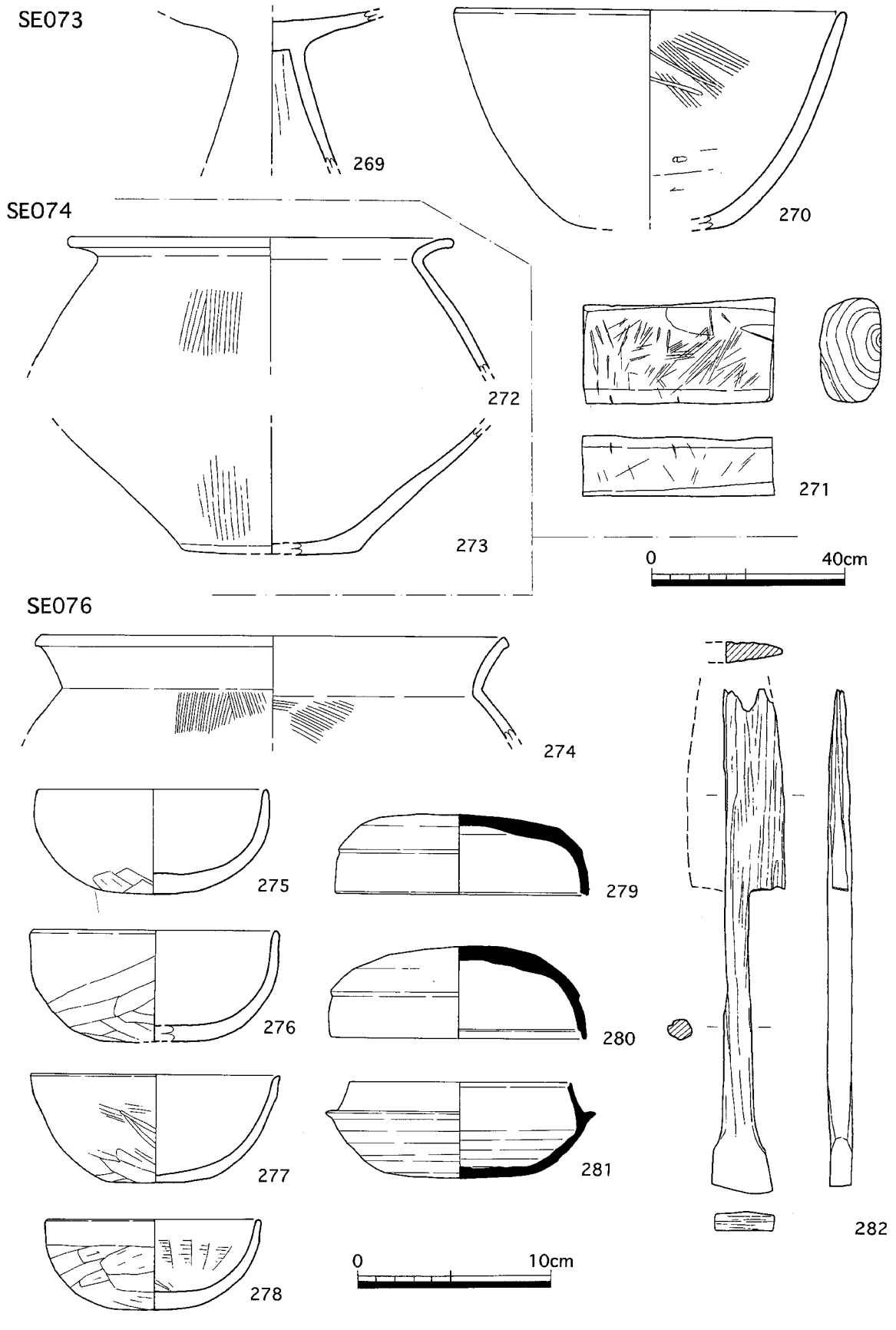
調査区北壁沿いに位置しＳＤ０３１と接する。検出面の径1.0m、深さ1.9mを測る円形の井戸である。底面での平面形は50cmを測る。

出土遺物（第74図）

コンテナ１箱の土師器が出土した。**269**は高坏である。脚柱は直線的に開く。器壁は薄く、灰白色を呈する。**270**は鉢である。復元口径20.2cm、器高11.5cmを測る。外面は磨滅し調整不明。内面は上半に刷毛目、内面に横方向の削りを施す。**271**は枕形木製品である。上面に集中して、鋭利な刃物でつけた線状の傷がつく。裏面には全く傷がついていない。



第73図　ＳＥ070出土遺物実測図 (1/3)



第74図　ＳＥ073・074・076出土遺物実測図（1/3、271･282は1/12）

ＳＥ０７４号井戸（第72図）

ＳＥ０７３の西側に隣接し、ＳＤ０３１を切る。検出面での径1.4～1.5ｍ、深さ1.5ｍを測る円形の井戸である。壁は途中まで狭まっていくが、底面から60cmほどの高さまでは垂直に近い。底面では径1.0ｍを測る。

出土遺物（第74図）

少量の弥生土器が出土した。**272**は甕の口縁部である。短い口縁部は強く外湾し、逆L字状になる。復元口径20.0cmを測り、胎土は精良で薄手のつくりである。**273**は甕の底部で、復元底径9.2cmを測る。薄い平底で外面は縦刷毛、内面はなめらかになでる。

ＳＥ０７６号井戸（第72図）

ＳＥ０７０の西に隣接し、ＳＤ０３１を切る。検出面で径1.4ｍの不整形プランを呈し、検出面からの深さは120cmを測る。上層で土器・木製鋤・自然木が出土した。須恵器坏蓋を逆置して、その中に土師器椀を入れ込んだ状態で土器が出土した。中層でも須恵器坏蓋が１点出土した。出土遺物より古墳時代後期前半に位置付けられる。

出土遺物（第74図）

コンテナ１箱の土師器、須恵器、弥生土器が出土した。須恵器・弥生土器はごく少量である。

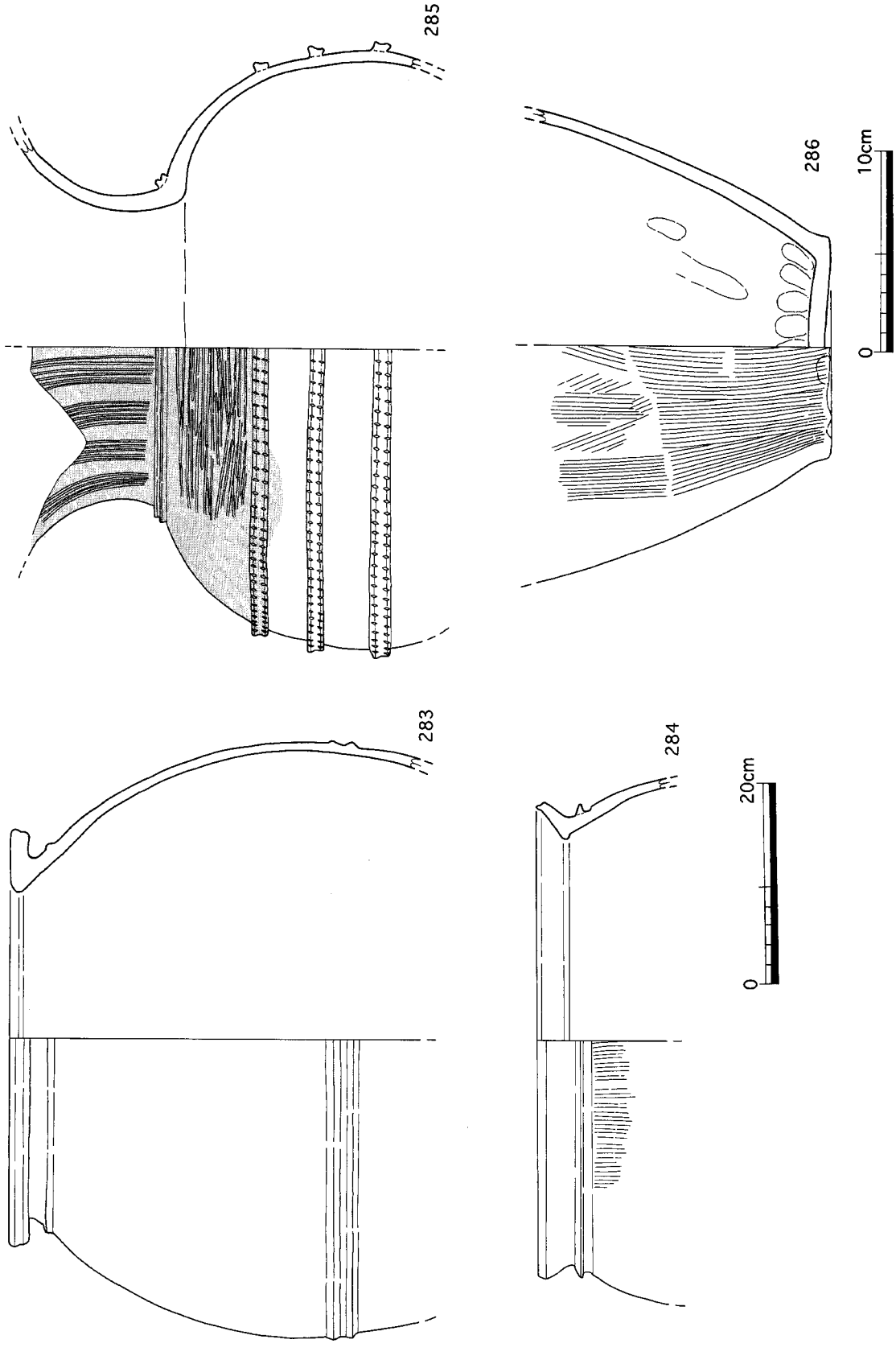
274は弥生土器の甕の口縁部である。く字状口縁で口縁端部を小さく外につまみ出す。内面に横刷毛を施す。**275～278**は土師器の椀である。275・278は完形品である。口径は11.1～12.8cm、器高5.4～5.8cmを測る。外面は下半を削った後口縁部を横ナデ、内面は横刷毛あるいはナデで調整する。**279～281**は須恵器である。**279**は坏蓋である。完形品で口径13.0cm、器高4.1cmを測る。天井部は平坦で、口辺部との境に稜を持つ。口縁端部内側にも稜をもつ。天井部に自然釉が付着する。**280**は坏蓋である。ほぼ完存し、口径13.2cm、器高4.8cmを測る。天井部はやや丸みを持ち、口辺部との境に稜を有する。口縁端部内面にも稜をもつ。天井部に自然釉が付着する。**281**は坏である。口径13.8cm、器高5.0cmを測る。底部は平坦で、回転ヘラ削りによる稜がはっきりと残る。立ち上がりは長くやや内傾し、端部内側に稜を有する。これらの蓋坏は中村編年Ⅱ－２段階にあたる。**282**は木製の鋤である。柄の部分は円形で、鋤の刃の部分は半分が欠損する。残長104.6cmを測る。

ＳＥ０７７号井戸（第72図）

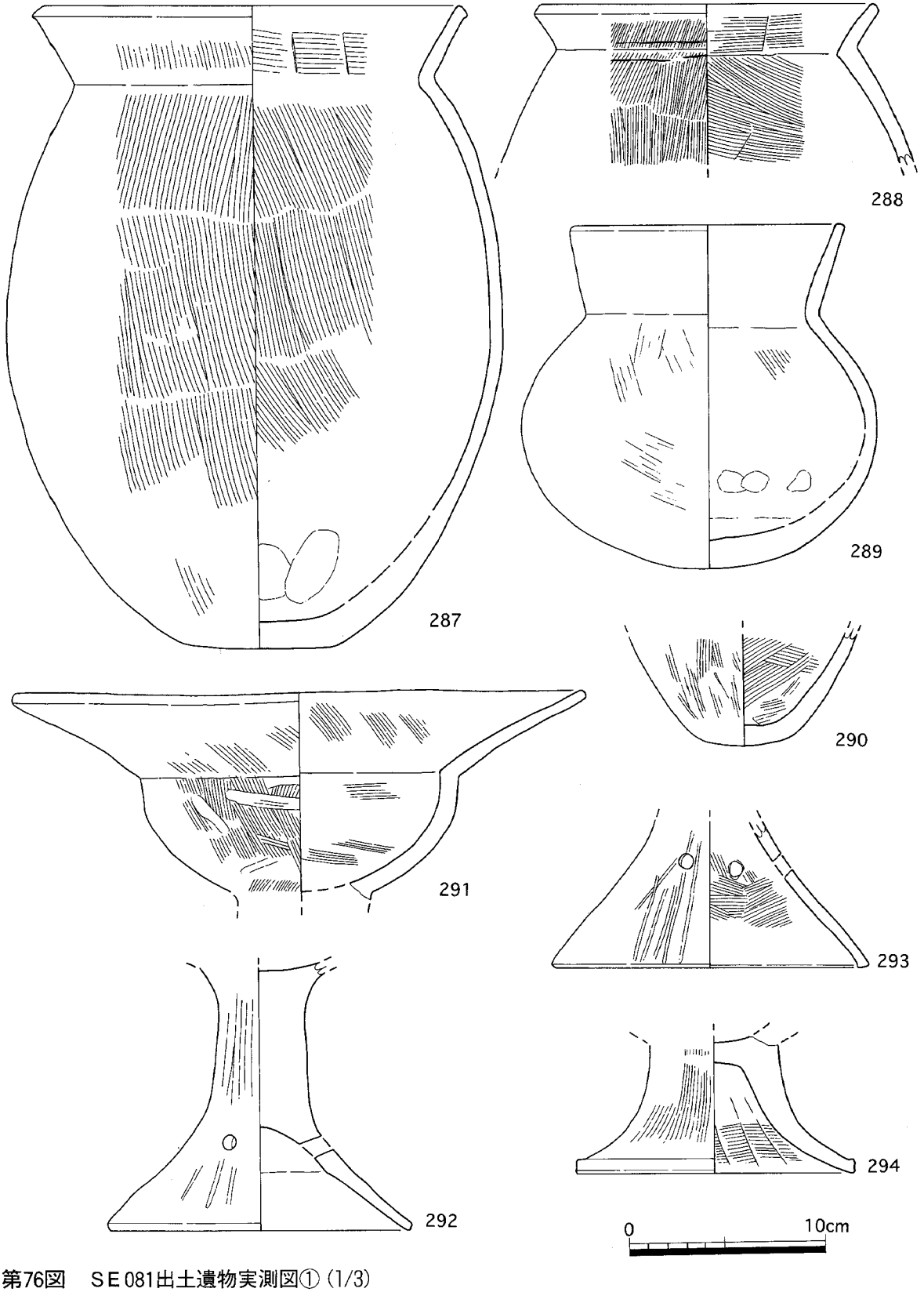
ＳＤ031の北西部分と重複する井戸・土壙群の１つである。ＳＫ０７５に切られ、ＳＤ０３１とも切り合っているが、こちらの先後関係は不明である。検出面で長軸1.2ｍ以上、短軸1.1ｍの不整形プランを呈し、検出面からの深さは1.4ｍを測る。埋土は灰色がかった黒色粘質土である。深さ70cmで大量に湧水し、ほぼその高さで甕棺の破片が出土した。更にその下層から大型精製壷、甕棺片が出土したが、湧水が激しく図化できなかった。甕棺、大型精製壷は破片が揃わず、二次的な投棄によるものであろう。

出土遺物（第75図）

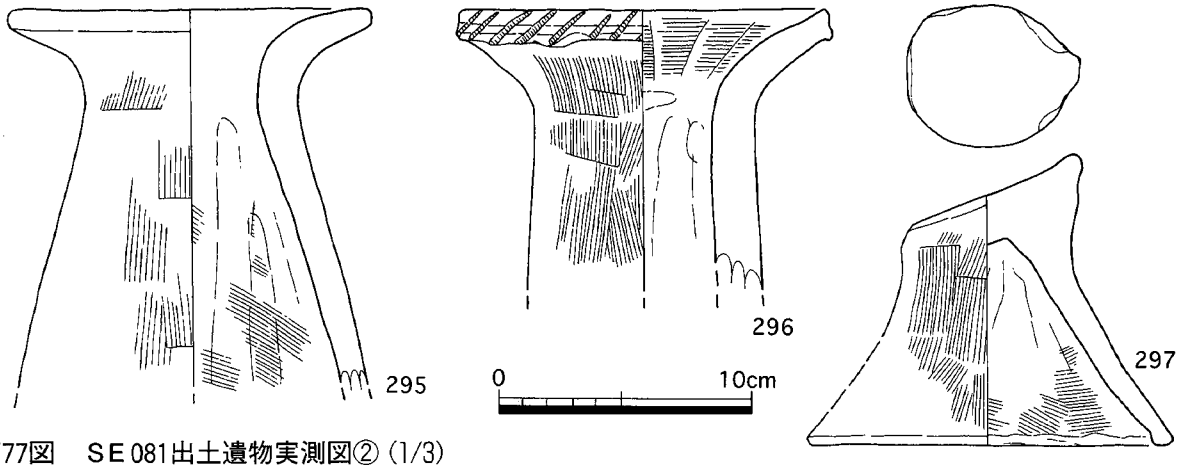
283は甕棺である。口縁部は逆L字状で上面は水平である。頸部に１条、胴部に２条の断面三角形の突帯がめぐる。口径が小さいため、体部は丸みを帯びる。復元口径40.6cm、胴部最大径59.2cmを測る。口縁部形態、突帯は弥生時代中期後半の立岩式の特徴をもつ。**284**は甕棺の口縁部である。く字状口縁の内側がやや突出し、外側には細く高い突帯が1条めぐる。復元口径47.4cmを測る。弥生時代後期前半の桜馬場式である。外面に煤が付着する。**285**は大型丹塗精製壷である。頸部は直立後外



第75図　ＳＥ077出土遺物実測図（1/4、286は1/3）



第76図　ＳＥ081出土遺物実測図①（1/3）



第77図　ＳＥ081出土遺物実測図②（1/3）

湾していく。頸部の付け根に１条、体部に３条の断面M字形の突帯をめぐらす。体部の突帯は指で強くなでて凹面をつくった後、板で刻目を入れる。凹部には板が当たらず図のような刻目を呈する。頸部には５、６本単位の縦磨きを等間隔で施し、暗文をつくる。体部の１番上の突帯より上に細かい横磨きを密に施し、頸部からこの部分まで丹を塗っている。それ以下は横ナデで仕上げる。内面はなめらかになでている。弥生時代中期後半のもの。**286**は甕の底部である。外面には縦刷毛を施し、内面底部からの立ち上がりには指頭痕が残る。

ＳＥ０８１号井戸（第72図）

調査区中央の段差の下、北寄りに位置する。検出面での径0.8～0.9ｍ、深さ1.5ｍの円形の井戸である。壁は直立し、底面は径50cmの円形を呈する。出土遺物より弥生時代終末に位置付けられる。

出土遺物（第76・77図）

コンテナ３箱の弥生土器が出土した。**287**は甕である。ほぼ完存し口径22.0cm、器高32.8cm、底径8.0cmを測る。底部は平坦面をもつが体部との境は明瞭ではない。胴部は長胴化し内外面とも縦刷毛調整をおこなう。外面に濃く煤が付着するが、胴部の下１／３にはまったくつかない。この部分は煮炊きのとき土中に埋めていたのか。**288**は甕の口縁部で、復元口径17.6cmを測る。胴部外面に縦刷毛、内面に右下がりの刷毛目を施し、頸部内面の稜がしっかりしている。外面に煤が付着する。**289**は直口壷である。完形品で口径14.0cm、器高17.6cmを測る。外面は細かい刷毛目、内面は上半を刷毛目で調整し、下半に指頭痕が残る。底に黒斑を有する。**290**は壷の底部である。内外とも刷毛目を施すが、雑で器面の凹凸が目立つ。底に黒斑を有する。**291**は高坏である。半球形の坏部から口縁が外に大きく開く。復元口径29.0cmを測り、内外面とも刷毛目を施す。**292**は高坏の脚部である。底径15.4cmを測る。脚柱は中実で裾がハの字に開く。透かし孔を３つ有する。**293**は高坏の脚部である。ハの字形に開き、透かし孔を有する。外面に縦方向の磨き、内面に刷毛目を施す。胎土は砂粒をまばらに含むが焼成は良好である。**294**は脚付土器の脚部である。底径14.2cmを測る。内外面ともに刷毛目を施す。**295・296**は器台である。295は復元口径14.4cmを測り、受け部はゆるやかに外反する。外面は縦刷毛、内面は指で整えた後、下半に刷毛目を施す。**296**は受け部に板の小口で斜め方向の刻目をつける。復元口径15.0cmを測る。外面にうすく煤が付着する。**297**は支脚である。復元底径14.6cm、器高11.6cmを測る。頂部は円形で傾斜は急である。先端に小突起がつく。

4）土壙

調査区西側の段差下において15基の土壙を検出した。

ＳＫ０３５号土壙（第78図）

調査区南壁沿い、ＳＥ０４１の西で検出した。長軸180cm、短軸130cmの楕円形を呈し、深さは約60cmを測る。東側壁面に１段ステップがつく。埋土は黒褐色の粘質土である。

出土遺物（第79図）

コンテナ１箱分の遺物が出土した。弥生土器と土師器、須恵器４点出土した。**298～301**は弥生土器である。**298**は壷の口縁部片である。外反し端面はナデにより中央が窪む。内面は横刷毛、外面は横ナデで調整し灰白色を呈する。**299・300**は平底の底部片である。**301**は脚付壷の脚部ある。**302～305**は土師器である。**302**は鉢である。復元口径23.8cm、器高10.7cmを測り、底部は削る。**303**は高坏の坏部である。復元口径19.2cmを測る。平坦な坏底から屈曲し、口辺部は外反する。脚との接合部に粘土が突出する。**304**は甕の口縁部片である。**305**は丸底の底部片。**306**は小型器台の脚部である。内外面とも細かい磨きを密に施し、復元底径9.0cmを測る。

ＳＫ０３６号土壙（第78図）

ＳＫ０３５から西へ４ｍ、ＳＤ０３１溝の東側に隣接する。1.1ｍ四方の隅丸方形で、その西壁に幅0.6ｍ、奥行き0.5ｍの張り出し部がつく。深さは20cm（張り出し部は15cm）である。埋土は粘性の強い黒色土で、検出段階で遺構上面に高坏を含む土器片が面的に広がるのを確認した。埋土の土質から当初井戸かと予想されたが、実際には浅く土壙であった。

出土遺物（第79図）

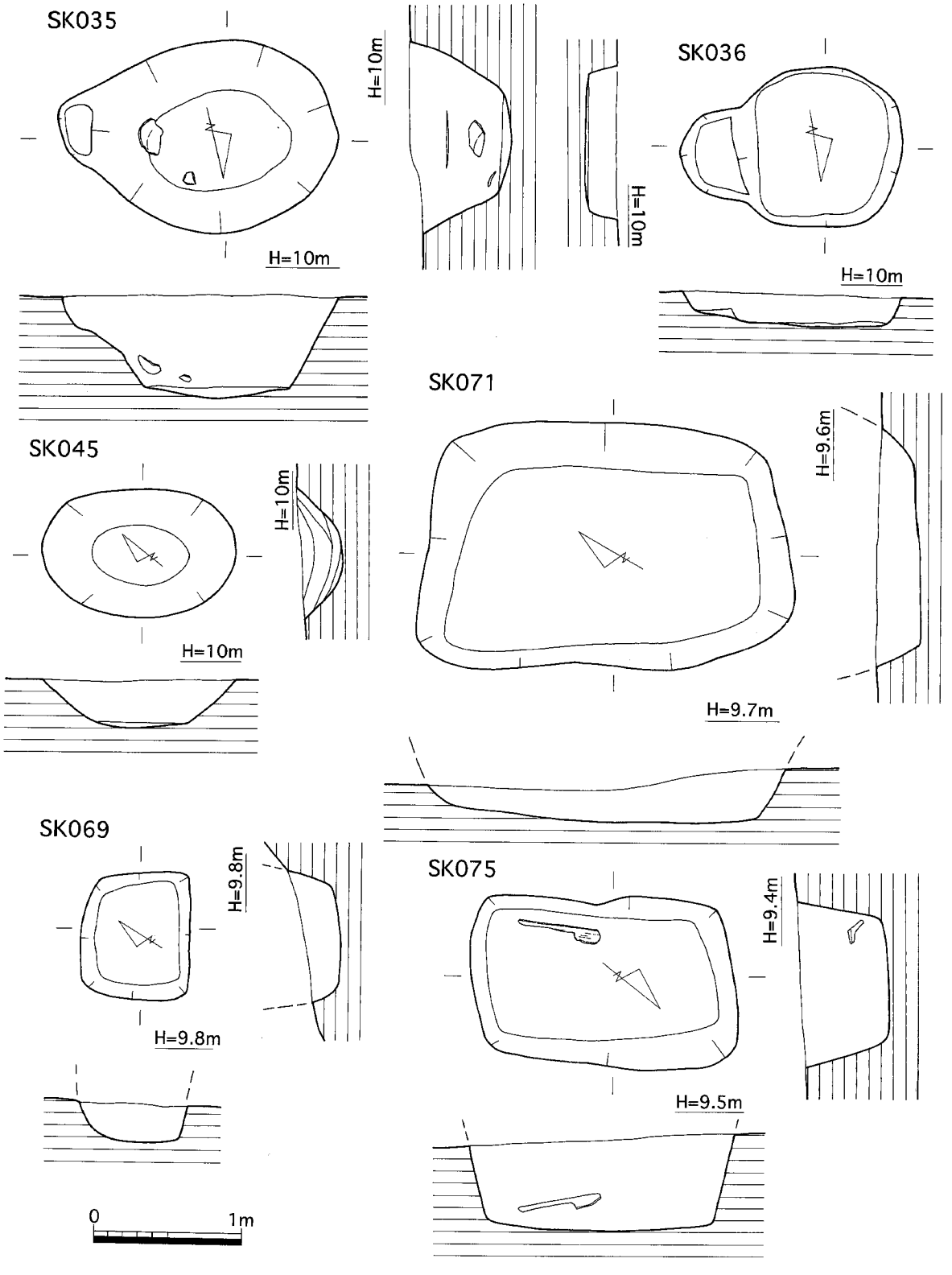
コンテナ２箱分の遺物が出土した。土師器がほとんどで須恵器が３点含まれる。**307**は甕の口縁部である。口径15.8cmを測り、口縁部は直線的に開き、端部を平坦に面取りする。内面は口縁に右下がりの刷毛目を施し、頸部に指頭痕が残る。灰白色を呈する。**308**は小型丸底壷である。外面に刷毛目、内底に指圧痕が残る。つくりは粗雑である。**309**は単孔の甑である。**310**は椀である。ほぼ完存し、口径13.4cm、器高4.8cmを測る。**311・312**は高坏の坏部である。平坦な坏底から口辺部が内湾して立ち上がる。311の口縁は端部を丸くおさめるのに対し、312の口縁端部は外反する。**313**は高坏の脚部である。底径14.0cmを測る。脚柱は直線的に開き裾部で折れ、透かし穴を有する。

ＳＫ０３８号土壙（第80図）

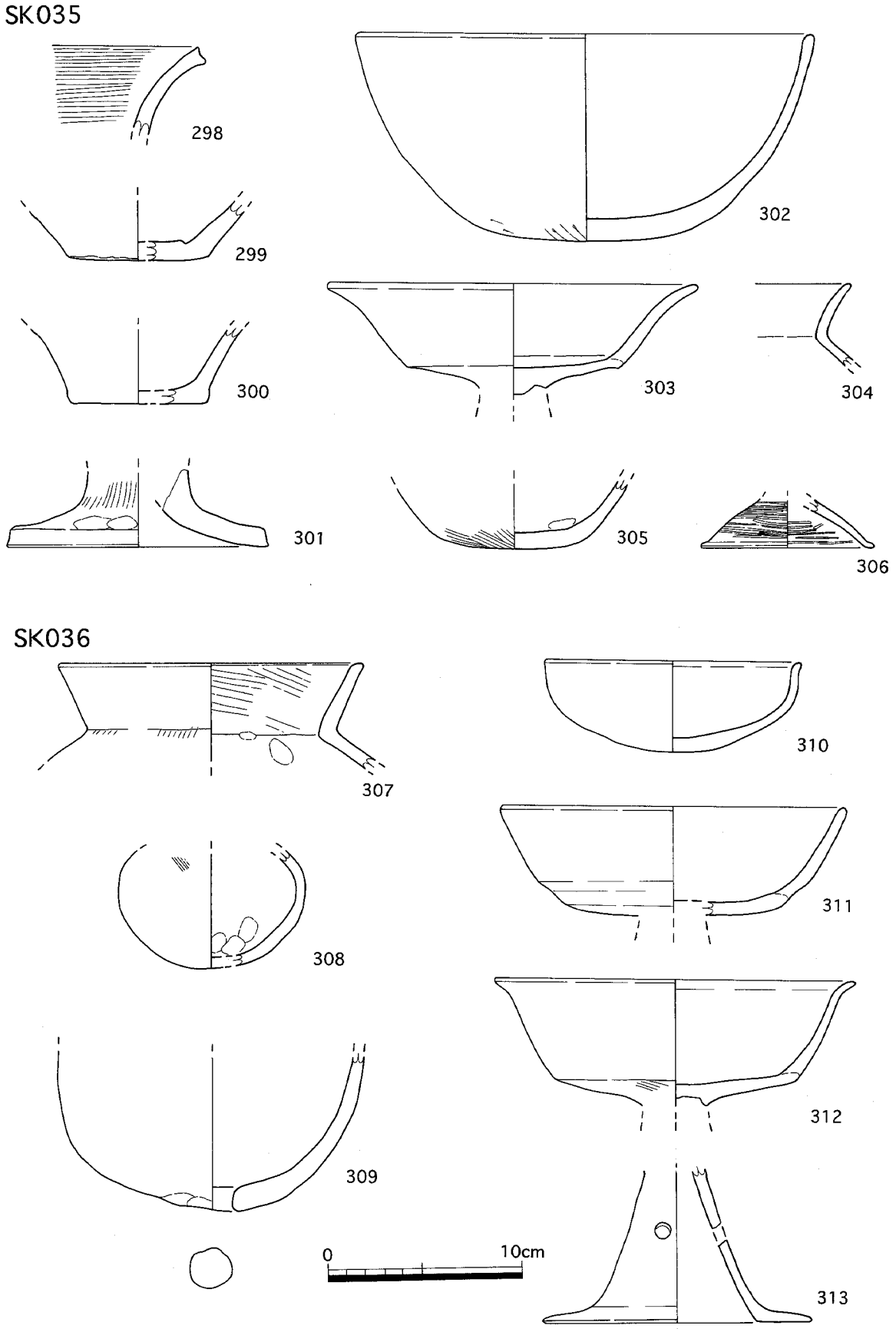
ＳＢ０４９の西に位置する。径1.3ｍ、深さ105cmの円形土壙である。埋土はローム小粒および八女ブロックを少量含む黒色土である。底面からやや浮いた高さで甕、高坏、小壷がまとまって出土、また、検出面－10cmのレベルでガラス小玉１点が出土した。出土土器から古墳時代前期後半に位置付けられる。

出土遺物（第81図）

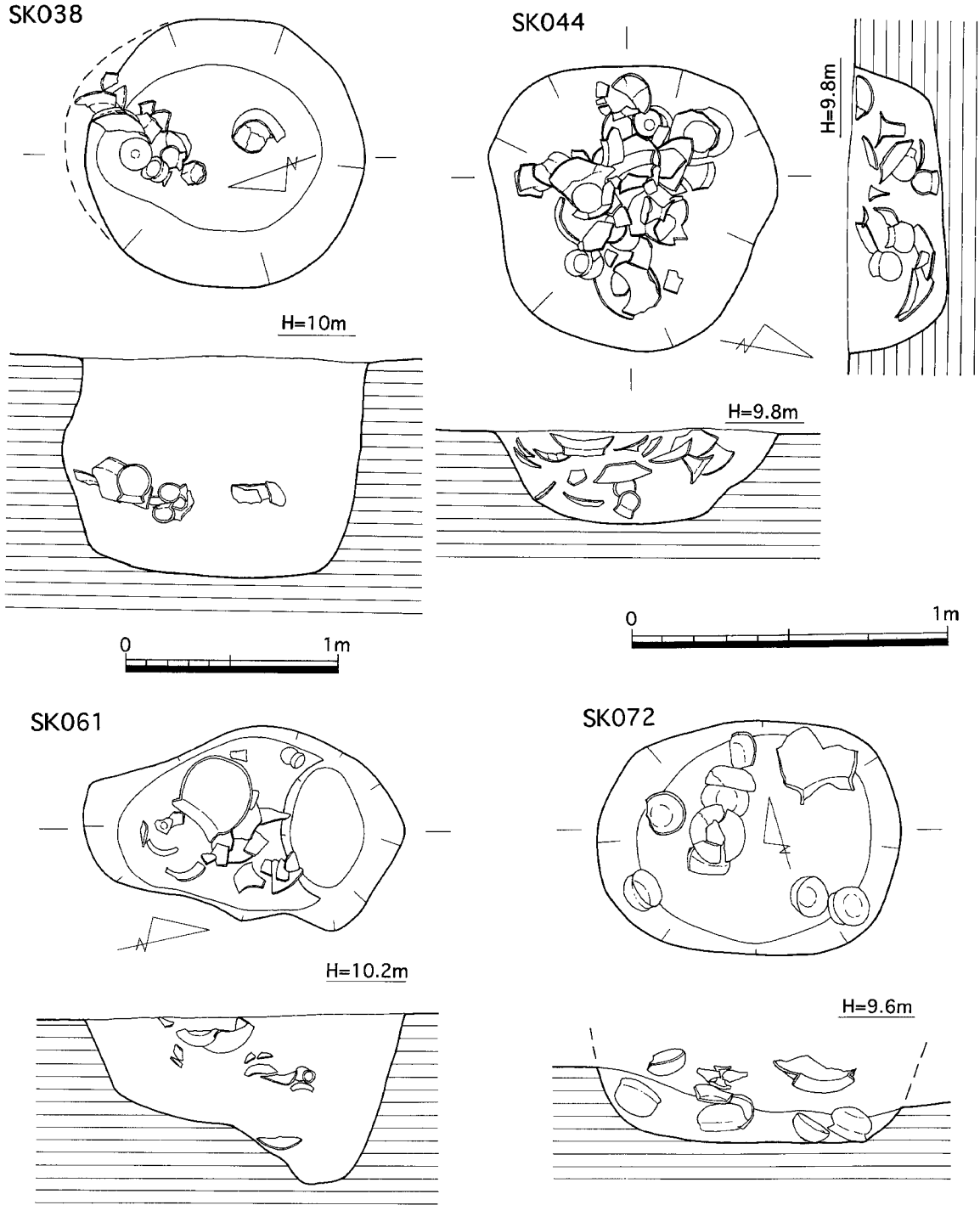
コンテナ２箱の土師器が出土した。古代瓦３点が混入する。**314～317**は甕である。**314**は口縁部を欠く。最大径部が高い位置にある長胴のもので、底は凸レンズ状をなす。内外面とも刷毛目を施し、外面底部付近を削り上げる。**315**は復元口径12.8cmを測る。口縁部は直線的に外傾し端部は面をもつ。胴部は球形で、胴部外面は縦および斜めの刷毛目のあと、肩を横ナデする。胴部内面は下半を削るが、上半には粘土紐積上げの痕跡が残る。外面に煤が付着する。**316**は布留甕である。完形品で口径11.8cm、



第78図　SK 035・036・045・069・071・075実測図 (1/40)

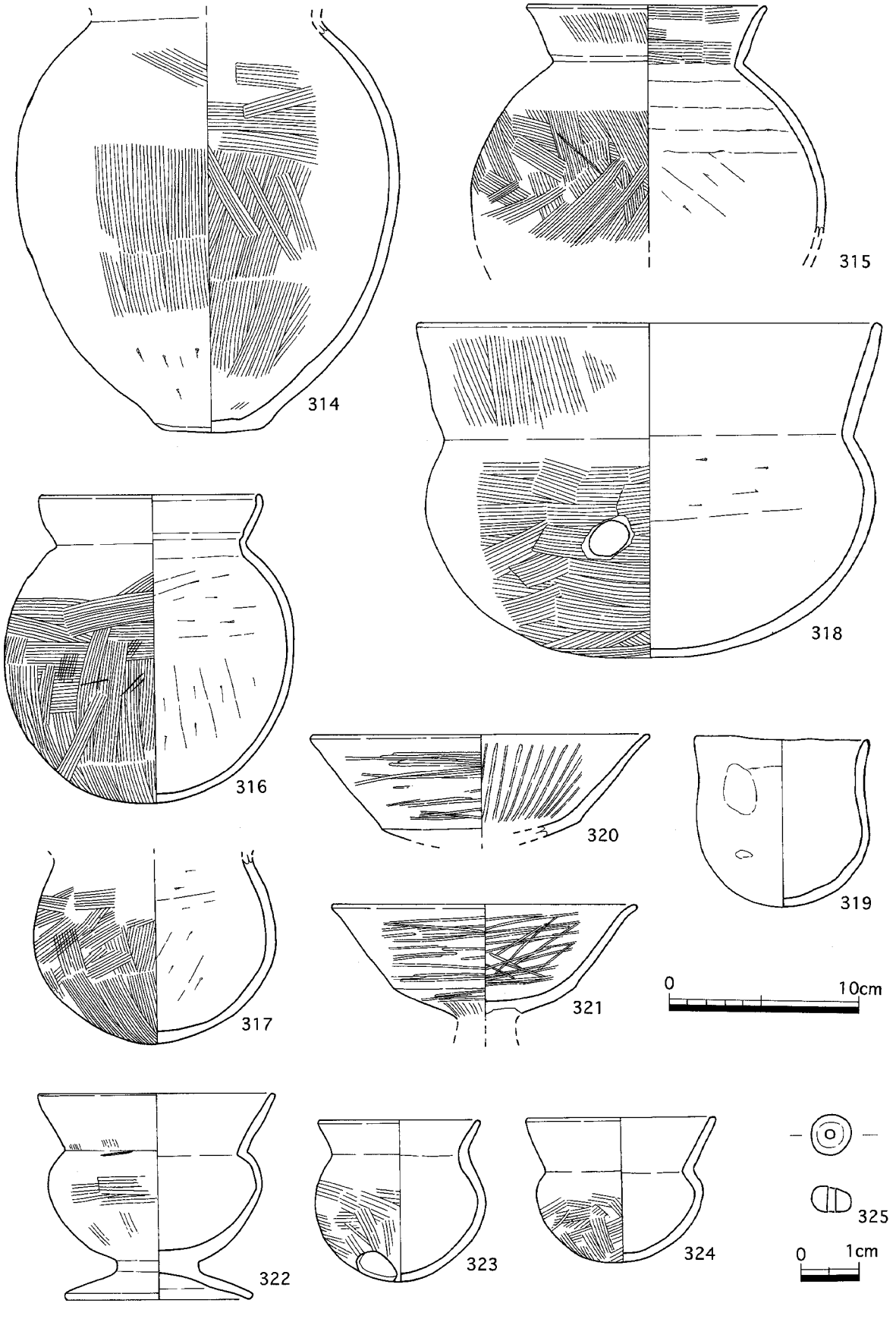


第79図　ＳＫ035・036出土遺物実測図（1/3）



第80図　SK038・044・061・072実測図（038は1/30、ほかは1/20）

器高16.1cmを測る。胴部は球形で、口縁部は内湾する。器壁はうすく、外面は全体に細かい刷毛目を施した後、肩を横ナデ、内面は削りで調整する。外面と内底に煤が付着する。**317**は布留甕である。球形の胴部で、外面は縦刷毛の後、肩に横刷毛、内面は削り調整する。内外面に煤が付着する。**318**は鉢である。完形品で口径24.4cm、器高17.5cmを測る。丸底で横長の胴部から口縁が外傾して立ち上がる。外面は口縁を縦刷毛、胴部を横刷毛、内面は胴部を削りで調整し、口縁部を横ナデして仕上げる。胴部に1箇所内側から穿孔する。**319**は小型鉢である。手づくねで成形している。丸底で、口



第81図　SK038出土遺物実測図（1/3、325は1/1）

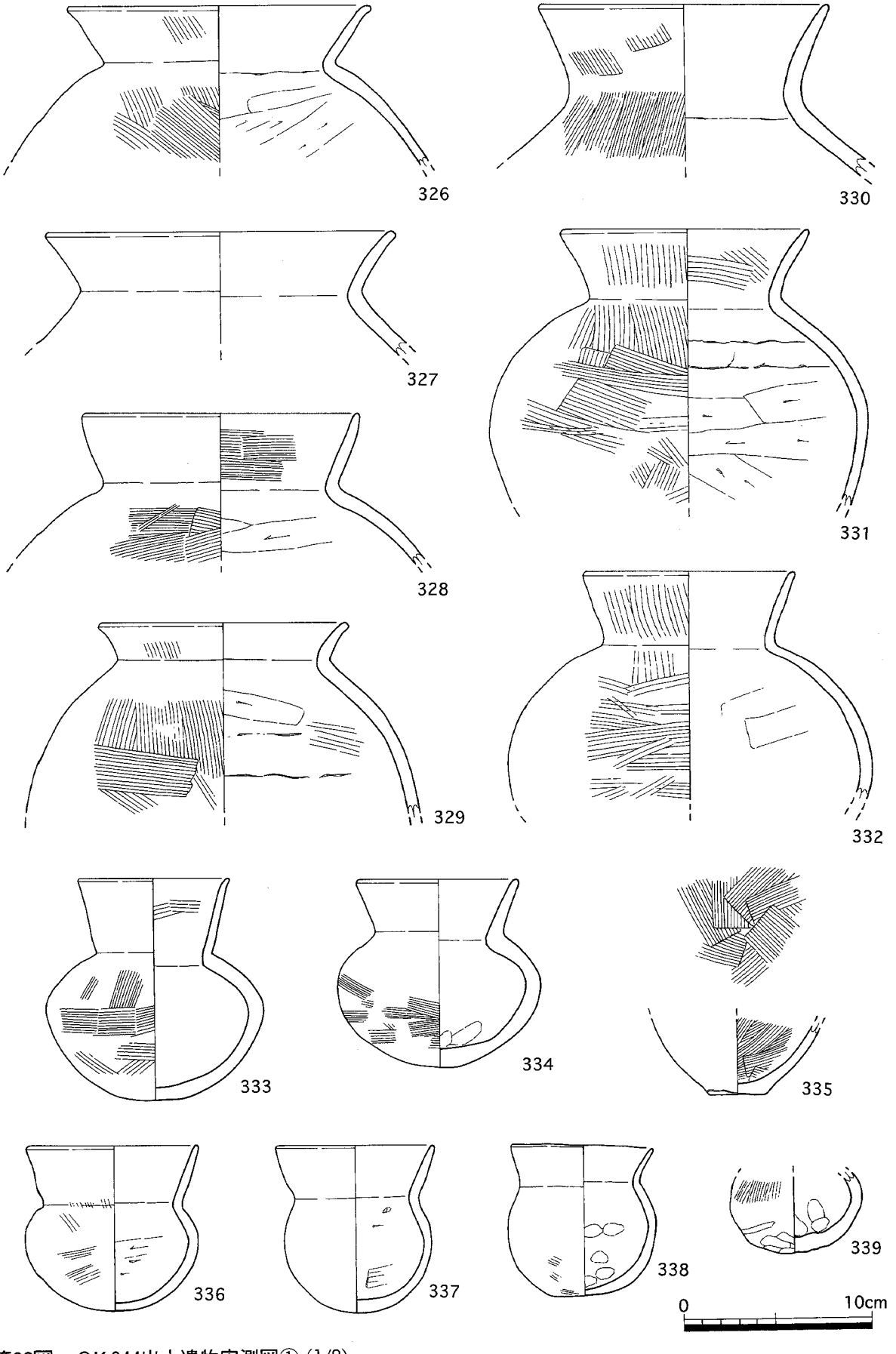
縁はわずかなくびれを経てそのまま直立する。口径9.2cm、器高8.9cmを測る。器表は磨滅する。**320・321**は高坏の坏部である。口辺部が直線的に開く器形である。内外面に細い磨きを施す。**320**は口径17.8cmで、内面は放射状の磨きで暗文を呈する。**321**は口縁部がひずんでおり16.0～16.4cmを測る。内面の磨きは方向がでたらめで、器表面に砂粒が多く残っている。磨きにしては精製品の感じがしない。**322**は脚付壷である。口径12.4cm、器高10.8cm、脚径9.8cmを測る。脚部は低く外にハの字に開く。外面に煤が付着する。**323・324**は小型丸底壷である。**323**は完形品で口径8.4cm、器高8.5cmを測る。胴部は球形で、口径と胴部径がほぼ等しい。外面は刷毛目、内面は削り。胎土は砂粒が多く含まれる。底部に穿孔する。**324**は完形品で口径10.0cm、器高7.6cmを測る。口縁部径が胴部最大径よりも大きい。体部外面は刷毛目、内面はなめらかになでる。**325**はガラス玉である。径７mmを測り、色はコバルトブルーを呈する。

ＳＫ０４４号土壙（第80図）

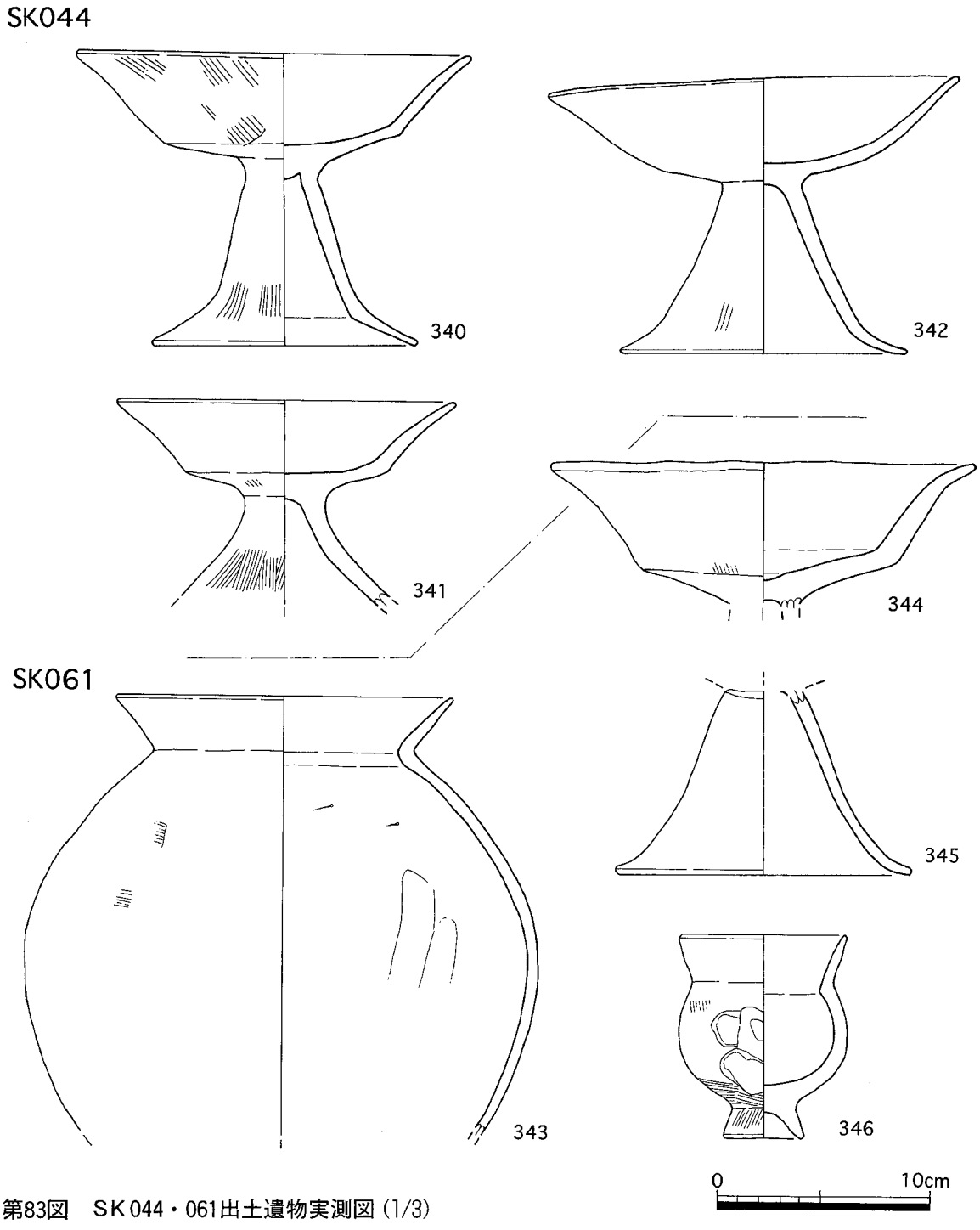
ＳＫ０３８の北西４ｍに位置する。径0.9ｍ、深さ30cmの不整円形の土壙である。埋土は黒褐色を呈する。埋土中から大量の甕、壷、高坏等が出土した。小さく浅い土壙にも関わらず、図化できる土器だけでも17点を数える。土器は無秩序に投げ入れられている。完形に接合できる土器も複数あり、使用できなくなった土器の廃棄土壙とも考えにくい。土壙の性格は不明。出土遺物から古墳時代中期前半に位置付けられる。

出土遺物（第82図）

コンテナ４箱の土師器が出土した。須恵器は出土していない。甕の口縁部が多く出土しているが、胴部の破片が少量しかない。**326～330**は甕の口縁部である。**326**は頸部で鋭く屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。復元口径16.0cmを測り、体部外面は刷毛目、内面は削りで調整する。**327**も口縁部が直線的に開き、復元口径18.4cmを測る。**328**は頸部がすぼまり、口縁部はやや内湾気味である。復元口径14.6cmを測り、肩部外面は横刷毛、内面は削り。外面に煤が付着する。**329**は頸部径が胴部最大径の半分ほどにすぼまり、口縁部は短く外反する。復元口径13.2cmを測る。胴部外面は縦刷毛のち横刷毛、内面は横方向の削りと刷毛目を施し、肩に粘土紐積上げ痕が残る。**330**は頸部がゆるやかに緩く屈曲し、口縁部は外傾する。口径15.4cmを測る。**331・332**は中型壷である。**331**は口径13.2cm、胴部最大径20.0cmを測る。頸部がすぼまり口縁部は外反する。胴部外面は縦刷毛のち横刷毛、内面は削りを施す。**332**は復元口径11.2cm、胴部最大径19.4cmを測る。胴部外面は粗い刷毛目、内面は削りで調整する。**333・334**は小型の直口壷である。**333**は復元口径8.0cm、器高11.8cmを測る。体部は横長の偏球形を呈し、口縁部は長く直立する。**334**は復元口径8.5cm、器高10.0cm、胴部最大径10.7cmを測る。器壁が厚く外面に刷毛目を施す。**335**は畿内Ｖ様式系の壷の底部片である。内底に簾状刷毛を施す。**336～338**は小型丸底壷である。**336**は偏球形の体部で、口径と胴径がほぼ等しい。ほぼ完存し口径9.0cm、器高8.7cmを測る。**337**は体部が球形で、口径と胴径がほぼ等しく、口辺部の長さは胴部より短い。完形品で口径8.4cm、器高8.8cmを測る。**338**は体部が球形に近く底は平坦で、口縁部は短い。ほぼ完存し口径7.5cm、器高8.0cmを測る。**339**は手づくね土器である。外面上半に刷毛目を施す。**340～342**は高坏である。**340**は完形品で口径18.5cm、器高13.7cm、底径12.4cmを測る。中膨らみの脚部で、脚付け根の内部は突出する。坏部の口辺は外反し、外面を右下がりの刷毛目、内面を横刷毛で調整する。**341**は坏部が外反し、脚部は大きくハの字に開く。復元口径15.8cm。**342**はハの字に大きく開く脚部を持ち、坏部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部でやや外反する。坏部は大きくひずみ、口径19.2cm、器高13.0cm、底径13.4cmを測る。



第82図　SK044出土遺物実測図①（1/3）



第83図　SK044・061出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ０４５号土壙（第78図）

ＳＢ０８５の西に位置する。長軸1.3ｍ、短軸0.85ｍ、深さ30cmの楕円形の土壙で、埋土は暗褐色を呈する。9点の土器片が出土したのみである。須恵器の甕あるいは壷の破片１点と、甑の口縁部片１点が含まれるが、図化できるものはない。

ＳＫ０６１号土壙（第80図）

ＳＢ０８５付近で検出された。平面形は長軸1.0ｍ、短軸0.6ｍの不整形プランである。30cm程度の深さで平坦面を形成し、北側が更にそこから一段落ちて深さ55cmの楕円形の底面に至る。埋土は

黒褐色を呈する。上層で土師器の甕、小型丸底壷、高坏等がまとまって出土した。下層からの土器の出土は少ない。出土遺物より古墳時代中期に位置付けられる。

出土遺物（第83図）

コンテナ２箱の土師器が出土した。**343**は甕である。復元口径15.8cmを測る。頸部がしまり口縁部は短く外に開く。器面の磨滅が著しい。内面は上半に削り痕、中程に指ナデによる縦方向の窪みがみられる。**344**は高坏の坏部である。口径19.8cmを測り、肉厚で口辺部は外反する。**345**は高坏の脚部である。ハの字に開き裾部でゆるく外反する。**346**は脚付の小型丸底壷である。ほぼ完存し、口径7.8cm、器高9.5cmを測る。脚は非常に小さく、胴径と口径はほぼ等しい。胴部に焼成時に出来た器表の剝落がみられる。

ＳＫ０６９号土壙（第78図）

SE０７０の南側に隣接し、ＳＤ０３１を切る。長軸0.95m、短軸0.7m、深さ30cmを測る隅丸方形の土壙である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ０７１号土壙（第78図）

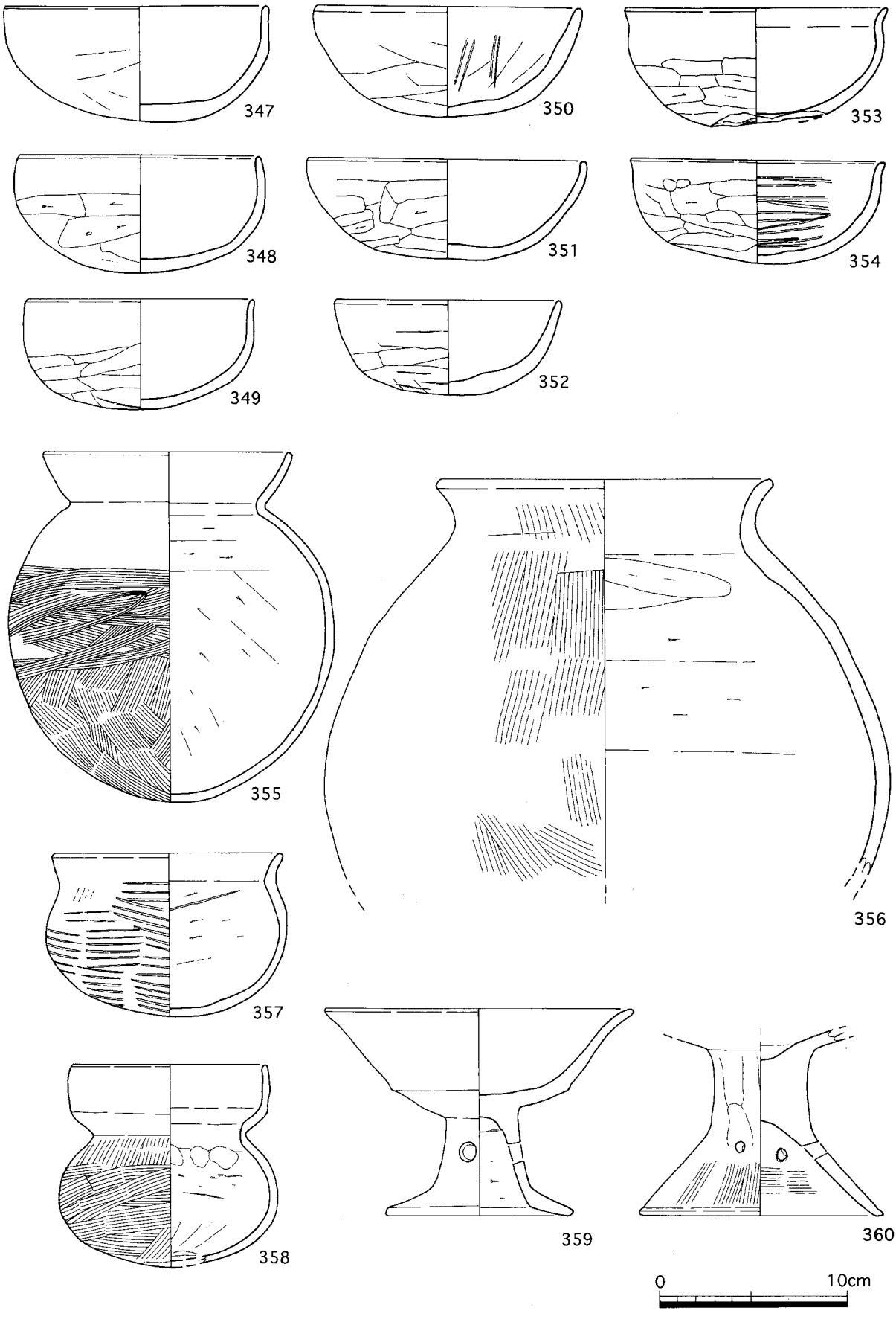
調査区西部でＳＤ０３１と重複あるいは隣接して検出された井戸・土壙群のひとつで、その中心に位置する。ＳＤ０３１の掘り下げ中に存在を確認した。ＳＤ０３１を切っている。長軸2.4m、短軸1.5mの方形土壙である。検出レベルからの深さは35cmで、遺物は出土していない。

ＳＫ０７２号土壙（第80図）

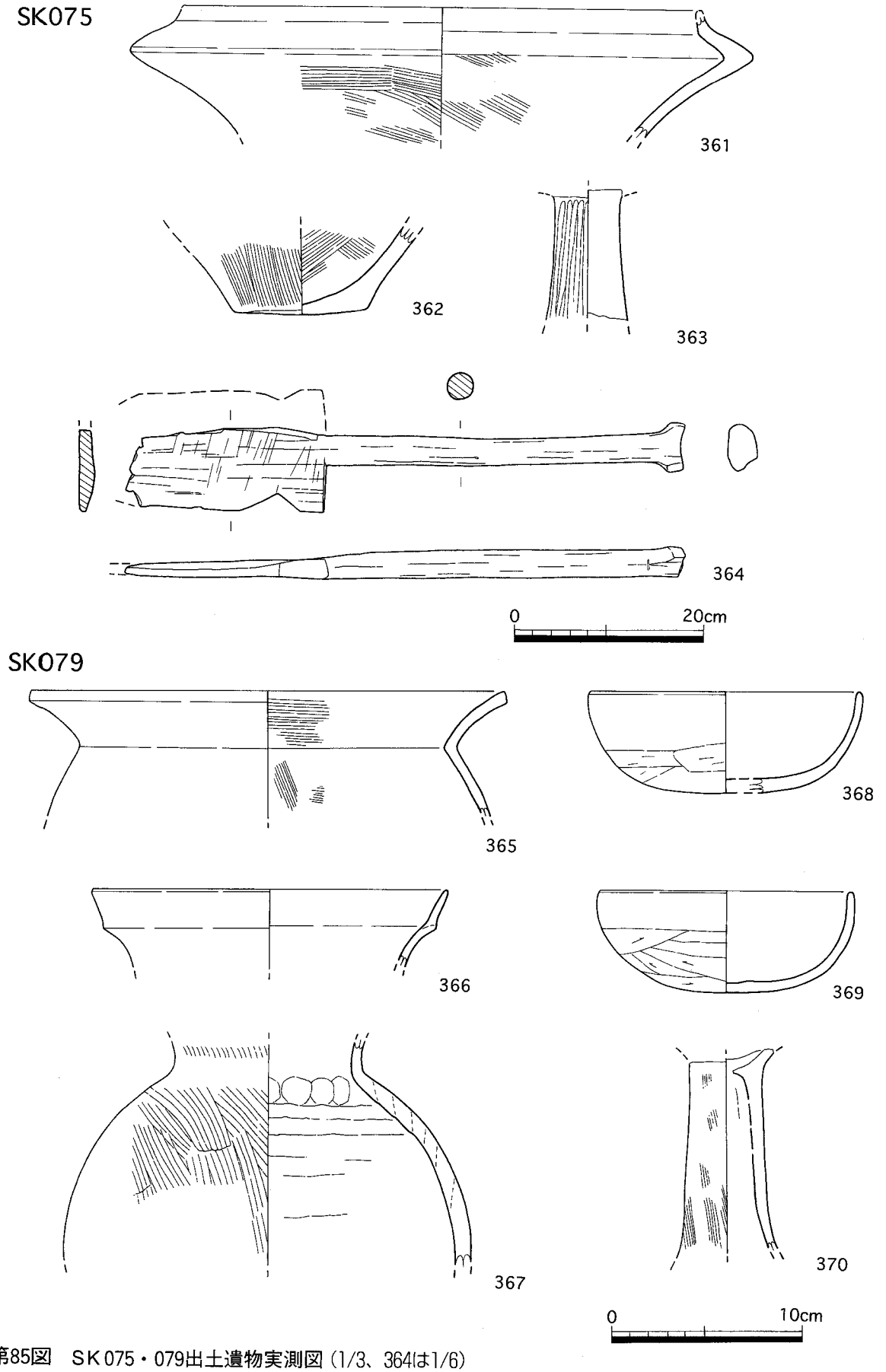
SK０７１の北西側に隣接し、SD０３１を切る。長軸95cm、短軸75cm、深さ30cm以上の楕円形の土壙である。埋土中から土師器の椀、壷、高坏、甕が出土した。とくに椀は８点出土し、そのほとんどが完形品である。古墳時代前期の布留甕が含まれるが、全体的に新しく古墳時代中期後半に位置付けられよう。

出土遺物（第84図）

コンテナ４箱の土師器が出土した。須恵器は出土していない。**347～354**は椀である。丸底で口縁部はまっすぐなもの（347～352）と端部で軽く外に曲げるもの（353・354）とがある。**351**が口縁部を１／３欠く以外はすべて完形品である。口径12.2～15.0cm、器高5.1～6.3cmを測る。外面は口縁部付近までヘラ削りをした後、口縁部を横ナデする。内面はナデ調整で、354は横方向の細い磨きを施す。353は底部に焼成時にできた器面の剝落がみられる。**355**は布留甕である。口縁部は内湾し、体部は球形。器壁はうすく、体部外面は胴部に横方向、底部に縦方向の細かい刷毛目を施した後、肩部を横ナデする。内面は肩部を横方向の削り、それより下は削り上げる。内外面に煤が付着する。**356**は甕である。復元口径18.0cm、胴部最大径30.0cmを測る。頸部がすぼまり、口縁は短く外反する。最大径部が下位にあるので、なで肩でずんぐりした器形になる。外面は粗い縦刷毛、内面は横方向の削りで調整し、外面に煤が付着する。**357**は鉢である。完形品で口径12.2cm、器高8.7cmを測る。丸底で口縁部は短く外傾する。外面に粗い叩き、内面に削りを施す。外面には煤が付着する。**358**は壷である。口縁部は二重口縁状を呈し、体部外面は縦刷毛のち横刷毛、内面は削りで肩部に指頭痕が残る。復元口径10.4cm、器高10.8cmを測る。**359・360**は高坏である。**359**は完形品で口径16.4cm、器高11.0cmを測る。脚部は非常に小さく、透かし孔を１つ有する。**360**は中実の脚柱部から裾が外に開く。透かし孔を４つ有する。



第84図　ＳＫ072出土遺物実測図（1/3）



第85図　SK075・079出土遺物実測図（1/3、364は1/6）

ＳＫ０７５号土壙（第78図）

ＳＫ０７１の南側に隣接し、ＳＤ０３１、ＳＥ０７５を切る。長軸1.7ｍ、短軸1.1ｍ、深さ60cm以上の方形土壙である。埋土は灰色がかった黒色粘土で、底から木製の鋤が出土した。

出土遺物（第85図）

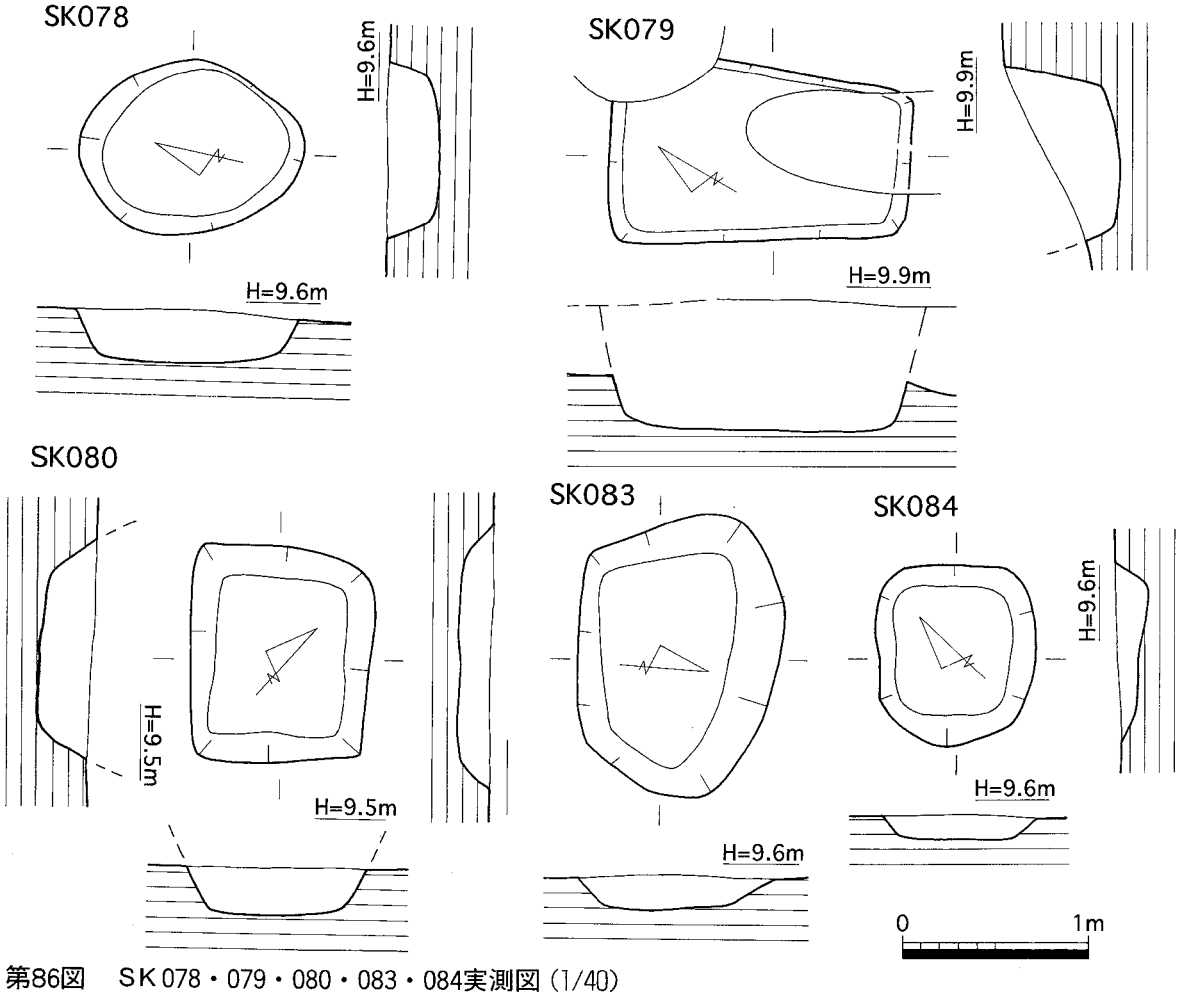
コンテナ１箱の弥生土器が出土した。須恵器２点が混入する。**361**は複合口縁壷の口縁部である。反転後内側に強く折れる。**362**は甕あるいは壷の底部片である。平底で底径7.2cmを測る。底面にも刷毛目がつく。**363**は高坏の脚部である。中実で縦方向の磨きを施す。**364**は木製の鋤である。鋤先は半分が欠損する。残長58.6cmを測る。

ＳＫ０７８号土壙（第86図）

ＳＫ０７５の西側に隣接する。長軸1.2ｍ、短軸0.9ｍ、深さ25cmの楕円形の土壙である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ０７９号土壙（第86図）

ＳＫ０７１の東側に隣接する。ＳＥ０７３に切られ、ＳＤ０３１を切る。長軸1.6ｍ、短軸0.9ｍ、深さ70cmの方形土壙である。



第86図　ＳＫ078・079・080・083・084実測図（1/40）

出土遺物（第85図）

コンテナ３箱の土師器・弥生土器が出土した。**365**は甕の口縁部である。く字状口縁は端部に面をもち、頸部内面に明瞭な稜をつくる。復元口径24.8cmを測る。外面は磨滅し、内面は刷毛目を施す。**366**は二重口縁壷である。復元口径18.6cmを測る。**367**は壷である。外面に粗い縦刷毛を施す。内面は横ナデ、肩には粘土紐積上げの痕跡、頸部に指頭痕が残る。**368・369**は椀である。口径13.4～14.4cm、器高5.3cmを測る。外面下半はヘラ削り。**370**は高坏の脚部で、細長い筒状を呈する。

ＳＫ０８０号土壙（第86図）

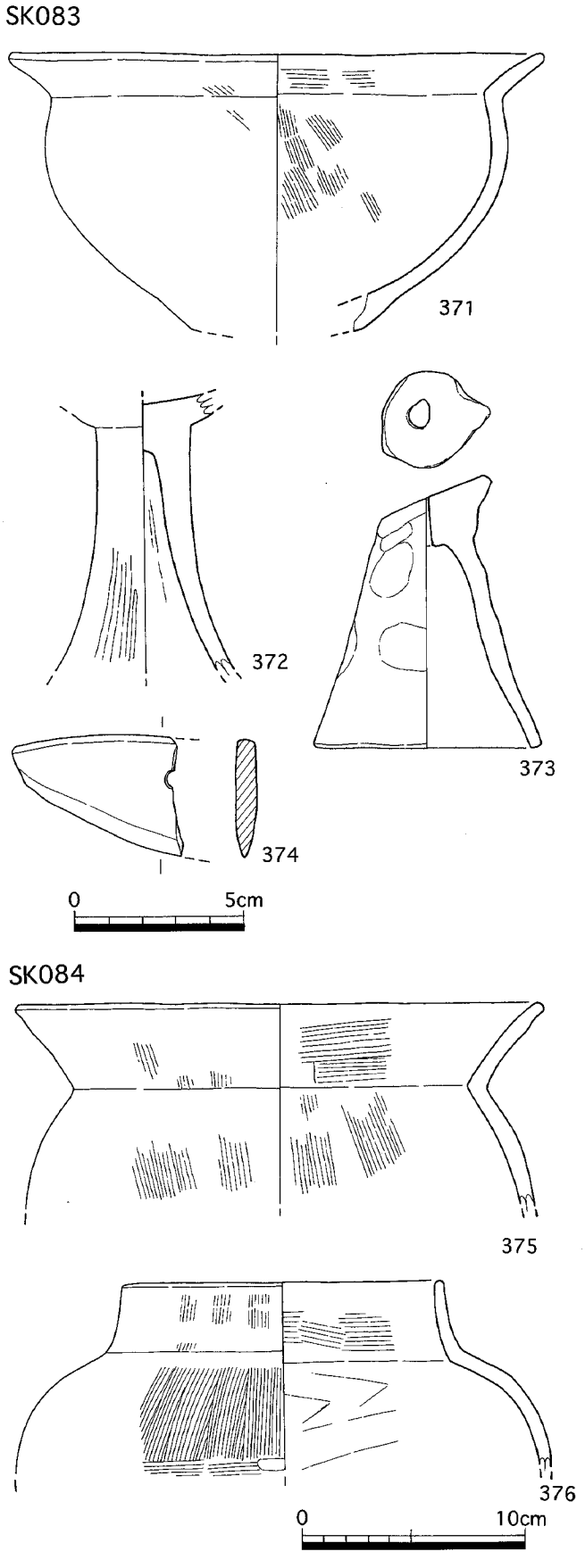
ＳＥ０７６の南西に隣接して検出された。ＳＤ０３１に切られる。長軸1.1m、短軸0.9m、ＳＤ０３１底面からの深さ30cmを測る方形土壙である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ０８３号土壙（第86図）

調査区の北西隅に位置する。長軸1.5m、短軸1.1m、深さ20cmの方形土壙である。石包丁が出土した。出土遺物より弥生時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第87図）

コンテナ２箱の弥生土器が出土した。**371**は鉢である。半球形の胴部から口縁部が外に折れる。底部は凸レンズ状になりそうである。外面は磨滅が著しい。内面は縦刷毛で調整し、復元口径24.0cmを測る。**372**は高坏の脚部である。長脚で筒状の脚柱は裾部でゆるやかに広がっていく。器面は磨滅する。**373**は支脚である。ほぼ完存し底径10.2cm、器高12.2cmを測る。頂部に円孔を有する。**374**は石包丁である。紐通し穴の部分で欠損し、１／３が残存する。



第87図　ＳＫ083・084出土遺物実測図（1/3、374は1/2）

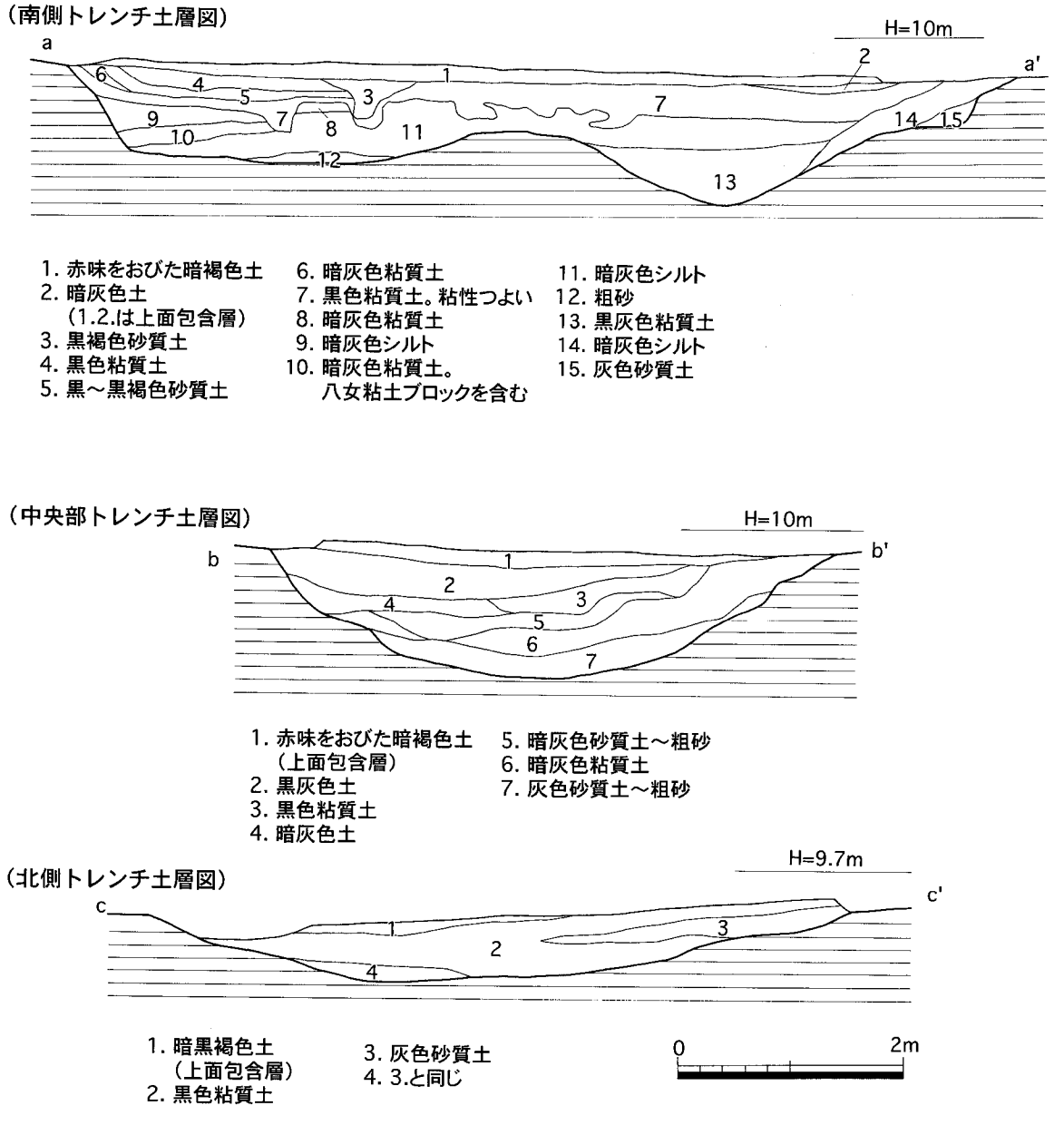
ＳＫ０８４号土壙（第86図）

ＳＫ０８３の北西に位置する。長軸0.9m、短軸0.8m、深さ10cmの方形土壙である。

出土遺物（第87図）

コンテナ１箱の土器が出土した。**375**は甕の口縁部である。く字状口縁は頸部内側に明瞭な稜を有し、口縁端部は丸くおさめる。胴部は内外面とも縦刷毛を施す。復元口径23.6cmを測る。**376**は壷である。肩が張り、短く直立する口縁部はやや内傾する。外面に細かい刷毛目を施す。

５）溝



第88図　ＳＤ031土層図（1/60）

ＳＤ０３１号溝（第88図）

調査区西側を南東から北西方向に向かって流れる溝である。幅は2.5～4.0ｍ、検出面からの深さ約80～120cmを測り、なだらかな壁面から幅広の底面に至る。底面には凹凸があり、底面への粗砂、シルトの堆積は、水が流れていたことを示している。南側トレンチ近辺では溝が東側に抉られる。溝の北側ではこれを切る古墳時代中・後期および弥生時代後期の土壙、井戸が10基ほど検出された。溝の埋土は黒色粘土を主とし、その上面には古墳時代後期から古代にかけての暗黒褐色土遺物包含層がうすく堆積する。埋土中からは大量の土器が出土し、上面包含層、上層、下層に分けて取り上げた。上層および下層出土遺物は弥生時代後期～終末にかけての土器が主体を占め、古墳時代の遺物も混入する。整理の結果、上層と下層では遺物に顕著な時期差が認められなかった。

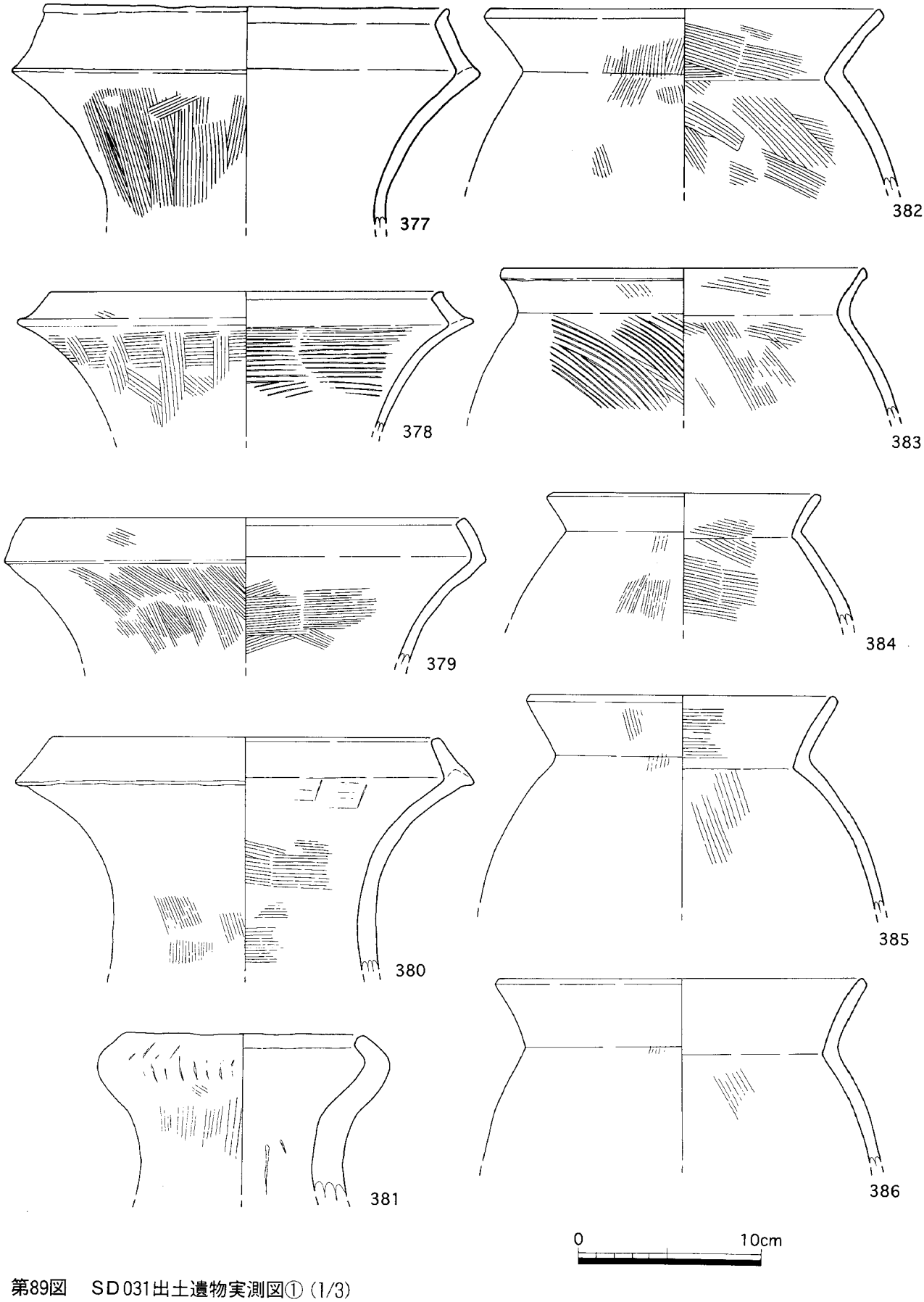
溝の存続期間は弥生時代終末頃の遺構に確実に切られているので、弥生時代後期から終末までのごく短期間だけ機能し、古墳時代にはすでに埋没している。また、この溝は明治末年の地図にある高畑丘陵の西裾の方向ともほぼ一致し、この溝の西側には遺構がほとんど存在していない。以上のことから、溝は丘陵上の集落の外縁につくられ、その周囲を画する機能を与えられていたと推測する。

出土遺物（第89～93図）

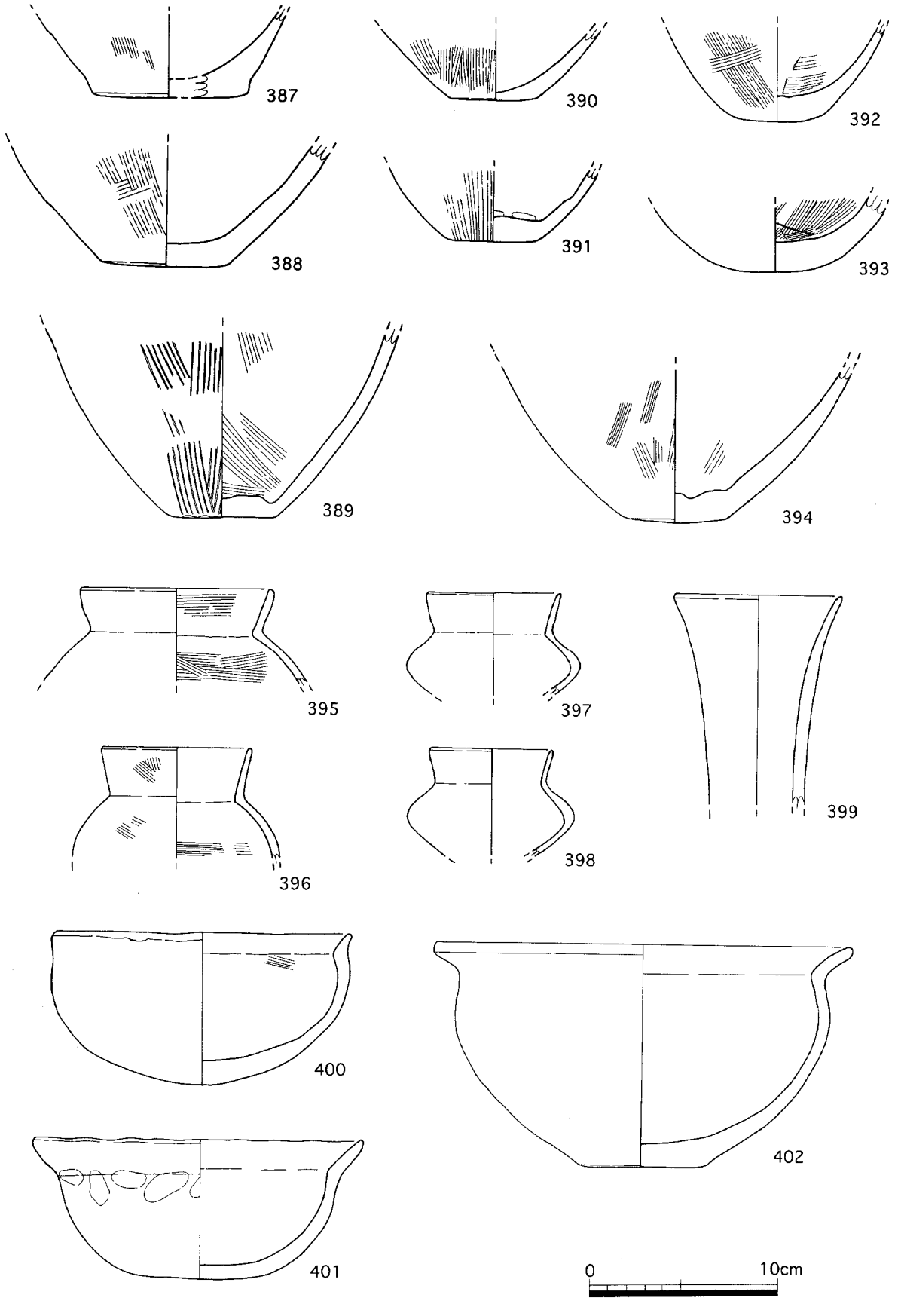
コンテナ92箱の遺物が出土した。

上層および下層出土の遺物（**377～426**）は、弥生時代後期から終末にかけて、とくに後期後半の土器が主体である。**377～381**は複合口縁壺の口縁部である。377～380は口縁反転部が内傾ないし内湾する。復元口径21.2～24.0cmを測り、頸部の内外面に縦刷毛を施し、口縁反転部は横ナデする。378の外面調整は横刷毛後に縦刷毛を等間隔で施しており、装飾的である。381は弥生時代中期の袋状口縁壺の形態を残すもので反転部には粘土の裂け目が筋状に入っている。後期初頭のもの。**382～386**は甕の口縁部である。く字状口縁で復元口径14.2～21.8cmを測る。**387～394**は甕・壺の底部である。凸レンズ状の底部が多いが、平底のものも少量出土している。**395・396**は直口壺である。**397・398**は小型短頸壺である。**399**は長頸壺である。長頸壺の出土は珍しく、調査全体でこの1点のみである。**400～402**は鉢である。浅くて口縁部が外反する。口径・器高は、400が15.8・8.0cm、401が17.4・7.4cm、402が22.2・11.7cmを測る。**403～405**は高坏の脚部である。403・404は細い筒部が裾でラッパ状に開き、透かし孔を3つ有する。405は中実で透かし孔を有する。**406～408**は器台である。406は受け部の端部が強く内傾する。407は受け部端面に刻み目を施す。408は脚部の中央から上位にかけて6つの透かし孔を不規則に穿っている。**409～413**は脚付土器である。体部は長胴の甕形と浅い鉢・壺形があるようだ。**414**は脚付鉢で口径18.8cm、器高11.0cm、底径9.6cmを測る。**415～417**は杓子である。**418**は土製紡錘車である。**419**は支脚である。器高13.2cm、底径12.0cmを測り、頂部はほぼ水平で突起が上方に伸び、中央に孔を穿つ。外面は叩き、内面は指ナデで調整する。**420**は砥石である。細長く中央部がくびれた形状を呈し、両端を除く4面は平滑に研磨されている。上面の片側には細長い窪みがあり、鉈（やりがんな）等を研いだ痕跡であろう。長さ34.6cm、幅8.8cm、厚さ4.4cmを測る。中ほどで半分に折れ、大きい方の破片がＳＤ０３１から、小さい方の破片が溝から遠く離れた井戸ＳＥ０８１から出土し整理段階で接合するのを確認した。**421・422**は石包丁である。**423・424**は石製紡錘車である。**425**は指輪状石製品である。材質は蠟石で、全体をきれいに研磨している。穴の内径は10mmを測り、成人の指はとても入らない。糸を通して玉として使用したものか。**426**はガラス玉である。径７mmを測り、色はコバルト-ブルーを呈する。

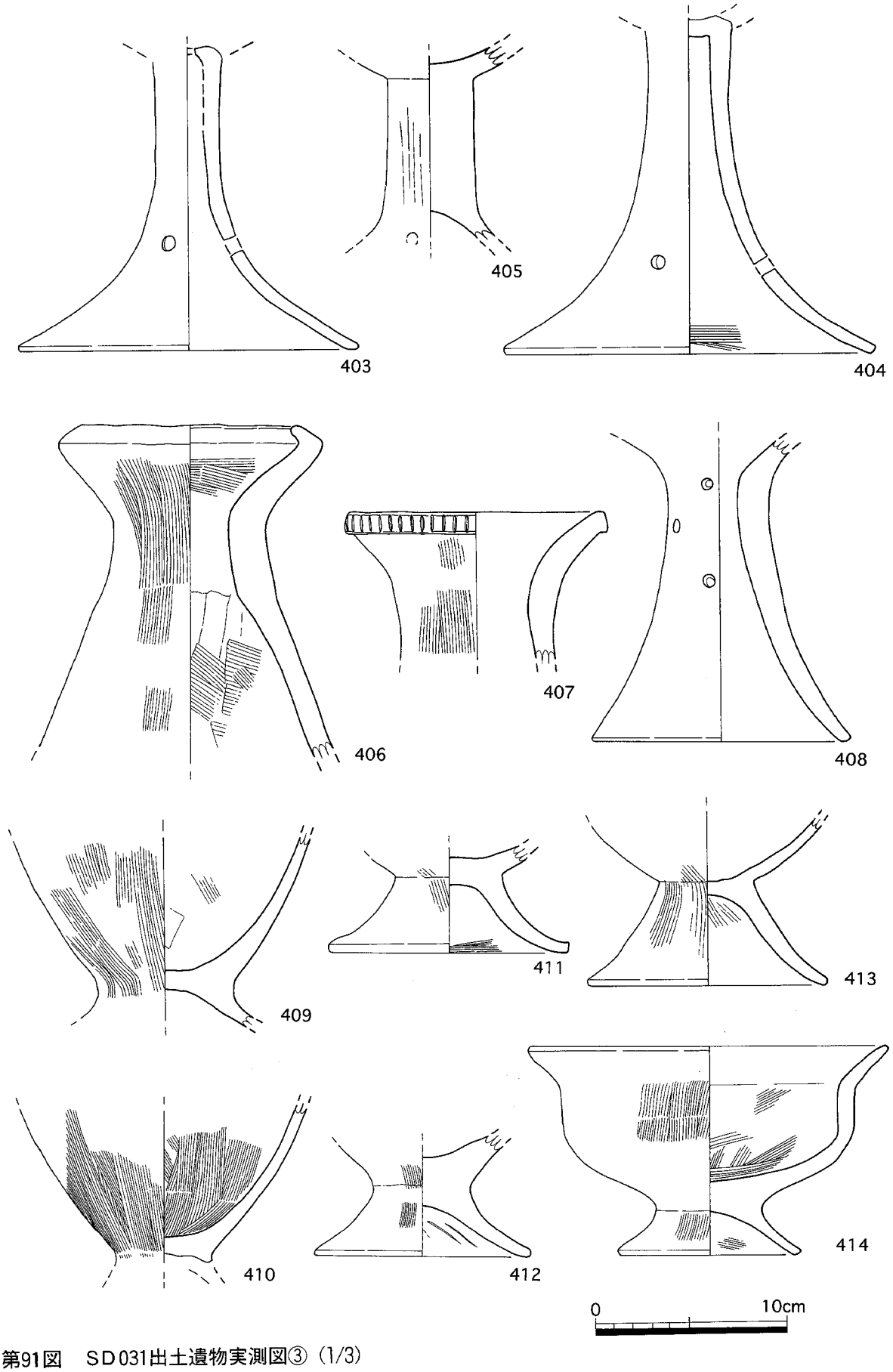
上面包含層からは古墳時代の土師器、須恵器、陶質土器や古代の平瓦が出土した。**427**は畿内Ｖ様



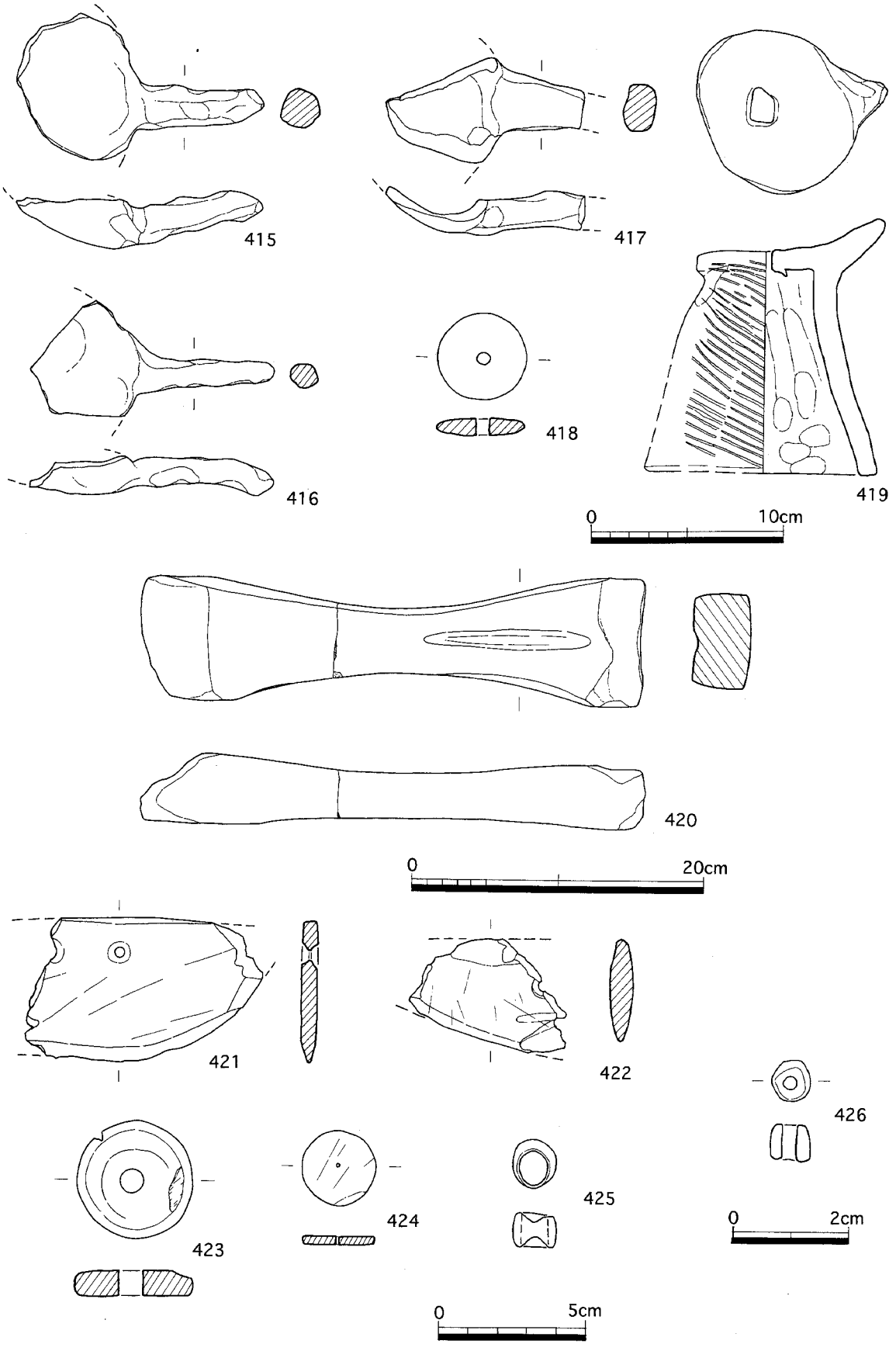
第89図　SD031出土遺物実測図①（1/3）



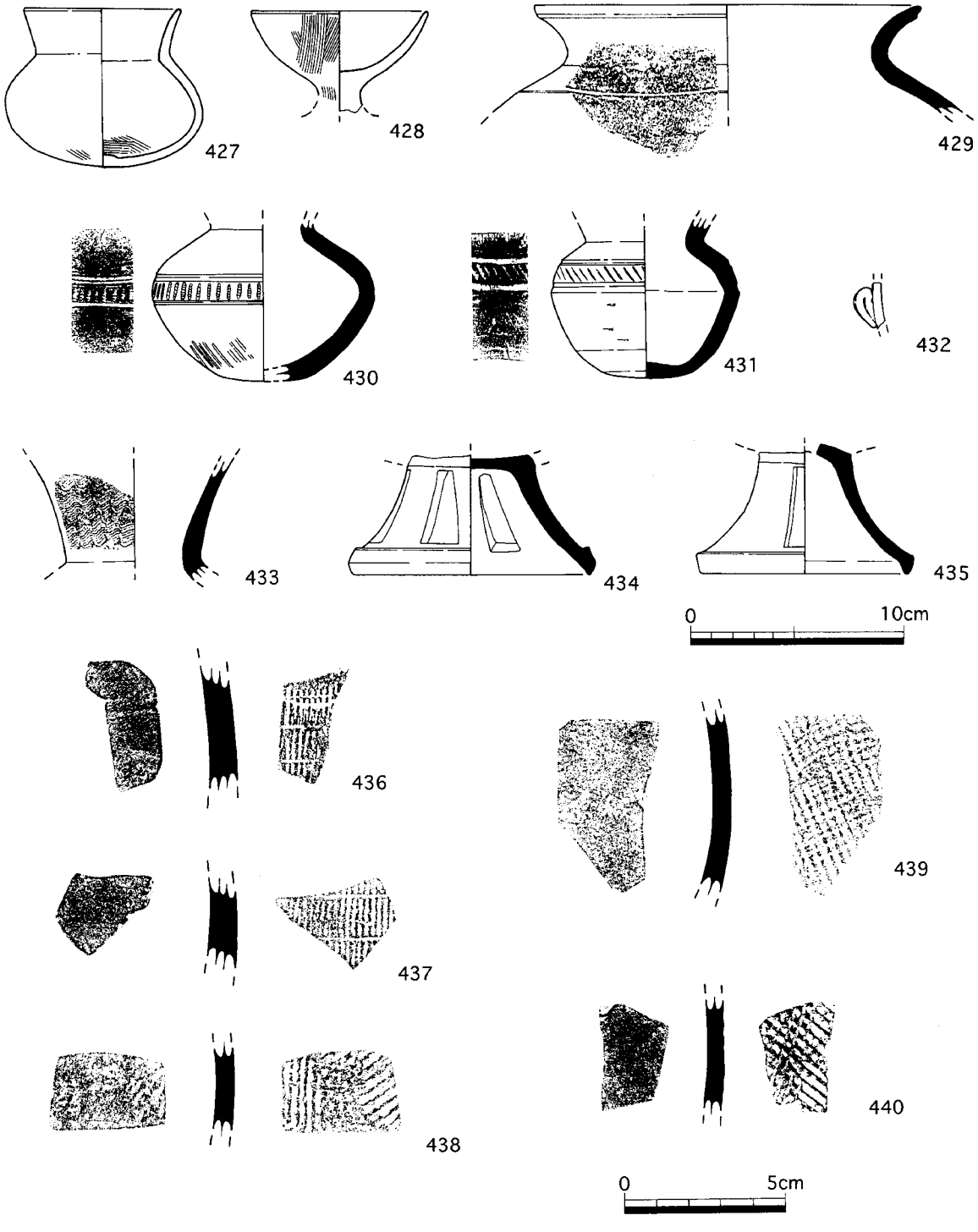
第90図　ＳＤ031出土遺物実測図②（1/3）



第91図　SD031出土遺物実測図③（1/3）



第92図　ＳＤ031出土遺物実測図④（415～419は1/3、420は1/4、421～425は1/2、426は1/1）



第93図　SD031上面包含層出土遺物実測図(427～435は1/3、436～440は1/2)

式系の小型丸底壷である。ほぼ完存し、口径7.3cm、器高7.5cmを測る。内底に簾状刷毛を施す。**428**は庄内系椀形高坏の坏部である。口径8.4cmを測る。427・428は庄内式併行期の古式土師器である。**429・436・437**は陶質土器である。**429**は壷の口縁部である。口縁部は緩く外反し、端面との境に明瞭な稜をつくる。内外面とも平滑に横ナデし、外面の肩に1条の沈線をめぐらす。内面の肩に不明瞭ながら面があり、無文の当て具痕の可能性もある。**436・437**は壷の破片で、同一個体であろう。外面に縄席文を施文後、横位の沈線を数条めぐらす。焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。断面を見ると、表

裏の器面付近は還元焼成で須恵質に焼けているが、内部は土師質の焼成で、3層に見える。**430～435・438～440**は5世紀代の須恵器で、初期須恵器が含まれる。**430・431**は瓿である。**430**は体部中位に上下2本の沈線で囲まれた刺突文の文様帯があり、外面底部付近は叩きの後ナデを施す。**431**は頸部の基部が広く、体部上半に上下2本の沈線で囲まれた刺突文の文様帯をもつ。下半は回転ヘラ削りを施す。**432**は高杯の装飾耳である。**433**は瓿の頸部か。外面に波状文を施す。**434・435**は高坏の脚である。434は4つ、435は3つの透かし窓を有する。**438～440**は甕の小片であろう。438・439は外面に擬格子文の叩きを施す。440は外面に格子文の叩きを施す。焼成不良でやや軟質、灰白色を呈する。

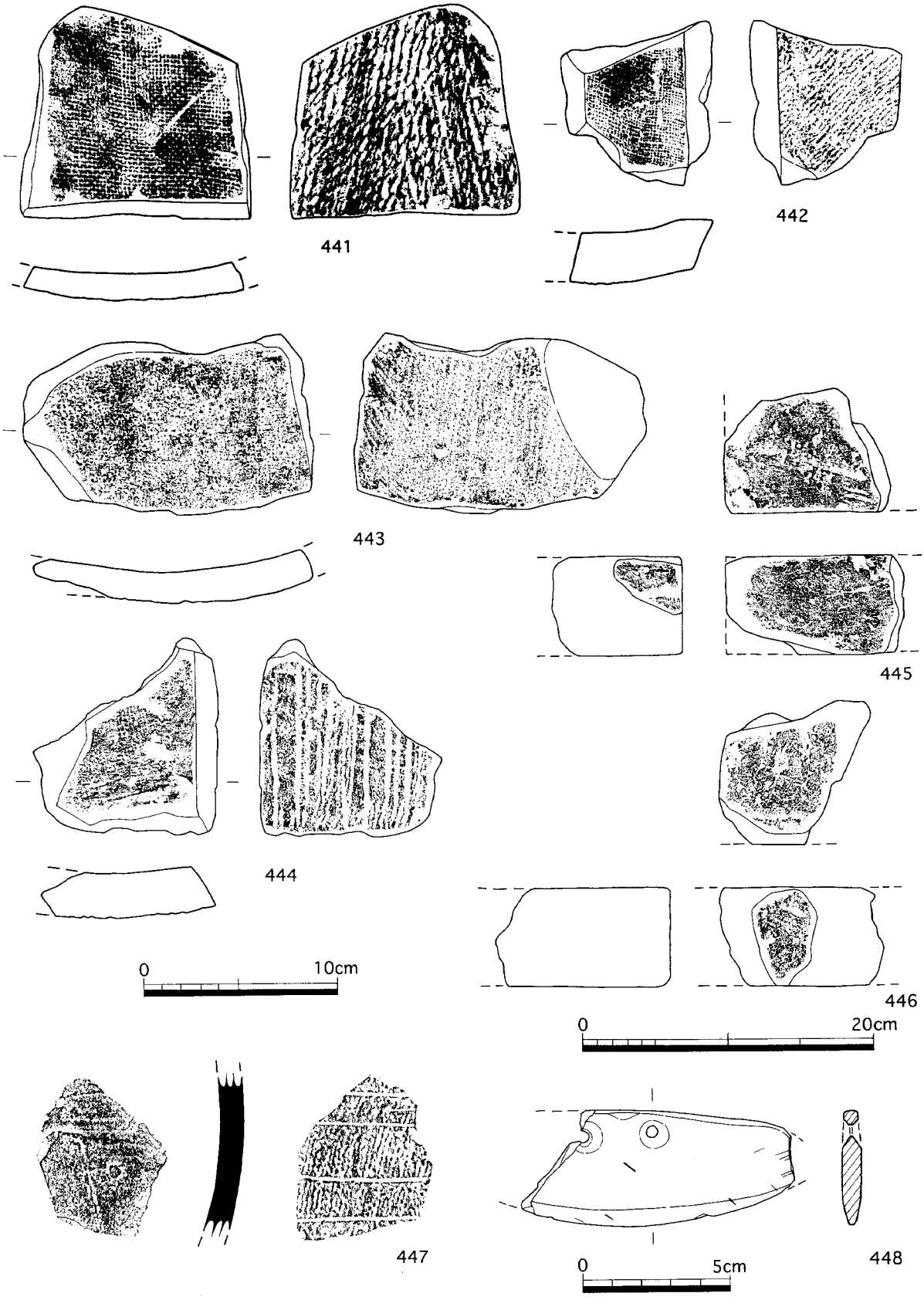
6）古墳時代から古代にかけての遺物包含層

調査区西側のＳＤ０３１号溝周辺を中心に、遺構検出面上に暗黒褐色粘土の遺物包含層が堆積していた。調査期間の制約から精査は行わず、重機で表土を剝ぐ段階で包含層の土を他の排土とは別にして集め、その中から遺物を採集した。包含層埋土からは弥生土器、古墳時代から古代にかけての土師器、須恵器、平瓦、塼などが出土した。遺物総量はコンテナ13箱におよぶ。須恵器がコンテナ4箱出土しているが、古代にくだるものはなく、5世紀代の古いものが多い。初期須恵器、陶質土器も出土している。包含層の遺物は古墳時代中期～後期にかけての土器が主体をなしている。本調査区の北東の丘陵上に古代に高畑廃寺が存在したと推測されている。この関係で述べておくと、Ⅱ・Ⅲ区では平瓦約50点、塼2点が出土した。また、前述のＳＤ０３１上面においても該期の包含層遺物の堆積を認め、陶質土器、初期須恵器が出土している。

この包含層の堆積の時期についてすこし検討を加えてみたい。調査区中央の段差形成に関わる大規模な地形改変の時期を特定する手がかりとするためである。また、このことを問題にする背景には、高畑遺跡周辺の比恵遺跡群、那珂遺跡群の調査例で、中世に削平された地形の直上に古墳時代や古代の遺物ばかりで中世の遺物を全く含まない包含層がのる事例が時々あるということを付言しておく。今回の調査では、古墳時代中期のＳＥ０３７、０４０、０４１の各井戸において、埋土上面に包含層がレンズ状に沈み込んでいるのを確認した。井戸の検出面直上には包含層は堆積していなかった。したがって、井戸の埋没とそこへの包含層の堆積は連続している。また、地形の削平が包含層の堆積より後の出来事であることも分かる。さらに、本調査区では古墳時代後期の遺構がほとんど存在しないのでこの集落の廃絶が古墳時代後期頃に起こったと考えられる。以上の点を考え合わせて、包含層の形成時期は、古墳時代後期に集落の廃絶と連動して始まり、古代にかけて堆積したと考える。

出土遺物（第94図）

441～444は平瓦である。凹面には布目痕が、凸面には**441・442**は縄目叩き、**443・444**は平行叩きの痕跡が残る。図化していない平瓦も凸面の文様はほとんどがこの2種類で、ほかに格子目文のものが1点だけ存在する。焼成があまく軟質、灰白色を呈するものが多く、概して磨滅が激しい。**445・446**は塼である。素文で、いずれも厚さが6.8cmと厚い。焼成は良好で灰色を呈するが、欠損および磨滅が著しく、その規格については明らかでない。**447**は陶質土器である。壷の胴部片であろうか。外面は縄蓆文を施文後、残存部だけでも横位の沈線を4条めぐらす。内面は平滑になで、胎土は精緻、焼成良好で青灰色を呈する。**448**は石包丁である。紐通し穴の部分で半分近くが欠損、残存側の先端部も欠損する。

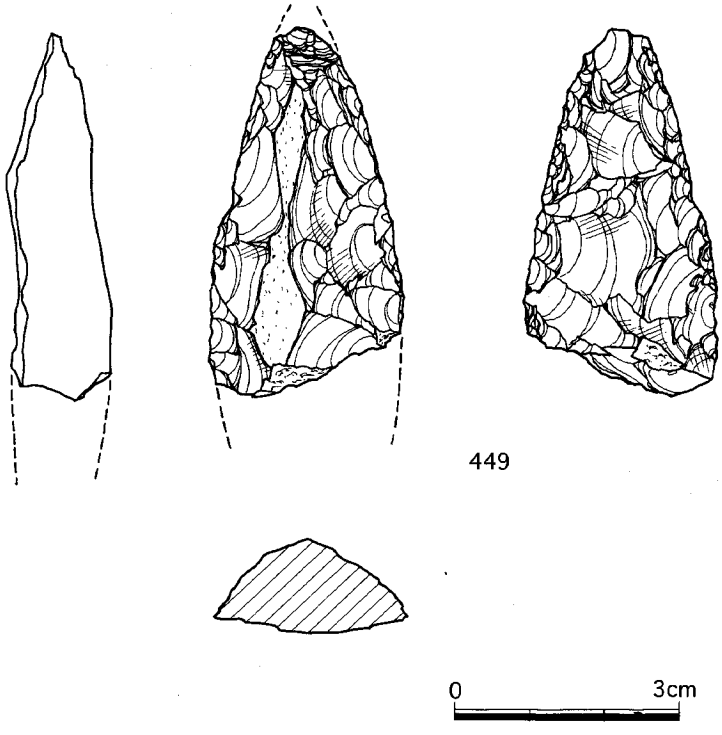


第94図　包含層出土遺物実測図

(441～444は1/3、445・446は1/4、447・448は1/2)

7）旧石器

ＳＤ０３１号溝の下層埋土中から旧石器が１点出土した。第95図**449**は槍先形尖頭器である。石材は良質の漆黒色黒曜石であり、脈状の流理が認められ、パティナが進んでいる。背面と破断面に自然面があり、前者はやや平滑であり、後者は凹凸がある。産地は不明であるが、肉眼観察では腰岳産黒曜石に類似する。本石器が剝片素材であるのか、礫核素材であるのかは表裏両面の二次調整が入念なために明らかではない。石器形態は木葉形に近く、両側縁は緩い曲線を描く。先端は尖らず、丸くおさまる。先端部裏面に先端方向からの階段状剝離を認めるが、これが衝撃剝離であるのかは判断し難い。横断面は低三角形であり、二次調整は両側からのみで、稜上剝離はない。背面の調整剝離は稜線を越えず、やや急角となっている。裏面の調整は平坦剝離であり、一部は三分の二幅まで達している。胴部幅最大値のやや基部側で欠損している。欠損面は裏面側の部分的自然面（ホール）から発する単一剝離面で折断される。折断面からの二次調整はない。現存値で長さ4.9cm、幅2.5cm、厚さ1.3cmを測る。



第95図　ＳＤ031出土旧石器実測図（1/1）

本石器は弥生時代後期の溝に混入した単一の出土品である。本来の遺物包含層を遊離しており関連遺物もない。なお同様の形態、特徴を有する尖頭器は近くでは諸岡遺跡Ｆ区、那珂遺跡２３次、春日市駿河遺跡などで出土している。この種石器を集成、検討した杉原(1997)によると、本資料は筑紫野市宗原遺跡遺跡に典型例があり、氏のいうＡ型調整を有する槍先形尖頭器に含まれる。筑紫平野から周辺部に分布し、後期旧石器時代後半期のナイフ形石器文化終末期以前の石器群に含まれる。

杉原敏之1997「九州の尖頭器石器群〔二〕―筑紫平野の「槍先形尖頭器」―」『九州歴史資料館研究論集』22　九州歴史資料館

4．小結

Ⅱ・Ⅲ区の調査では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落を検出するなど、多くの成果が得られた。まず、その成果を時代ごとに順を追って整理することにしたい。

本調査で出土した最古の遺物は、後期旧石器時代の槍先形尖頭器である。弥生時代後期～終末の溝ＳＤ０３１から出土した。混入品であり、旧石器の出土はこの１点のみである。

縄文時代に属する遺構・遺物はなく、次にあらわれるのが弥生時代後期から古墳時代後期にかけての生活遺構であり、本地区の遺構のほとんどがこの時期に属する。該期の主な検出遺構は、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物６棟、井戸13基、土壙15基、溝１条である。古墳時代中期末の滑石製臼玉の製作工房１軒が含まれる。

この集落は古墳時代後期のうちに廃絶するようであり、その上に古墳時代中後期から古代にかけての遺物包含層が薄く堆積する。古代の遺物としては平瓦50点程度、塼２点が出土し、本調査区の北東側の丘陵上に存在したとされる高畑廃寺ないし官衙的施設との関連をうかがわせる。古代の遺物量は多くなく、他地点から土砂に混じって流入したものであろう。

集落および古代の包含層は調査区中央の80cm程度の段差を伴う大規模な地形の削平を受けており、遺存状況は悪い。地形の削平は直上に耕作土がのることから、水田あるいは畑の開墾によるものと推測する。耕作土からの遺物の出土は非常に少なく、土地造成の時期を正確に知る手がかりはあまりないが、包含層内に中世以降の遺物が皆無であることから、古代のうちには耕作地化が行われたものと考えている。以後、本地点は永らく水田あるいは畑として利用されていたようで、該期の遺構はなく、土層の堆積はうすく細かな分層もできない。高畑という当地の字名も、耕作地としての土地利用を裏付けていよう。

1）集落について

本項では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡についてやや詳しく検討してみたい。調査区の西端部を除く、旧地形の台地上にあたる部分全域にわたって生活遺構が分布していた。古代の耕作地化に伴う地形削平や撹乱を受け、住居等の浅い遺構は遺存状態が良好ではない。主要な検出遺構は、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物６棟、井戸13基、土壙15基、溝１条である。

過去の調査の成果から、台地上に弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在することは確認されていた。例えば、台地北から東側にかけての縁辺部で検出された溝から大量の古式土師器と木製品が出土している。また、台地上における第11次調査は幅１ｍのトレンチ調査ではあったが、夜臼式～板付Ⅱ式期の貯蔵穴６、弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居跡14などが検出された。しかし、台地上における2750㎡におよぶ面的な発掘調査は今回が初めてであり、該期集落の様相をさらに明確にすることができた。

第３表に遺構の時期的分布を示す。集落の主たる構成要素である竪穴住居跡、掘立柱建物に詳細な時期が特定できないものが多い点が残念である。これは削平による遺存状態の悪さと出土遺物の少なさに起因するが、時期の細分が困難な遺構についても、弥生土器、土師器、須恵器の出土によって分類し示している。全体的な集落の動向を把握する上で参考にしていただきたい。

集落は弥生時代後期後半に形成され、当初からかなりの規模であったようだ。確実にこの時期と批定できる住居はないが、切り合い関係からＳＣ０６３・０６５・０５４あたりはこの時期の住居である可能性が高い。井戸が４基存在することも相当な規模の集落だったことを裏付けている。調査区西側に位置するＳＤ０３１は弥生時代後期後半～終末にかけての短期間だけ存続した。台地縁辺部との

第３表　時期別遺構分布表

	弥生時代 後期	弥生終末・ 古墳初頭	古墳時代 前期	古墳時代 中期	古墳時代 後期
竪穴住居跡		SC057 SC059	SC053	SC052 SC058 SC066	
溝	SD031				
井戸	SE039 SE043 SE046 SE070	SE060 SE081		SE037 SE040 SE041	SE076
土壙	SK075 SK083	SK035	SK038	SK036 SK044 SK061 SK072 SK079	

弥生土器出土		土師器出土	須恵器出土
SC063 SB047 SB050 SE074	SC065 SB048 SB051 SK084	SC056 SE073	SB049 SK045

境界に位置することから、集落を周囲と画するための区画溝ではなかったか。ちなみに、遺物だけでいえば、弥生時代中期の大型精製壷・甕棺片がＳＥ０７７から出土、後期初頭の袋状口縁壷の形状を残す複合口縁壷１点がＳＤ０３１から出土している。しかし、前者は明らかに２次的な投棄によるものであり、集落の形成時期をさらに遡らせるだけの積極的な証拠は見出せない。

集落は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけても引き続き一定の規模を保って続いている。在地系土器とともに、外来系の古式土師器も多く出土しており、畿内文化との接触・受容という大きな社会の変動にも柔軟に適応したようである。

古墳時代前期の遺構は非常に少なく、ＳＣ０５３とＳＫ０３８の２つしかない。この時期の指標となる布留甕についてもほとんど出土していない。集落はこの時期に画期を迎え、非常に小規模となってしまった。台地内で集落のセンターが移動したのか、住民がこの台地に見切りをつけ集団で出ていったのか、疫病で多くの人が死んだのか。この静的現象の背景として、いかなる動態を想定するのが妥当なのかは分からない。ただ、高畑遺跡がのる台地全面の調査が実施されているわけではないので、台地上の別地点に古墳時代前期の集落がある可能性も高い。現時点では、この地点に限っての現象として、古墳時代前期における集落の衰退を指摘しておく。

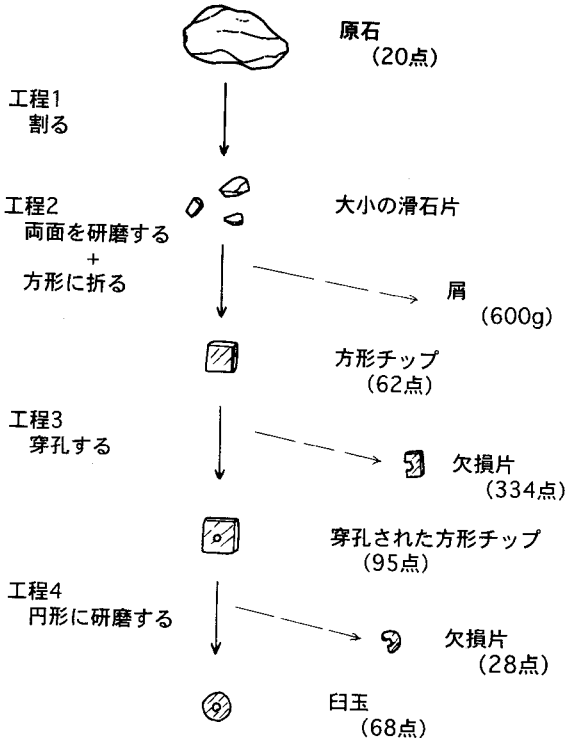
古墳時代中期には、一転して遺構が爆発的に増加する。ＳＣ０５８では、滑石製臼玉、未製品、滑石原石がまとまって出土し、滑石製品の製作工房であることが確認できた。また、陶質土器、初期須恵器が20点程度出土したことも注目される。質・量ともに高畑集落は最盛期を迎えたと言える。

古墳時代後期に集落は突然廃絶してしまう。検出された遺構は後期前半のＳＥ０７６のみである。出土した須恵器を見ても５世紀代のものが多く、６世紀にくだるものは少ない。遺構面上への古墳時代中・後期から古代の遺物包含層の堆積、それに続いて古代のうちには行われた耕地化。これら土地利用形態の変化も、後期の早い段階で集落が廃絶されたことを前提にして起こり得ることである。

2．滑石製臼玉の製作工程

古墳時代中期末、5世紀末の住居ＳＣ０５８から、滑石製臼玉、未製品、滑石原石、大量のチップがまとまって出土し、滑石製品の製作工房であることを確認した。資料の採集にあたっては、遺構の精査中に滑石粉末が埋土中に含まれるのを確認した時点から、埋土をすべてコンテナ箱に集めた。その後、埋土を丹念に水洗して滑石類を採集したが、このとき、ふるいの代わりにビニール製の網戸を2枚重ねて使用した。その網目は１～２mm四方である。これら一連の遺物は滑石製臼玉の製作工程を知る上で貴重な資料である。本項では、出土資料をもとにその製作過工程を復元してみたい。

滑石製臼玉の製作工程については、すでに福岡県糟屋郡須恵町牛ガ熊遺跡を調査した中間研志氏による復元案がある（中間研志編1993『牛ガ熊遺跡』、須恵町教育委員会）。仲間氏の復元案を参考に作成したものが第96図である。本遺跡で出土した各段階の資料数を、参考のため（　）内に示してある。



第96図　滑石製臼玉の製作工程復元図

滑石製臼玉の製作工程

工程１：滑石原石を割って、大小の不整形滑石片をとる。

工程２：砥石を使って滑石片をうすく研磨する。その後、金属利器を使って筋目を入れ方形に折る。この作業によって７mm四方程度の方形チップが完成する。

工程３：方形チップに穿孔する。

工程４：穿孔チップの側面を円形に研磨して、臼玉が完成する。

工程１に関して、滑石原石20点が一ヶ所にまとめて置かれた状態で出土している。長さ20cm弱、重さ720ｇの板状の原石1点が含まれるが、大多数は長さ10cmに満たず、重さ100～200gの小さいものである。原石は福岡市香椎周辺や須恵町等で採集できるそうである。

工程２に関して、チップを適当な大きさに揃えるために筋目を入れて折っている。仲間氏は格子目状に筋目を入れた板チョコ状の未製品を想定されているが、本遺跡では出土していない。タテの筋目を表面に、ヨコの筋目を裏面に入れたチップもあり興味深い。

工程3に関して、穿孔作業は一連の工程中最も難しい作業である。穿孔時の欠損片334点に比べて工程４での失敗は28点にとどまる。また、側面を研磨していない不整形チップに穿孔した例が２点認められる（第56図150・151）。原石が小さいことも考えると、滑石の産地から離れているため、その入手が困難であり、このような屑も可能な限り利用したと言えるかもしれない。

工程４に関して、断面形が算盤玉形にならず、側面が平坦なものが多い。研磨の擦痕は斜め方向についている。このことから複数のチップを糸に通して、一度に多くの臼玉を仕上げたことが分かる。

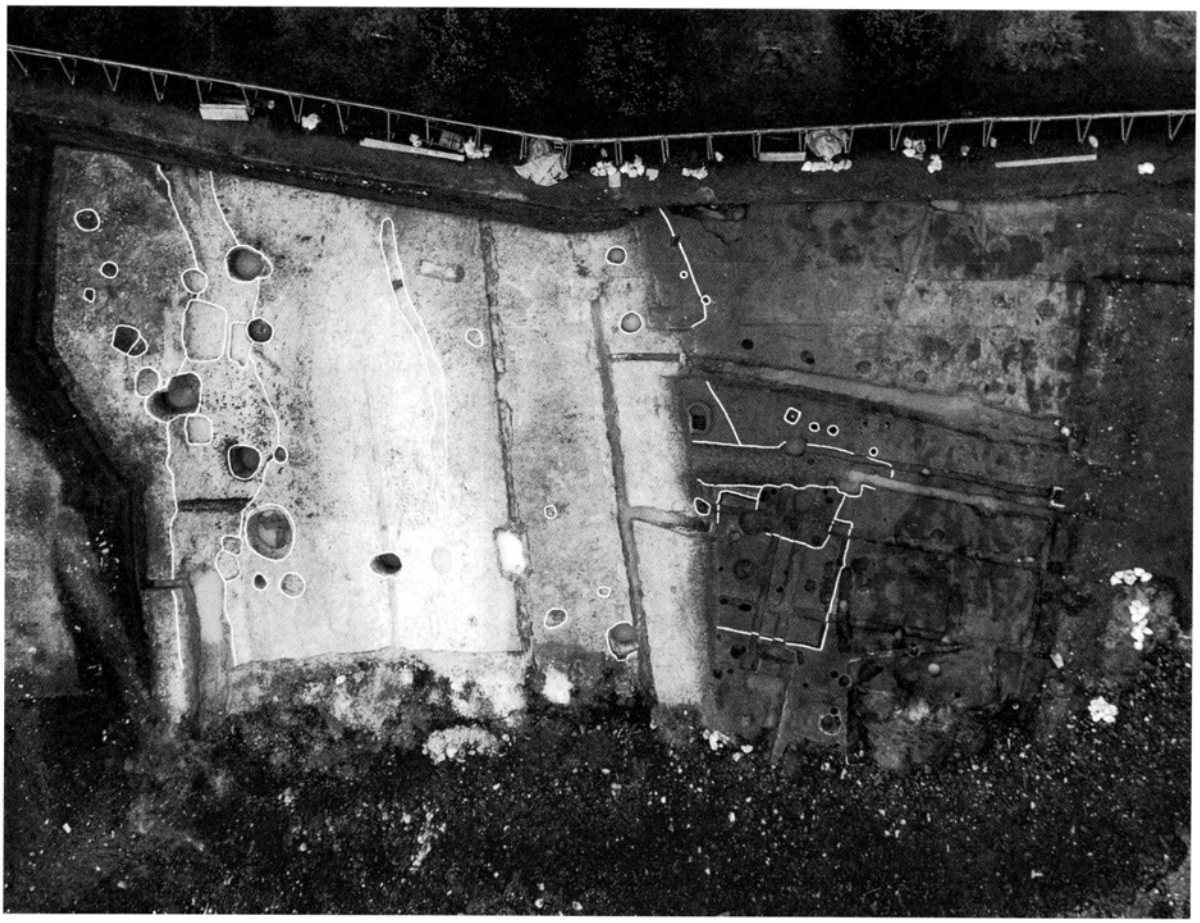


写真37　Ⅲ区全景（南東から）

写真38　Ⅱ区全景（南東から）

写真39　竪穴住居群（南西から）

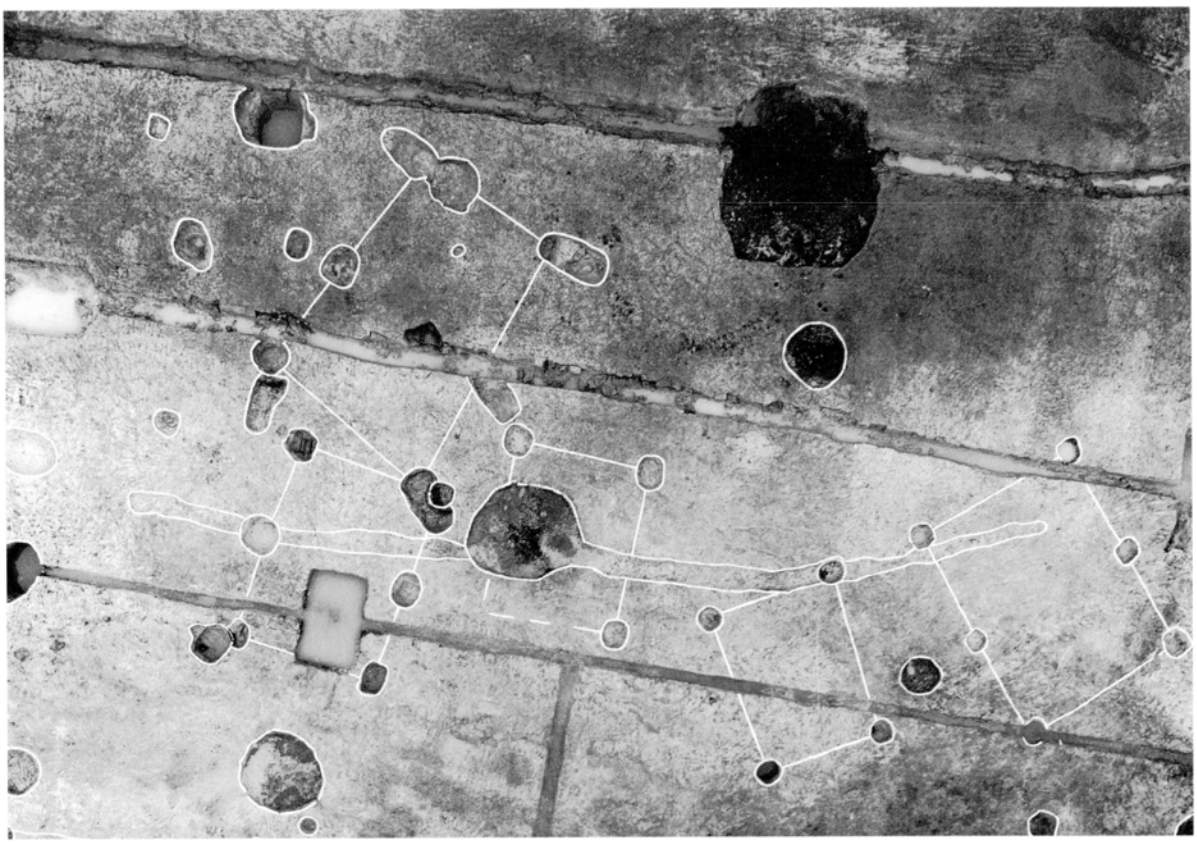


写真40　堀立柱建物群（南西から）

写真41　SC052（南西から）

写真42　SC053（南西から）

写真43　SC057（西から）

写真44　SC058（北西から）

写真45　SC058滑石原石
出土状況

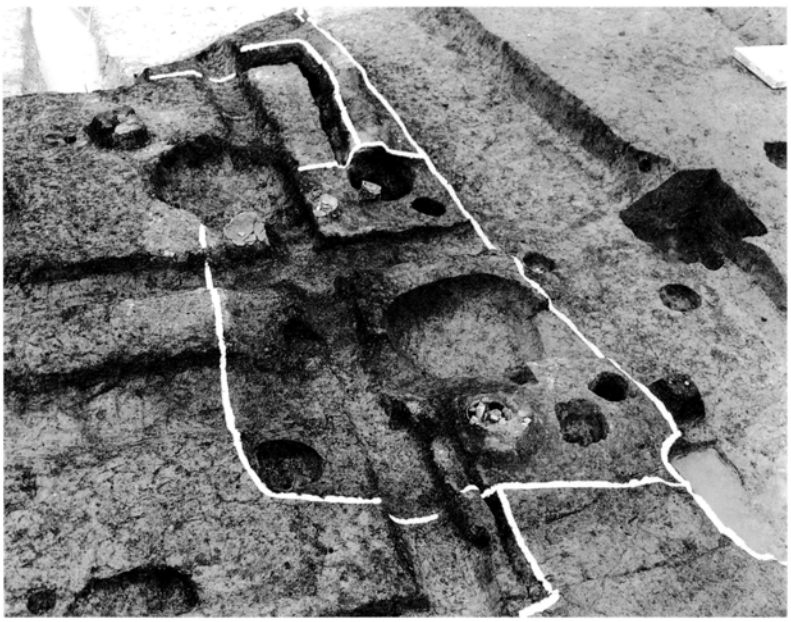


写真46　SC066（東から）

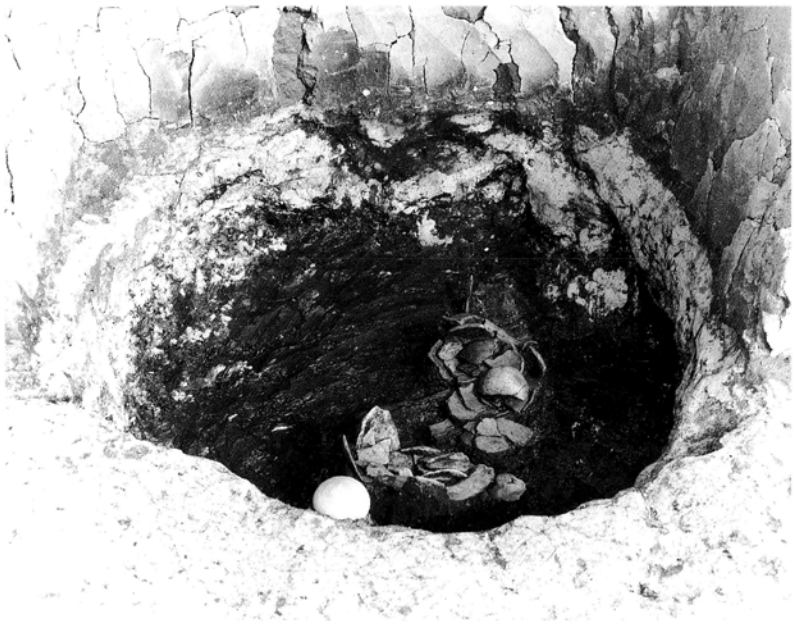


写真47　SE040（西から）

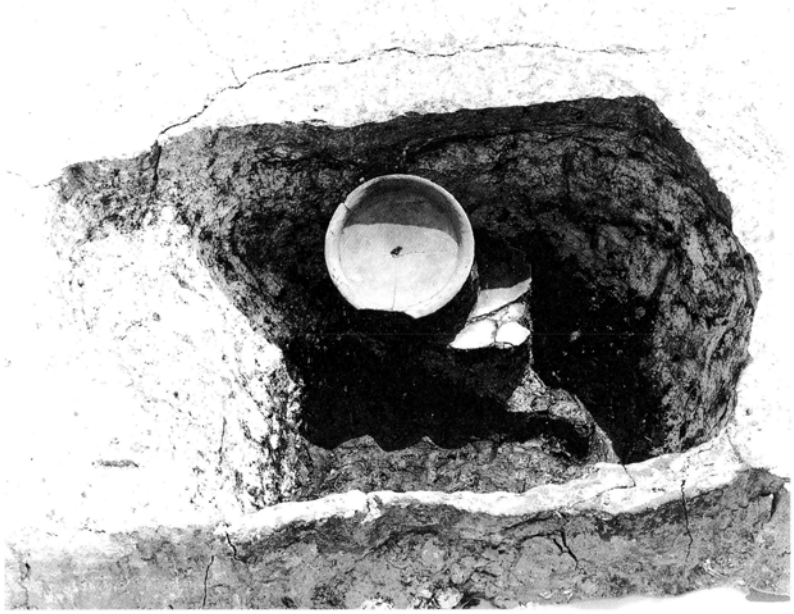


写真48　SE046（北から）

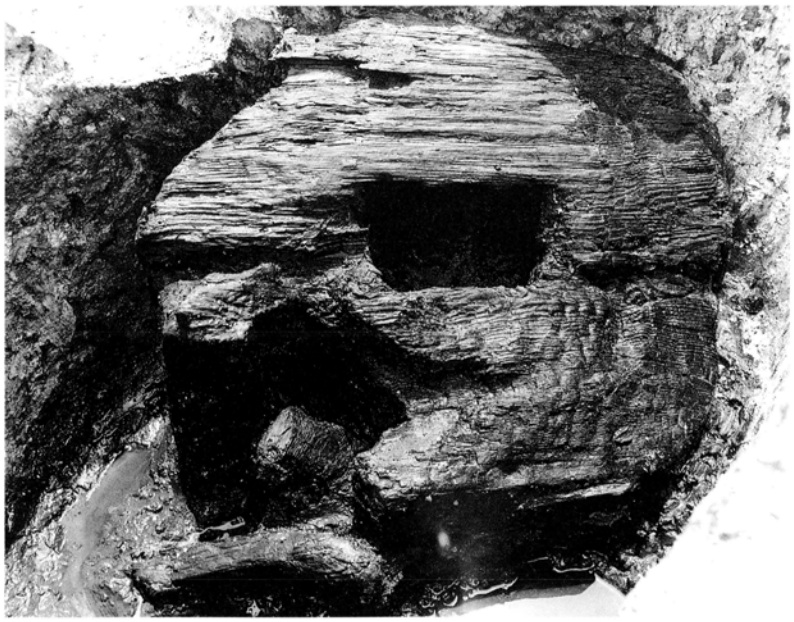


写真49　SE060 ねずみ返し状
木製品出土状況

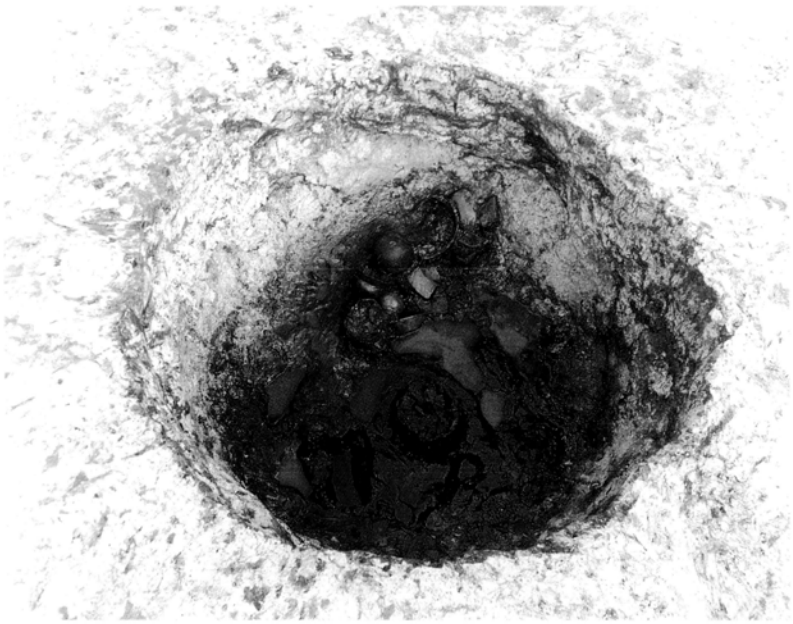


写真50　SK038（東から）

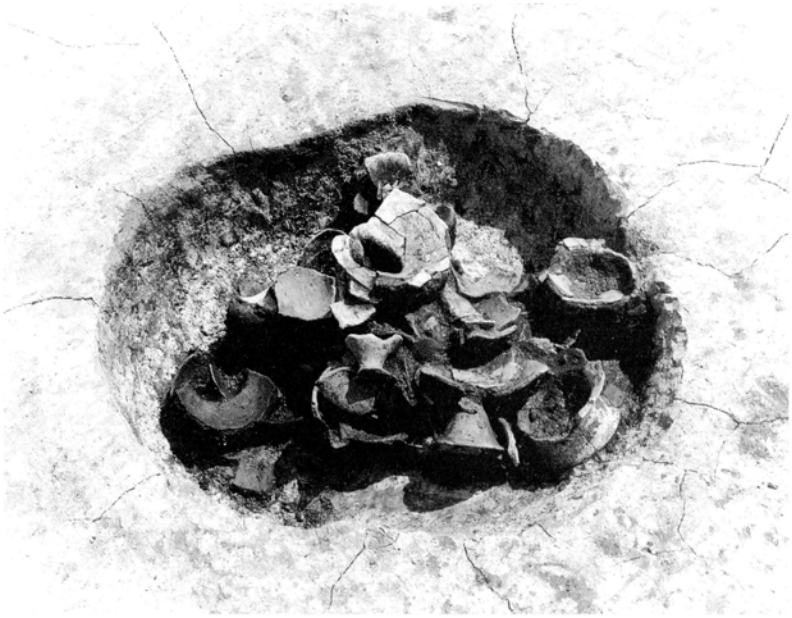


写真51　SK044（北から）

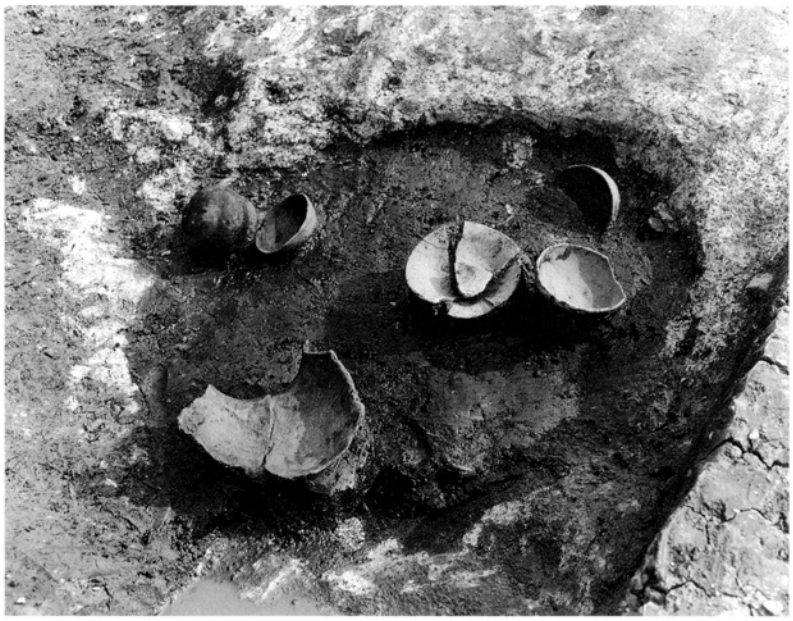


写真52　SC057（西から）

224

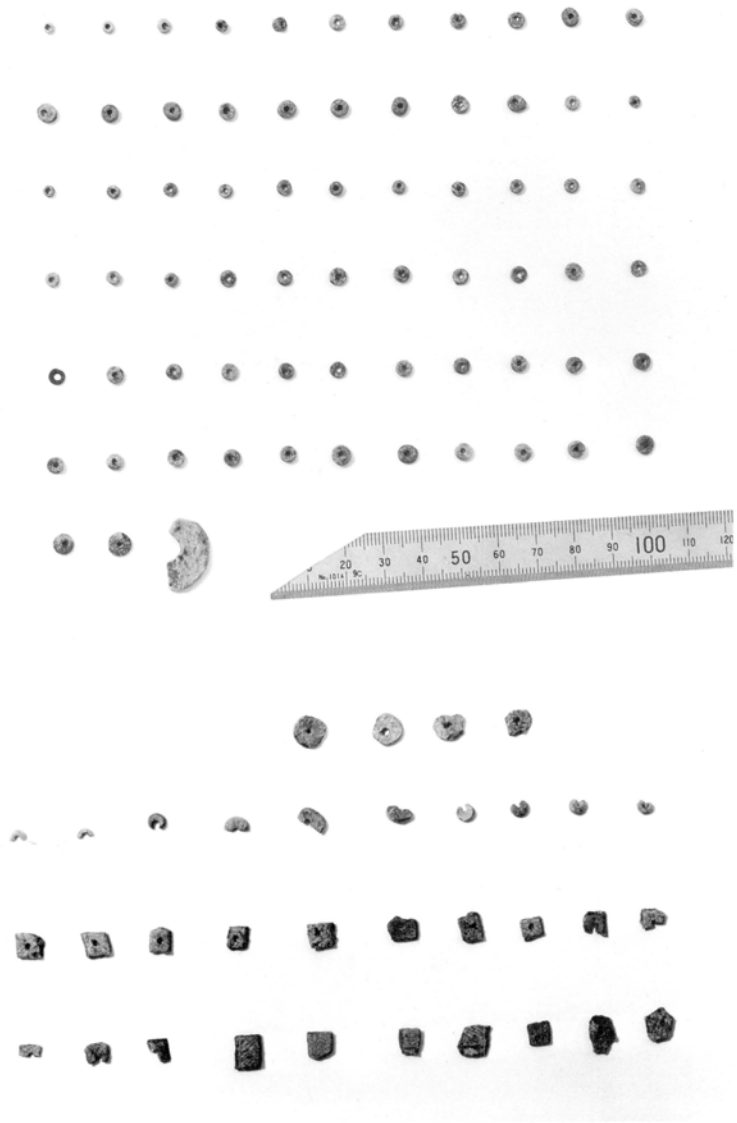
225

220

316

164

写真53　出土土器



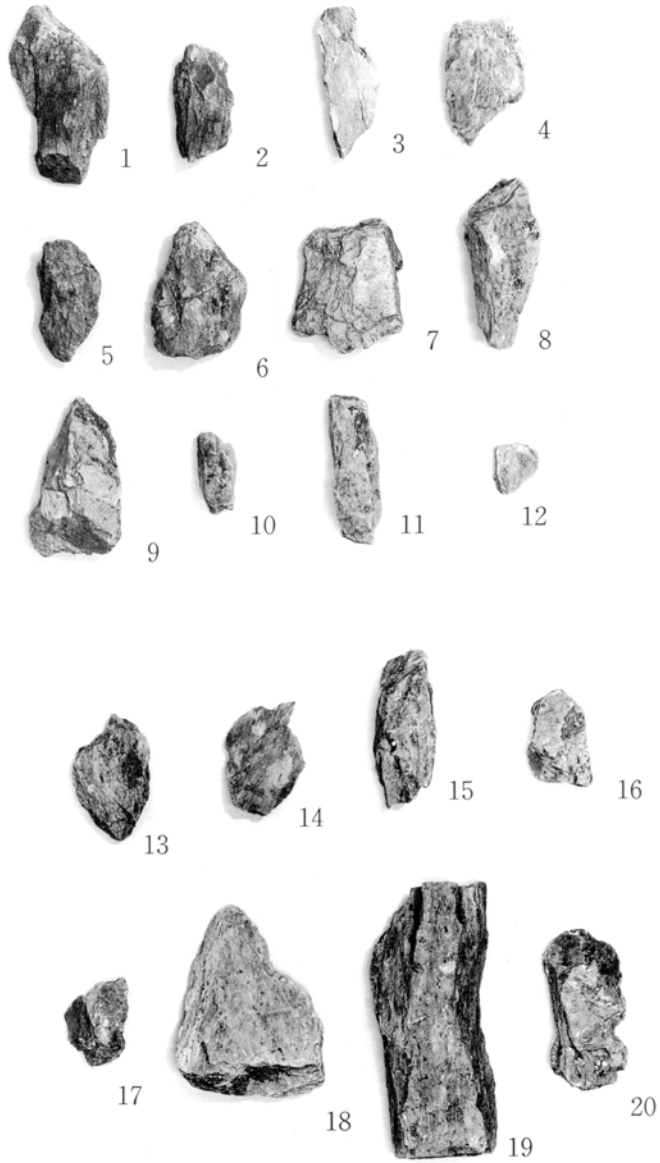


写真54　SC058出土滑石製品

外環状道路関係文化財発掘調査報告書13

高　畑　遺　跡

―第18次調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集

2002年（平成14）年3月5日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
☎（092）771－4667

印　刷　正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺三丁目28－1
☎（092）806－5708